精神分析入門

下巻

フロイド
精神分析大系

ARS

Freud

Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse

ジグムンド・フロイド
(1891)

Freud

精神分析入門

安田徳太郎訳

下巻

フロイド
精神分析大系
8

アルス刊

ジグムンド・フロイド

Freud

精神分析入門

安田徳太郎訳

下巻

フロイド
精神分析大系
8

アルス刊

目次

神經症。

精神分析入門

神經症

第十六章　精神分析と精神病學

丁度一年目に諸君に再びお目にかかつて、精神分析の講演を續行することは誠に欣幸の至りである。昨年は精神分析が間違ひと夢の現象をどのやうに取扱ふかをお話したが、今日は一つ神經症の現象を諸君に理解していただきたいと思ふ。いづれお氣附きになることだが、神經症は間違ひとか夢の現象といろいろの點で共通點のあるものである。ところが前以て一言しておきたいのは、諸君は今回の神經症といふ題目に關して昨年と同一の態度をとることが出來ない點である。昨年はいちいち諸君の批評を仰ぎ諸君の贊成を得て初めて前進するやうに努めて來た。私は諸君とたびたび議論をやり、諸君の抗議を說服し、ひたすら諸君及び諸君の「健康なる常識」を判決の標準としたのであつた。然るに今日からは最早その通りに行かない。その理由は至つて簡單である。間違ひといひ夢といひ諸君には極めて家常茶飯な現象であつた。諸君も私と御同然そんなものはいくらでも經驗されたのであるし、いつ何時でも容易に澤山經驗出來たものであるのだ。ところが神經症の現象界は諸君には緣遠いものである。諸君がお醫者でない限りは、私がお話しなければ、どうしても近

寄る道のないものであり、これから私が批判しようとする材料に無知であるなら、いくら立派な意見でも一向お役に立たない次第である。

併し諸君が私の話を傾聽される時に、私がドグマ的な講演をやつてゐるとか、諸君に無條件で押賣を強いてゐるとか曲解して呉れては大變である。かやうな誤解は私を侮辱するものだ。私は何等確信をひきおこさうとは欲せぬ、――私の目的は研究心を喚つて從來の偏見を打破したいのである。材料に關して無知であるがために批判を下す立場にない以上、諸君は信ずることも非難することも不可能である。諸君はおとなしく傾聽して私が語るものを素直に受入れなくてはならない。確信と申すものはさう容易に贏ち得られるものでない。確信が何の苦勞もなしにらくらくと作れるものなら、そんな確信は早晩無價値な一向頼み甲斐のないものであることが分る。私と同じやうに長い年月を同一の材料に憂身を窶し、その時同じやうな新しい驚くべき經驗を自らに體驗された人にして初めて、確信が作れる權利があるのである。知識といふ領域に於て、このやうな早呑込みな確信、電光石火のやうな回心、行當ばつたりな反撥が一體どこから來たのか。諸君は「Coup de foudre」一目見た戀が知識とは全く世界を異にした情緒の領域に發してゐることに氣附かないか。私達は未だ嘗て一度も患者に精神分析を信ぜよとか、精神分析の歸依者になれと要求した覺はない。そんな

事をすれば患者は猜疑の眼でわれわれを見るやうになる。懐疑と名附けるものは結構にも私達が患者に請求したい最も望ましい心の狀態であるのだ。この理由から諸君もまた通俗的な見方や精神病學の見方と並べて、精神分析の見方を靜かに成長さすやうに努めて欲しい。その結果兩者が相互に影響し合ひ、比較對照し合ひ、互に融け合つて一つの結論に達する機會が到來するに相違ない。

併しまた一方に於て諸君は私が精神分析的見解として講演するものが思索體系であると苟且にも思惟して吳れては大變である。精神分析とはむしろ觀察の直接の表現若くは觀察から演繹した推論を土台とした經驗と申せる。かやうな演繹を果して適當な正當な方法で引き出したかどうかは科學の將來の發達の中に證明されるのである。そして私は殆ど二十五年を閲した今日、かなり高齢に達した今日、何の誇張もなしに、これ等の觀察を生み出したものは、實に至難な、熾烈な、全身全靈をぶちこんだ努力であつたと敢て主張したいのである。精神分析の反對者はわれわれの主張のかやうな由來を一向考慮しようとしないやうな、精神分析は單に主觀で極めた出鱈目なもの、誰でも好放題に貶しつけることが出來るものだと考へてゐるやうな印象を私は幾度も受けたのである。私にとつてはこのやうな敵視態度は解し難いものである。多分これは醫者が神經症患者に對して研究心が薄く、患者の語るところを不注意に聞き流し、その結果患者の言葉からある貴重なものを引出

即ち神經症患者に就て微細な觀察を下す好機を逸してゐるがためである。私はこの機會に講演中は少くとも諸君の一人一人とはあまり論爭しない積りだとお約束しておく。實は私は鬪爭は萬物の父であるといふあの格言の含む眞理を信ずることが出來なかつた。この格言は希臘のソフィストに發してゐて、詭辯家と御同然、この格言もまた詭辯法の過重の結果方向を誤つてゐると私は信じてゐる。いや私は所謂科學上の論爭は要するところ大して效用のないものだと思つてゐる。ただ例外なのは、論爭が常に相互に人格を尊重して行はれる場合はさうではない。數年前に私は生れてたつた一度だけ正正堂堂と僅に一人の學者（ミュンヘンのレエヱンフエルド）と論爭を鬪はしたことを誇としてゐる。その結果二人は親友となつて、今日に到る迄二人の友情は變るところがない。併し私はもう隨分長い間實驗を反復してゐない。と申すのは私には實驗結果が同一であるといふ確信がなかつたからである。

さて學問上の論爭をこんな風に避けることは反駁の機會をなくし、我執を增長さし、學問界でよく用ゐられる婉曲な俗言を借れば「剛情」（Verrantheit）を釀すものだと諸君は判斷されるであらう。だが私はかう返答してみたい。若し諸君が一度私と同じやうに苦心慘憺な努力をした曉にある一つの確信が作れたなら、諸君にもこの確信をどこ迄も固持しようとする權利が當然湧いてくるで

あらう。さらに私は研究を續けてゐる間に二、三の重要な點に關して私の見解を變更し訂正し、新しい見解ととりかへたと公言することが出來る。私は無論その度毎に公に報告しておいた。そしてこの訂正の結果はどうであるか。ある人は私の自家訂正をまるで顧みもしなかつた。そして今日から見れば雲泥の差のあるといへる舊說をとつつかまへて難癖をつけようとしてゐる。ある人はこの訂正を機會にここぞとばかりに私を不埒な男だとよばはる。と申すのは、彼の最近の主張もまた間違つてゐるかも知れぬといふ疑惑を與へるからである。ところが一度發表した說を一徹に固持したり、人が何と言つても容易に撤回しない男は、あべこべに片意地とか「剛情」とかやつつけられる。どつちを向いても取附く島のない批評に對してわれわれは一體どうしたらよいのか。私達は今のままで押しとほして、自らの批判から最良と信じたままを行ふよりほかに道はないのである。私もかうやらうと決心してゐる。そして私のすべての學說を、私の進步して行く經驗に應じて、變更し訂正して行くことを何等屈辱とは考へてゐない。だが根本としてゐる私の見解に今日迄何等訂正を加へる必要も發見してゐない。そして將來においてもしかくありたいことを希望してやまないのである。

さていよいよ神經症といふ現象に對する精神分析の下す見解にはひることにする。このために既

にお話した現象との類似點や比較點に結びつけてお話する方が一番早道である。私は一つ私の診察室で澤山の人が犯す徴候動作をとつつかまへることにしよう。長い生涯の煩悶を十五分間でぶちまかうと醫者の診察室を訪れる人をどう處置してよいかを分析家は知るところが少い。世間の醫者が患者に向つて「お惡いところはありませんね。」と斷定を下してやつたり、「まあ少し宛水療法をおやりなすつては。」と提案したりするやうな、みすみすな事は分析家の深い知識にとつては行ひ難いものである。精神分析の專門家の一人が、一體君は外來患者をどんなに處置するのかと質問された時に首をすくめて、「俺は患者からうんと莫大な稅金を徵發してやるんだ。」と答へた。だから最も忙しいといはれてゐる精神分析家のところへ行つても、その診察時間は大して繁昌してゐないと聞いて諸君はさうびつくりしない筈だ。私は患者控室と私の診察室兼治療室の間にある粗末なドアを二重にして、おまけにそれにフエルトを張りつけておいた。この小さいからくりの目的はお分りのことと思ふ。さて私が控室から呼びこんだ時に患者はこの二重ドアを閉めるのを忘れやすい。そしてお極まりのやうに二重のドアをあけつぱなしにしてはひつてくる。これを見た時早速に私は可なり不機嫌な調子で、相手がハイカラ紳士であらうが、盛裝した御夫人であらうが、そんな事には一向おかまひなしに、そのはひつて來た患者に、ドアをしめに行くやうに命令する。私のやりか

たは偏屈らしいペダントリイな印象を與へる。だが時時このやうな命令を私自らに下すはめに陷つたことがあつた。と申すのは、お當人が自分自らハンドルを握つたのでなくて、その人のお伴がドアを閉めるのを忘れたのを知らん顏で見てゐるといふやうな場合であつた。併し、大多數の場合私のやりかたは正しい。そんな作法をする人、控室と醫者の診察室の間のドアをあけつぱなしのままにしてくる人は下等社會の人に屬してゐて、そんな人は十分に冷遇される資格を有してゐるのだ。だがあとを聞かずに贊成されてしまつては困る。患者のこのやうな粗忽は、彼が控室に一人ぼつちで待つてゐて、從つて呼ばれた時には自分のあとには控室に待つてゐる人がゐないといふ場合にのみ現れるのである。赤の他人が自分と一緒に待つてゐるやうな時には決して現れるものでない。後者の場合を吟味してみるに、彼が醫者との會話中に、自分の話を控室に待つてゐる他人が噛み聞いては大變だといふ懸念が心中にあることを彼は十分に承知してゐる。かういふ場合は二重のドアを丁寧にしめることを決して決して怠るものでない。

こんな風に考へると、患者の粗忽は偶然でもないし無意味でもない。いや重要でないと棄て去る譯に行かない。私達はこの粗忽をはひつて來た患者と醫者との關係を仄かすものだと觀ずるのだ。患者は世界的の大家の名に憧れて、大家によつて幻惑され、大家によつて威嚇されやすい俗人に屬

してゐる。患者はおそらく前以て電話で何時にお伺ひすれば一番御都合がよろしうございますかと問合せたかも知れない。彼は歐洲大戰當時のユリウス・マイニルの食品店に詰めかける氣持で、外來患者が黑山のやうに待つてゐるだらうと豫期してゐたのである。ところがやつて來て見ると豈圖らんや門前雀羅を張るといふ光景そのままにみすぼらしい控室には人つこ一人もゐないのを見てがつかりする。彼は來る道道お醫者に拂はうと準備をして來た溢るるやうな尊敬のとつておきに對して、何とかしてお醫者に賠償さしてやらなくては腹の蟲が承知せぬ。そしてこの時彼は控室と診察室につけたドアを閉めるのを忘れてしまふ。彼はこの動作によつてお醫者に「ふん。門前雀羅を張るといふ不人氣なのだな。俺がここで診て貰つてゐる間に一人の患者さんも來さうでないぞ。」と言はうとするのである。患者は醫者との會話中にも、萬一醫者が銳い逆捩によつて彼の橫柄面をいきなりたたきつぶさなかつたなら、患者はよい氣になつて尊大に不行儀に振舞ふに相違なからう。

諸君がこんなとるにもたらぬ徵候動作の分析によつて知り得るものは、去年旣にお話したあの主張だけであらう。卽ち徵候動作は偶然でない、いや一つの動機、換言すれば一つの意味と一つの目的を含んでゐる、徵候動作は無意識と申す精神連鎖に屬してゐる、徵候動作は重要な精神過程の小さい表示を暴露してゐると。だが何はともあれかやうに表面に現れた過程は、それを行つた當人の

意識には氣附かないものであることを敎へる。なんとなれば、二重のドアをあけつぱなしにして來た患者の一人でも、彼がこの粗忽によつて、私に對して輕蔑を示さうと欲してゐるのだとはよもや告白出來ないだらう。彼等の大抵はからつぽの控室に飛び込んだ時に起こつた失望の感動を思ひ返へすであらうが、この印象とそれから引き續いて起こつた徵候動作との因果關係は彼の意識には氣附かないものとして殘つてゐるのは確實である。

さて私達は徵候動作のこの小さい分析を患者に下す觀察に利用しようと思ふ。私は今もなほなまなましい記憶として殘されてゐるこのやうな觀察を一つ選んでみることにする。といふのは、この實例は比較的かいつまんで描寫出來るからである。だが詳細な點に渡つて述べることはかやうな講演では不必要である。

數日間の休暇を貰つて歸省した若い將校が私に義母を治療して吳れるやうに依頼した。この母は至極家庭圓滿に暮してゐたが、ある馬鹿馬鹿しい觀念のために自分の家庭を呪ひ出したのである。私が面會した時に、彼女は五十二歲の上品な老婦人で、愉快さうな素朴な人柄のやうに見受けられた。彼女はなにの躊躇もなしに次の話を打開けた。夫人は田舍で夫と一緒に至つて幸福な夫婦生活を送つてゐた。夫は大きな工場を所有してゐた。夫人は夫の愛情の籠つた心盡しを心から讃へよう

とはしなかつた。二人は三十年前に戀愛結婚をしてそれ以來夫婦の間には波瀾も確執も嫉妬の機會もなかつたのである。二人の子供は幸福に結婚した。夫としまた父としての責任觀念から彼は隱居もせずになほ孜孜として活動を續けようと思つてゐる。一年前に一つの信ずることの出來ない、彼女自身にも不可解な事件が持ち上つた。といふのは彼女は自分の信じてゐる夫が竊に若い娘と戀愛關係を作つてゐるといふ匿名の手紙に接したのである。彼女は卽座にそれを信じた。それ以來彼女の幸福は粉微塵になつてしまつたのである。詳しい事情は大略次のやうである。彼女の家に一人の下女がゐた。夫人はこの下女とかなりしばしば內輪話をしあつたらしい。この下女はある女に毒毒しい敵意を懷いてゐた。その女は生れがよくないくせにこの下女よりもずつと成功したといふのがその理由であつた。實際その女は奉公といふ道をとらずに商業見習にはひつた。そしてこの工場に採用されて、大戰中に社員が出征して人員缺乏を告げてゐる際に幸運にもよい地位にありついた。現在では工場內に居住して社員一同と交際を共にして、みなの人から孃とよばれる身分である。出世しそこなつた下女には以前のこの學友にあらん限りの憎惡を讒誣する下心があつたのは尤もである。ある日のこと夫人と下女がこの家のお客に來たさる老紳士の噂をした。この老紳士は自分の妻と別居してお妾を圍つてゐるといふ評判であつた。夫人はこの人がどういふ理由でそんな事をして

ゐるのかを知らなかつたが、突然、若しあの信じ切つてゐる夫がお妾でも圍つてゐるといふことを聞いたら、まあどんなに恐ろしいことだらうと叫んだ。丁度その翌日夫人は郵便配達夫から匿名の一通の手紙を受取つたのである。手紙は僞筆でものされて、その中に夫人が昨日叫んだと同じ事柄が認められてあつた。彼女は——半信半僞であつたが——この手紙はあの意地悪い下女の仕業だと看破した。夫の色女として丁度下女が憎み拔いてゐるあの女が名指されてあつたからである。彼女はたくらみを卽座に見拔いて、かやうな卑怯な密告がどれ程根もないことだといふ證據を周圍の事情から十分知つてゐたにも拘らず、この手紙は一瞬のうちに彼女を征服してしまつたのである。夫人は物狂しい興奮に包まれて早速に夫を呼び寄せて、夫の非行を口をきはめて責めたのである。夫はこの密告を一笑に附した。そして出來る限りの眞心を盡した。夫は工場醫を招いた。醫者はこの不幸な夫人を慰撫するために全力を注いだ。二人がそれから行つた道筋は勿論想像がつく。下女は解雇された。だが妾の誣告を受けた下女の敵は解雇されなかつた。それ以來患者はあの匿名の手紙を最早信じない程度で何度も冷靜になつたと自分で信じてゐたが、決して心の底から、決して永久に冷靜になつたのでなかつた。あの女の名前を他人が口に出す時とか、町であの女にばつたり會ふ時は猜疑、悲哀、屈辱の新しい發作が彼女の心に爆發するに十分であつた。

以上がこの夫人の病歴である。彼女が他の神經症の患者に比較して自分の病症をあまりあつさり描寫したこと、卽ち私達の言葉を用ふれば病症を伴つてゐること、彼女が匿名の手紙にものされた誣告に對する信仰を心底から打破出來ないこと、これ等を理解するために、わざわざ精神病學の山程の經驗を必要としないのである。

それでは精神病學者はこのやうな病例に接してどんな態度をとるか。控室のドアを閉めない患者の徵候動作に對して精神病學者がどういふ態度をとるかは既に私達は承知してゐる。彼はその動作を心理學的興味を有さない、その患者とは全く無關係な一つの偶然事だと說明する。然しながら、この態度をそのまま嫉妬に悶悶たるあの夫人の病例に迄おし進めることは出來ない。徵候動作は一見無意味なもののやうに思はれるが、症候の方はある意味深いものとして私達の注意を喚起する。症候は激しい自覺苦悶を伴つてゐる。症候は他覺的に家庭の共同生活を脅かす。この故に症候は實に精神病學的興味の立派な題目である。精神病學者はまづ第一に症候を本質的な特徵によつて分類しようと試みる。この夫人をなやます觀念はそれ自體馬鹿らしいとたたきつけることは出來ない。老いた夫が若い娘と戀愛關係を作つてゐるといふことは世上よくあることだ。併し、それに纒る他のあるものは馬鹿らしいもの、信ぜられないものである。患者はあの品行方正のやさしい夫までが

夫といふもののざらにある範疇にはひつてゐることを信ずるためには、あの匿名の手紙以外には何の證據も有してゐない。夫人は手紙の筆蹟が一向證明力に價しないことを知つてゐる。夫人はこの手紙の出所を立派に說明することが出來る。卽ち夫人は自分の嫉妬に對してはつきりした理由を持つてゐないと言はざるを得ない。夫人は自分自らにもさう言へる。それにも拘らず夫人は恰もこの嫉妬を立派な根據があるものと認めてゐるやうに煩悶してゐるのである。現實を骨組として創造された論理的な議論に遠去つてゐるこの種の觀念を世人は等しく妄想と呼んでゐる。だからこの夫人は嫉妬狂にかかつてゐるのである。これがこの症狀の根本的な特徵である。

この最初の立脚點を樹ててみると、われわれの精神病學的興味はさらに生氣を增してくる。妄想が現實との關係と何の交渉もないならば、妄想は現實から作られたものとは申されない。ぢや妄想はどこに由來してゐるのか。妄想といつても千差萬別な內容を有してゐる。只今の例では、妄想の內容が何故に嫉妬であるのか。どういふ人に妄想、特に嫉妬の妄想が作られるのであるか。この點に就て私共は精神病學者の意見を拜聽したいものであるのに、精神病學者は知らぬ顏をきめこんでゐる。精神病學者は私達の質問のたつた一つだけを說明して吳れる。彼はこの夫人の家族史を檢べて多分、「妄想はその遺傳史に類似した精神障害若くは他の精神障害が反復現れた家系の人に發す

るのである。」と返答して吳れる。他の言葉を借りて申せば、この夫人が妄想に憑かれた時は、彼女はそのやうな妄想に對して遺傳を通して素因を有してゐることになる。確かにさういふこともあるが、この說明は私達が知りたいと思つてゐる總てであらうか。この症狀の原因に共力した一切のものをたつた一つの遺傳で片附けることが出來ようか。他種の精神病の代りにこの嫉妬狂が發生した時に、それがどうでもよいものであるとか、勝手氣儘なものであるとか、說明が施せぬものであるとか假定するだけで私達は滿足が出來ようか。そして私達は遺傳的影響の威力を力說するあの學說をまた消極的な意味に於て、卽ちたとへ精神にいかなる事件がはひりこんでもその事件とは一向無關係に、彼女はいつか一度は狂氣を發すべき運命にあつたといふやうに解さなくてはならぬか。諸君は科學と自稱する精神病學が何故に一步進んだ說明を與へようとしないかを知りたいと思ふであらう。併し私は諸君にかう返答する。惡玉は彼が眞實に所有してゐるものを澤山のやうに見せようとすると。精神病學者はこのやうな症狀の說明を一步前進さす道を知つてゐないのである。診斷と申すものと、豐富な經驗と稱するわりには不確實な豫後と申すものを下すだけで滿足してゐるのである。

では精神分析はもつと大したことが出來るか。確かに出來る。このやうな近寄り難い症狀においても

てさへ、精神分析は立派な理解を成就せしめるあるものを發見する力があるといふことを、諸君に示してあげたいと私は希望してゐる。まづさしあたつて、諸君は、現在妄想の基調を作つてゐるあの匿名の手紙は女患者自らが作り出したこと、換言すれば、彼女はこの事件の前日に奸策を弄したあの下女に對して、若し妾の夫が若い娘と私通關係を作つてゐたのであれば、妾の不幸は何をもつてしても償はれないと現に口に出して言つたといふ點に留意して欲しい。彼女自らがこの下女に匿名の手紙を送るといふ思想を與へたのだと申せる。だから彼女の妄想はこの手紙とはある點無關係だといへる。妄想は以前から既に杞憂として――換言すれば願望として――彼女の心中に實在してゐたのであつた。この外になほ僅か二時間の分析で引出したさらに進んだ小さい表示を諸君にお話してみたい。患者が自分の身上を語つた後、私がそれ以上の思考、聯想及び記憶を報告するやうに要求した時に患者は非常に冷淡な態度をとつたのである。妾には何の聯想も浮びませぬ、言ふべきことは悉皆お話してしまつたと頑張つた。そして二時間目に私は夫人の分析をすつくり中止しなければならなかつた。と申すのは妾はもうすつくり健康に復したやうなさつぱりした氣分になつた、あのいまいましい考へはもう頭に往來しなくなつたと口を切つたからである。勿論これは私が分析を續行しようとする氣配に對する抵抗と恐怖からいつたのであるが、この二時間の間に彼女は、あ

る解釋の緒口となる、いやどうしても確證と觀じなくてはならぬ數言を口滑つたのである。この數言を解釋することは、やがて彼女の嫉妬狂の病原を闡明することになつた。夫人は實際ある青年、彼女を患者として私のところに連れて來た現在の自分の義理の息子に對して、深い戀心を懷いてゐた。彼女はこの戀心に就て自ら全然、いやおそらく殆ど意識するところがなかつた。親子關係といふ狀況の下に、この戀といふ傾向は容易に差障りのない愛情といふ假面をかぶつてしまつたのである。既に學んだ經驗のすべてを用ゐて私達が、この五十三歲になる貞淑な女、善良な母としての彼女の精神生活にはひりこむ事は決して至難なものでないだらう。かやうな戀愛は一見いかにも奇怪な、あり得べからざるものとして、意識の表面に現れることが出來なかつたが、しかも、ずつと實在を續け、無意識となつて、重重しい壓迫を縱にしてゐたのである。そこで當然あるものが彼女の心に起こらねばならなかつた。何かある救ひが求められなければならなかつた。そして最も手近な緩和策として轉移作用が利用されたのである。轉移作用は實に妄想的嫉妬の發生に例外なしに干與してゐるものなのである。年とつた女としての自分が若い男に戀してゐるばかりでなく、自分の年とつた夫が若い娘と戀愛關係を作つてゐるなら、彼女の不貞といふ良心の苛責は確かに輕くなつたであらう。この論法から、夫の不品行を中心とする空想は彼女のやけつくやうな心の痛手を冷やす

かつたからである。

利益を惠んだ妄想の投影は今や强迫的となり、狂的となり、意識的となつたのである。妄想に反對する幾百の說法も何等役に立ち得ないのは當然である。なんとなれば、これ等は唯一その投影にのみ注がれて、投影を濃く作つてゐる、觸れ難きものとして無意識の底に潛んでゐる原像に注がれなかつたからである。

短時間で行つたこの曲折にみち溢れた精神分析の努力が、この症狀の理解に寄與した結論を只今總括してみよう。勿論私達の報告が飽く迄も正しかつたと假定してもよい。この點に於て私はここにいらつしやる諸君の批評に決して屈服することは出來ない。第一に妄想は最早無意味なもの、若くは不理解なものでない。妄想は意味深長なもの、立派な動機を具備したもの、患者の嘗めた强い感動を持つた經驗と因果關係を有してゐる。第二に妄想は必ず他の表示から摘發出來る、無意識的精神過程に應じた反應として現れたもので、それの狂氣の姿、論理的な現實的な攻擊にどこ迄も抵抗しようとする性質は實にこれと切つても切れぬ關係を持つてゐるのである。妄想はそれ自體望ましきものであり、ある種の慰藉であり得るのである。第三に妄想は嫉妬に色づけられた妄想であつて、決してそれ以外であり得ないといふ事は、疾患のうらに潛んでゐる經驗によつて明白に決定さ

れてゐる。だが諸君は、あの夫人が丁度事件の前日に奸策を弄したあの下女に對して、萬一妾の夫が不品行であるなら、これ以上の恐愕があり得るだらうかと現に口に出して言つたことを記憶されるだらう。諸君はまた私達が分析したあの徴候動作との二つの重要な類似點、卽ち症候のうらに隱れてゐる意味と目的の發見及びこの狀況に應ずる無意識との關係を思ひ出されるであらう。

尤も私達がこの病症を機會に提出しなくてならぬすべての疑問は、これでもつて解決されるとは申せない。この病症はむしろ次から次へと湧いてくる問題によつて張切れさうである。問題のあるものは今日のところ未だ完全に氷解されたとはいへないし、問題の他のものは、特殊な事情といふ不都合によつて解決することは覺束ない。例へば何故に幸福な夫婦生活に浸つてゐた夫人の心に、義理の息子に戀愛を感ずるといふ隙が出來たのか。何故に、別の方法でも出來たであらうに、ことさらに、自らの心の狀態を自分の夫に投影し反射するといふ形によつて救はうとしたのであるか、かやうな質問を提出することが下らぬことであるとか、けしからぬことであるとか考へないか。この質問に出來る限りの返答を與へるために私達にはちやんと澤山の材料が準備されてゐる。女は恰も更年期にあつた。更年期は女子の性慾を急激に不可抗的に亢進さすものである。それだけで返答は十二分であるかも知れぬ。あるひはまた、彼女の善良な品行方正な夫には數年前から既に、元氣

な妻の要求を滿たしてやる性慾の貯藏が盡きてゐたと附加してもよい。丁度この種の夫は勿論品行方正であるが、自分の妻を特別やさしく取扱ひ、妻の神經症に對して人一倍心配するものであることを經驗が敎へて吳れる。さらにこの病原となつた戀愛の對象が、實の娘の若い夫であることは無關係とは申されない。最後は結局母の性體質に基づいてゐる、娘への熾烈なエロチックな愛著はしばしば、かかる轉化の中に永續する道を發見する。この機會に一つ思ひ出して欲しいのは、母親と娘の婿の關係は太古から、人類によつて特別むづかしいものと觀ぜられてゐて、この關係は原始人に非常に强いタブウ、禁忌を作る動機を與へたといふ事實である。(*) 二人の關係はしばしば陽性の方向にも陰性の方向にも、文明といふ範圍から外れやすいものである。只今の病症に於て、この三つの要素のどれが干與したのであるか、この要素のうちの二つ若くは三つともが協力したのであるか。勿論そんなことは私の口から申せない。併し申せないといふ理由は、病症の分析を二時間以上續行することが許されなかつたためでないのである。

(*) "Totem und Tabu" 1913.

私が述べたてた事柄は、諸君には未だ未だ合點の行くものでないことに氣附いたが、精神病學と精神分析學を比較してみたいがために、お話を試みたのである。併し私は一つ諸君に精神病學と精

神分析學の兩者の間に、何か矛盾のあることに氣附かれたかと質問させて頂きたい。精神病學は精神分析のテクニカルな術式を應用しようとしない。精神病學は妄想の內容にあるものを結びつけるのを怠つてゐる。そして精神病學は私共に何はともあれ極く卑近な極く特殊な原因を探して呉れずに、遺傳といふものをひつぱり出して來て、非常に總括的な非常に遠隔してゐる病原學を高唱するのである。だがその點に矛盾、對立が存してゐるか。むしろ二つが相俟つて完全なものとなるのではなからうか。それでは、遺傳的要素は事件の意義と矛盾しないか、むしろ二つが協力して作用しなかつたのでないだらうか。精神分析の研究に飽く迄も反抗出來るものは、精神病學の研究の本質には存してゐないといふ私の意見に諸君は贊成されよう。即ち精神分析に反抗するものは精神病學者であつて、決して精神病學といふ學問ではないのである。精神分析學と精神病學との關係は恰も組織學と解剖學との關係のやうなものだ。解剖學は器官の形態を研究し、組織學は組織と細胞からなる器官の構造を研究するのである。この二つの研究のやり方に今更ら矛盾があるといふなぞはてんで問題とならない。卽ち一方の研究は他方の研究に引續いてゐるのである。今日解剖學は科學といはれる醫學の基礎と認められてゐることは諸君も御存じのことだが、過去の一時代に於て、身體の構造を知るために、死體を解剖することが、恰も今日精神生活の深いしかけを闡明するために、

精神分析を活用することが誹謗されると同樣に、禁壓の迫害を蒙つたのである。そして多分將來に於て、精神生活の深い深い底にある無意識と申す過程に關しての立派な知識がなくては、科學として深めらるべき精神病學は存在不能になるといふ意見が唱へられるやうになるだらう。

さて講堂にをられる諸君のうちに、精神分析に對して深甚な友情を懷いて下さる人があるかも知れない。さういふお方は、精神分析が他の方面、卽ち治療の方面から見ても正しいだらうと豫想されるかも知れない。諸君は從來の精神病學の用ゐる治療法が妄想に何等の感化力を持たぬことを百も承知してをられる。それでは精神分析は妄想といふやうな症候のメカニズムに對する獨特な見地から、天晴妄想を追拂ふことが出來るだらうか。いや。そんな輕業は出來つこはない。精神分析はこれ等の疾患に對して――少くとも當分の間は――他の治療法と同然に無力である。私達は患者の心の中に何が起こつてゐるかを理解することは出來るが、それを患者自らに理解さしてやる手段を知らないのである。私が妄想の分析を最初の豫想以上に前進さすことが出來なかつた事を諸君は既に耳にしてをられる。諸君はこの理由を楯にして、かやうな病症の分析は、その結果が無收穫であるから、咎むべきものだと固持される積りだらうか。私はさうは信じない。私達は學術の研究といふものを、直接の利害關係を離れて行ふ權利、いや義務があると信じてゐる。知識の一片一片が積

つて最後に——私達はいつ、どこでかは知らないが——力、治療力と變ずる時代がやつて來るであらう。たとへ今日精神分析が妄想と同じく他の型の神經症とか精神病に無效であつたところで、科學研究における不可缺な武器として、やつぱりその正しさは永く沒せられないに相違ない。來るべき時代に、勿論私達はそれを活用する立場にないのはきまりきつてゐるが、私達が學ばうとした人間と申す材料はその時でも生きてゐるし、それ自らの動機を持たなくてはならない、そしてその時でも人間といふ材料は精神分析の解釋を否定するに違ひない。これでもつて今日の講演を打切ることにするが、結論代りに次の言葉を殘しておきたい。この世の中には神經障害の雜多の種類が存してゐる。このやうな神經障害に對して精神分析の立派な知識は實事に治療力と變ずる事を證明したのである。さらに私達は、このやうな近寄りにくい疾患に對して、ある條件の下に於ては、內科的治療の何物とも決して遜色のない效果を收めることが出來ると公言して憚からぬのである。

第十七章　症候の意味

前回の講演で私は臨床的精神病學が症候の現象形式及び症候の內容に一向無關心であるが、翻つて精神分析はこの點に力瘤を入れ、先づ第一に症候が意味深深たるもの、症候が患者の經驗に密接してゐるものと決定出來るとお話しておいた。神經症の症候が意味を含んでゐるといふことは、ブロイエルがヒステリイの一例を研究して、運よくそのヒステリイを救治してみせた時に初めて發見したものである（一千八百八十年——一千八百九十五年）。そしてこのヒステリイの一例はこのために爾來有名なものになつた。實はブロイエルの發見とは獨立してピエル・ジヤネエが同じ事實を立證してゐる。ブロイエルは自分の觀察をジヤネエとは殆ど十年ものあとで、私と共同研究を行つてゐる頃に發表したのだから（一千八百九十三年——一千八百九十五年）、文獻上の優先權は當然この佛蘭西の學者の手に歸したのである。この發見が誰の手でなされたか、そんなことは私達には大した問題でない。諸君も御承知のやうに、どんな發見でも一回とは限つてゐない。發見といふものは決して棚から牡丹餅式に忽然となされるものでない。その成功とその功績は決して合致するもので

ない。亞米利加はコロンプスによつて名附けられたのでない。早くもブロイエルとジャネエの前に偉大な精神病學者リユレエが、精神病患者の妄想でも、それを解する術を知つた曉は意味を含んでゐると見做さなくてはならぬと斷言したのである。私はかなり長らくジャネエの神經症の症候の說明に關する功績を買ひ冠つてゐたと白狀したい。と申すのはジャネエは神經症の症候を患者を支配してゐる「idées inconscientes」即ち無意識の表現と解してゐたからである。ところがジャネエは爾來非常に控目な態度をとつて來て、無意識は單に字句でめり、方便であり、「un façon de parler」に過ぎないと思つてゐるといふ口吻を漏らした。ジャネエは無意識が實在してゐるものと考へなかつたのである。この時以來私はジャネエのいふところが分らなくなつてしまつた。淺薄にもジャネエはこの一言によつて彼の偉大な功績を臺なしにしてしまつたのだと私は信じてゐる。

神經症の症候は間違ひ行爲や夢と同じやうそれに特有な意味を含んでゐる、それを示す人の生活と切つても切れぬ關係を持つてゐるのだ。只今私はこの重大な見解を二、三の實例を借りて詳論してみたい。だがどんな場合でもいつでも意味を持つてゐると證明出來るとは主張したくない。兎に角自分自ら觀察を試みられた人は私の言ふところが合點出來るに相違なからう。併し私はこの實例としてある理由からヒステリイの病例を借りてくるのをやめて、ヒステリイではないが、その起原に

於てヒステリィと密接してゐる非常に特徵のある他の神經症を例とすることにする。この神經症に就て私は諸君に一寸前口上を述べておかなくてはならない。私が只今選ぶ神經症とは强迫神經症である。强迫神經症は有名なヒステリィほど通俗的に知れ渡つてゐない。私に勝手な表現を許して貰へるなら、强迫神經症はさううるさい程喧噪なものでない。强迫神經症はむしろ患者の私事のやうに振舞ひ、全然肉體に姿を見せず、その一切の症候は患者の心の中に作られるのであると申せる。精神分析は强迫神經症とヒステリィといふ二つの神經症に就てまづ第一に研究を完成して、それの治療に於ても精神分析療法は凱歌を奏することが出來たのである。强迫神經症には精神から肉體への神祕な跳躍が缺けてゐるとはいへ、精神分析の努力によつて、ヒステリィ以上に私達に鮮明な、ヒステリィ以上に親しいものとなつた。そして强迫神經症は神經質のある極端な本性を露骨にむき出したものであることを知つたのである。

强迫神經症は次のやうに現れる。患者は自分には丸で興味のない思考によつて占領され、自分には丸で緣も因りもないやうに見える衝動のうごめきを覺え、自分には一向愉快を與へない、そのくせどうしても制することの出來ない行動に驅られる。

思考（强迫觀念）はそれ自體に於ては意味のないものである。換言すれば患者にとつてのみ興の

ないものである。時によるとその思考は支離滅裂であるが、大抵の場合その思考が緒口となつて、患者はそれを出發點として次から次へと考へ込み、患者はそのためにへとへとになるものの、いやいやながら、その思考の俘になつてしまふのである。患者は自分の意志に反して、恰も人生の最も重大な任務であるかのやうに沈思し思索する。患者が心中で感ずる衝動はいつでもある子供臭い馬鹿らしい印象を與へるが、大概空恐ろしい犯罪への誘惑のやうに戰慄に價する內容を持つてゐる。その結果、患者はその觀念を自分には見當もつかないものと否定するばかりでなく、戰きながらその觀念から逃れようとし、萬一その觀念を實行しないものかと怯えつつ自らの自由の禁壓、拋棄、束縛によつてわが身を防衛するのである。この際患者は强迫觀念を決して、文字どほり一度も實行に移さない。實行に移さない結果逃避と警戒が常に勝利を占めるのである。患者が實際に行ふところのもの——所謂强迫動作——[illegible]はまるで邪氣のない、確かにたわいもない動作である。大概日常生活に行ふ動作の反復と作法的修飾である。併しその結果これ等の家常茶飯な動作、例へば就寢、洗面、化粧、散歩といふ平凡な務めが極度に面倒臭い、とても難解な任務となつてしまふ。この病的な觀念、衝動及び行動が强迫神經症のそれぞれの形や場合に同一の比率でまぜ合はされてゐるのでない。むしろこれ等要素の甲若くは乙がその症狀を支配してこの疾患に名稱を與へるのが規則とな

つてゐる。併しこれ等すべての病症の共通點は十分に看破出來るのである。

確かに氣違ひじみた病氣である。最も狂暴な精神病的妄想も、これと同じものを構成することに成功しないと私は信じてゐる。そして私共が毎日毎日目前にそれを見ることが出來なかつたなら、到底それが眞實だと信ずる決心が起らなかつたであらう。それぢや諸君が一つさういふ患者に、氣を散じて、そんな馬鹿らしい考へに耽けるのはよして、そんな遊戯の代りにもつと理智的なことをしてみてはどうだと忠告したところで、患者に效目があるとは考へられない。患者自らもさうしたいのは山山である。なんとなれば患者ははつきり自分の心の狀態を知つてゐる。患者は彼の强迫觀念に對する諸君の批判と同じものを持つてゐるのである。患者でも諸君のいふことに早速贊成出來る。ただ患者は自らどうすることも出來ない。强迫神經症にあつて行爲に織込まれてゐるものは一つのエネルギイによつて支へられてゐる。常態な精神生活に於てそのエネルギイとあひ伯仲するものを私達は未だ知つてゐない。患者はただ一つの事だけが出來る。轉移し交換することが出來る。一つの馬鹿らしい觀念の代りに、それよりは馬鹿らしさの程度の少ない何か他の觀念を採用することが出來、一つの禁壓若くは警戒から他のものに進むことが出來る。一つの儀禮の代りに他の儀禮を實行することが出來る。患者は强迫觀念を轉移出來るが、決して强迫觀念をおつぱらふことが出

來ない。すべての症候をその起原的な姿から遠く隔つたものに轉移する。この轉移は實にこの疾患の主要なる特徴である。加ふるに、精神生活を浸潤してゐる兩極性がこの狀態に於て特別はつきり獨立して現れてくる。陽性の內容と陰性の內容を持つた强迫觀念と並んで疑惑が智性領域に勢力を占めて來て、漸次に普通最も確かとされてゐるものに迄侵蝕して來る。一切のものは漸次に程度を增して行く狐疑逡巡、無精力、自由束縛を仲間にしてくる。强迫神經症の患者は生れつきは非常に精力家で、しばしば人並はづれた見識家であり智性は一般に常人を拔いてゐる。彼の德義觀は大概優れて高く發達し、人一倍に良心が强く、一般人以上に正義に燃えてゐる。性格の特徴と疾患の症候のこの矛盾きはまる總和の中心に正しい重心を發見することがいかに困難なものであらうと諸君は考へることが出來るだらう。私達には只今のところこの疾患の少數の症候を理解し解釋にかける以上の研究はすべて不可能だと思つてゐる。

多分諸君は私達が前回にやつた議論に對して、現代の精神病學がこの强迫神經症の問題にどのやうな態度をとつてゐるかを知りたいと思はれよう。ところが精神病學の態度は實に暗澹たるものである。精神病學はいろんな强迫觀念に名稱を與へた。精神病學は强迫觀念を分類する以外のことをしなかつた。精神病學はさやうな症候に憑かれてゐる人は「變質者」であると主張した。この名前

は私達にぴつたりこないものだ。確かに變質者などといふのは一つの價値判斷である。說明でなくて判決である。定型からそれてゐる人は當然あらゆる種類の變態性を現すと考へてもよい。かやうな症候を展開した人は當然天性一般の人とは幾分か變つてゐなくてはならぬとは信ぜられるが、かやうな人は他の神經症患者、例へばヒステリイとか精神病に罹つてゐる患者以上に變質者であるかと質問がしたくなつてくる。特性をつけるといふことは明かにあまり普遍的である。若し症候が非常に卓越した、社會に意義深い功績を殘した、令名を歌はれた人達にも現れてゐることを知るならば、この種の特性が果して正當なものかどうかと疑ひたくなつてくる。自重といふものと傳記者の出鱈目といふもののお蔭で、私達は典型的偉人の私生活を殆ど知つてゐないことになつてゐるが、例へばエミル・ゾラのやうに、偉人のあるものは眞理狂拜者であつた場合がまま存してゐる、私達は彼が一生涯幾多の奇怪な强迫觀念の習癖になやまされたかを聞いてゐるのである。(*)

(*) E. Toulouse, Emile Zola. Enquête médico-psychologique, Paris. 1896.

精神病學はかういふ人に「Dégénerés superieurs（デジエネレ シユペリユール）」（高等變質者）といふうまい名稱を與へて逃道を作つたのだ。成程うまい逃口上である。——だが精神分析によつて私達はこの種の奇怪な强迫症候を他種の疾患と同樣に、また變質でない人におけると同樣に、永久におつぱらふことが出來るこ

とを體驗した。私自らかやうなことに幾度も成功したのである。

さてこれから私は强迫症候の分析の例を二つだけお話してみたいと思つてゐる。一つは昔の觀察であつて、私はこれ以上に實事な例を只今のところ知つてゐない。他の一つは最近研究したものである。私は話を二つの實例にだけに留めたい。と申すのは、このやうな實例を報告する段になると、話が非常に廣汎にわたつて、次から次へと詳細な事までぶちまかなくてはならぬからである。

患者は殆ど三十歳に近い夫人で非常に頑固な强迫觀念になやんでゐた。若し私の研究が運命の惡戯によつて徹塵に粉碎されなかつたなら、恐らく私はその夫人を救治出來たのであらう。――私はあとで諸君にそのことをもつと語るつもりである。夫人は一日に數囘も次に述るやうな奇怪な强迫動作をやつたのである。夫人は自分の居間から隣の居間に走つて行く。その部屋にはひると夫人はその中央に置いてある卓子に向つてあるきまつた姿勢をとる。それから下女を招いて、何でもない用事をいひつけるか、ある時は用事などいひつけずに早速にさがらす。それから夫人は再び自分の居間に馳け戻つてくる。確かにこれは決して重い病氣の症候とはいへなかつたが、私達の好奇心を唆るに十二分であつた。そして醫者としての私の方から何等手を借さなくとも、患者自らが、最も手取早く、最も明瞭に說明をつけて吳れたのである。どうして私がこの强迫動作の意味を推定する

に至つたか、どうしてそれの解釋を暗示するに至つたかを丸で知つてゐない。私は患者に「どういふ譯であなたはそんなことをされますか。それにはどんな意味がありますか。」と幾度も質問してみた。夫人はきまつたやうに「あたしは一向存じません。」と答へるのであつた。ところが、ある日のこと、私は彼女の心に蟠る大きな根太い躊躇を見事に屈服さした。その瞬間突然彼女は氣附いたのである。そして夫人は強迫動作に關聯する一部始終を物語つたのである。彼女は十年前に非常に年上の男と結婚した。ところがその男は新婚の夜に陰萎であつた。男はその夜幾度も幾度も試みを反復するために自分の居間から花嫁の居間に駈けこんだが、その都度成功しなかつた。朝になつて男は「ベットの始末をする女中の目の前で俺は赤耻をかかなくてはならぬ。」と嚙んで吐き出すやうにいつて、矢庭に偶然その部屋にあつた赤インキの瓶をつかんで敷布の上に赤インキをぶちまいた。ところが、赤インキの汚點は當然つくべき場所に濡れなかつたのである。私には初めこの記憶と現在の强迫動作にどういふ關係が結ばれてゐるか見當がつかなかつた。單に一つの居間から隣の居間に幾度も幾度も駈けこむことが一寸一致してゐること、女中が現れてゐることがまづ類似してゐることを知つた。その時患者は私を隣の居間の卓子に導いて行つた。私はその卓子クロオスの上に大きな汚點のあるのを發見した。夫人はまた呼びこんだ女中の目にこの汚點が早速とまるやうな位置

に卓子を置いておくのだと說明した。新婚の夜のあの光景と彼女の現在の强迫動作の間に橫たはる密接な關係を私は最早疑ふことが出來なかつたが、それにはなほ幾多の學ぶべきものが存してゐた。まづ第一に女患者は自分を夫と同視してゐる事が明瞭になるだらう。彼女は夫の役割をしてゐる。卽ち夫人は一つの居間から隣の居間に夫が馳けこむのを模倣してゐる。同じ地位を保つために、私達はベットと敷布は卓子と卓子クロオスによつて置換されてゐると認めなくてはならぬ。これは一寸こじつけのやうに見えるが、以前に夢の象徵を硏究したことがこの際立派に役立つ。夢に於ては同樣にしばしば卓子が現れるが、卓子はベットと解釋すべきである。卓子とベットは二つで結婚を意味するから、卓子は容易にベットの代用を務めることが出來るのである。

强迫動作が意味を含んでゐる證明はこれだけで十分だ。强迫動作とはある深刻な光景の描寫であり反復であるやうだ。併し私達はこの外觀で滿足する義理なぞ持ち合してゐない。若しこの二つの間の關係をさらに一步立ち入つて硏究する時は、私達はあるもつと深いもの、卽ち强迫動作の目的にぶちあたるのである。この夫人の强迫動作の核心は明かに下女を呼びつけて、下女の面前に汚點(しみ)を示して、彼女の夫の「俺は下女の目の前で赤耻をかかなくてはならぬ。」といふ言葉とは正反對のものを證するところにある。かやうにして夫——彼女は夫の役割を眞似てゐる——は下女に赤耻を

ふのである。それ故私達は彼女が光景を正しい方向にむけてゐることを知るのである。同時にこれによつて彼女はあの夜に起こつた非常に悲痛なもの、赤インキを必要としたところのもの、卽ち夫の陰萎をも訂正したことになる。換言すればこの强迫動作は「いいえ。あたしの夫が下女の目前で赤耻をかくなぞは眞實でない。夫は陰萎ではない。」といふことを語つてゐるのだ。彼女はこの願望を夢におけると同じやうに、現在の動作の中に實現されたものとして描寫してゐる。この動作は新婚の夜の不幸から夫を恢復さしてやるといふ傾向に行使されてゐる。

私がこの夫人に就て諸君にお話の出來るすべてはこれと全然一致してゐる。もつとはつきり申せば、私達が彼女に就て知つてゐるすべては、それ自體では理解がつかなかつたこの强迫動作に對する只今の解釋の正しさを立派に裏書して吳れるのである。夫人は數年來夫と別居して、夫と合法的に離婚すべきやといふ決心と戰つてゐるのだ。といつて決して彼女が夫から全然解放されてゐたとは申せない。彼女は夫に對して貞操を守るべく强いられてゐる。彼女は誘惑に陷らないために世間から却いた。彼女は自分の空想の中に夫に許しを哀願し、夫の人格を理想化してゐる。彼女の疾患

の深い深い神祕は實に、彼女がこれでもつて意地悪い世間の噂から夫をかばひ、夫からの正式な離婚を合法的にし、夫に落ついた孤獨生活を可能ならしめるところにある。かくて一つの打見たところ罪もない强迫動作の分析は一直線を走つて一つの疾患の心臟を射拔いたことになつた。同時に一般强迫神經症の祕密に關して大きな掘出物を得たことになつた。諸君がこの實例に可なりの時間を割愛されたことを私は衷心から喜ぶのである。なんとなればこの實例はどんな例でも決して汲み出し難いいろんな條件を悉皆持つてゐるからである。分析家の手引とか干渉なしに、只今の場合症候の解釋は患者の方から斷定が與へられたのであつた。そして症候の解釋は忘却裡にある小兒時代に屬してゐない、患者が大人になつた生活に起こつた經驗に結びついてゐて、この經驗は彼女の記憶から決して拭ひ去ることの出來ないものであつた。症候の解釋にいつもきまりきつてあがるすべての攻擊は只今の實例に命中しない。だが柳の下にいつも鰌はゐない。解釋はいつもかううまく行くものでない。

さらにもう一つの實例をお話することにする。一見したところ邪氣のない只今の强迫動作がいかに女患者の祕密に私達を導いて行つたかといふことは諸君を驚かすものでなからうか。新婚の夜の歷史ほど女にとつて祕密のうちの祕密はないものだ。しかも私達が分析によつて性生活の祕密に到

違したといふことは、まぐれあたりであり、無意義なものだとやつけることが出來るだらうか。先生が勝手にそんなのを選んで、性生活に命中したのだと自惚れていらつしやるのだと諸君は仰しやるかも知れない。私達はあまり性急に批判したくない。兎に角第二の實例に鋒尖を向けることにする。第二例は只今のとは全く違つた種類で、しばしばお目にかかるものの典型であつて、私達はそれを就寢儀禮(Schlafzeremoriell)とよんでゐる。

患者は十九歳になる發育のよい利口な一人娘である。その教養、その知識慾にかけては兩親以上に秀れてゐた。子供時代は我儘な才氣潑溂たる子供であつたのが、最近になつて何等これといふ外來影響もないのにすつきり神經質になつてしまつた。娘は自分の母に對して非常に口答をするやうになり、いつも不滿で、いつも壓迫を感じ、優柔不斷で猜疑心が深くなつて來た。そしてとうとう最早自分一人で廣場とか大通を歩くことが出來ぬと訴へ出した。醫者は少くとも臨場苦惱と恐迫神經症の二つの診斷を下すが、娘のかういふ複雜な症候に就て私達はあまりいろいろ話さないことにして、この娘が漸次に就寢儀禮を現して來て、兩親がひどく困り拔いたことを專ら詳細に報告したい。ある意味に於て健常な人にも就寢儀禮が存してゐると申すことが出來る。少くとも自分の就寢を妨げられないやうにある條件を作るものだ。人は覺醒生活から睡眠狀態に移行するためにある一

定の形式を作るものだ。そして毎夜毎夜おきまりのやうにこの形式を反復する。ところが健常な人が就寢條件として要求する一切のものは合理的に理解出來るものである。萬一外境のためある變化を必要とするなら、人は容易にその外境に適應し、すつくり適應してしまふ迄大した時日がかかるものでない。ところが病的となつた就寢儀禮は頑固であり、最大の犧牲を捧げるやうに頑張る事を心得、同時にまた合理的動機の假面を冠り、皮相な觀察では、單にある大袈裟な細心といふ點が健常な人と違つてゐるぐらゐにしか見えない。ところが一歩詳細に觀察してみると、假裝にはいかにも間の拔けたところがある。儀禮は合理的動機を越えた規定を含んでゐる。さらに合理的動機と全く矛盾した他のものを持つてゐる。この娘は自分が毎夜繰返す用心の動機として、自分は睡眠に靜寂を保ちたいこと、喧しさの一切の根元を除かなければならぬことを擧げてゐる。このために娘は二種の動作をする。第一に自分の部屋にある大きな掛時計をとめてしまふ。ほかの時計はすつくり部屋の外へ持ち出し、引出の中にしまつてある腕時計さへ氣になつて抛り出してしまふ。第二に植木鉢と花瓶が萬一夜中にひつくりかへつたり、毀れたりして、自分の睡眠を破るかも知れないと、それ等を机の上に倒れたり落ちないやうにちやんと並べる。靜寂を保つためにかういふ手順をとることは見掛けだけは合理的であることを娘は知つてゐる。懷中時計などは枕元の机の上に置いても

耳障りになるものでない。私達は經驗上、掛時計の規則正しいこつちこつちといふ音は睡眠を亂すどころか、かへつて子守歌のやうに睡に導くやうに働くことを知つてゐる。さらに娘は植木鉢とか花瓶に足が生えて、夜中にひとりでに轉げ落ちたり毀れたりするといふ杞憂があり得べきものでないことを百も承知してゐる。なほ就寢儀禮のこれ以外の規定を觀察してみると、靜寂を保つといふ口實は薄弱になつてしまふ。例へば自分の居間と兩親の居間のドアを半分あけておくといふ要求、そのために娘はあけたドアにいろいろの道具をたてかけて閉まらないやうにしてゐるが、かういふ要求は靜寂にするどころかかきみだす噪音の源を却つて活動さすやうに見える。併し一番重大な規定はベット自體に關してゐる。ベットの頭部にあるボルステルは木製の枠組に觸れてはならない。小さい枕はこの大きなボルステルに對して丁度斜になるやうに置く。彼女は自分の頭を丁度この菱形の中央に置く。掛蒲團（私達は墺太利では Duchent と言ふが）はひつかぶる前に振らなくてはならぬ。その結果、中の羽が足の方にすつくりかたまることになる。ところが娘はかたまりをおさへてもう一度平均にすることを怠らない。

私は彼女の行ふ儀禮のほかのこまかしい點を述べることを省略しておく。お話したところで、大して新事實を學ぶことも出來ないし精神分析の目的からそれることになる。ただ見逃し難い點は、

娘はこれらすべての事を決してすらすらと行はなかつたことである。娘は念に念を入れて行つた。その結果、すべては型の如く行はれなかつた。吟味されやり直されねばならなかつた。疑惑がある時は一つの動作、ある時は他の動作に注がれて、その果ては、ちやんと安心が行く迄には殆ど二時間もかかるのであつた。その二時間の間、娘自身も寢ることが出來ぬし、はらはらしてゐる兩親も寢込むことが出來なかつた。

かやうな苦悶の分析は先刻の女患者の强迫動作の分析のやうに簡單にかたづかない。私は娘に解釋への暗示と緒口を與へなければならなかつた。娘はおきまりのやうに私の提供に對して、斷乎としていいえで以て否定するか、あるひは輕蔑するやうな疑惑をふりかざした。ところが、この最初の否定の反應に次いで一つの期間が續いた。娘は私の提供した可能性を自分自らに反省し、それに對する聯想を集め、記憶をよびおこし、連絡を作り、最後にすべての解釋を自らの力によつて遂行したのであつた。このやうな狀態に進むに從つて、娘はあの强迫的な儀禮の擧行を緩めて來て、治療のかたづく前に、娘は儀禮を全部やめてしまつたのである。卽ち今日お話した分析の成績からほ一つの症候への不斷の集中を跡形もなく散じて、最後に症候の意味がはつきり分かると共に、症候もなくなつてしまふ事實を諸君は知らなくてはならぬ。萬一うまく行かなければ私達は提出した

題目を何度も何度もひつこめなければならぬやうになる。併し他日他の連鎖を辿つて新しく前の題目にたち戻れる確信がつくものである。卽ち私が只今述べてゐる症候の解釋は研究業蹟の綜合である。そしていろいろほかの仕事が忙しくて合ひ間合ひ間に行つたため、この研究は數ヶ月にも渡つた。

この患者は時計が女子の性器官の象徵であるといふ理由で時計をすべて寢室から放逐したのだと漸次に曉つて來た。私達は他の場合に時計を別の象徵に解してゐるが、時計がこのやうに性的意味をとるのは、彼女の月經の周期現象と規則正しい休歇期に關聯してゐた。世間の女は自分の月經が時計仕掛のやうに正確に來潮することを自慢顏に吹聽するものである。ところがこの患者の恐怖は時計のこつちこつちこつちといふ音のために睡眠がかきみだされるところに向けられてゐた。時計のこつちこつちは性興奮の際のクリトリスの動悸に比すべきだ。娘は事實このなやましい感覺のために再三再四睡眠から搖り起こされて、今やこの勃起恐怖は停止もせずに進行する時計共を夜分に自分の近邊から遠去けよといふ命令となつて現れたのである。植木鉢と花瓶はいろんな甕と同樣に女子の象徵である。卽ち植木鉢とか花瓶が夜分に轉け落ちたり毀れたりしてはいけないといふ用心は立派な意味を含んでゐることになる。私達は婚約に際して甕とか皿を割る土俗が廣く一般に行はれてゐる

ることを知つてゐる。ここに御臨席の諸君は花聟が最早花嫁に何の要求も提供しないといふ誓約の象徴として、一夫一婦の婚姻制度の見地から眺めなくてはならないこの土俗を所有してをられる筈だ。これ等の儀禮のこの部分に關して娘はまた一つの記憶をよびおこし、その記憶からいろいろの聯想を浮べた。娘が大人になつて、性交の事實に關する知識を持つた時に、彼女の胸に、もしや新婚の夜に出血せずに、處女の證據がなかつたならばどうなるだらうかといふ恐怖の觀念が現れて來たのであつた。娘は小兒時代に嘗て硝子瓶や茶碗を落として、指を傷つけて非常に出血したことがあつた。花瓶を破毀しまいとする彼女の用心はとりも直さず、最初の性交に於ける出血と處女性に關聯する全錯綜の排斥を意味してゐる。同時に出血するといふ恐怖とこれと正反對のもしや出血しなかつたならといふ恐怖の排斥も意味してゐる。さらに娘がこれ等の儀禮を行ふ時に極めて音を立てないやうに注意した事實と只今の用心はずつと遠いところで互に關聯してゐるのである。

娘は自分の行ふ儀禮の中心の意味を一日娘がボルステルはベツトの枠組に觸れてはいけないといふ規定の意味を突然に曉つた時に發見したのだ。娘はかういふ。「ボルステルはあたしにはいつも女であり、直立してゐる木製の枠組は男でありました。」と。卽ち娘は――私は魔術的儀禮によつてと挿句しておかう――男と女が接觸しない事を欲したのである。換言すれば、夫婦の交を行はないや

うと以前既に小兒時代に直接に達しようと試みた。卽ち娘はこわいといふ口實を設けた。言ひかへれば、恐怖傾向の實在にかこつけて、兩親の寢室と自分の寢室の間のドアを閉めないやうにしたのである。この命令は娘の現在の儀禮の中にもなほ含まれてゐる。こんな方法で娘は兩親を覗ふ機會をこしらへたが、機會を窺ふうちにある時など不眠にとつつかれて、數ケ月も不眠狀態が續いた。このやうな手管で兩親の邪魔をすることに滿足しきれなくなつて娘は今度は時時兩親の眞中に寢させて貰ふことにさへ成功した。その結果、「ポルステル」と「枠組」は本當に接觸することが出來なかつたのだ。とうとう娘のからだは大きくなつて、最早兩親のベットの中に樂に寢ることが出來なくなつた。そこで娘は恐怖といふ意識的假面を利用して、母親に自分のベットの方に代つて貰つて、首尾よく父親の側に寢るやうになつた。この狀況は確かに空想の出發點であつた。そしてこの空想の餘韻をこの儀禮のうちに嗅ぎ出すことが出來る筈である。

ポルステルが女であつたなら、掛蒲團をふつて中の羽をすつくり下に集めて、ふくらみをこしらへるのにもまた一つの意味があるべきである。これは女の妊娠を意味してゐる。ところが、娘は妊娠を再び元にかへすことを決して怠らなかつた。なんとならば、兩親が接觸してその結果もう一人

子供が生れて、自分の競爭者が現れるといふ恐怖に娘は數年間なやみ通してゐたからである。大きなポルステルが女、卽ち母であるなら、小さい枕は單に娘を示すことが出來る筈だ。何故にこの枕をポルステルの上に菱形に置き、さらに自分の頭を丁度この菱形の中央に置いたのであるか。彼女は菱形は方方の壁の樂書から女子の開いた隱部を意味してゐることを早速に思ひ出した。この場合娘は自ら男卽ち父の役目をして、自分の頭によつて陰莖を代用したのであつた。（去勢の象徵としての斷頭を參照。）

こんな恐ろしい考へがおぼこ娘の腦裡に往來してゐるものかと諸君は叫ばれよう。私は往來してゐると信じてゐる。併し諸君は私がこのやうな考へを發明したのでなくて、單にこのやうな考へを解釋したといふことを忘れずにおいて欲しい。こんな就寢儀禮はどこから見ても奇怪である。そして諸君は私達の解釋によつて摘發した空想とこの儀禮の合致點を見逃してはならない。なほ私にとつてもつと大切なことは、諸君がこの儀禮が單純な一つの空想でなくて、どこかある一點に湊合點を持つてゐる數個の空想の產物であることに留意して欲しいところにある。さらに儀禮の規定は性的願望をある時は陽性にある時は陰性に反映さし、一部はその願望の代表者となり、一部はその願望の防禦者となつてゐるのである。

若し諸君が患者のこの儀禮とこれ以外の他種の症候を正しく結びつけるなら、この儀禮の分析から澤山の知識を學ぶことが出來ようが、只今の場合私達はこの結びつける道を知つてゐない。だから諸君は、この娘が父とエロチックな關係に陷つてゐること、その關係の發端は早期小兒時代に溯つてゐるといふ暗示で滿足しなくてはならない。この目的のために娘は自分の母親にかやうな不快な目に合したのであらう。この症候の分析はまたぞろ患者の性生活に觸れたことを看過することが出來ない。神經症の症候に含まれてゐる意味と目的を深くつきとめてみれば、私達はこんな事實が大して驚くに足りないことを幾度も合點する。

要するに私は諸君に二つの實例をお話して、神經症の症候が間違ひとか夢と同じにある意味を持つてゐることとその症候は實に患者の生活と密接な關係を持つてゐることをお目にかけたのである。この二つの實例から推論したこの最も重大な定理を諸君が早速に信ずると私は期待してゐるだらうか。いや、期待などは出來ない。また諸君は十分納得が行く迄いろいろ澤山の實例を話すやうに私に期待することが出來るか。これも出來ない。若し私がいろいろの患者を直した一部始終をお話するとなると、神經症學のこれ等の諸點を解決するために、一週に五時間の講義をしなければならなくなる。だから私の主張の實證だけをお目に掛けとくだけにして、もつと詳しい知識を知りたい人

に、この題目の文献として最早古典に屬してしまつたブロイエルの最初の患者（ヒステリイ）の症候の解釋、ユングが混沌たる目鼻もつかない症候を物の實事に種明しをした所謂早發性癡呆の實例——ユングはその時代では單に精神分析學者であつて、未だ豫言者にならうとは思つてゐなかつた——及び精神分析の機關紙に發表された無數の研究を參照して貰ふやうお願ひしておきたい。

諸君がかやうな努力を惜まれないなら、確實に證據となる材料が山程轉つてゐることに強い感銘を受けられる筈だが、同時に諸君は別の困難にも逢著されるだらう。既に私達が知つたやうに、症候の意味は患者の生活と關聯してゐる。症候が個體の色彩が強ければ強いだけ、私達は症候がその患者の個體生活に關聯してゐる事實をさらに鮮明に合點することが出來る。從つて一見無意味と思はれる思想と一見無目的と思はれる行動に對して、何か過去の情況を發見することがわれわれの研究の本領となるのである。その結果、發見した情況に對して思想は正しい地位をとり行動は目的にかなふことが分明する。卓子に駈けつけて行つて下女を呼ぶあの女患者の強迫動作は實にこの種の症候に對する定型と申せる。ところがまた全く趣を異にした症候が存してゐる。むしろ後者の種類の方が多い。そしてこの種の症候をむしろ定型的症候と呼ばなくてはならぬ。卽ちこの種の症候はあらゆる場合に大體同一であつて、個體的差違は消滅してしまひ、ある時は少くとも萎縮してしま

ひ、その結果、症候を患者の個體生活に結びつけ、個人の體驗的情況にひつつけることがむづかしくなつてくる。もう一度私達は强迫神經症に立ち歸ることにしよう。あの第二例の女患者の就寢儀禮はそれ自體定型的な多數の症候を持つてゐた。それには勿論個體的特徵も多量に存してゐて、所謂經歷的解釋が立派に下せたのである。併しこれ等の患者達が申合せたやうに、傾向を反復し、作法を律動的に行ひ、動作のあるものを獨立させなければならなかつた。彼等の大抵の者はあまり澤山のものを洗ひ落とす。例へば臨場苦悶（トポホビイ、空所恐怖症）になやむ患者は――かういふ患者は最早强迫症にはひらない、むしろヒステリイ症と名附くべきである――自分の症狀に於てしばしば疲れ果てた單調でもつて同一動作を反復してゐる。患者は閉された空所、だだ廣い場所、長い一本道や並木道に怯える。患者は知人と一緒の時、あるひは自分のうしろから馬車がくる時は安心して行ける。併し患者達は基調が同種であつてもそれぞれ個體的條件、言つてみれば個體的氣分を帶びてゐて、いちいちの場合に、お互に非常に矛盾し合つてゐる。ある患者は狹い道だけ、ある患者は廣い道だけを恐れ、ある患者は人通の少い街路、ある患者は雜踏してゐる街路だけが步けない。同じやうにヒステリイにも個體的特徵が山程あるが、また共通した定型的症候に富んでゐて、こんな定型的な症候から經歷的由來をたやすく探ることが絕望のやうに見える。なほこのやうな定

型的症候によつて診斷の着眼點を極めることが出來ると附言しておきたい。實際ヒステリイの症狀に於て定型的症候から一つの經驗の結果若くは類似の經驗の連鎖、例へば、ヒステリイ性嘔吐からある嘔吐を催す印象の結果をつきとめたなら、嘔吐の他種の症狀に於て、一見誘因となつたやうに思はれる經驗の全く違つた種類を發見した時は、私達は容易にまごついてしまふ。併しすぐあとから、ヒステリイ患者は未知の理由から嘔吐をしなければならなかつたことが分かつてくる。そして分析から摑み出したある經歷的機緣といふものは單に口實であつて、この經歷的機緣は機會ある度にこの內部要求に利用されるものである。

以上のお話から神經症の個體的症候は患者の體驗との關係から立派に說明出來るとはいへ、精神分析の術式は同一の症狀において個體的以上に頻繁に現れてゐる定型的症候を說明する上に一向役に立たないといふ情ない結論が生れてくる。なほこれに加へて、私は症候の經歷的解釋を合理的に追求する際に現れる幾多の困難を殆ど諸君にお話しなかつた。私はそれを說明する心組はない。私は諸君に何物かを伴つたり隱蔽したりする目論見を持つてゐないとはいへ、總論と名附くべきこの研究のまつぱじめから、諸君のあたまを惑亂さし茫然たらしめる氣はないからである。症候の解釋の知識に今やつと朧ろな世界が開けたばかりである。私はこの既知の知識を足場として一歩一歩前

遊して暗黒のうちに光明を手探らねばならない。だから定型的症候と經歴的症候との間に存する根本的相違は嚴然と區分がつかないことを注意して、諸君の沮喪を慰めてあげたい。個體的症候が患者の體驗とかくも深く關聯してゐるなら必然定型的症候に對しても、それはすべての人類に共通した、それ自體定型的なある體驗に關聯してゐるといふ可能が存すべきである。神經症に於ておきまりのやうに反復される個性の特徴、例へば强迫神經症の反復とか懷疑とかいふものは、病的變化といふ本質によつて患者を驅りたたす一般反應であるかも知れない。何もそんなに早くから絕望する理由なぞない。私達はさらにいかなる歸著に達するかを見たいものなのだ。

私達は夢學に於ても今の場合と同じ難關に遭遇したことがある。その難關のあるものは以前の講義でお話することが出來なかつた。夢の顯在内容は非常に千差萬別であり、個體的相違が大きい。そして私は分析によつて顯在内容から摘發したものを諸君に詳しくお目にかけた筈である。ところがこの外に定型的と名附けてよい、人類全體に同一の姿で現れる夢が存してゐる。かういふ夢の内容はいつも同一であつて、われわれの解釋に向つても同一の頑固さで抵抗するものである。墜落、飛行、浮揚、水泳の夢、妨害される夢、裸體の夢、ある種の惡夢がこの種の夢の代表である。だがこれ等は個人個人にそれぞれ適切な解釋が與へられてゐるが、この種の夢の單調さと定型的な發現

には何等適切な説明が下されてない。ところがこれ等の夢に就てもある共通した基調に個人的に違つたいろいろの色彩が施されたものであることを觀察してゐる。そして大體に於てこの定型的な夢もまた、私達が定型的でない夢から得た夢の生活の知識に、何のこじつけなしに、いや、私達の見解を普遍して行くに從つて合致することを知るのである。

第十八章　外傷への固著、無意識

前回私は精神分析の研究を續行するために私達の懐疑を出發點とせずに、私達が贏ち得た知識を出發點としたいと申しておいた。私は雛形とも形容してよいさつきの二つの分析から知つた最も興味深い二つの推論に就て未だ一言もしやべらなかつた。

第一の推論。二人の患者は恰も彼等の過去のある一部分に固著され、その桎梏から釋放される手段を知らない、そしてこのために患者達は現在と未來を斷ち切つてゐるといふ印象を與へた。たとへてみれば、往古世人が修道院に世をさけて、その一隅で不幸な人生の運命を甘受したやうに、彼女達は自分の疾患といふ修道院の中で世捨人の生活をしてゐるのだ。第一例の女患者にとつては、固著はあの夫との結婚であつた。彼女は現實においてはとうの昔にこの結婚を拋棄してしまつたが、この結婚は實に彼女にこの運命を開展したといへるのである。女は自分の症候によつて夫との關係を續けてゐる。私達はその症候の中に、夫を辯護し、夫に哀訴し、夫を淨化し、夫の不幸を痛んでゐる聲を解することを知つたのである。女は年が若くてほかの男をひきつける魅力が十分あつた。

それだのに女は夫に貞節をたてるために、あらゆる現世的な同時に空想的な（魔術的な）用心を怠らなかつた。女は世間の人に顔を出さうとしない、女は自分の容貌に振むきもしない、女は自分の坐つてゐる一つの椅子からやすやすと立ち上らうとはしない、そして自分の名前の署名を拒絕し、自分の所持品はどんなものであらうと他人が持つてはならないといふ理由から、一切の贈物を人に與へることが出來ない。

第二の患者であるあの若い娘では、それは父へのエロチックな戀慕であつた。この戀慕は思春期前の年代に現れて、彼女の生存にとどめをさしたのである。娘はあたしはこんな風に病氣である限りは結婚なぞは出來ないと結論を下してゐるが、私達は娘は結婚などせずに父の側にゐたいために、そのやうな病氣になつてゐるのだと推測しなければならない。

どうして、どういふ道程を經て、またどういふ動機に行使されて、人間がこんな驚くべき、こんな不利な心理狀態を人生に對してとるやうになつたのであらうか。この態度は神經症の一般特徵であつて、決してこの二人の患者に特異な特徵でないと假定しなくてはならぬ。併しこれは實際はあらゆる神經症に普遍な、實地上非常に有意義な特徵である。ブロイエルの最初のヒステリイ患者は同樣な道筋から、自分が重篤な父を看病してゐた時代へ固著されてゐたのであつた。病氣が回復し

たにもかかはらず、彼女はそれ以來ある點に於て人生と絶緣してしまつた。彼女は健康に復して十二分に働けるやうになつた。それにもかかはらず常態な女としての運命を拋棄してしまつた。私達の見たどの患者に就ても、分析を通して患者達は自分の疾患の症候の姿をもつて、その症候の推論をもつて、彼の過去のある期間に踏みとどまつてゐることを知る事が出來る。大抵の場合患者は非常に早期な人生の道程、即ち自分の小兒期、滑稽と思はれるかも知れないが、自分の乳兒期に固著されてゐるのである。

このやうな神經症患者の示すこの行動との非常な類型を、歐洲大戰當時特に頻頻に現れた疾患即ち所謂外傷性神經症が示してゐる。外傷性神經症は勿論大戰前でも、列車衝突事故とか、その他の恐ろしい生命危險の事故のあとでよく頻發した。外傷性神經症はその根本にあつては私達が分析を試み治療を施さうとしてゐる偶發神經症と同型でない。外傷性神經症を精神分析の見地から說明する事に今日未だ成功してゐないが、二つの區別が那邊に存してゐるかを闡明することが將來成功することを希望しておきたい。併しある一點に於て兩者に完全な一致があることを特記しなくてはならぬ。外傷性神經症の患者は、その疾患が外傷事故の發した瞬間への固著を基調としてゐるといふ立派な證據を示してゐる。患者は夢の中に繰返し外傷の光景を反復するのを常とする。若しヒステ

リィ型の發作が起つて、私達がそれを分析にかけてみれば、この發作はその外傷の光景に對する完全な代用に一致してゐる事實を知るのである。恰も患者は外傷の光景をすつくり片附けてゐないやうな、恰もこの光景は強いられない痛切な任務として患者の目前に横たはつてゐるやうに思へる。そして私達は患者のこのやうな考へ方に眞面目に賛成してやる。それは私達が唱へてゐる精神現象の經濟觀への道を示して與れるからだ。然り。外傷といふ言葉はかやうな經濟的意味に外ならない。精神生活に短時間のうちに刺戟が強く增量し、この刺戟を尋常普通の方法で鎭壓し除去することに失敗し、その結果必然に心中のエネルギィ活動に永續の支障が生じた時に、私達はこれを外傷と名附けるのである。

この類似から當然神經症患者が固著されたやうに思はれる經驗をも外傷的と命名するやうに誘はれる。かやうなために私達は神經症といふ疾患に對して單一な條件を準備しなければならなかつたのだ。神經症は外傷的疾患に比すべきであり、強烈な感動を持つた經驗を鎭定することが不可能なために發生したものである。事實ブロイエルと私が一千八百九十三年から九十五年にかけて新しい觀察を理論的に批判した最初の公式もまた同じ內容であつた。夫から離別した若い夫人であるあの女患者のやうな病例はこの見解を立派に證明してゐる。夫人は自分の結婚生活の實行難に打克つこ

とが出來ずに、彼女の外傷に永遠にぶらさがつてゐるのである。ところが父へ固著したあの娘の第二例に就ては私達の只今の公式が大して包括的でないことを敎はる。一方に於て小さい娘がかやうに父に戀慕することは幾分常套なもの、しばしば克服しやすいものであつて、ここでは外傷的といふ名稱はすべての內容を失つてしまふが、他方に於て患者の病歷はこの最初のエロチックな固著はその當時は外觀上無難に通過されたが、數年たつて初めて强迫神經症の症候となつて再び現れたことを敎へて吳れる。だから私達はこの實例から神經症の條件がいかに複雜を極めてゐるか、いかに雜多な條件が存してゐるかを豫想するが、同時に私達は外傷說が誤りであると捨て去ることが出來ないことを推測する。外傷說はどこへ出しても通用するものであり、どこへ出しても資格があるものなのだ。

ここで今迄步いて來た道をも一度棄てることにする。今のところこの道は私達を深く導いて吳れない。正しい道程が見附かる迄暫くほかのいろんな事を習つておかねばならぬ。過去のある時期への固著といふ題目に關して、私達はかやうな現象が神經症以外の世界にも廣く散在してゐることに留意しなくてはならぬ。どの神經症でもすべてかかる固著を含んでゐる。然しながら、固著は必ずしも神經症に導くとは限つてゐないし、固著と神經症は合致するものでないし、固著は神經症への道

に現れるものでない。過去のある時代への情緒的固著のお手本として悲哀がある。悲哀それ自體は神經症と同じに現在と未來に對する完全な逃避を含んでゐる。ところが素人の判斷では悲哀と神經症とは劃然と區別されてゐる。一方神經症にでも悲哀の病型と名附くべき種類が存してゐる。

人生の在來の根柢を震盪さすやうな外傷的事件によつて人類はその生存に停止を命ぜられて、現在と未來に對する一切の興味をなげすてて、永遠に過去の思ひ出のみに耽けるものである。併しこの不幸な人はこの際神經症となる必要はない。だから、よし他の場合きまつて干與してゐる、意義深いものであるとはいへ、私達はこの一つの特徵を何も神經症の特性として過重する必要はないのである。

さて次に私達の分析の第二の推論に觸れることにしよう。この推論に對して私達は何等の制限を設ける心配はない。私達は第一例の女患者の口から、彼女の行ふ無意味な强迫動作や彼女がその動作に關聯してゐるものとして語る祕密の囘想に就て聞いたが、またその後兩者の關係を研究し、囘想と動作のこの關係から强迫動作の目的を嗅ぎつけた。ところがここに今迄お預りしておいた、特に注目に價する一つの要素がある。この女患者が强迫動作を反復してゐる限り、彼女はこの動作がある體驗と結びついてゐることを意識してゐない。兩者の連絡は彼女に隱されてゐるのである。彼

女はどういふ衝動の下でかやうな强迫動作をしてゐるかを知つてゐないと眞から返答しなければならなかつたのだ。それから治療の效果によつて突然に彼女は兩者の關聯を發見して報告することが出來る迄になつたのである。併し患者は自分がこの强迫動作を行ふ目的、即ち過去の悲しい一章を訂正し、愛する夫を高い評價におかうとする目的に就ては何等氣附くところがなかつた。この動機こそ唯一强迫動作の原動力であり得ることを彼女が悟つて私に告白する迄には可なりの時日と大變な苦心を要した。

不幸な新婚の夜の後に起こつた光景と夫に懐く患者の愛情の二つの關係が、私達が强迫動作の「意味」と命名したものを合成したのである。併し彼女が强迫動作を行ふ限りこの意味の兩方向即ち「由來」及び「目的」は彼女には未知のものであつた。だから精神作用は彼女の心中に活動してゐてそれの結果が丁度强迫動作であつた。彼女は常態な心理狀態でこの結果を認識したが、この結果の精神的前提は寸毫も彼女の意識界の知識に現れなかつた。ベルンハイムが講堂で被驗者に醒覺後五分たてば雨傘を開けと命令しておいたのに男は催眠狀態から醒めると早速この命令を實行した。だが男は何の理由で雨傘を開くべきかの動機を知らなかつた。彼女はこの被驗者と全く同じことをやつてゐたのだ。私達が無意識的精神作用の實在を許す時はかやうな狀態は生き生きしてくる。この

ならぬ。そして若しこれ以上に立派な說明が存在するなら、その時こそ私は進んで無意識的精神作用の假說を撤回したい心組である。併し今日迄のところ私達はこの假說に踏みとどまつても差支へない。そして萬一他人が無意識は科學といふ意味に於ては決して實在でない、單なる字句であり、une façon de parler であると反駁しようとも、私達は飽く迄もその主張が不當であると首をすくめて笑つてやらねばならぬ。實在でないあるもの、さういふものからどうして强迫動作といふ實在として極めて明瞭な結果が發生することが出來ようぞ。

第二例の女患者にも根本に於て全く同じ事が申せる。彼女はボルステルはベットの枠組に觸れてはならぬといふ規則を作つた。そしてこの規則を遵守しなければならなかつたが、彼女はこの規則がどこに由來してゐるか、何を意味してゐるか、それの實行力はいかなる動機に負つてゐるかを知らなかつた。彼女がこの規則にいかに無關心であらうとも、いかに反抗しようとも、いかに憤慨しようとも、その規則を破棄しようといかに決心を堅めても、そんな事は規則の實行と一向無關係である。この規則は遵守しなくてならぬものなのだ。何故にこの規則を遵守しなくてならぬと自問しても彼女は一向明答が出來ない。どこからやつて來たとも分からない、常態な精神生活の一切の影

響に對してどこ迄も反抗しようとする、患者にさへ恰も他界からやつて來た權力無雙の賓容のやうな、死すべきものの渦卷に交つてゐる不死の精靈のやうな印象を與へる强迫神經症のこれらの症候、これらの觀念と衝動の中に、精神生活の他界から隔離された特殊な區劃の存在を最も明快に指示するものが存してゐることを人は認めなくてはならぬ。彼等から精神生活に於ける無意識の實在を確保すべき堂堂たる一道が開けてくる。そして丁度その理由をもつて、意識心理學だけを知つてゐる臨床的精神病學は彼等に特殊な變質徵候といふ烙痕を附ける以外何の方法をも講ずることを知らなかつた。勿論强迫觀念や强迫衝動はそれ自體無意識的でない。況や强迫動作の實行は意識的知覺から逸する筈がない。若し彼等が意識に出しやばらなかつたなら、決して症候とはなり得なかつたであらう。併し私達が分析を土臺として推論を立てる彼等の心理的前提、私達が解釋によつて彼等を置換する連鎖は、少くとも私達が分析といふ仕事によつて彼等を患者に意識さしてやる迄は無意識である。

只今の二つの實例から決定したこの事實はあらゆる神經症のあらゆる症候に於て立證出來るものであること、どんな場合にも除外なく症候の意味は患者には氣附かぬものであること、分析は常に症候が無意識過程の誘導體であつて、然もこの無意識過程は諸種の好都合な條件の下に意識にのぼ

すことが出來ることを附け加へるなら、私達が精神分析に於て無意識精神を除外出來ないこと、無意識を感覺で觸知出來るものと同じやうに取扱ふやうに慣れてくることを諸君も理解して下さるだらう。然しながら、無意識を單に概念と考へていらつしやる人、分析といふことをやつた經驗のない人、一度も夢を解釋したり神經症の症候に含まれてゐる意味と目的を飜譯した經驗のない人は、この問題に口をはさむ資格がないことを多分諸君でも了解される筈だ。分析的解釋によつて神經症の症候にある意味を與へるといふ可能性は無意識精神過程の實在に對して――諸君が望まれるなら無意識精神過程の假設の必然に對する反駁の餘地のない立派な證明であるのである。

併し問題はこれだけで落著しない。私達はブロイエルの第二の發見――この發見は私にさへ第一の發見より内容豐富に思はれるし、彼のみがこの發見の功績を占領した槪があるが――のお蔭で無意識と神經症の症候の二つの關係に就てもつと多くのものを學んだ。症候の意味は常に無意識的であることを知つたのにとどまらない。實にこの無意識と症候の實在可能の兩者の間に仲介をとる一つの關係があることをも知つたのである。諸君も間もなく私の言ふところがお分かりにならう。私はブロイエルと一緒に次のやうに主張してもよい。われわれがある症候に出くはす時は例外なしに、その患者の心中に症候の意味を藏してゐるある無意識過程が存在してゐると結論しなくてはならな

いと。併しこの意味なるものは症候を作るためには無意識的であるとも考へなくてはならぬ。症候と申すものは意識過程から形成されない。その無意識が意識となる瞬間に當然その症候は消失せねばならぬ。ここに到つて諸君は治療法の緒口、卽ち症候を消失さすべき一道を早速に合點されるであらう。事實ブロイエルはこの道を通つてヒステリイ患者を救治したのである。言ひかへればヒステリイ患者をその症候から釋放してやつたのである。ブロイエルは患者に症候の意味を藏してゐる無意識過程を意識にのぼしてやる術を發見した。その結果症候が消失したのである。

ブロイエルのこの發見は思索の成果でなくて、患者の協力によつて成就した幸運な觀察の成果であつた。諸君はこの新事實を諸君に既知のある他の事實と比較することによつて理解しようと焦る必要はない。むしろ諸君は、この新事實に含まれてゐる一つの新しい基礎事實を知らなくてはならぬ。そしてこの基礎事實によつて他のいろんな事が鮮明になつてくるのである。この故に私に同じ事を違つた言葉で反復することを許して欲しい。

症候形成は停滯狀態にあるあるものの代用である。ある精神過程は常態に於てはそれの存在が意識にのぼる迄ずつと發展しなくてはならないものなのだ。ところが萬事さうは行かぬ。そしてさう都合よく行かぬために、無意識界にあらねばならなかつた過程がどこかでかき亂され喰止められて、

その結果症候と申すものが現れたのである。だから譬へてみれば交換といふやうなものが現れたといへる。若しこの過程を逆に溯ることに成功すれば、神經症の症候の治療の任務は果たされたことになるのだ。

ブロイエルの發見は今日でも依然精神分析療法の基礎となつてゐる。無意識的前提が意識的になる時に症候は消失するといふ命題はその後の廣汎な研究によつて確實となつた。勿論この命題を實地に應用する時は、最も法外な最も思ひがけない複雑さにぶちあたるのは必然である。精神分析の治療法は無意識を意識に轉化さすことによつて效果を發揮する。そして治療法がこの轉化を成就する立場にある時にのみ卓效を奏するのである。

さて諸君がこの治療法が極めてたやすいものだと想像する危険に陷らないために一寸本題からそれることにする。只今迄の講義に從ふと神經症とはある種の無知の結果、換言すれば人が當然知らなくてはならぬ精神過程への無知の結果であつたのだ。この考へ方は有名なソクラテスの教義と非常に似通つてゐる。ソクラテスの教義によると不德でさへ無知の結果となつてゐる。さて分析に熟練した醫者は種種な患者に就てどういふ種の感情が無意識の儘で停滞するかを大抵何の苦もなくつきあてることが出來る。だからこの知識を報告して貰ふことによつてそれ獨自の無知から患者を解

放すことが出來上れば、患者を回復さすことは醫者にとつては何もむづかしいものでない。少くともこの方法によつて症候の無意識的意味のある一面をたやすく解決することは出來るが、勿論他の一面、卽ち症候が患者の過去の體驗にどういふやうに關聯してゐるかに就て多くを摘發することが出來ない。なんとなれば醫者は患者の過去の體驗なぞ知つてゐないからである。醫者は患者がその體驗を回想して話し出す迄じつと待たねばならぬのだ。併し多數の例に於て、この體驗に對する代用物が發見出來るものだ。醫者は患者の近しい人達から患者の過去の生活に就て敎示して貰ふことが出來る。そしてしばしばこの人達はどういふ事件が外傷的に働いたかを知つてゐる立場にある。勿論この人達はずつとずつと小兒時代に起こつたがために患者が記憶してゐないやうな事件さへ語ることが出來るだらう。だからこの二つの手段を組合せて私達は患者の病原的無知を短時間にほんの少量の努力で明瞭にしてやる見込がつくのである。

　さうすらすら行けば占めたものだ。ところが最初にしつかり下準備をしておかなかつた事に氣が附いた。知識と知識は同物でない。知識にもいろんな種類がある。知識といつても心理學的には決して等價値のものでない。「Il y a fagots et fagots.」（莫迦にもいろんな莫迦がある。）とモリエエルが申してゐる。醫者の知識は決して患者の知識と同一物でないし同一效果を與へることも出來な

い。醫者が口づから自分の知識を患者に傳授したとてその知識は一向效力がないものだ。いや。さう申すのは却つて不當であつたかも知れぬ。それは症候を消散さす效果を有してゐないが、別のものを持つてゐる。それは分析を運轉さす。そしてそれの第一の結果として否定の聲がしばしば發せられる。その時患者は自分が今迄知つてゐなかつたあるもの、卽ち自分の症候の意味を知る。然も彼の知るといふ程度は前とは大して變りがないといへる。かくて私達は無知にも一種以上種種雜多な無知があることを知るのである。諸君にその差違がどこにあるかを示すために、われわれの心理學上の知識をある點迄掘り下げなくてはならぬ。然しながら症候がそれの意味を知ると共に消失するといふ命題はこの故に正しいのである。この知識は患者に於ける內部變化に基づいてをらねばならぬ事が必須條件であつて、この內部變化はある目的を持つてゐる心的作業によつてのみ惹起され得るのである。この點に於て私達はやがて症候形成の力學として總括すべき諸問題に直面したことになる。

これ迄にお話した事實がすべてあまり混沌としあまり複雜すぎるかといふ疑問を諸君に提出しなければならぬ。私が幾度も幾度も事實を收縮し制限し、思考の流を引伸し、おしまひにその流をほつんと切つてしまふ事によつて諸君の頭を混亂ささなかつたらうか。混亂さしたなら誠にお氣の毒な

次第である。併し私は眞理を犧牲にして迄眞實を單純にしようとする事には飽く迄も反對して來た。たとへ對象が多方面であり縺れ合つてゐるといふ印象を受けられたとて一向平氣だ。そして私がいろんな點に於て諸君に早速に消化出來る以上にうんと澤山の事柄をお話しても、一向害にならないと考へてゐる。私は聽講者諸君及び讀者諸君が私のお話した知識を頭腦の中で整理し、略省し、單純にし、憶えておきたいものだけを旨く抽出されることを知つてゐる。澤山の種を蒔いておけば、結局澤山の收穫があることはある程度眞實である。私の話の中にある眞髓のもの、卽ち症候の意味、無意識、及び兩者の關係をいろんな餘談を抜にしてしつかり摑まへておいて欲しいのである。われわれの渾身の努力は、第一にどうして人類は病氣になるか、どうして人類が臨床の問題である神經症といふ人生の見方に到達し得るか、第二にどうして神經症の條件から精神力學の問題である症候が發展するかの二方向に走らうとしてゐる事を理解して下さつたことと思ふ。これ等二つの問題に對して當然どこかに接觸點が存してゐる筈である。

今日はこれ以上話を進めない考へであるが、未だ時間もあることだから、諸君の注意を二つの分析の別な特徵、勿論あとでもう一度詳しくその意義を論ずる積りであるが、記憶缺損といふこと卽ち健忘(アムネシヤ)に注いで貰ふことにする。諸君も旣に耳にされたことであるが、精神分析療法の目的はすべ

ての病原的無意識を意識に轉化するといふ公式に包容することが出來る。患者のすべての記憶缺損を埋めて、患者の健忘を除去するために、この公式を他のものによつて置換出來ることを聞いて多分一驚されるであらう。併し結局は同じ事になる。即ち症候の發生に重要な關係を持つてゐるものは一途に神經症者の健忘にかかつてゐる。だが諸君があの第一例の分析を考へられるなら、健忘に對するこのやうな評價は正しくないと思惟されよう。あの女患者は彼女の强迫動作が結びついてゐる場面を忘却してゐない。忘却どころかこの場面は生き生きした囘想の中に保存されてゐる。そして彼女の症候の發生には忘却された何等かの因子が一向携つてゐない。第二例のあの强迫儀禮をやつた娘に於ける立場も前者に比してあまり鮮明とはいへぬが大體相似してゐる。彼女もまたあの小兒時代にやつた自分の行動、卽ち兩親と自分の寢室の間のドアをあけたままにしておいた事實、自分が母親をその夫婦のベツトから追拂つた事實を決して忘却してゐなかつた。勿論たじたじして厭な思ひに包まれたが、娘はこの事實を非常に鮮明に覺えてゐたのである。私達がこれに就て特に注目して觀察出來るのはさつきの第一例の女患者である。彼女はあの强迫動作を何百囘と實行してゐたのにも拘らず、一度だつてこの强迫動作が新婚の朝の出來事と似てゐることに氣附かなかつた。そして彼女が强迫動作の動機を探るために短刀直入的に質問をぶつかけられた時にさへ、この囘想

は一度も浮ばなかつたのである。同樣なことはあの娘にも適切にあてはまる。この娘に於ては儀禮ばかりでなく、その儀禮の發生に與つた動機迄が同一な毎夜毎夜反復されてゐる情況の下に行はれてゐるのである。二人の場合本當の意味でいふ健忘卽ち記憶缺損は存してゐなかつたが、記憶の再生、記憶の想起を作るべき連鎖が斷絕してゐる。記憶のこのやうな障礙は强迫神經症には十分だが、ヒステリイ症では大分樣子が違ふ。ヒステリイといふ神經症の特徵は大概途方もない健忘である。ヒステリイのそれぞれの症候を分析してみるとお極まりのやうに過去の印象の全連鎖がほどけてくる。そしてこれ等の印象が復歸する時はその印象は文字通り今日迄まるで忘却してゐたと名附けてもよいものである。この連鎖は一方に於て小兒時代にとどいてゐる。その結果ヒステリイ性健忘はわれわれ健康人に對して精神生活の發端を隱してゐる小兒性健忘の直接連鎖と考へてよい。他方に於て私達は患者の極く最近の經驗が忘却裡に陥りやすいこと、發病に導いた、若くは疾患を增惡させた機緣は特に忘却によつて、勿論すつくり呑まれはしないが、侵蝕されることを知つて一驚するのである。かやうな最近の回想の全景から重大な明細が消失してゐたり、ある時は記憶の錯誤によつて置換されてゐたりすることがお定まりのやうになつてゐる。あるひはまた、分析が結末に近づく直前になつて初めて、長い間引き留められてゐた、連鎖の間にはつきりした空隙を殘してゐたな

まなましい經驗のある囘想が浮び上るといふことが幾度も起こるのである。

囘想力がこのやうに侵害されることは既にお話したやうにヒステリイの特徴である。ヒステリイに於ては症候（ヒステリイ發作）として記憶の中へ何の痕跡も殘さないやうな狀態が現れる。强迫神經症ではこの通りでないから、この種の忘却はヒステリイ性變化の心理的特徴であつて、神經症の一般特徴でないと諸君は結論されよう。だがこの區別の意義も次の事實を考へれば薄弱になつてくる。私達は一つの症候の意味を二樣、卽ち第一は症候の由來、第二は症候の目的又は理由、換言すれば第一は症候の發した印象と體驗、第二は症候を行使する目的に總括してゐる。症候の由來は外界からやつて來た、當然一度は意識された、そしてそれ以來忘却によつて無意識になつた印象に歸著する。ところが症候の目的、症候の傾向の方は、最初は必然意識にあつた、しかも二度とは意識にのぼらない、卽ち發端から無意識に留まつてゐる內部心的（エンドプシヒツセル）過程であるのを常とする。だから健忘が丁度ヒステリイに於けるやうに症候が支持されてゐる由來卽ち體驗をも侵すかどうかは大して問題とならない。發端から無意識に留まることの出來る症候の目的、卽ち症候の傾向は症候の無意識への隷屬を支持してゐるところのものであつて、この點で强迫神經症に於てはヒステリイに於けるよりも可なり堅固である。

併し精神生活の無意識なるものをかやうに力說するために、私達は精神分析に對して放たれる極惡なる批評の靈魂をよびさますことになつた。これを聞いて諸君はたまげないか。精神分析に對する反抗は單に無意識と申すものをこんなものだと手で觸知することが困難だといふ點、若くは無意識を證據立てる經驗に比較的近寄りにくい點に存してゐるとも諸君は信じないか。私は反抗の聲がもつと深いところから湧いて來てゐると考へてゐる。人間と申すものは時代の推移のうちに科學から受けた人生のナイヴな自尊心に對する痛棒を忍從しなければならなかつたのだ。わが地球は宇宙の中心にあらずして、廣大無邊なる宇宙體系の微微たる一片なりと聞いた時に實事に第一の痛棒を喰はされたのである。勿論アレクサンドリヤ科學も殆ど同じ事を語つてゐるが、地動說と聞けば私達は早速にあのコペルニクスの名前を思ひ出す。第二の痛棒は、生物學研究が人類は特別に作られたのだといふ自惚れた特權をひんめくつて、人類は動物から進化したもの、人類には歷然と動物の本性がやきつけられてゐると指摘した時であつた。この革命はわれわれの時代に於てダアヸンとワレエス及びその一派の人達の煽動によつて、時代の喧喧囂囂たる迫害をものともせずに樹立されてしまつた。然しながら人間の誇大狂は現代の心理學から三度目の痛棒を喰はされたのだ。卽ち現代の心理學は人間に自我は彼自らの家を統御さへ出來ないばかりか、自我は自らの精神生活に於て無

意識的に何が行はれてゐるかを殆ど報告することも出來ないのだと證明しようとしたのである。內省へのこの警告は私達精神分析家が唯一最初にしたのではないが、この警告を最も力強く高調し、すべての人にぴつたりとくる經驗資料によつてそれを鞏固にしたのは、誠にわれわれの功績に俟つことが多い。このために、私達の科學に對して總攻擊が開始され、あのアカデミックな上品といふすべての思慮分別を忽にして、攻擊の火の手は公平なる論理といふ一切の桎梏を解放してしまつたのである。なほこれに加へて、私達はこの世界の平和をさらに別種の方法で攪さなければならなかつたことは、いづれ他日諸君も耳にされることと思ふ。

第十九章　抵抗と抑壓

神經症をさらに深く理解するために私達は新しい觀察を必要とする。そして觀察は二つになる。二つの觀察共非常に注目に價するもので・最初は少からず面喰ふものである。諸君は二つながら先年聞かれた講演で既に御承知の筈である。

第一。私達が患者を治療して、その症候から釋放さしてやらうと試みる時に、患者は全治療期間中に醫者に對して激しい、ひつこい抵抗をあらはしてくる。この現象は私達が早速には信ずることが出來ない程奇怪なものである。患者の家のものにこんな事を告げない方がよい。と申すのは家のものは分析療法が手間取るのをいひわけする、あるひは分析療法の失敗をいひわけする口實としかとつて呉れないからだ。患者もまたこれを抵抗とは承認せずに、しかも抵抗なるすべての現象を作るのだ。そして私達が患者にそれが抵抗であることを悟らし、それを見積ることが出來る程にしてやれば、それだけでももう占めたものなのである。自分の症候になやみ拔いて、家のものにその苦しみを訴へ、そのなやみから脫するために、時間、金、努力、克己の多量のものを敢て犧牲にする

患者、しかも自分が病氣である方が利益だといふために自分の救治者に極力反抗しようとする患者を考へてみるがよい。私の主張はいかにも出鱈目に聞えよう。だがやつぱり本當なのだ。若し諸君が出鱈目だとわれわれを非難されるなら、それと類似のものはないでもないと返答しなくちやならない。齒痛に堪へかねて齒醫者の許に駈けこんだ人は、醫者が齲齒に鉗子をあてようとする時に、いやいやと頭を掉るものである。

患者の抵抗は千差萬別であり、纖細を極めたものであり、しばしば看破することがむづかしく、變幻自在にその形を變へる。分析家はそれに對してひつきりなしに疑惑をいだいて、欺されないやうにしなくてはならぬ。私達は精神分析療法へも、既に夢判斷から御存じのあの術式を應用するのだ。冷靜な内省の狀態をとり、熟考をさけ、この際内部知覺に觸れ得るすべてのもの、彼に浮んでくる感情、思想、回想を次から次へと語るべきであると患者に提案する。その時私達は患者に、口に出すのはあまり不愉快だ、あまり不謹愼だ、そいつはあまり大切なことでない、こいつは方向違ひだ、これは馬鹿らしい、お話しする必要もない程だといふ口上で、浮んだ聯想を取捨選擇しようとするある動機に降參してはいけないと力強く警告しておく。患者は自分の意識の表面に浮ぶもののみに留意して、自分に浮ぶ聯想に對してはどんな種類の批評でも一切廢棄しなくてはならぬと忠

告する。そして治療の效果、就中治療期間の長短は、彼が分析に對するこの術式の根本規則を遵守する良心に基づくことが多大であると數へるのである。私達は夢判斷の術式から、無數の躊躇と無數の反抗が絡みついてゐる聯想にこそ、常に無意識の發見に導く材料が含まれてゐることを知つてゐる。

術式のこの根本規則を提供することによつて、まづ第一にこの根本規則が反抗の攻撃點になることが分明してくる。患者はあらゆる手段を弄して、この規定から逃れようとする。患者はある時は自分には聯想など何も起らぬと頑張るし、ある時はあまりいろんな考へがおしよせて、何が何だか見當がつかないといふ。續いて私達は患者がある時は甲の批判的抗議、ある時は乙の批判的抗議にすつかり降參してしまつたのを認めて閉口する。卽ち患者は口にのぼす迄の長い沈默によつて私達にそれを裏書してくれるのだ。それから彼は聯想は浮んでゐるが、口に出すことが出來ぬとか、口に出すのは恥しいとか白狀して、この動機に屈服して初めの約束を反古にしてしまふ。ある場合は自分にはある聯想が浮んだが、この聯想は他人の事に關してゐて自分のことでない、だから報告するものの中にはひらないといひ出す。ある場合は丁度今浮んだ聯想は實をいふとあまり無用な、あまり馬鹿らしい、あまり途方もないものだといふ。勿論患者がかかる思考を厭でも應でも白狀すべ

きだと私は考へる事は出來なかつた。そして限りない變異をもつて萬事がそのやうに進んで行く。その變異に對して人はすべてを語ることは實際すべてを語ることを意味してゐると說明しなければならなかつたのである。

私達が出會ふ大抵の患者は、分析の鋒尖を避けるために思考のある領域を隱蔽しようときばる。非常に怜悧な男だといはなくてはならなかつたある患者が、數週間もある祕密な戀愛關係に就て口を緘してゐた。私が神聖な規則を破棄するものだと抗議を申込んだ時に、男はこの話は私の祕密事であると信じてゐたから默つてゐたのだと辯解した。勿論分析療法はこのやうな隱家(アジイル)の特權を主張することは出來ない。維納のやうな都會のある一角、例へばホオエ・マルクトといふやうな場所やステファン寺院は例外と申せる。さういふ場所では犯人の檢擧は許されない。だからある犯人を逮捕するには骨が折れる。犯人がこの隱家に逃げ込んでしまへばもうとつ捉まへる手段がないのだ。嘗て私はこの點について根本規則の例外をある男に許してやらうと決心した。さうしてやれば、患者の分析の能率を他覺的に非常に高めるからであつたし、またこの男はある事柄に就て第三者に絕對祕密を嚴守するといふ誓約をかはしてある家に勤務してゐる身分であつたからである。患者は勿論治療の效果に滿足してゐたが、私は至つて不滿であつた。私はこんな條件の下では今後決して分

析を反復するものでないと覺悟したのである。

強迫神經症の患者はその過大な良心とその懷疑心をふりかざして、巧みにこの術式規則を反古にすることを心得てゐる。恐怖ヒステリィ患者は、こちらの求めてゐるものとまるで見當違ひの聯想だけを產出して、一向分析に貢獻しないやうに試み、時時術式規則を途方もない方向にそらしてしまふ。併し諸君に治療上の術式の困難なぞお話する心組はない。結局のところ、決斷と忍耐によつて抵抗を屈服してある程度迄術式の根本規則に服從せしむることに成功し、その曉抵抗は實事におつぽり出されてしまふと申上げるだけにとどめておく。抵抗は智的抵抗となつて現れて、議論でもつて挑みかかり、正常なしかも未だ教授を受けてゐない思考が分析學で發見するむづかしさと確でもない事をあべこべに利用する。その時こそ私達は科學界の文献の合唱のやうに私達をとりまいてぶうぶう唸る批判と抗議のありとあらゆるものが患者めいめいの口をついて飛び出るのを傾聽しなくてはならぬ。外からどなりこむ批評なぞは私達には一向耳新しいものでない。譬へてみれば茶碗の中の暴風雨のやうなものだ。相變らず患者は大いに熱辯をふるひ續けるが時がたつにつれて、私達が患者に指導を垂れ、說明を下し、彼を納得さし、もつと知識を得るために文献を數へるやうに、患者の方から進んで申出てくる。おしまひには、分析が個人的に自分を損はないといふ條件の

下でなら、患者自ら精神分析の賛助員になりかねまじい意氣込を示す。然しながら私達はこの知識慾をやつぱり抵抗と考へる。こんな知識慾は私達の特殊な使命から考へれば岐路である。そして私達はそれを排擊するのである。强迫神經症の患者は抵抗なるものの戰術を活用するものだ。患者はしばしば分析の進行に防害を加へない。そのために疾患の謎は分析によつてますます明るくなつてくる。ところが私達は最後にこの光明が實地上の進步、症候の稀薄と一致してゐないことを知つて呆氣に取られる。それから私達は抵抗は强迫神經症に固有な疑惑に基づいてゐること、抵抗は物の實事に私達に一杯喰はすものだといふことを發見する。患者は大體次のやうなことをいふ。「成程みんな大變に素晴しい大變に面白いものです。私も心からもつと深く進みたいものなのです。若し眞實でありますなら、私の病氣はうんとよくなつたでございませう。が、どうも眞實だとは信ぜられません。そして私が眞實とは信ぜられない以上、仰しやる事は私の病氣の本質にはまるで觸れてはゐないのです。」患者がこのやうな控目な態度に自ら最後に到達する迄には可なり長い時間がかかるのである。そして今や形勢一變して患者と醫者の間に決戰が開始される。

智的抵抗は一番手におへないものとはいへない。醫者は常に智的抵抗に打勝つことが出來るとはいへ、患者は分析の領域内に於ていかに抵抗を活用すべきやを心得てゐる。そしてこれ等の抵抗を

打破することは醫者にとつては術式上最もむづかしい事業である。自ら回想するどころか、患者は自分の實生活からさやうな心理狀態及び感情衝動を反復してくる。これ等は所謂「交付」(Übertragung)の作用によつて醫者及び治療に對する抵抗に使用されるのである。患者が男であるなら、彼はおきまりのやうにこの材料を自分と父との關係から集めてくる。丁度父の地位へ醫者を安置する。そして人格の獨立、判斷の獨立への渴望、彼の第一番の目的である、父と同等になりたい、父を壓倒したいといふ功名心、感謝の重荷を人生に於て二度迄も背負はねばならぬといふ不快に出發して抵抗なるものを作るのである。醫者を不正に置かうとする、醫者に自らの無力を自覺せしめようとする、醫者を征伐しようとする患者の懷く意圖は、疾患を根治しようとする折角の意圖を臺なしにしてしまつたといふ印象を私達が受ける一時期がくる。女は天才的に抵抗の目的にやさしいエロチックに色どられた交付を醫者に搾取することを心得てゐる。この愛著がある高さに達すると、治療の現實的情況に對する一切の興味、患者達が分析療法を受ける際に守らねばならぬ一切の義務が消失してしまふ。そして患者のやむにやまれぬ嫉妬心、醫者から婉曲につつぱなされたやむを得ない拒絕に對する悶悶の情は醫者との私人關係を毒するはめになり、その結果當然分析の最も力強い衝動力が氣拔けたものになつてしまふ。

この種の抵抗を一側面から貶しつけてはならぬ。この種の抵抗は患者の過去の生活に於ける最も大切な材料の大量を含んでゐて、若し私達が巧妙な術式をもつて抵抗を正しく利用することを知つてゐるなら、この抵抗こそ分析の秀れた足場となるに十分な材料を再現して吳れてゐるのである。なほ注目すべきは、この材料は外觀上最初は常に抵抗に奉仕し治療に敵對するやうである。この材料は強いられた變化を驅逐するために發動した自我の性格特性であり自我の心的態度であるといつてもよい。人は次いでこれらの性格特性が神經症の條件との關聯、神經症の要求への反應中にいかに發展したものかを知り、この性格中に、普通では現れ得ない、少くとも普通ではこれ程に鮮かに現れ得ない、潛在性と名附けるべき特色を見出だすのである。といつてこれ等の抵抗の發現こそ分析作用の不測の危險だと私達が觀じてゐると諸君が早吞込されても困る。いや。私達は抵抗が現れなくてはならぬことを知つてゐるのだ。萬一私達が抵抗を十分明瞭に惹起さすことが出來ず、抵抗を患者にも鮮明に自覺さすことが出來ぬとならば、實もつて殘念至極であるのだ。最後に私達はこれ等の抵抗の克服は分析の本質的な仕事であり、少くとも私達が患者に何物かを與へたことを確かめる仕事の重要な部分であることを理解するのである。

さらに諸君が患者は治療中に現れるすべての偶然な出來事、卽ち自分を外方へそらさうとする出

來事、分析に敵對する大家の言葉、偶然な器質的疾患、若くは神經症をこんがらかす器質的疾患を一つの妨害の意味に利用すること、さらに患者は疾患の囘復を自分の努力を弛緩さす原動力に轉換さすことを附加するなら、諸君は分析中に征服せねばならぬ抵抗の形式と手段の姿を、勿論不完全であるとはいへ、ある程度迄看取されることになるのだ。この點に就て私は非常に詳しく論じた。その理由は一つには、神經症患者の示す症候の除去に刄向ふ抵抗に關して私達が味つたこの經驗は實は神經症に對する精神分析の力學的見解の基礎となつたことを諸君に知らしめたいためにあつた。ブロイエルと私は最初は催眠術をもつて精神療法を行つたのである。ブロイエルの一番初めの女患者は徹頭徹尾催眠作用の狀態で治療が施された。最初私は彼のお手本を踏襲した。正直なところを白狀すれば、仕事はその當時非常にやすやす、非常に愉快に、おまけに短時間で進められた。ところが效果の點に到ると氣まぐれで持久的とは申せなかつた。この故に私は思ひ切つて催眠術をやめてしまつた。そして私は催眠術を使用してゐる限りは、神經症といふ疾患の力學上の理解などは思ひもよらぬものであると曉つたのである。催眠狀態では醫者は抵抗の實在を認識することが出來ない。催眠狀態は抵抗をおひはらひ、分析の仕事にある領域を開いて吳れるが、それ以上一歩進まうとすれば二進も三進も行かない、丁度境界線のところで喰ひとめられてしまふ。要するに强迫神經

症の疑惑に對すると同じやうなことになる。このために私は、本當の精神分析は催眠術の助力をやめる時に初めて行はれるといはなくてはならなかつたのである。

抵抗の問題がこのやうに意義深いものになつた以上、果して私達は抵抗の假說にちやんと準備が出來てゐたかどうかといふ疑問を愼重に考へなくてはならぬ。實際聯想が他の理由から全く拒絕されるといふ神經症の實例が多分存してゐるだらうし、私達の學說に對して患者がやりこめる議論は實際實質的評價に相當するだらう。そして私達は被分析者の智的批判を無雜作に抵抗だと片附けてしまふのは患者にとつては飛んだ無禮であるかも知れない。併し私達は抵抗だといふ判斷をさう輕卒に下すのでない。私達は抵抗の發現時及び抵抗の消失後の批判好きな患者を觀察する機會を有したのである。卽ち抵抗は常に治療の經過中にその强さを變へる。私達が新しい話題に觸れかける時はきまつて抵抗が上昇する。その話題に觸れてゐる間は抵抗は最も强大になるが、この話題がすつかり盡きると抵抗は再びすほんでしまふ。私達が特別な術式上の誤謬を犯さなかつたら、患者は決して無暗やたらに抵抗をあびせかけることはないものだ。だから同じ患者が分析中に何囘も何囘も批判的態度を抛棄して再び批判的態度に復するといふやうなことは私達から見ればあり得べきものでない。無意識的材料の新しい、特別に悲痛な部分が意識に押寄せるやうに私達が導いた時に、患

者は極端に批判的になるものだ。たとへ患者が以前にいろんな事を理解し承認してゐても、かかる場合に直面すれば、患者はまるでこれ等の獲得物を喪失してしまふ。患者は力一杯の反抗への努力でもつて、情緒的癡呆の姿を露出することが出來る。若し患者にこの新しい抵抗を克服するやうに救つてやれば、彼は再び元の見解と理解にかへる。だから彼の批判力は決して獨立した批判として尊重すべきものでない。その批判は彼の情緒的態度の旗持であつて、彼の抵抗のいひなりになるものである。あるものが彼の氣に喰はぬなら、彼は極めて巧妙にそれに對して防禦することが出來、一見非常に批判的な態度をとる。ところがあるものが彼の思召にかなふなら、彼はうつて變つて信じやすくなり得る。恐らく私達もさういへば御同然であるが、ただ私達と違ふ點は、被分析者は分析中に非常に大きな窮迫狀態におしやられるために、情緒生活への知性の隷屬を明確に示すのである。

さて私達はいかなる道程を辿つて、患者が自分の症候の救濟と自分の精神過程に於ける正常な潮流の回復に刄向つてかくも力強く反抗するかといふ事實を觀察出來たのであるか。私達は狀態の變化に反對しようとする强い力をそこに嗅ぎつけたのだといはう。この力は以前この狀態を强制したものと同一物であらねばならぬのだ。私達が症候消散に於ける經驗から只今作り直すことの出來る

あるものが症候形成に於て行はれたのに相違ない。私達は既にブロイエルの觀察から、ある精神過程が丁度意識に浮び上るといふ正常な終點に迄搬ばれなかつたといふ前提の下に、症候が實在してゐることを知つてゐる。だから症候はそこに宙ぶらんになつてゐるあるものの代用物であると申せる。さて私達は今假定した力がどの箇所に作用したかを知つてゐる。卽ち今問題としてゐる精神過程が意識界におし出ることを妨げるためにある激しい反抗が行はれなければならなかつた。このためにこの精神過程は無意識に留まつたのである。この精神過程は無意識として症候を形成する力を有してゐたのだ。同一の反抗は再び分析療法中に無意識を意識に導かうとする試みに反對する。この反抗を私達は抵抗として感ずるのである。抵抗によつて私達に實證されるこの病原的過程に抑壓(Verdrängung)の名前を與へてゐる。

いよいよ私達はこの抑壓といふ過程にもつとしつかりした概念を作らなくてはならぬ。抑壓は症候形成の前提であるが、抑壓は一寸類例のない代物である。たとへば一つの衝動卽ちある行動への轉換を求めてやまぬ一つの心的過程をモデルにすると、この衝動は場合によつて私達が否認とか譴責とか名附けてゐる拒絕を蒙ることがあり得ることを私達は知つてゐる。拒絕される時は命令に服するエネルギイは衝動から却いてその結果衝動は無力になる。ところが衝動は囘想として永續出來

る。衝動に下す決定の全過程は自我の知識の下に行はれる。抑壓を受けるのは今のと同じ衝動であると想像する時は方向が大分違つてくる。いや衝動は自分のエネルギイを保持し、衝動に何等の回想を殘さない。また抑壓の過程は自我に氣附かれずに行はれる。こんな只今のやうな比較からは決して抑壓の本質に一歩も近接することは出來ぬ。

私は諸君に抑壓といふ名辭にもつとくつきりした形を與へるために、どういふ理論的概念が役立ち得たかを説明したいのである。第一に必要なのは、「無意識的」といふ言葉の純記述的意味を體系的意味に進めなくてはならない。換言すれば、私達はある心的過程の意識若くは無意識は單にその心的過程の性質の一つで、必ずしも限定的のものでないと言はうと決心する。かやうな過程が無意識に留まつてゐるなら、意識からこのやうに遮斷されてゐることは、この過程の受けた運命のしるしであつて、決して運命それ自體ではない。この運命なるものを具象的にするために、あらゆる心的過程——一つだけ例外があるが、いづれ後日述べよう——は初めは先づ無意識的段階若くは無意識的位相に存してゐて、この位相から初めて意識的位相に移行するのであるといひたい。譬へてみれば、寫眞の像は初めはネガチィフであるが、燒附によつてポヂチィフの寫眞となるのである。といつて陰板はみんな寫眞となる必要はない。同様に無意識の心的過程がみんな意識的に轉換する必

要はない。個個の過程は最初は無意識なる心的體系に屬してゐて、場合によつて意識なる體系に移行出來るのである。

この體系の最も亂暴な概念としてこれを空間的概念に直せば私達には一番好都合である。そこで一つ無意識體系を一つの大きな控室に譬へてみよう。この控室には雜多な精神興奮が恰も個個の人間のやうに動いてゐる。この控室に第二の狹い一種の客間のやうな部屋が續いてゐる。この客間に意識が鎭座してゐる。ところが二つの部屋の閾のところに一人の看守が頑張つてゐて、個個の精神興奮の首實驗をし、檢閱し、看守が怪しいと睨んだなら、容赦なく客間への入場を拒絕する權能を掌つてゐる。諸君も早速お氣附きになるが、看守が個個の興奮を閾のところでくひとめるか、客間にはひつてから、閾からおつぽり出すかにさした區別はないのである。かういふ時は單に看守の看視力の度合と看守の早期の認識が問題となるだけだ。この擬人法をもつてすると、私達の使ふ術語がずつと明瞭になつてくる。無意識といふ控室の興奮は、丁度その隣の部屋にゐる意識の目にはとまらない。その興奮はどこ迄も無意識的にとどまらなくてはならぬ。若し興奮が既に閾に肉迫して、看守によつて追拂はれた時には、この興奮は意識にはひつてゐない。私達はこれを抑壓されたと命名する。併し看守が閾を越えることを許可した興奮でも、早速に意識的になるとはきまつてゐない。

興奮は首尾よく意識の目にとまる時だけ意識的となるのである。この故にこの第二の部屋を前意識體系といふ名を冠するのには立派な理由があることになる。このやうに行くと、意識的になるといふことは純然たる記述的意味を含んでゐるといへる。ところが抑壓の運命は個個の興奮が看守によつて無意識體系から前意識體系への入場を拒絕されるところに存してゐる。そして私達が分析療法によつて抑壓を除去しようと試みる時に、抵抗として現れてくるものは只今のと同じ看守であるのである。

先生の概念は亂暴な、空想的なものであります、科學上の描寫としては飽く迄も許さるべきものでありませんと諸君が攻擊されるのを私は覺悟してゐる。この概念が亂暴であることを私は承知してゐる。さらにこの概念が正しくないことも私は諸君以上によく知つてゐる。そして若し私達が非常に間違つてゐないなら、私達はこの擬人法の代りにもつともつと立派な代用品を旣に手にしてゐるのである。この概念が諸君の目になほ空想的に映ずるかどうかは私は存じてゐない。まあ當分の間この槪念は丁度電流によつて動搖するアンペエル式の小人のやうに諸君への理解の一助となる。そして觀察の理解に役立つ以上、只今の槪念を決して輕蔑してはならない。二つの部屋とその部屋の閾に頑張つてゐる看守、及び第二の部屋の正面にゐる見物人としての意識といふこの亂暴な假設

は實際の情況をずつとずつと如實に示してゐると諸君に保證したい。さらに、私達のいふ無意識、前意識、意識といふ名稱は從來提唱された、あるひは現在使用されてゐる、潛在意識、副意識、內意識といふものに比してずつと偏頗がなく、ずつとたやすく辯證がつくものであると諸君から保證を得ておきたいものだ。

この故に若し私が只今神經症の症候の說明に都合のよいやうに假想した、精神機關のこのやうな構造が單に一般にあてはまるにとどまらず、當然常態な機能をも說明すると諸君が指摘して下さるなら、この假設は事實うんと有意義なものになる筈である。諸君のこの考へは正しいのである。私達は只今常態方面の硏究をやることは出來ぬが、萬一病的狀態の硏究から、暗黑に包まれてゐる常態な精神機能に就て手蔓が求められる見込があるなら、症候形成に關する心理學への私達の興味は非常な程度に高まるに相違ない。

なほ二つの體系、及びこれらの體系と意識の關係に對する私達の主張は何に基づいてゐるかを諸君はお氣附きにならぬか。無意識と前意識の間にゐる看守は丁度顯在夢の姿に干涉したあの檢閱官に外ならないのだ。私達が夢の指唆者と認めたあの晝の殘物は前意識的材料であつた。その材料は夜間睡眠狀態に於て、抑壓された無意識的な願望興奮に影響を與へて、その願望と一致共同して、

その願望の有するエネルギイを借りて潛在夢を作ることが出來たのである。無意識體系の統治の下にこの材料は一つの推敲——壓縮と轉移——を受ける、丁度常態な精神生活、換言すれば前意識體系ではこの材料は氣附かれないのである。咎められるのは極めて例外である。作用法のこのやうな差違は私達の作つた二つの體系の特性によつてゐる。前意識に續いてゐる意識への關係は、二つの體系のどちらに隷屬してゐるかを私達に示して呉れてゐる。夢は決して病的現象でない。夢は健康な人のすべてに睡眠狀態といふ條件の下に發現してくる。夢形成と神經症の症候形成の二つながらを一緒に敎へて呉れる精神機關の構造に對する只今の假設は、常態な精神生活にも適用出來るといふ立派な權利を有してゐるのである。

これから一つ抑壓に就て大いにしやべつて見たい。ところが抑壓は症候形成の前提に過ぎないのである。症候とは抑壓によつて妨害されたあるものの代用であることを知つてゐるが、この代用形成を理解するためには、抑壓に就てもつともつと深く研究を進めなければならない。抑壓の實證に關聯して問題の他方面から疑問が起つてくる。精神興奮のどんな種類のものが抑壓を受けるか、抑壓はいかなる力、いかなる動機から斷行されるか?、この疑問に對して私達は今日迄一つの返答しか有してゐない。抵抗の研究中に、抵抗は自我の力、卽ち既知のしかも潛在してゐる性格特性から

發することを知つた。卽ち抑壓を斷行するものはまたこの力である。少くともこの力が抑壓に關與してゐる。それ以外のことは未だ本當に分かつてゐないのである。

私が前にお話した第二の經驗は丁度只今役に立つ。私達は分析から神經症の症候の目的なるものを常に摑み出すことが出來る。こんな事實は諸君に一向耳新しいことでない。私は諸君に神經症の二つの實例をお話した時にこの目的をお目にかけておいた。然しながら、この二つの實例は一體何を意味してゐるのか。それを論證するために諸君は二百例、いや無數の實例を要求する權利があるが、私は諸君の要求に應ずることが出來ない。だから諸君はこのために自らの經驗にたのまうとするか。いや。この點に就てはすべての精神分析家がこぞつて贊成してゐる所信に從ふより外に致方がない。

私達が症候を詳細に硏究してみたあの二つの實例に於て、分析は患者の性生活の最も祕密なものに行きあたつたことを思ひ出されよう。なほ第一例で私達は症候の目的換言すれば症候の傾向を特別鮮かに知つたのである。恐らく第二の例では症候の目的は後日お話するある要素によつてある範圍迄隱蔽されてゐたのである。どんな例を分析してみても、私達はいつでもこの二つの實例で發見したと同じものを摑みだすに違ひない。私達はいつでも分析によつて患者の性的經驗と性的願望に

導かれるのである。そして私達はいつでも患者の症候が同一の目的に行使されてゐることを確信する。この目的は私達に性的願望の滿足を示して呉れてゐる。症候は患者の性的滿足に行使されてゐる。症候は實生活に於て果たされない性的滿足の代用であるのだ。

あの第一例の女患者の强迫動作を考へてみたまへ。夫人は熱愛してゐる夫なしに暮さなければならなかつた。夫人は夫の陰萎、夫の虛弱な人生を共にすることが出來なかつた。夫人は夫にずうと貞操を捧げなくてはならなかつた。夫人は夫の地位に何者をもおくことが出來なかつた。夫人の强迫動作は彼女の熱望してゐるものを與へてゐる。强迫動作は夫を高め、夫の虛弱、就中夫の陰萎を否定して訂正してゐる。この症候はその根本に於て全く夢と同樣に一つの願望實現、一つのエロチックな願望の實現である。夢の場合は願望はいつもエロチックなものと極まつてゐない。第二例の女患者に於ては諸君は少くとも、彼女の儀禮は兩親の夫婦の交りを邪魔し、若くはさかうと目指してゐること、性交から新しい子供の生れるのをとどめようと目指してゐることを嗅ぎ出すことが出來た。諸君はさらにその根本に於て娘自ら母の地位を簒奪したいと求めてゐることを摘發したのである。卽ちこの儀禮はここでも性的滿足への妨害を除去し、自らの性的願望の實現をはかつてゐるのである。これに關聯して浮び上つてくるいろんな複雜な事柄は次にお話することにする。

私はこれ等の主張の普遍性をずつと制限することを避けたいと思ふ。そしてこのために諸君は、私が只今抑壓、症候形成及び症候解釋に就てお話したすべては、神經症の三つの形、卽ち恐怖ヒステリイ、轉化ヒステリイ及び强迫神經症から得たこと當分はこれ等の三つの形にのみあてはまることに注目してほしい。この三つの疾患を一纒めにして私達は「交付神經症」(Übertragungsneurose)といひならはしてゐるが、精神分析療法はこの領域に一所懸命になつてゐるのである。精神分析は他の神經症に就てはあまりしつかり研究してゐない。そのうちのある種類ではあまり研究を積んでゐないためか、精神分析療法を試みてもどうしても直らない。諸君も精神分析が非常に若い科學であること、精神分析を習得するために多大の努力と時日を要すること、つひこの間迄は精神分析などやる人は極めて少數であつたことを忘れないでおいて欲しい。然も私達はあらゆる方面から交付神經症でない他の疾患をもつと深く理解しようとしてゐるのだ。私達の假設と歸著がこの新材料に適應する際にいかなる變化を蒙つたかを諸君にお話し出來ると思つてゐる。そしてこれ等をずつと深く研究することは、矛盾をひきおこすどころか、却つてその知識をさらに高く統一して呉れることを諸君に示したいのである。だから、只今お話したすべてが三つの交付神經症にあてはまるなら、私はまづ症候の價値を高めるために、一つの新しい報告を加へることにする。疾患の機緣を比較研

究してみると一つの結果が贏ち得られる。この結果は、卽ち現實が性的願望の滿足を禁ずる時には、何等かの種類の拒絕のために、人は病氣になるのであるといふ公式にまとめることが出來る。諸君はこの二つの歸著がいかにうまく一致してゐるかを認められよう。今や症候は實生活に於て滿たされない願望の代用滿足として解さなければならなくなる。

神經症の症候は性的の代用滿足であるといふ命題は確かにいろんな抗議を蒙むる。私は今日なほ二つの抗議を論じてみたい。諸君自らが澤山の神經症患者を分析的に研究したならば、私のいふことに冠を振つて、「でも先生の仰しやることは病例のある種類にはまるであたりません。症候はむしろ性的滿足を除去するとか、斷絕するとかといふ、まるつきり正反對の目的を持つてゐるやうであります。」と申されるだらう。私は諸君の解釋の正しさを何もとやかう申さない。精神分析にあつては事物は私達が望むよりは數等複雜であるのを常とする。そんなに簡單であるなら、精神分析など用ゐなくても解釋がつく筈だ。あの第二例の女患者では儀禮の二、三の特色は明かに、性的滿足に反對する禁慾的な性質を示してゐた。例へば、時計を外に出すといふことは、夜中の勃起を避けるといふ魔術的意味を有してゐるし、花瓶が落ちないやうにまた毀れないやうに注意することは、處女性の守護に一致してゐる。私が分析してみたベツト儀禮のある例では、このやうな消極的な性

質が却つて著明に現れてゐた。その儀禮は飽く迄も性的囘想及び性的誘惑に對する防禦規則から形成されてゐたのである。ところがずつと以前から幾度も精神分析では正反對は決して矛盾を意味してゐないといふことを經驗してゐる。私達の主張を擴大すれば、症候はある時は性的滿足、ある時は性的滿足の防禦を目指してると申せる。例へばヒステリイでは積極的な願望實現といふ性質が勝ち、强迫神經症では消極的な禁慾的な性質が勝つてゐる。若し症候が性的滿足と同時にそれと正反對のものに行使され得るなら、この兩側性卽ち兩極性は私達が未だお話する機會を持つてゐない症候のメカニズムのある部分に於ける特有な基礎となるのである。卽ち症候は今後お話するやうに二つの相反する潮流の干渉から生じた妥協の成果である。そして症候は抑壓されたものと同樣に、症候の發生に協力した抑壓したものをも代表する。だからこれ等二つのうちの甲若くは乙といふ片一方にずつと都合のよいやうに代表され得るのだ。二つのうちの一方の影響が全然消失するやうなことは極めて稀有であるのである。ヒステリイに於ては大概同一の症候の中に双方の目的が一緒になつて現れてゐる。强迫神經症では二つの目的はしばしば別個の姿を見せてゐるから、症候は二重になつて、相殺する二つの連續した行動から成り立つてゐる。

第二の躊躇をとりはらふことはしかく容易でない。症候を解釋したものを澤山見渡されるなら、

諸君は恐らくまづ第一に性的代用滿足の概念はそれ等の解釋に於て最も極端な範圍まで普遍出來ると判斷されるだらう。これ等の症候は滿足に對して決して實在のものを與へないこと、大抵の場合性的錯綜からの感覺の蘇生若くは空想の描寫に限つてゐることを力說することも怠つてはならぬ。さらに所謂性的滿足がしばしば子供臭い値打のない性質を示し、ある點自慰行爲に似てゐるか、若くは子供に禁止して習慣にさせまいとする汚らしい惡戲を思ひ出さしめる。さらに私達が性的滿足として殘忍な若くは凄愴な、それだけでも不自然と名附けてよい惡趣味の滿足と記載しなくてならぬものを數へたいと申せば、諸君でも定めし吃驚仰天されるであらう。人類の性生活を徹底的に研究して、正しく性と稱してよいものを確定する迄、私はこの最後の點に觸れることを差控へることにしたい。

第二十章　人類の性生活

「性」といふ名前が何を意味するかなどとわざわざ鹿爪らしく申上げなくても諸君は御承知の筈だ。第一に性とは人がかりそめにも口に出してはならぬ猥褻なものである。私はかういふ話を聞いたことがある。ある有名な精神病學者の門弟達が嘗てヒステリイの症候は大抵の場合性的事物を表現するといふことを先生に説得さゝうときばつた。門弟達はこの證據を實地にお目にかけるために先生をあるヒステリイ女の病床にひつぱつて來た。この女患者の發作は誰が見ても分娩の眞似事としか思はれなかつた。ところが先生は「分娩だね。だが分娩は決して性的でないよ。」といつて門弟達の説を一笑に附した。先生の仰しやる通りである。分娩はどこへ持ち出しても猥褻である筈がない。

こんな嚴肅な問題に駄洒落をやつたと諸君は詰問されるだらうが、今のは何も駄洒落ではない。「性」といふ概念の內容が何を含んでゐるかと、いくら嚴肅に考へてみたところで、さう手取早く定義を下すことは出來ない。男女兩性の差違に關する一切が性だといふのはまづ唯一の適切な定義か

も知れないが、諸君でもこの定義があまり味のないあまり空漠なものと考へられるだらう。諸君が性交の事實を問題の中心とされるなら、性なるものは異性の肉體、特に異性の性器官から快感を獲得するのを目的とする一切、狹義に申せば生殖器の結合及び性交の遂行をめざす一切をいふのだと主張されるかも知れぬ。然しながらこんな定義を下す諸君は、丁度性なるものは猥褻なものだとか、分娩は實際性なるものに屬さないと申した人達と五十歩百歩であるのだ。一方諸君が生殖機能を性の核心とされるなら、これはとんでもないことである。種の生殖を目的としない、それでもなほ正眞正銘性的なと名附けられるものがこの世の中に山程存してゐる。手淫とかキスでさへ性なるものである。こんな風に性といふものにきつぱり定義を下さうと思へば、問題はますます紛糾するばかりである。そこで私達は性の定義に頭をひねくるのを斷念することにする。性なる概念の發展中に、ヂルベレルの適切な言葉を借用して申せば、「蓋の間違ひ」(Überdeckungsfehler)をもち來たしたあるものが行はれたことを私達は想像することが出來る。一般に申せば、人類が性と稱してゐるものが何であるかに就ては大體指南がついてゐるのである。

實生活に於ける實地の要求には男女兩性の差違、快感獲得、生殖機能、極祕に保つべき猥褻なものの性質に關聯したものから合成されたあるもので事が足りる。併しこんなものは最早科學に於て

は十分でない。なんとなれば、愼重な、確かに献身的な克己をもつてのみ成就する研究によつて、私達は人類の個體のうちに、その性生活が普通の正規な姿から最も著しくそれてゐる一群が存してゐることを學んでくる。このやうな「倒錯者」のある一群は所謂兩性の差違をその人生のプログラム中から抹殺してしまつてゐる。自分と同性の人のみが彼等に性的願望を唆るのである。異性、特に男性の性器官は彼等にとつては一向性對象とはならない。極端な場合では嫌惡の對象となる。從つてさういふ人は勿論生殖への一切の參與をも抛棄してしまつてゐる。私達はさやうな人達を同性愛者若くは轉倒者と呼んでゐる。この奇癖だけをとりのぞけばしばしば——いつもではないが——瑕瑾のない程圓滿な、敎養のある、智的にも倫理的にも卓越してゐると箔をつけてもよい男女が存してゐる。これ等の人はただこの一つの宿命的な轉倒からどうもがいても逃れることが出來ないのである。彼等は同性愛の科學的代辯者の口を借りて、俺達は人種の特別な變種、男女兩性と同一の權利ある「第三性」だと辯じたててゐる。いづれ機會を見て彼等の主張を檢討してみる積りだ。勿論彼等がお題目のやうに口癖にするやうに、轉倒者は人類の「選民」ではない。選民どころか、彼等は少くとも性的といふ立場から見た他の特異者と同樣に低格したやくざな個體を代表してゐるのである。

このやうな倒錯者は少くとも大體に於てその性對象に向つて、尋常者がその性對象に向ふと同一な態度を示す。併し彼等の後方には異常者の長い行列が續いてゐる。かやうな異常者の性慾は理性を備具した人間をひきつけるやうなものからいよいよますます遠ざかつて行く。その示す千差萬別な姿、その示す奇怪な姿を見れば、彼等は、ブリュウゲルが聖アントニウムの誘惑として描いたあのグロテスクな畸形、若くはフロベエルがその贖罪者の目前に展開さしたあの氣息奄奄たる神樣と信仰者の長い行列にしか比べるものがない。われわれの感官を惑亂さすべきものでないなら、この群集は分類する値打がある。私達はこの群集を二分する。甲は同性愛者のやうに性對象を轉化したもの、乙は性目的を變化したものである。相互の生殖器の結合を拒絶する人はこの第一群にはひる。かういふ人達は性交にあたつて配偶者のどちらかの生殖器を他の身體部門若くは身體局所で置換する。この際器質的構造の不足とか汚ならしさの感情の障礙（膣の代用として口腔と肛門を使ふ）は眼中にないのである。さらにある人達は依然生殖器を保留してはゐるが、それは性機能のためでなく、他の機能のため、卽ち解剖學的根據及び近似といふ機緣から使用してゐる。子供の教育に於て尾籠として追放した排泄機能がかういふ人達には依然性的好奇の全部を吸ひつけることを私達は知つてゐる。さらにある人では凡そ生殖器と申すものはまるで對象とはならない。生殖器の代りに他

の身體部門、例へば女子の乳房、足、結髪が愛慾の對象となる。さらに進んだものでは、身體部門に何の價値もなくなつて、裝飾品、例へば靴とか肌着の一部が一切の願望を滿たしてくれる。かういふ人達を崇物者と名附けてゐる。もつと極端に行くと全對象を欲求するものの、その全對象に對しては全く限定した稀有な、ある時は戰慄すべき要求を注文する人がある。ある人では防禦力のない死屍が對象となり、ある人ではこの要求を味ふために犯罪的强迫行爲を敢行する迄になる。こんな凄愴な事柄はこれだけで御免を蒙りたい。

常態では單にはしがきのやうな單に準備的と申せる行爲を性的願望の目的とする倒錯者が第二群にはひる。卽ち彼等は異性を見るとか異性に觸れるとか、異性の祕密なしかけをのぞいて見るとかを求めてやまない。時には隱蔽すべき自分の肉體を露出して、この時相手方も同じやうに應じて呉れるだらうといふ空漠とした期待に包まれる人もある。それに次いで迷宮にも似たサヂストがある。彼等の抱く愛慾はわが對象に苦痛と折檻を與へる以外の目的を知つてゐない。侮辱の口吻から進んでは肉體に恐ろしい危害迄加へようとする。サヂストと對立してマゾヒストがゐる。マゾヒストの唯一無二の快感は愛する對象からあらゆる侮辱と折檻を、ある時は象徵的の形式で、ある時は實在的の形式で甘受するところにある。またこの種の變態性格が數個結び合ひ、からみ合つてゐる人も

ある。最後に私達は第一群と第二群のうちにもさらに二種類があること、即ち自分の性的滿足を現實界で求めようとする人と、性的滿足を頭に描くだけで甘んじてゐる人、どこ迄も實物の對象を求めずに、實物の代りに空想で置換出來る人とが存してゐる。

こんな馬鹿げた、奇怪な、恐ろしいものが實際人類の性的活動を構成してゐることは最早疑ふ餘地のないものである。彼等自らがそれをさう觀じてその代用關係を認めてゐるばかりか、私達でさへそれが彼等の實生活に於て、われわれの常態な性的滿足と同一な役割を演じてゐ、彼等はそのために私達と同一な、しばしば過大な犧牲を拂つてゐるといはなくてはならぬのだ。これ等の變態がどこで常態に接してゐるか、變態は常態のどこから發生したものであるかを横に廣く縱に深く追求することが出來る。性的活動にうるさく附き纒つてゐるあの猥褻といふ性質がここへも出しやばることを諸君も見逃さないだらう。然も猥褻といふ性質は大概破廉恥に迄高まつてゐる。

さて私達は性的滿足のかやうな異様極まる種類に對してどういふ態度をとつてよいのか。憤慨し、個人的な反感を吐きつけて、俺達はこんなけしからん惡趣味を屑しとしないと公言したところで何にもならない。そんなことは私達の論點ではない。要するにこれとて一つの現象界である。珍品だ、骨董品にすぎないなどといふ逃口上を張つたところで濟まされるものでない。いや全くあべこべに、

かやうなものは私達がしばしばお目にかかる、この世に廣く散在してゐる現象であるのだ。これ等の現象が悉皆性慾の迷行と脫線を示してゐるのだから何もこんな變態のために、わざわざ性生活に對する在來の見解を改革する必要がないと容喙されるなら、私達は嚴談を持込まなくてはならない。若し性慾のこのやうな病的特色を理解せず、またそれを常態な性生活と比較對照出來ないなら、當然私達は常態な性生活をも知つてゐないことになる。一言で申せば上述の倒錯の可能性及び所謂常態性慾との關聯を十二分に理論的に說明することが私達の公然たる使命となるのである。

この使命のために一つの見解と二つの新經驗が役立つてくる。第一のものに就てはわれわれはイワン・ブロホに負ふところが大である。ブロホは性目的からのかやうな迷行、性對象へのぐらぐらした關係は開闢以來あらゆる時代を通して最も原始的な民族に於ても最も文明開化な民族に於ても現れてゐたもので、時代によつて寬大に取扱はれて一般に行はれてゐたといふ根據から倒錯を「變質徵候」と考へたのである。次に二つの新經驗といふのは、神經症患者の精神分析研究から得たものであつて、この經驗に立脚して性的倒錯に對する私達の見解を決定するやうになつたのである。

私は旣に神經症の症候は性的の代用滿足であると申した。そしてこの命題を症候の分析によつて確證するために、幾多の困難に遭遇したと諸君に仄しておいた。私達が所謂倒錯と名付くべき性的

欲求を「性的滿足」の一項に包容する時に初めて只今の命題は正當なものとなるのである。なんとなれば、驚く程澤山の實例にあたつて、厭でも應でも私達は症候のこのやうな解釋に辿りつくからである。ひと度私達が同性愛的衝動がどんな神經症患者にも實證出來ること、大多數の症候はこのやうな潛伏性倒錯の表現であることを知るなら、同性愛者若くは轉倒者が人類の選民であるといふあんな要求は早速に無效となつてしまふ。同性愛者だと自稱してゐる人は單に意識的、顯在的轉倒者であつて、潛伏性同性愛者の數に比較しては、自稱同性愛者は物の數にもはひらない。併し私達は同性から對象を選擇することは常に戀愛生活の異端と觀じなければならなくなつてくる。そして彼等に特別高い意義を認めなくてはならぬやうに學んでくる。確かに顯在的同性愛と常態愛の差別はこのために撤回されてしまはない。彼等の實地的意義に變りはないが、その理論的價値は一般に遞減してしまふ。私達が最早交付神經症の中に數へることの出來ぬある疾患、パラノイアはおきまりのやうに過度に强い同性愛的衝動を防禦しようとすることから發生してくるとさへ假定するのである。諸君の記憶に未だ新しいあの女患者は强迫動作の中に、一人の男、卽ち離別した夫の役割を演じてゐた。このやうに男の役目に扮するといふ症候の姿は神經症の女に非常に普通なことである。勿論これは同性愛の中にはひらないが、同性愛の假設と非常に密接してゐるのである。

諸君は御存じのことと思ふが、ヒステリィ性神經症はすべての器官系統に症候を作つて、その結果はあらゆる機能がみだされる。この際生殖器を他の器官で置換しようとする、卽ち倒錯と名附くべきあらゆる衝動が現れてくることを分析から知る。そして置換した器官は丁度代用生殖器のやうな役目をとる。私達はヒステリィの症候學から、身體の器官はその本來の機能以外に性的――發情的 erogene ――意義を持つてゐ、若し發情的意義の要求が過大になる時は、本來の機能がかきみだされるといふ見解に到達したのである。ヒステリィの症候として私達が遭遇してゐる、一見性慾と何の關係もなささうな器官に現れる無數の感覺と神經興奮は私達に、さういふ器官が生殖機能を簒奪して、倒錯した性興奮の實現としての本性を露出して呉れるのである。さらにまた、營養攝取や排泄の器官がいかに容易に性衝動の所持者となり得るものかを私達は知つてゐる。だから今のは倒錯から知つたものと全く同一である。ところが倒錯では何の苦心もなく極めてはつきり分かつたものだが、ヒステリィでは私達は症候解釋といふ迂回をとらなくてはならなくてはならぬのである。そして問題の倒錯した性興奮は個體の意識でなしに、個體の無意識に探さなければならないのである。

强迫神經症が發現するいろいろの症候のうちで最も重要なものは、非常に强いサド風の性興奮、換言すればその目的に於て倒錯した性興奮のやむにやまれぬ力によつて現れたものであることが分

かる。詳しく申せば、これ等の症候は恰も强迫神經症の構造に一致して、專らこれ等の願望の防禦の役に立つ。ある時は症候は滿足と防禦の間の鬪爭を表現してゐる。併しこの場合滿足でも短刀直入的ではない。滿足は迂遠な道筋を通過して患者の行動に這ひ出ることを知つてゐる。そして好んでその當人に反抗し、その當人を自責におち入らしめるやうにする。神經症の他の形、例へば穿鑿症といふものでは、常態な性的滿足への豫行と考へられる動作、見たい、觸れたい、究めたい欲望が誇大に性慾化されてゐる。接觸恐怖とか洗濯强迫はこれによつて立派に說明がつく。これ等の强迫動作から溯ると、變裝した反復と變形としての、豫想も許されない大きな部分は、行爲としては單一な均一なものだが、その形に於ては千差萬別な性的空想を伴つてゐるあの自慰に到達することになる。

諸君に倒錯と神經症の關係をもつと密接さして描寫するためにはあまり大した努力も要せないが、精神分析の目的には只今迄のお話で十分だと考へてゐる。症候意義のこのやうな說明を傾聽されたあとで、諸君は人類の倒錯傾向は成程熾烈なものだ、成程頻繁に現れるものだと過重されないやうに警戒して欲しい。常態な性的滿足が拒絕される時は人間は神經症に罹るものだと聞いてをられる。併しこの拒絕が現實に行はれる場合は、要求は性興奮の變態な道に押しかけて行く。どうし

てそんな變態が起こるかは諸君にも後日お分かりになることと思ふ。このやうな相關的な鬱結によつて、倒錯衝動は、常態な性的滿足が何等現實の障礙を蒙らなかつた時に現れる倒錯衝動より數倍も強く現れなくてはならないことを知る。なほ同樣な影響は顯在的倒錯に於ても認められる。顯在的倒錯は多くの場合性慾の常態な解放が、一時的の狀態、または永久の社會制度のために、非常に困難になる時に惹起され發動されるのである。他の場合は倒錯傾向はかやうな條件とはまるで無關係に現れる。この時は倒錯はいはばその個體にとつては性生活の常態行爲である。

私達は常態性慾と倒錯の關係を鮮明にするどころか却つてごたごたさしたといふ印象を諸君は只今受けられたであらう。併し諸君は次の事柄を一つ考へて欲しい。常態な性的滿足が現實でむづかしくなるか若くは剝奪されてしまふ時、普通の狀態では痕跡もない人間に倒錯傾向が現出してくることが正しいなら、かやうな人に倒錯を歡迎するあるものがちやんとあると假定しなければならぬ。若くは諸君が希望されるなら、倒錯傾向は潛在した形でかやうな人に存してゐなくてはならない。併しこの道筋から私達は既に報告しておいた二つの新事實に到達するのである。かくて精神分析研究は小兒の性生活を暴露せざるを得なくなつた。さらに症候の分析で行はれる回想と聯想がきまつて小兒時代の早期に根を發してゐることもまたその理由となつてゐる。このやうにして私達が開拓

したものはいちいち小兒を直接に觀察することによつて確められたのである。そして今や、すべての倒錯傾向が、小兒時代に根を下してゐること、小兒は倒錯の一切に素質を有し、その素質を小兒の未熟に相應する範圍で發揮すること、省言すれば、倒錯性慾とはその個個の衝動に解體され、擴大された小兒性慾に外ならないといふ結論が生じたのである。

ここに到つて諸君は倒錯を違つた目で眺めることが出來よう。そして倒錯が人類の性生活に關聯してゐる事實を最早默殺しないだらう。だがこれ等の結論を承認するために諸君はこみ上る驚愕を抑へつけ、感情の悲しき不調和を堪へ忍ばねばならぬ。小兒が性慾と名附けなければならぬあるものを有してゐるといふ事實、精神分析の觀察の正しさ、小兒の行動に、後年倒錯とやつつけなくてはならぬものと非常に近接してゐるものが發見出來るといふ主張の資格のすべてを諸君はまづ第一にたたき伏せたい氣持がしてくるだらう。それ故私は何はともあれ諸君の懷く反抗の動機を說明し、次いで私達の觀察の總括を展開してみたいと思つてゐる。小兒は性生活——性興奮、性要求及びある種の性的滿足——を決して持つてゐない、いや性慾は十二歲から十四歲の間に突然にめざめてくるものであるといふ定說は——すべての觀察は暫くおいても——生物學的に考へてもあやしいものである。小兒はこの世に生れた時は生殖器を持つてゐない、思春期になつて初めて生殖器が生える

のだといふ主張と同様に馬鹿馬鹿しいものである。思春期になつて子供にめざめるものは生殖機能である。この機能は既に具つてゐる身心の材料をこの目的に利用するのである。諸君は性慾と生殖をごつちやにしてゐるのだ。この誤謬のために諸君は性慾、倒錯及び神經症を理解しようとする道まで邪魔をしてゐるのである。併しこの誤謬はある傾向を有してゐる。諸君自らが小兒であつたこと、小兒として教育の影響に屈服したことが不思議にもこの誤謬の根元となつてゐる。卽ち社會と申すものは、生殖衝動として現れる時は性慾を縛りつけ、制限し、社會的命令と同視さるべき個人の意志の下に壓迫することを、その最も重大な教育方針としなければならぬのだ。性慾の完全な發達を、小兒が智的成熟のある段階に達する迄遲延さすことは社會の利益にもなる。といふのは、性慾がすつくり發現してしまへば、教育の效力は消失してしまふからである。若しさうでなければ、性慾はすべての堤防を決潰し、苦心して建築した文化の殿堂はそのためにぐらついてしまふ。だが性慾を束縛しようとする使命は決して容易なものでない。ある時はあまり手ぬるいし、ある時はあまり嚴格に失するものだ。人類社會の動機はその究極に於て經濟的である。社會はその成員が働かずに支持して行くだけの生活資料を有してゐない。社會はその人口を制限し、そのエネルギイを性慾活動から轉じて、勞働にふりむけなければならない。この故に原始時代から現今に到る迄永遠に

盡きない生活難が連綿として續いてゐるのである。

新時代の性意志を鑄型にはめようとする任務は、教育の感化を、思春期の暴風時迄待たずに、思春期前の小兒の性生活に干渉して、ずつと早期に開始する時にのみ効果があることを教育家は經驗から知つたに相違ない。この目的から見れば、殆どすべての小兒性の性活動は小兒には禁斷の果となり小兒を穢すものとなる。教育家は小兒の生活を無性の姿に築き上げるといふ理想の目的を立て時代の進運とともに世人はとうとう小兒は無性だと思ひこむやうになつてしまひ、科學迄がそれを學說にこねあげてしまつたのである。こねあげられた信仰と目的に撞著が生じないやうに人は小兒の性活動を看過する。なかなか大した成功である。科學は科學で小兒の性活動を嘘八百に解釋して自ら大いに得意としてゐる。小兒は淸いものである。小兒は無垢のものである。若しさうでないやうに記述すれば、忽ち人類のやはらかい神聖な感情を害する厚顏無恥の徒とたたき伏せられるのである。

ところが、小兒だけはこんな因襲には一向おかまひなしに、天眞爛漫にその動物性を發揮してゐる。そして小兒こそ純潔の道へ抑留すべきものであるといふ證據をますますあらはす。可笑しなことに、小兒性慾を否定する人達が教育の手を緩めずに、「子供のいたづら」といふ標題の下に彼等が

否定しようとする性慾の表現を最も嚴格に禁壓しようとする。無性的小兒期といふ偏見に一番ひどく撞著する時代、卽ち五歲乃至六歲迄の嬰兒期は大概の人では忘却の帷に包まれてゐて、分析研究によつて初めてその帷をすつくりひき裂くことが出來るが、早くにこの帷を拔けて夢の姿の中に現れてくるといふことは理論的に非常に興味深いものである。

さて小兒の性生活のうちで最も顯著なものを數へたててみよう。序にリビドの槪念を紹介しておくのは丁度よい時だ。リビドとは飢餓に全く相似した力と命名してよい。この力を借りてここでは性慾、飢餓では食慾が現はれる。性興奮とか性滿足といふやうなほかの槪念を講釋する必要はない。諸君も早速お氣附のやうに解釋は大槪乳兒の性活動を中心としなくてはならない。そして諸君はそれを私達への抗議の種に利用するだらう。かやうな解釋は分析硏究に立脚して症候を逆行して初めて知り得たのである。乳兒に於ける性慾の最初の衝動は、生活に必須な他の機能に結びついて現れてくる。諸君も御存じのやうに、乳兒の第一の興味は營養攝取に向けられる。乳兒が母の乳房を腹一杯に吸つて寢込む時に、丁度後年大人になつて性的オルガスムスの直後に反復するやうな安らかな滿足の表情を示すのである。これだけの材料で結論を立てるのはあまり貧弱であるかも知れないが、私達は乳兒が本當に食物を要求しないくせに營養攝取の行爲を反復することを觀察してゐる。

だから乳兒はこの時空腹の衝動を決して感じてゐないのである。乳兒はルッチエン若くはルウデルン (lutschen oder ludeln) するといふ。乳兒がこのやうにぺちやぺちや乳首を吸ふてしまへば再び安らかな表情で寢込むことはルッチエンといふ行爲が乳兒自體に滿足を齎すことを私達に示してゐる。やがて乳兒にルッチエンしなければ寢込まないやうな習慣がついてくるのは周知の事實だ。ブタベストの昔の小兒科醫なるリンドネルが初めて只今のやうな行爲に性的な色彩があると主張した。小兒の保姆者達は理論上のむづかしいことは知らなくても、ルッチエンを同じやうに判斷してゐる。彼等はルッチエンが單に快感獲得の手段であることを疑はない。彼等はそれを小兒のいたづらだと觀じ、小兒がこのいたづらをやめようとしない時は、こわい顏をしてやめるやうに叱りつける。だから私達は乳兒が快感獲得の目的しか持つてゐない行爲を實行することを知つてゐるのだ。乳兒はこの快感を營養攝取の時に初めて體驗するが、やがて快感と營養攝取の條件を切り離すことを知つてくる。この快感獲得は口及び唇の部分に於てのみ達せられる。私達はこの身體部分を發情帶 (erogene Zone) と名附け、ルッチエンでもつて贏ち得られる快感を性的快感としてゐる。このやうな名稱が果して正しいかどうかに就てはさらにいろいろ論じなくてはならぬ。

若し乳兒が自らの思ひを表現することが出來るなら、母の乳首から乳を吸ふ行爲は人生に於て非

常に重大なものだと認めるであらう。乳兒はそれを決して惡いとは思つてゐない。結構にも乳兒はこの吸乳といふ行爲によつて二つの大きな生活要求を滿足するからである。かくて私達は精神分析からこの行爲の心的意義のいかに多くのものが全生活を通して保たれてゐるかを知つて可なり駭き入るのである。母の乳首から乳を吸ふことは全性生活の出發點となり、後年の性的滿足のこの上もない雛形となり、必要な場合には空想はしばしばこの雛形にたち還る。吸乳は性慾の最初の對象たる母の乳房を含んでゐる。私は諸君にこの最初の對象が後年の對象發見にいかに意義あるものであるか、この最初の對象が轉化と置換によつていかに深刻な影響を吾人の精神生活の最も遠隔した領域に及ぼすものであるかに就て諸君にはつきりした觀念を與へることが出來ない。ところが間もなく乳兒はルッチエンといふ活動に存してゐるこの對象を棄てて自らの身體の一部で置換する。小兒は自らの拇指若くは自らの舌をぺちやぺちや吸ふ。この結果外界の許諾から獨立して快感を獲得することが出來、これに加へて第二の發情帶の興奮は漸次に强められてくる。發情帶はみな同等の快感を與るとは限つてゐない。そこでリンドネルが報告したやうに、乳兒が自らの身體を探檢するうちに、自分の生殖器が特別興奮しやすい箇所であることを發見し、かくてルッチエンから自慰に到る道を見出したなら、誠に重要な體驗と申せるのである。

ルッチエンをかやうに評價することによつて既に私達は小兒性慾の二つの明白な特質を知つたのである。小兒性慾は大きな器質的欲求の滿足に關聯してゐるやうである。小兒性慾は自己春情的に振舞ふ。卽ち小兒性慾はその對象を自らの肉體に探し、自らの肉體に發見する。食物攝取に於て最も明白に現れたものは一部排泄に於ても反復される。嬰兒は尿及び糞便の排泄に際して快感を待つこと、嬰兒はやがて發情性粘膜帶の興奮によつて出來る限り大量の快感を獲得出來るやうに、この排泄行爲をうまく調節するやうに工夫すると私達は結論出來る。この點に關して犀利なるル・アンドレアスが指摘したやうに、先づ外界は嬰兒に快感追求に敵對する抑制力として現れて、後年に經驗される內外の鬪爭の先驅をなす。嬰兒は排泄物を自分がしたいと思ふ時に排出するを許されない。排泄時間は他人が決定するのである。嬰兒にこの快感の泉を斷念さすやうにするために、大人は排泄機能に關する一切のものを尾籠な、祕密にすべきものと說明する。かくて嬰兒は第一に快感と社會的品位を交換しなくてはならない。排泄物に對する嬰兒の態度はその當初から非常に趣を異にしてゐる。嬰兒は自分の糞便に對しては何等の汚穢を感じない。むしろ糞便を自分の肉體の一部と觀じて、糞便を自分の身體から離すことを喜ばない。そして嬰兒は自分はあなたを特別に尊重してゐるといふしるしに糞便を第一の贈物と觀ずる。教育が首尾よく小兒をこの傾向から引き離す目的を

貫徹した後でも、小兒はやつぱり糞便を「贈物」「黄金」と評價してゐる。一方嬰兒は排尿の行爲を大威張りで行ふやうである。

察するところ諸君はもう大分前から私の話にがつかりして次のやうに叫びたいと思つていらつしやるだらう。「そんな汚らしい話はもうそれでお免蒙ります。糞便の排泄は嬰兒が早くに舐める快感滿足の泉であるのですつて。糞便は非常に貧い物質で、肛門は生殖器の一種ですつて。うあはは。そんな事は到底信ぜられません。小兒科醫とか教育家が精神分析とそれの歸結を手嚴しく排斥した所以もそこにあるんでせうね。」いや、さうぢやない。諸君は私が性慾倒錯の事實に關聯して小兒性慾の事實を述べようとしてゐるのをまるで忘れてしまつてゐる。肛門が同性愛者、異性愛者を問はず大人の大多數に於て實際性交にあたつて膣のやうな役目をとり得ることを諸君は何故知つてはいけないのだらう。さらに脱糞に於ける快感を全生涯保つてゐ、さういふ快感を可なり重大視してゐる人が實際澤山轉がつてゐるのを諸君は何故知つてはいけないのだらう。脱糞行爲に對する興味、他人の脱糞を覗き見る時の愉快に就ては、小兒が二、三歳にも達して、それを報告出來る時に、諸君は小兒の口から直接に確めることが出來る。勿論諸君はこの小兒を早くから組織的に訓練してはいけない。訓練などすれば、小兒はそんな事は口に出すべきものでないことを會得するものである。

さらに諸君が信じたくは欲せない他の事柄に對しても私は分析の歸結と小兒の直接の觀察を示して、これ等のすべてを見ないこと、若くはこれ等すべてを色眼鏡で見ることは一つの發明であると諸君に申したいのである。諸君に小兒性慾と性慾倒錯の密接な關係がはつきり分かるぐらゐなら、私は何もとやかう理窟などこねないのだ。若し一般に小兒が性生活を有してゐるならこの性生活は倒錯の種類でなくてはならぬ。これは尤もなことである。と申すのは、生殖機能となるやうな性慾の徴候は小兒には爪の垢ほどもない。一方すべての倒錯の共通特性は、性慾が生殖目標を拋棄してゐるところに存してゐる。性慾が生殖目標をすてて、それとは獨立した目標として快感獲得を追求する時、さういふ性活動でも私達は倒錯と名附けてゐる。だから諸君は性生活の進化に於ける崩壞と飜點は生殖目的の下に性生活を隷屬せしめる如何にあることを理解するだらう。この飜點迄に現れたすべてのもの、この轉換を拒んで、快感獲得のみに利用されたすべてのものは、「倒錯」といふ名譽にもならぬ名前を冠せられ、倒錯として侮蔑されるものなのである。

かういふ理由から、私に小兒性慾の貧弱な記述を繼續さして貰ひたい。私が二つの器官系統に就て報告したことは他の器官系統を參照される時に一そう完全にならう。小兒の性生活は部分衝動の連續した活動に存してゐる。この部分衝動はお互に無關係に、あるものは自らの肉體から、あるも

のは早くも外界の對象から快感を得ようと求める。これ等の器官のうちでも生殖器は非常に早くに現れる。世の中には他人の生殖器若くは他の對象の助なしに、自らの生殖器で快感を求め、この快感獲得を乳兒時代の自慰から思春期の救急自慰に到る迄斷絶せずに追求し、思春期後ずうと永く求める人が存してゐる。なほ自慰の問題はさうてきぱきと片附くものでない。誠に自慰は多方面から觀察しなければならぬ材料であるのである。

この題目はずつと簡略にやりたいものだが、なほ小兒の性的好奇に就て二、三言申さねばならない。性的好奇は小兒性慾に特有なものであり、また神經症の症候學にも意義あるものである。小兒の性的好奇は非常に早期に、時には三歳前に始まることがある。性的好奇は性の相違には關してゐない。性の相違は小兒には何の價値もない。と申すのは、小兒——少くとも男の子供——は男女兩性はみんな同一の男の生殖器を持つてゐると思つてゐる。ところが、男の子が小さい妹とか遊び友達に膣があることを發見した時に、子供は卽座に自分の知覺の證據を否定しようと努める。なんとなれば、男の子は自分と同じかたちの人間が、自分には非常に尊いと思はれる生殖器といふ部分を持つてゐないなぞとはどうしても想像がつかない。後年男の子はもしや自分にも生殖器が何等かの機會になくならないだらうかと心配し出す。そして自分の小さい陰莖を熱心に氣にし出した時に、

大人があまり手嚴しく威嚇すると、その影響はずうとあと迄響いて殘る。彼はつひに去勢錯綜に支配されるやうになる。この去勢錯綜は彼が健康であればその性格の形成に、彼が病む時は神經症に、彼が分析療法を受ける時は抵抗に非常な役割を演ずるのである。小さい女の子に就て知つてゐることは、自分が大きな人目にもつく陰莖を持つてゐないために男の子よりも劣つてゐると極めてかかり、男の子の持物を妬み、この動機から男になりたいといふ願望が發展してくる。この願望は後年女としての役目が下手なために起こつた神經症の中に再び姿を見せてくる。なほ女の子のクリトリスは小兒時代には全く陰莖と同じ役目をするものである。クリトリスは特別興奮しやすいもので、そこは自己春情の滿足が達せられる箇所である。女の子が一人前の女になるかどうかは、クリトリスがこの感性を丁度よい時機にすつかり膣に渡してしまふかどうかにかかつてゐる。女の所謂不感症にあつては、クリトリスがいつ迄もひつこくこの感性を保持してゐるところに因してゐるのである。

小兒の性的好奇は先づ第一に赤ん坊がどこから生れるかといふ問題に集中される。あのテエベのスフィンクスの謎の裏にもやつぱりこの問題が隱されてゐる。そしてこの好奇は大概新しい赤ん坊の誕生を利己的に恐れるために惹び起こされる。かうのとりが赤ん坊を連れてくるといふ乳母のお

極りの返答は、私達が想像する以上にしばしば小兒にさへ疑はれてゐる。大人によつて眞實を誤魔化されたといふ感じは、小兒の孤獨と、小兒の獨立心の發達を非常に助成するものである。併し小兒はこの問題を自分の頭で解決することが出來ない。彼の認識力はその未發達な性組成によつて作られた極限を越ゆることが出來ない。そこで小兒は第一に赤ん坊は大人がある特別なものを食物にまぜ合はすために出來るのだと想像する。そして女だけが子供を生むものだといふことを知つてゐない。後になると小兒は女だけが生むといふ制限を知り、赤ん坊が食物から生まれるといふ說を棄ててしまふ。さういふ說はお伽噺の中に殘つてゐる。大きくなつた子供は直ぐに、父親が赤ん坊の出來るためにある役目を持つてゐなくてはならぬと曉るが、どういふ役目かを嗅ぎ出すことが出來ない。若し偶然子供が性交を目擊したなら、彼はそれを征服の試みとか格闘だと早呑みこみをし、性交をサド風に誤解してしまふ。併し勿論子供は初めはこの行爲を赤ん坊の創造に結びつけることが出來ない。若し子供が母親のベットとか肌著に血を發見するなら、子供はこの血を父親が母親に加へた負傷の證據だと考へる。もつとあとになると、子供は男子の陰莖は赤ん坊の創造に根本的な關係を持つてゐると想像するが、この部分に排尿以外の作用を與へることが出來ない。

子供は初めから赤ん坊の分娩は腸管から行はれなくてはならぬ、卽ち赤ん坊は糞便のやうに現れ

47

ゐるものだといふ意見に賛成してゐる。肛門の部分へのいろんな興味が褪めた時に初めてこの說を棄てて、次に臍が破れるとか、左右の乳房の眞中の部分が分娩部だとか假定し出す。こんな風に好奇心に富んだ小兒は性的事實の知識を養ひ、ある時は彼の無智のために迷ひ込んで、そんな知識に觸れないやうにし、最後に、大概思春前期に、あやふやな徹底しない說明を聞かされることになる。この說明はしばしば外傷的に働くものである。

諸君は神經症の性的病原や症候の性的意義の命題を正しとするために、性といふ槪念が精神分析に於て非常に擴大されたのを見られたことと思ふ。只今諸君はこの擴大が不合理か不合理でないかを自ら批評出來る筈だ。私達は單に性といふ槪念が倒錯者の性生活及び小兒の性生活をも包含してゐるといふ範圍で擴張することが出來たのである。換言すれば、私達は性なるものにその正當な領域を囘復さしてやつたのだ。世人が精神分析以外で性と名附けてゐるものは、單に狹義な、生殖に利用される常態と稱せられてゐる性生活を指してゐるのである。

第二十一章　リビド進化と性組織

精神分析の性慾觀に倒錯がいかに有意義なものかを諸君に確信さすことに不成功でなかつたと私は考へる。この故に私は出來る限りこの問題を改良し擴大してみたいと思つてゐる。

こんな猛烈な反抗を浴せかけられた性慾といふ概念を單にこの倒錯のために變更する必要などなかつたとお考へになつては困る。小兒性慾の研究は必然倒錯以上に性慾の概念を變へてしまつたのだ。そして倒錯と小兒性慾の合致は私達に確乎たるものとなつたのである。成程小兒性慾の表現は小兒時代の後期に顯著に現れる。が、その表現は小兒時代の早期に溯れば殆ど零となつてしまふかも知れない。進化と分析的關係を無視する人達は小兒時代の早期に性なる特質があることを否定して、その代りに未だ分化しない何等かの特質を認めようとする。私達が偏狹として排斥しなくてならぬあの定義、性慾は生殖機能に隷屬してゐるといふ以外、私達は現今未だ一現象たる性なる本質に對して、一般に承認されるやうな立派な知識を有してゐないことを忘れないでおいて欲しい。生物學的標識、例へばフリイスの主張した二十三日と二十八日の周期性も今日未だ問題である。性現

象の化學的特徴も、假定は出來るものの、誰も未だ發見したものはない。これに反して大人に現れる性慾倒錯は現在目前にあるものであり動かすべからざるものである。既に一般に承認されてゐる名稱が證明するやうに、性慾倒錯は疑もなく性慾である。倒錯は變質特徴だとかいや何だとか呼ぶ人があるかも知れぬが、倒錯が性生活の現象でない別のものだとよもや主張する度胸のある人はない筈だ。この見地からでも私は、性慾と生殖とは合致しないものだといふ主張を飽く迄も固持したい。なんとなれば、明らかに性慾倒錯はこぞつて生殖の目的を否定してゐるからである。

この點で私は可なり興味ある並行を見る。一般人は「意識的」と「精神的」が同一のものだと考へてゐる。ところが、私達は「精神的」なる概念を擴大して、この精神的なるものに意識されないものを認めるべく餘儀なくされた。丁度これと全く同じに世人は性的と「生殖に屬してゐるもの」——諸君はこれを「生殖的」と省略してもよい——が同一のものであると觀ずる。ところが、私達は「生殖的」でない、何等生殖作用と關聯してゐない「性的」なるものを考へずにはをられない。形式的には同じであつても、內容的には可なり深い根據があるのである。

併し性慾倒錯の實在がこの問題の激しい議論の焦點であるなら、何故もつと昔に性慾倒錯の本質が研究されて、この問題を解決しておいて吳れなかつたのか。私はこの理由をはつきり言ふことが

出來ない。性慾倒錯は昔から特殊な禁制に數へられてゐた。この禁制から學說が作られ、剩へ科學的評價まで下されるやうになつたのである。何人も性慾倒錯がある穢はしいものだけにとどまらずある恐ろしいもの、ある危險なものを含んでゐることを忘れることが出來ぬやうに、恰も性慾倒錯が誘惑力を持つてゐるやうに、恰も人はその心の底で性慾倒錯を享樂する人にひそかなる嫉妬を禁じ得ないやうに、丁度あの有名なタンノイゼルのパロディにある法官に立つた領主が吐き出す

「ヹヌス山に到りて彼は名譽も義務も忘れ果てたり。——かやうなるものわが身の上に起こらざるとは不思議なる哉。」

といふ感情を懷いてゐるやうである。眞實倒錯者は哀れなる惡魔と申せる。この惡魔は贏ち得がたい享樂に對してはげしい贖罪を續けてゐる。

對象と目的が不自然であるにもかかはらず、倒錯活動が誰が見ても性的であるといふのは、倒錯的滿足の行爲が大概完全なるオルガスムス及び生殖產物の射出に終つてゐる事實に基づいてゐる。これは勿論その倒錯者が大人であるがために過ぎない。小兒ではオルガスムスや生殖器の勃起は全く不可能である。オルガスムスや勃起は小兒でははつきり性的だと承認出來ない諷刺によつて置換

されてゐる。

性慾倒錯の評價を完璧にするために、私はなほ他の事柄を附加せねばならぬ。性慾倒錯が言語道斷なものであらうとも、さらに常態な性的活動と嚴然と區別すべきものであらうとも、一寸觀察すれば、しばしば常人の性生活にもある倒錯した特徴が具つてゐることを知る。キスは倒錯行爲の名前を與へるに十分である。キスは二種の生殖器の代りに、發情帶と申せる二つの口を接合するところにあるからである。ところが誰もキスを性慾倒錯だと非難しない。キスは芝居では性行爲のやはらめられた仄しとして許されてゐるぐらゐである。だがキスに射精とオルガスムスが直接に結び附く程熱烈になれば、容易に立派な性慾倒錯となり得るのである。こんなことは決して稀有なものでない。なほ對象に觸れたり對象を眺めることは性亨樂の不可缺な條件であること、ある人は性興奮の頂上に達すれば相手をひきむしつたり、相手に嚙みついたりすること、愛人に於ける最も大きな興奮は常に生殖器によつてでなく、むしろ對象の他の身體部門によつて喚起されること、その他いろんな事實に就ても同一であることを知ることが出來る。といつてかやうな倒錯した特徴を一つだけ持つてゐる人を常人の列から曳き出して倒錯者の列に加へるのは不合理である。性慾倒錯の本態は性目的の違背や生殖器の置換に存しない。決して決して對象の變異になぞ存してゐない。いや單

に、この變態行爲を押し通し、生殖に利用される性行爲を斥けようとする獨裁に存してゐるのである。たとへ倒錯性慾であつても、それが常態な性行爲を進行さす上の序曲的な若くは刺戟的な作用に過ぎないなら、最早性慾倒錯と申せなくなる。勿論常態性慾と變態性慾に横たはる溝はこのやうな事實によつて非常に狹くなる。常態性慾はそれ以前に存在してゐたある材料から、この材料のある成分を無用として抛棄し、新しい目的、卽ち生殖目的に隷屬するやうに他の成分を綜合することによつて作られるものだと申しても決して牽强附會ではない。

確かな豫想を懷いて新しく小兒性慾の研究に潛入する上に、私達の性慾倒錯の知識を利用するにあたつて、まづ私は兩者の重要な區別に諸君の注意を引いておかなくてはならぬ。一般に倒錯性慾は集中されるのが特徵である。一切の行動を一つの――大概唯一の――目的に集中する。一つの部分衝動が優力になる。一つの部分衝動は唯一のものとして立證される。ある時は一つの部分衝動は自らの目的に他の衝動を屈服してゐる。この點に於て倒錯性慾と常態性慾の間には何等の區別も存してゐない。違つてゐるところといへば、支配權を有してゐる部分衝動、卽ち性目的が兩者にあつて違つてゐるぐらゐである。譬へてみれば、二つながら立派に組織された專制政治と申せる。ただ違ふところは、前者では甲の家族、後者では乙の家族が獨裁を擅にしてゐると申せる。これに反し

て小兒性慾にはこのやうな集中と組織がまるで缺けてゐる。各個の部分衝動が同一權利を主張して、めいめい獨立してそれ自らの快感を追求してゐる。勿論集中が缺如してゐるとか集中が存在してゐるとかは、倒錯性慾も常態性慾も二つながら小兒性慾から發生したものであるといふ事實にきつぱり一致してゐる。なほまた小兒性慾と區別が出來ない程よく似てゐる倒錯性慾の例がある。この場合無數の部分衝動が相互に無關係にそれに特有な目的を持つて活躍してゐる。いや、もつとうまくいへば進行してゐると譬へられる。かういふ例では倒錯といふより性生活の小兒性といふ方が適切である。

かやうに武裝しておけば、私達はどうしても看過することの出來ないある一つの命題を考察することが可能となる。人はわれわれにかういはう。「なぜ先生自らの證言によつても不確實な小兒時代の表現――それから後年性なるものが發展するさうですが――を性慾と名附けるべきだと主張されるのですか。なぜ先生はむしろ生理學の記述で滿足して、乳兒にあつては早くも、乳兒が器官快感を追求する證據たるルッチエンとか排泄物の保留とかいふ能力が觀察出來ると簡單に片附けやうとされないのですか。かう申さるれば先生は小さい小兒に性生活があるなどといふ、私達すべての感情を侮辱するやうな言ひ方を避けることが出來ませうのに。」――御尤もである。私は器官快感に對

して何等反對したことはない。性的結合の最高の快感は單に生殖器の活動に結びついてゐる器官快感であることを存してゐる。ではこの起原的な不分化な器官快感が一體いつ頃に、進化の後年の段階で確かに所持してゐると申せるあの性的特徴を身に附けるかを諸君はいふことが出來るか。私達は性慾の知識以上に、うんと澤山「器官快感（オルガンルスト）」（Organlust）に關する知識を持つてゐるだらうか。いや生殖器がその機能を現はし始めた丁度その時にこの性的特徴が加はるのだと諸君は答へる積りか。諸君のいふところは、性なるものは生殖なるものを意味してゐる譯になる。大概の倒錯者は、勿論生殖器の結合とは違つた手段ではあるが、兎に角生殖器のオルガスムスを實現しようとしてゐますと指摘して、諸君は私のいふ倒錯の反駁に逃口上を張らうとしていらつしやる。倒錯の實在のために不都合な生殖との關係を、性なるものの本質から削除して、その代りに生殖活動を提唱すれば、實際諸君はうんと都合のよい立場を作ることが出來るかも知れぬが、さういふ立場を作つたところで大した逕庭はない。やつぱり他の器官に對して生殖器が對立してゐる。それでは常態なキスとか花柳界の倒錯行爲とかヒステリイの症候に於けるやうに、快感獲得のために生殖器が他の器官によつて代用され得る事實を立證する幾多の經驗を諸君はどう片附ける積りなのか。ヒステリイといふ神經症では刺戟現象、感覺、神經興發、さらに生殖器に屬してゐる勃起の現象さへ遠く離れた

他の身體部門（例へば下體から上體へ、頭または顔面へ移行されるやうに）へ移轉されることが普通になつてゐる。このやうな論法から諸君が主張される性といふ性質がまるでたわいもないものであることにお氣附きにならう。かくて諸君は私のお手本を踏襲して、「性」なる名稱を早期の小兒時代に於ける器官快感を追求する活動に迄擴大しようと決心しなくてはならなくなる。

さて私の說を確證するために、さらに二つの考慮を提出することを許して欲しい。諸君も御存じのやうに、最も早期の小兒時代に於けるあやしい不確實な快感活動を私達は性的と名附けたのである。何故かといふと、私達は分析の方法をもつて、症候を基點として、否定の餘地のない程明瞭な性的なる材料を越えて、この快感活動に達したのだ。だからこの快感活動は性的それ自體であるとは主張出來ないかも知れぬ。だが一つ諸君は類似した場合を考へて欲しい。双子葉の二つの植物の成長、例へば林檎の木と蠶豆の成長を、その種子から觀察するために私達に何の手段もなかつたと想像したまへ。ところが私達は兩者に於てその成長しきつた植物の個體から、二つの胚葉を持つてゐる最初の種子に迄溯ることが可能である。二つの胚葉の外觀は兩者の區別がつかない。兩方の植物とも殆ど同質のやうである。それ故に私は兩者の胚葉が實際同質であり、林檎の木と蠶豆の間の特殊な區別は植物の成長のずつと後段に現れると假定出來るだらうか。いやたとへ私が胚葉に區別

を見出すことが出來なくても、種子の中にはちやんと區別が出來てゐるのだと考へる方が生物學的に正しいだらうか。私達が小兒の快感活動を性的と名付ける場合にも同じことがいへる。すべてのどんな器官快感でも性的と名附けても差支へないか、若くは、性的の快感と並んで、この名前に一致しない他種の快感が存してゐるだらうか。どちらが正しいかを私は只今ここで論ずることが出來ない。私は器官快感とそれの條件に就てあまり大して知つてゐない。そして分析の逆行特性の結果、最後に私がその當時未だはつきり分類出來ない要素に突きあたつたことに一向恐れ入らないのである。

さらにもう一つ。たとへ諸君が乳兒の活動は性的と觀じない方がよいと私に說得出來ても、諸君が力說されようとするもの、卽ち小兒の性的無垢に關して諸君は大局から大した收穫を贏ち得てゐない。と申すのは、早くも三歲から小兒には明白に性生活が存してゐるからである。この年代になると既に生殖器の興奮が始まる。多分小兒性手淫卽ち生殖器官による滿足の一時期がちやんと發現する。さらに性生活の精神的表現及び社會的表現が誰の目にもついてくる。卽ち對象選擇、愛情によつてわが好む人を區別すること、男女兩性の一方を決定すること、さらに嫉妬は、公平な觀察によつて既に精神分析のない頃に獨立して確定されてゐる事實であつて、眼を具へた觀察家ならどん

な人でも立證出來るものである。愛情の早期のめざめは疑はないが、この愛情が「性的」の特徴を帶びてゐることだけに諸君は反對したいのである。勿論三歳から六歳迄の小兒は愛情に含まれてゐる、この性的の特徴を早くも隱蔽することを心得てゐる。若し諸君が注目してみるなら、この愛情の肉慾的目的をいつ何度でも蒐集することが出來る筈だ。そして諸君の目に未だ觸れないものは、分析的研究が何の苦もなくうんと澤山摑み出して呉れるであらう。この時代の性目的は同時代の性的好奇と深い關係を持つてゐる。これに就て私は前に少數の見本をお目にかけておいた。勿論これ等の目的のあるものが倒錯の特徴を帶びてゐる事實は、性交行爲の目的を未だ發見してゐない小兒の體質的未熟にかなつてゐるのである。

次いで六歳から八歳にかけて性の進化にある靜止と退行とが現はれる。文化の要求する理想のままになるやうな場合なら、この期を潜伏期といふ名で呼んでもよい。併しこの潜伏期が缺けることがある。潜伏期と申しても、何も全線に渡つて性活動と性的好奇が中絶してしまふといふ意ではない。潜伏期が始まる以前の大抵の體驗や精神興奮は小兒性健忘、卽ち前にお話した忘却に包まれてしまつて、この結果私達の最初の青春は私達から隱蔽され私達から遠去かつてしまふ。精神分析の使命は實に忘却裡にあるこの年代を記憶の中に甦らすことにある。かくて人はこの年代に屬してゐる

る性生活の芽生えこそこの忘却の動機であり、この故に忘却は抑壓の成果であるといふ假設を否定することが出來なくなる。

小兒の三歲以降の性生活は大人の性生活といろんな點で一致を示してゐる。既にお話したやうに、小兒と大人の性生活の差違を擧げると、小兒にあつては生殖器が上位を把握すべき堅固な組織が缺けてゐること、倒錯の明瞭な特色が存してゐることにある。いふまでもなく小兒では全衝動の强度が弱い。然しながら、性進化、私達の言葉を用ふればリビド進化の理論的に最も興味深い段階は實にこの年代の前にあるのだ。この期の進化は非常に急速に行はれるため、直接に觀察しただけでは到底この須臾に消え去る姿を摑まへることは不可能である。僅かに神經症を精神分析的に探究することによつて、リビド進化のずつとずつと前の段階を明るみに出すことが出來るのである。確に進化のこの段階は理論的構成に過ぎないが、ひと度諸君が精神分析を實地におやりになれば、この段階が不可缺な、かつまた貴重な構成であることを發見されるに相違ない。常態の對象では當然見逃すやうな現象でも變態な狀態によつて立派に摘發することが出來ることを諸君は直ぐ理解されるであらう。

かやうにして私達は生殖器の上位が作られる以前の小兒の性生活がいかなる姿であるかを只今斷

言することが出來る。實にこの生殖器の上位は潛伏期前の最初の小兒時代に準備され、思春期から次第に組織化されたものである。この太古期には私達が前生殖器的性組織 (Prägenitale Sexualorganisation) と命名したい、括りの緩いある種の組織が存してゐる。

この時代には生殖器的部分衝動は存してゐないが、サド風な部分衝動と肛門の部分衝動が非常に顯著な姿を呈出する。この期には男性と女性の對當は未だ姿を見せてゐないが、能動的と受動的の對當は存してゐる。この對當を性的兩極性の先驅と名附けてもよい。卽ちこの先驅をもつて只今の對當は後年にも連續してゐるのである。この段階の活動中男性として現はれるものは、生殖器的段階から考察すると、一つの占有慾の表現と解せられる。そしてこの占有慾は容易に殘忍に移行する。受動的目的を持つてゐる衝動は、この時代にあつては非常に有意義な肛門の發情帶に關聯してゐる。覗きたいといふ衝動、卽ち好奇心は非常に力強く發現する。性生活に於ける生殖器はこの時代には單に排泄器官の作用に與かるだけである。この段階の部分衝動には對象といふものを缺いてはゐないが、これ等の對象は必ずしも一つの對象に集中されてない。サド風肛門的組織 (sadistisch-anale Organisation) は實に生殖器上位の段階の直ぐ前の段階にあるのだ。一步深く研究してみれば、その組織のいかに多くのものが、後年の完成した構造の中に含まれてゐるか、さらにこれ等の部分衝動

がどういふ道を通つて新しい生殖器的組織の中に配置されるやうに强いられるかを敎へられる。私達はリビド進化のこのサド風肛門的段階の裏面にもつと早期なもつと原始的な組織段階を瞥見した。そしてこの段階にあつては實に口の發情帶が主役を演じてゐるのである。ルッチエンの性活動がこの口の發情帶に屬してゐることを指摘してもよい。そして諸君は小兒、さらに神格を具へたホルスをさへ口の中の指でもつて美術的に表現したあの埃及の知識に驚嘆されてもよい。アブラハムは最近初めてこの原始的な口部段階は後年の性生活に名殘を留めてゐることを報告したのである。

性組織に關するこの最後の報告は諸君を啓發さすどころか、諸君にあべこべに重荷を加へたものだと私は推察出來る。私はもう一度詳しくお話する算段はしてゐるが、もう暫く辛抱して欲しいものである。諸君が只今お聞きになつた事柄でも、今後利用される時は立派に役立ち得るものなのである。諸君は今日のところ性生活——リビド機能と私達は申してゐるが——なるものは、初めつからちやんと出來上つた姿で現れるのではなく、一定不變の姿で成長して行くものでなく、むしろ相互に異つた連續的な段階の一つ一つを通過して行く、譬へてみれば幼蟲が蝶蝶になるやうに、進化の段階を何回も反復するといふ諸事實を記憶に留めておいて欲しい。そして進化の飜點はあらゆる部分衝動を生殖器の上位に從屬せしめ、從つて性慾を生殖機能の下に屈服さすところにある。この

觀點の前期では性生活はいはば安定を缺いてゐて、器官快感を追求しようとする各個の部分衝動が各自めいめいに活躍してゐるのである。たとへば無政府狀態のやうなものだと申せる。この無政府狀態は「前生殖器的組織」の擡頭によつて改革されるのである。この改革にあたつて第一に蜂起するものはサド風肛門的段階であるが、恐らく最も原始的な口部段階がその前に存してゐる。なほこの口部段階に加へて今日未だ明確に知るよしのないある過程が存してゐる。その過程とは組織の一段階からさらに高い後年の段階に移行して行くものである。リビドがかくも長い曲折に富んだ進化の道程を辿ることが、神經症の理解にどういふ意義があるかは次回にお話することにしたい。

今日さらにこの進化の他面、卽ち性的部分衝動と對象の關係を檢べてみることにする。私は進化のずつと後年に現れる事件を長時間お話したいので、この期の進化を短時間で鳥瞰するに留めておかう。卽ち性衝動の少數の成分例へば權力慾(サヂスムス)、覗きたい衝動、好奇心は最初から一つの對象を持つてこれをどこ迄も固持して行く。明白に身體のある特定の發情帶に結びついてゐる他の成分は、その成分が性的でない機能に未だ倚りかかつてゐる限りは、その當初だけ對象を持つてゐて、若しこの機能から分離する時に對象を拋棄する。だから性衝動の口部成分の最初の對象は乳兒の營養攝取を滿たしてやる母の乳房になる。吸乳と同時に滿たされる春的成分はルッチエンの行

爲によつて獨立し、乳房といふ外界の對象を拋棄して、この對象に代つて自らの身體で置換するのである。口部衝動は肛門衝動や他の發情帶の衝動と同じく初めつから自己春情的である。さらに進んだ進化はどうなるか。出來るだけ簡單に現はしてみれば、二つの目的を有してゐる。第一には自己春情を捨てて、自分の身體にあつた對象を再び外界の對象と交換する。第二には各個の衝動のいろいろの對象を糾合してただ一つの對象で代用する。と申してこの糾合はこの唯一の對象が自分の主體と全く類似してゐる全身である時にのみ成功する。さらに多數の自己春情的な衝動が無用として拋棄されないうちは、この糾合はまだ斷行され難いものである。

對象發見の過程はかなり複雜で、今日迄のところ未だはつきりした記載がない。私達は精神分析の目的のために、若し潛伏期前の小兒時代の過程がある結論を惠んでゐるとすれば、この發見された對象は小兒が第二次的に贏ち得たあの口部快感の最初の對象と同一物であると力說したいのである。この最初の對象は母の乳房でなくて母そのものである。私達は母を初戀の對象と呼んでゐる。それぢや私達は戀愛といふものをどういふ意味に用ゐるのか。性慾の精神的方面を重視して、その根柢を造る肉體的な若くは「肉慾的」な衝動欲求を度外視するかあるひは暫時忘れた時にこれを戀愛といふのである。母が戀愛の對象となる丁度その時代に、早くも小兒の心に抑壓といふ心的作用

が始まつてゐて、そのために小兒の性目的の一部分に對する知識を小兒に知らしめないやうにしてゐる。こんな風に戀愛の對象に母を選擇することは私達が「エヂプス錯綜」といふ名で總稱してゐるすべてのものと非常に密接してゐる。實に「エヂプス錯綜」は神經症の精神分析的說明に非常に大きな意義を惠んだものであり、同時に精神分析に對して少なからざる攻擊の種を蒔いたものとなつたのである。

歐洲戰爭時に起こつたある小さい事件をお話したい。精神分析の熱心な學徒のあるものが醫者としてボオランドの某所の獨逸軍の戰地に出征してゐた。この醫者が時時患者に豫期しがたい感化を與へる力を持つてゐることが、はしもなく同僚間の評判となつた。その理由を尋ねられたので、この醫者は私は精神分析を患者に應用するためだと答へた。そして同僚に精神分析の知識を敎へることを快諾した。それから每晩軍隊の醫者仲間、同僚や上官までが精神分析の神祕を傾聽するために集まることになつた。數日の間は極めて平靜に順調に話が進行したが、ある日のこと醫者がエヂプス錯綜を聽衆に話し終つた時に、突然上官が立ち上つて、我輩はエヂプス錯綜とかいふものを信じない、祖國のために戰つてゐる勇士や家長の團體にさやうなことを語るのは、講師として實に無禮きはまることではないかと叱りつけた。そして上官はこの講演の續行を禁止してしまつた。それで

講演もおしまひになつた。精神分析家たる醫者は陣地の他所へ左遷された。併し若し獨逸軍の戰捷が科學のかやうな「組織」にかかつてゐるものなら、この一事をもつてしても戰爭の結果は豫想するに難くないと私は考へてゐる。そして獨逸科學はかやうな組織の下では決して發展するものではないと私は信じてゐる。

それではこの恐ろしいエヂプス錯綜が何を意味してゐるかを知りたいと只今諸君は非常に緊張されてゐるやうに見受けられる。この名前が諸君にすべてを語つてゐる。諸君はみんなあの希臘神話にあるエヂプス王の話を御存じの筈だ。實にエヂプスは生れながらにして父を殺し母を自分の妻とするやうに運命づけられてゐたのである。この豫言から逃れるために彼はあらゆることを行つた。然もエヂプスがいつの間にかこの二つの犯罪を犯してゐることを知つた時に、彼は自責のあまり發狂して自らの目を抉つてしまつたのである。諸君のうちの多くの人達はあのソフォクレスがこの題材を取扱つた悲劇の深刻な效果を自らに體驗されたことと思つてゐる。このアテネの詩人の作品は、エヂプスがずつと昔に犯した罪科が、巧みにひきのばされた審問によつて、次から次へとあがつてくる新しい證據を堅めて、漸次に明るみに暴露されて行くかを描寫してゐるのである。この書きぶりは精神分析の航路とある點非常に酷似してゐる。例へば對話の進行中に戀の盲となつた母である

妻なるヨカステが審問の繼續を拒絕して、世間の人は夢の中で實の母と同棲することがあると聞いてゐるが、夢は出鱈目で證據には出來ないと抗辯する。私達は夢を出鱈目だとは考へない。少くとも澤山の人が同じやうに見る定型的な夢は意味重大と見てゐる。そしてヨカステが語つてゐるこの夢は實にエヂプス神話の奇怪な凄愴な內容に觸れてゐることを疑ふことが出來ない。

ソフオクレスの書いた悲劇に對して觀衆が怒らないのはをかしなことである。むしろ先刻の武骨一遍の軍醫と同じ反應を觀衆が懷く方がもつと正當であるべきなのだ。この悲劇はその根柢に不道德な分子を含んでゐる、この悲劇は道德律への個人の責任を無視して、神の力を犯罪の指揮者とし、犯罪から逃れようとする人間の道德心は神の力に對しては無力であると教示してゐるからである。人は早速に神話の題材は神及び運命に對する彈劾を目的としてゐる、神と意見を異にした批判的なユリピデスの手によつて、多分そのやうな彈劾となつたのであらうと考へることが出來るだらう。ところが敬虔なるソフオクレスにはそんな企みなぞ毫頭なかつた。たとへ犯罪を命令されても、神の意志に從ふことは最高の道德だといふ信仰深い狡猾によつて彼はこの窮地を脫したのである。私はこの道德が劇の强味に屬してゐると思ふことは出來ぬ。いやこの道德は劇の效果とは無關係である。觀客はこの道德に反應するのでなくて、神話の含んでゐる神祕なる意味と內容に反應するので

ある。觀客は恰も自己分析によつてエヂプス錯綜を自らの精神に發見し、自らの無意識を包む美しい假面としての神の意志と神託の面を剝ぎとつたかのやうに反應するのである。觀客は恰も父を除去し、父の代りに母を自分の妻とするといふ願望を囘想し、必然その考へに戰慄しなければならないやうに反應するのである。觀客は詩人の聲を恰も「責任を逃れようといくらきばつても駄目だぞ。この犯罪の意圖を避けようとどれ程全力を盡したか分からないと貴樣が言ひ張つても駄目だぞ。要するに貴樣は罪人だ。貴樣はこの犯罪の意圖を潰滅さすことは出來ない。その意圖は今でもなほ無意識となつて貴樣の心中に巢くつてゐるのだ。」と叫ぶやうに解するのである。そしてこの言葉の中に心理學上の眞理が含まれてゐる。よし人間が惡なる衝動を無意識裡におしこめて、俺はその衝動に對して責任はないと言ひ張らうとしたところで、彼はやつぱりこの責任を自分には動機の分からない罪惡感の形で感ぜざるを得ないのである。

大抵の神經症患者がなやまされる罪惡意識の最も重要な源の一つをこのエヂプス錯綜に求めなくてならぬことは極めて明白である。いやそれ以上である。私が一千九百十三年に「トォテムとタブウ」といふ書名で發表した、人類の宗敎と道德の發生に關する論文に於て、宗敎と道德の最も古い源泉である人類一般の懷く罪惡意識は、恐らくその歷史の起原に於てエヂプス錯綜から得たものだ

と推測せざるを得なかつたのである。私はこの問題を諸君に進んでお話したいのであるが、只今のところこの話に觸れない方がよからう。この問題に一たん手を染めたなら、話を打切ることがむづかしくなつてくる。だからやつぱり個體心理學にまひ戻らなくてはならぬ。

潜伏期前の對象選擇時代の小兒をエヂプス錯綜の見地に立つて直接に觀察すれば一體何を見ひ出すだらうか。人は早速に小さい男は母を獨占しようと欲し、父の存在を邪魔と感じ、若し父が母に愛情を示す時は、機嫌を損ね、若し父が旅行に出てゐるとか不在である時は欣然とするのを見る。しばしば子供は自分の感情を直接に言葉で表現して、自分はお母さんをお嫁にするのだと約束する。そんなことはエヂプスの行爲とあまり一致してゐないと仰しやる人があるかも知れぬが、この事實ですべては十二分である。二つはその核心に於て同一であるからである。同じ子供が同じ時代に父に對してもある機會にこまやかな愛情を示すといふ事情によつて、只今の觀察はしばしばあやふやになつてくるが、大人に於ては葛藤に導くかやうな相反した——もつと適切に申せばアンビワレトな——感情は小兒にあつては長い間葛藤も作らずに、丁度後年無意識界で持續して共存するやうに、仲よく一緒に存してゐるのである。小兒のふるまひは利己的動機から發してゐる、從つてこれに色慾錯綜の見解をあてるのは不當であると攻撃しようとする人があるかも知れぬ。母は子供の要求の

すべてにいろいろ面倒を見てやる。それ故に子供は母親が自分以外の何人をもかまはないところに一つの興味を懐くのである。成程この考へは正しいが、この場合でも、これと似た場合でも、利己的興味は單に色慾衝動が結びつく支持を與へるといふことは直ぐに明瞭になる筈だ。小兒が母に對して最も露骨に性的好奇を示すなら、小兒が夜分に母親の側に寢たいとせがむなら、母が着替をしてゐる部屋へ行かうときかないなら、若くは母親がしばしば實地に見て笑つて語るやうに、小兒が母を誘惑しようと試みるなら、小兒の母への愛著は色情的本質であるといふ主張はどこから見ても確實になる。母は今のやうな作用を與へることなしに自分の女の子の面倒を同じ樣に見てやるし、父は母と競爭のやうに男の子の世話をやいても、子供は母親と同一の意義を父親に見出ださないことをも忘れずにおいて欲しい。略言すれば、性的選擇の因子はどんな批評をもつてしてもこの情況から消し去ることは不可能である。男子が兩親の一人よりも兩親の二人ともが自分の世話をして呉れるのがよいのに、むしろさうされるのを好まないのは、利己的興味の見地から眺むれば隨分をかしなことになる。

諸君もお氣附きのやうに、私は男の子の父と母への關係だけを敍したのである。女の子に對しても、必要な箇所を訂正すれば、全然同じことが申せる。父へのやさしい愛著、母を餘計なものと排

斥して母の地位を奪ひたいとの欲望、早くも後年の女らしさにも似た手練手管でもつて働きかけようとするコケツトリイ、これ等は小さい娘に蠱惑に滿ちた姿をそへるものであり、そのために私達はそれの眞劍さと、この小兒の情況から湧いてくる後年の重大な結果を忘れようとするのである。しばしば兩親自らが小兒にエヂプス心境をめざめさす上に決定的な影響を與へることを附加せずにをられない。卽ち兩親自らが性によつて子供を可愛がらうとし、若し數人の子供がゐる時は、父は小さい娘に、母は小さい息子にその愛情を傾ける。併しこの因子すら小兒のエヂプス錯綜の自發的本質を深甚に震動さすことは出來ない。エヂプス錯綜は別の子供が生れてくる時は家庭錯綜に迄發展してくる。子供は今や自分の利己心が新しく侵害されると見てとつて、この新參者を憎惡の目で迎へ、この新參者を排斥しようと露骨に希望するのである。子供は大抵おきまりのやうにこの憎しみの感情を親錯綜から發した憎しみの感情よりももつとしばしば言葉で表現しようとする。かやうな願望が實現されて、自分の望んでゐない赤ん坊が生れて間もなく死去してしまへば、この死去がたとへ子供の記憶に殘る必要がなくとも、子供にとつてはどれだけ重大な事件であつたかを、後年の分析から知ることが出來る。赤ん坊の誕生によつて第二の地位におしやられ、初めて母から全然離されて一人ぼつちになつた子供は自分のこの繼子扱ひに對して母を許すことが出來ない。大人に

なつた人に於て激しい忿怒と名附けてゐる感情が子供の心にこみ上つてきて、しばしば持續した離反の基調となる。性的好奇及びそれに結びつくすべての結果は普通子供のこの經驗に關聯してゐることは既に申し上げたところである。弟若くは妹が成長するにつれ、彼等に對する心理狀態は最も著明な變化を蒙る。男の子は自分に對して貞淑でない母の代用として妹を愛情の對象とする。萬一兄が數人ゐる時は一人の小さい妹を贏ち得るために、子供部屋で早くも敵意に滿たされた競爭が現はれる。そしてこの狀況は後年の生活に於て意義深いものとなる。小さい娘は年上の兄を昔のやうに愛撫して吳れない父の代用に選び、ある場合一番年下の妹を父から求めて得られなかつた赤ん坊の代用に選ぶのである。

子供を直接に觀察してみれば、まだ分析の影響を受けてゐない小兒時代の生き生きした回想を考察してみれば、今お話したやうな性質のものをうんと澤山集めることが出來る。諸君はさういふもののうちから、弟や妹を引續き持つてゐる子供の地位は、彼の後年の生活を形造る上に非常に重要な因子となつて、どんな人の傳記の中にもこの因子を見ひだすことが出來ると結論することが出來る。併しもつと大切なものがある。かやうにやすやすと下すことが出來た說明に直面して、諸君はあの近親相姦の禁壓を取扱つた科學の學說を微笑なしに思ひ出すことが出來ようか。近親相姦の禁

歴を說明するためにいろんな學說が發明された。例へば小兒時代から共同生活をしてゐたために、同じ家族のうちの異性に對して性的魅力が消失したとか、破倫を避けようとする生物學的傾向が先天的な破倫の恐れとして心理的に表現されてゐるとかいふ。若し近親相姦の誘惑に對して確乎たる何等かの先天的制限が存してゐたなら、何もわざわざ法律とか慣習によつて峻嚴に禁壓する必要がなかつたではないか。學說をたてたお方はこの一點を忘れてゐる。私達にいはすればこの反證の中に眞理が含まれてゐるのだ。人類の最初の對象選擇は常に破倫的である。對象は男にあつては母及び姉妹に向けられる。そしてこの持續して活動してゐる小兒性傾向を現實から遮斷するために、最も峻酷な禁制が必要となつたのである。今日なほ存してゐる原始人や野蕃人に於ては、近親相姦の禁制はわれわれより何層倍か嚴格である。そして最近ライクはその優れた研究によつて、再生を象徵してゐる野蕃人の元服式は男の子がその母に結びついてゐる破倫的連鎖をたちきつて、父に和睦を結ぶ意味を有してゐると說明した。

神話はわれわれに人類からかやうに嫌忌すべきものとされてゐる近親相姦が、神神の間では許されてゐたことをありありと敎へて呉れる。そして、古代の歴史から、諸君は妹との破倫な結婚が王者にとつては最も神聖な掟（古埃及のファラオ、ペルウのインカス）であつたことを知ることが出

來る。卽ちこれは實に一般人民には禁止されてゐる特權であつたことになる。

母との破倫的結婚はエヂプスの一つの犯罪であり、父殺しはエヂプスの他の犯罪である。序でにお話しておきたいのは、この二つの大犯罪はまた人類の最初の社會宗教制度たるトオテミズムが禁止したものであつた。これから一つ小兒の直接の觀察から神經症に罹つた大人の分析的研究に鋒先を向けることにする。精神分析はエヂプス錯綜のさらに深い知識に何を寄與するであらうか。話は極めて簡單である。神話が語るそのままを分析も證據立てたのである。分析はこれ等の神經症患者自らがエヂプスであつたこと、あるひは、結局同じことではあるが、錯綜への反應に於てハムレツトになつてゐることを示すのである。勿論エヂプス錯綜の分析的描寫は小兒スケッチの擴大圖であり素描である。父に對する憎しみ、父に對する死の願望は最早こつそりと仄されない。母への愛情は同時に母を妻として所有する目的を告白してゐる。この氣味惡い、この極端な感情の動きをあのやさしい小兒時代におしつけることが許されようか。あるひは分析は新しい因子を挿入することによつて私達を欺かうとするのであるか。いやかやうなものを小兒に發見するのは一向むづかしいことでない。人が過去に就て報告する時は、たとへその人が歷史家であらうとも、私達は常に彼が知らず識らずに現在から若くはその中間に橫たはつてゐる時代から過去に輸送するものを考察しなく

てはならない。彼はそれの輪迻によつて過去の眞相を贋物にしてしまふ。神經症患者の場合では、この過去への輪迻が全然故意でないかどうかは疑問であるが、いづれ私達は後日これに對する動機をお話する積りである。そしてずつと昔の過去への「退行空想」(Rückphantasien)の事實が一般に正當なものになる筈である。父に對する憎しみは後年の時代及び後年の關係に卽した多數の動機によつて強められること、母に對する性的願望は小兒にとつては未知であらねばならぬ形でもつて味到されることを私達は容易に發見出來る。併し私達がエヂプス錯綜の全體を退行空想で說明して、後年の時代に結びつけようと思へばその結果はすべて徒勞に歸してしまふ。小兒への直接觀察が立證して吳れるやうに、小兒性中核及びそれへの附屬物の多少はずつと元の姿で殘存してゐるのである。

エヂプス錯綜の分析的に實證した形の裏面に現はれてゐる臨床上の事實は、今や實地上最も重大な意義を有して來た。性慾が張り切つて初めてそれの要求を提出するあの思春期にあたつて、古代の家族的、近親相姦的對象が再び活氣を呈して、新しくリビドを裝塡するのである。小兒性對象選擇は思春期に於ける對象選擇を誘導する力弱い、しかもその方角を決定する前奏曲であつた。そしてこの思春期にあたつて初めて非常に熾烈な感情の流がエヂプス錯綜の方角若くはエヂプス錯綜へ

の反應へ押し寄せる。といふものの、これ等の感情は、それ等の前提に堪へ切れなかつたために、大部分意識から遠く隔離されなければならなかつた。この時期から以後人類の個體は親から分離するといふ大きな課業に熱中しなければならない。親から分離して子供は初めて子供でなくなつて、社會といふ團體の成員となるのである。息子にとつての使命は實に、彼のリビド願望を母から引き離して、現實の中に家庭以外の戀愛對象の選擇にそのリビド願望を消費し、若し息子が父と拮抗してゐる時は父と和睦を結び、若し息子が小兒的革命に對する反應に於て父に征服されてゐるなら、父の壓迫から自らを解放するところに存してゐる。これ等の使命はどの男子にも課せられてゐるとはいへ、その使命の遂行が理想的に、卽ち心理的にも社會的にも、正當に行はれることがいかに稀有であるかは注目に價する。神經症患者は一般にこの分離に成功してゐない。息子は終生父の權威の下に屈服して、自分のリビドを家庭外の性對象に交付することが不可能である。關係は違つてゐても、娘の運命に對しても同じことがいへる。この意味に於てエヂプス錯綜は神經症の核心となる權利を有してゐるのである。

諸君はエヂプス錯綜に結びついてゐる、實地上にも理論上にも、意義重大な多數の關係を、私が至極大ざつぱに片附けたと想像されよう。私はエヂプス錯綜の異例とかそれの可能な轉化などにま

るで觸れない積りである。エヂプス錯綜と非常に遠いところで關聯してゐるもののうちでたつた一つだけ諸君に示したいものだ。それはエヂプス錯綜が詩的産物に對して最高の決定力を有してゐることを證明してゐるものである。オツトオ・ランクがその貴重な書物の中で、すべての時代の劇曲家がその劇の材料を專らエヂプス錯綜、近親相姦錯綜及びそれらの異形と變裝から取り入れたことを示して吳れた。さらにエヂプス錯綜の二つの犯罪的願望が精神分析發見以前のずつと昔に、放肆な本能生活の僞のない表現として知られてゐたことは注目に價するものである。百科全書家たるヂデロォの書物のうちに諸君は「ラモォの甥」(Le neveu de Rameau)といふ有名な對話を發見されるであらう。これは實にゲエテによつて獨逸語に飜譯されたことがある。その對話中に驚くべき一章が存してゐる。文はかうだ。「小さい野蕃人が自分の思ひの儘に振舞つて彼の癡愚の一切を所持し、搖籃中の小兒の理性のほんのちよつぴりに三十男の情熱の焰を注ぎかけるなら、彼は父の首をしめ切つて母と一緒に寢るに相違ない。」

併しここになほ見逃し難い一事がある。エヂプスの妻たる母がわれわれに夢を思ひ起さしめたのは空しいことでない。諸君はあの夢分析の結果、卽ち夢形成の願望がいかにしばしば倒錯した近親相姦の性質のものであり、ある時は自分の周圍の最愛の人達に向けられる思ひもよらない敵意を示

してゐるかを思ひ出されないか。その時私達はこの惡なる衝動がどこからやつて來てゐるかを明瞭にしておかなかつたが、今や諸君は自ら答へることが出來るだらう。それは早期小兒時代に屬してゐる、ずつと昔に意識生活で棄てられたリビドの投資、卽ちリビドの對象裝塡（Objektsbesetzung）である。この對象裝塡は夜分でもなほ存在し、ある意味で能力を發揮することを示してゐる。併し單に神經症患者に限らず、すべての人類がこの種の倒錯した、近親相姦卽ち殺人的な夢を見る以上、現代の健康な人達もまた、昔その進化の道筋に於て性慾倒錯とエヂプス錯綜の對象裝塡を通過し、この道筋が正常な進化の軌道であり、神經症患者は私達が健康な人から夢分析で摘發したものを單に擴大した誇張した姿で示してゐるといふ結論を作らなくてはならぬ。そしてこの事實こそ私達が何故に夢の研究を神經症の症候の研究の手引に選んだかの理由の一つになるのである。

第二十二章　進化と退行の見地、病原學

私達はリビド機能がさらに複雜な進化を辿り、つひに常態と名附けられる姿をもつて生殖作用に奉仕するやうに發展することをお話しておいた。今や私は諸君にこの事實が神經症の原因にどういふ意義を有してゐるかを述べてみたいのである。

リビド進化には二種の危險、第一は抑制の危險、第二は退行の危險が含まれてゐると假定するなら、私達の立場は丁度病理學總論の學說と一致すると私は信じてゐる。換言すれば、生物學的現象の變異への一般傾向のために、當然あるものは準備的段階を悉くすらすら通過することが出來ず、また完全にその準備的段階を克服することが出來ないで終る。機能のある部分は永久にこの早期の段階に停止して、進化の趨勢中にある程度の進化抑制が點綴されるのである。

私達はこの現象との類似點を他の領域に求めてみよう。丁度人類の歷史の太古にしばしば起こつたやうに、若し全民族が新しい土地を探すためにもとの舊い土地を去つたとする時に、民族の全部

が一人殘らずこの新しい土地に到着するとはきまつてゐない。勿論途中で落伍する人達もあるが、それは別問題として、移民のある小群若くは小團體は途中で停止してその場所に土著してしまひ、その間に大群はさらに前方に行進するのである。またこれと似た別の例を語つてみよう。諸君も御存じのやうに、最も高等な哺乳動物では、男性の生殖腺はその當初は腹腔のずつと奥に存してゐたのだが、胎內生活のある時期に游走し始めて、最後に骨盤の皮膚の直ぐ下に現はれる。生殖腺がこのやうに游走する結果、ある少數の男子に就て、一對ある生殖腺の一方が骨盤腔に停止してゐるとか、普通游走中に通過しなければならない所謂鼠蹊管に生殖腺が永久に停止してしまふとか、ある時は、常態なら生殖腺が通過してしまへば鼠蹊管は閉鎖してしまふのに、鼠蹊管が開いたままに殘るといふやうな畸形を發見するのである。私が若い學生時代ブリツク先生の指導の下に初めて科學研究に手を染めたが、その時のテエマは構造の未だ非常に古いある小魚類に於ける脊髓神經の後根の發生に就てであつた。この後根の神經纖維は灰白質の後角にある大きな神經細胞から發してゐることを知つた。かういふ事は、最早他の脊椎動物には見られない。ところが間もなく私は同じ神經細胞がこの灰白質以外のところにずつと擴がつて、後根の所謂神經節に迄のびてゐるのを發見し、この事實に立脚して私は、この神經節の神經細胞は後根をつたつて脊髓から移動したものだと結論

した。發生史もまたこの事實を裏書してゐるが、この小さい魚類にあつては停止した細胞によつて移動の全足跡のめじるしがついたのである。だが仔細に考察してみれば諸君は容易に只今の比較に弱點を嗅ぎ出される筈だ。この故にこの比較によつて私達はたとへ性衝動のある部分が決勝點に到達してしまつても、他の部分は進化の早期の段階に停止することが可能であるといふだけにしておく。この事實から諸君はこのやうな衝動は人生の初めから連綿として續いてゐる潮流であつて、この潮流をある範圍迄人工的にをやみなしに前進する個個の運動に分解出來るのを見らるるであらう。この考へ方をもつと詳しく說明して欲しいといふ諸君の注文は當然だが、話が岐路にそれるから割愛してしまはう。ついでに諸君は部分衝動の流がこのやうに早期の段階に停止することを固著(卽ち衝動の固著)と名附くべきだと極めておいて欲しい。

段階的に動くリビド進化の含む第二の危險は、前進した部分が逆行の方向に於て容易に初期の段階に舞戻ることである。私達はこれを退行と名附けてゐる。若し衝動の機能の練習、卽ちその滿足といふ目的への到達が、後年の形若くはさらに高い進化の形に於て、外來の強い障礙にぶつつかるなら、衝動の流はかやうな退行に到る機緣を見ひだすのである。固著と退行はお互に無關係だと假定するのは早計である。進化の軌道に於て固著が強ければそれだけ、機能はそれ等の固著までの退

行によつて、容易に外來の障礙に降伏する。換言すると、形成された機能は固著が强ければそれだけ進化の軌道に現れる外來障礙に對してずつと抵抗力がにぶくなる。若し移動して行くある民族がその途中のある土地に强い團體をのこして來たなら、前進して行く民族が萬一敗北するとか强敵に襲擊される時は、さきの土地迄退却するのは自然だと想像して欲しい。併しまた民族がその大部分を移動の途中に殘しておけば、それだけ敗北の危險が增すわけになるとも申せる。

固著と退行のこの關係に注目することは、諸君が神經症を理解する上に大切な事になる。この考へ方によつて諸君は私達がこれから早速に觸れようとしてゐる神經症の原因の問題、卽ち神經症病原學の問題に確乎たる足場を持つことが出來るに相違ない。

只今のところ私達はなほ退行の問題に踏みとどまりたい。リビド機能の進化に就てお聞きになつたことから、諸君は退行には二種類があることを豫想されるだらう。第一の退行はリビドに裝塡された最初の對象に復歸するものである。この對象が近親相姦の性質を帶びてゐることは夙に御承知だ。第二の退行は性組織の全部が初期の段階へ復歸するものである。二つながら交付神經症に現はれて、そのメカニズムに大きな役割を演じてゐる。特にリビドの近親相姦的な最初の對象は、神經症患者では例外なく見られる特徵である。若し神經症の他の部類、所謂ナルチス型といふものを一

緒に眺めてみれば、リビドの退行に就ていろんな事を喋らなければならなくなるが、現在のところそれは私達の目的でない。これ等の疾患は今迄述べてゐないリビド機能の他の進化過程に結論を惠むものであり、從つて退行の新しい種類をも數へて與れるものである。併し私は只今退行と抑壓を混同されないやうに篤と警告しておきたい。そして私は二つの過程の關係を諸君に明瞭にするためにうんと勉强しなければならぬ。諸君も御存じのやうに、抑壓とは意識になり得る行爲、卽ち前意識體系に屬してゐる作用を無意識、卽ち無意識體系に內攻さす過程である。そして若し一般に無意識的精神作用が直ぐ前方にある前意識體系への入場を許可されずに、檢閱官の閾のところで抑留された時にも同樣にこれを抑壓と呼ぶことにしてゐる。だから抑壓といふ概念には性慾關係などくついてゐない。この點をしつかり頭にたたきつけておいて欲しい。抑壓といふ名前は純心理學的過程である。いやむしろ局所的過程(トオピッシュ)と呼ぶ方がずつと適切かも知れない。假想の心的空間性に關聯してゐる時、若くは、この粗雜な想像の助を捨てるなら、個個の心的體系から成立してゐる精神機關の構造と關聯してゐる時に、私達はそれを局所的と呼びたいのである。

只今擧げた比較から今日迄「退行」といふ言葉を私達はずつと總括的な意義でなしに、全く特殊な意義に用ゐてゐたことに初めて氣が附いた。退行に總括的な意味、卽ち進化の高い段階から低い

段階への復歸といふ意味を與へるなら、抑壓もまた退行の中にはひつてしまふ。なんとなれば、抑壓は心的作用の進化の初期のずつと深い段階への復歸と記載出來るからである。ただ一寸違ふのは退行は逆行の方向に現はれない。と申すのは、私達は心的作用が無意識のずつと低い段階に固著された時にも、力學的の意味に於て抑壓と名附けてゐる。かくて抑壓は局所的力學的概念となり、一方退行は純記述的概念となる。併し私達がこれ迄に退行と呼び、また固著に關聯して考察したものは、どこ迄もリビドがその進化の初期の停止場へ復歸することを意味してゐたのである。換言すれば、本質に於て抑壓とは全く違つた、抑壓と全然無關係なものを意味してゐたのである。私達はリビド退行をもまた純心的過程と呼ぶことが出來ない。さらにリビド退行を精神機關のどういふ場所に置くべきかも知つてゐない。たとへリビド退行が精神生活に最も强烈な影響を與へても、それにある有機的因子は最も顯著な因子といへる。

こんな議論はどうも無味乾燥に陷りやすい。だからこのやうな議論をもつと印象的に取扱ふために、私達は一つ臨床に方向を轉ずることにしよう。諸君はヒステリィ及び强迫神經症が交付神經症といふ部類の二つの代表者であることを知つていらつしやる。さてヒステリイでは近親相姦的な最初の對象へのリビドの退行が存してゐる。これは例外なしにおきまりのやうにあるものであるが、

性組織の初期の段階への退行などはヒステリイには殆ど存してゐない。その代りヒステリイのメカニズムでは抑壓作用が主役になつてゐる。若しこれ迄に堅めたヒステリイといふ神經症の知識を一つの構成によつて完成するやうに許して貰へるなら、私は只今の狀態を次のやうに記述することが出來る。生殖器の上位の下に部分衝動の融和が成立するが、融和から出來上つた部分衝動の成果は意識に結びついてゐる前意識體系の抵抗にぶつつかる。それ故に、生殖器的組織は無意識にとつて成立するが、前意識にとつては同じ程度に成立しない。そこでこの融和が前意識の方面から拒否される結果、生殖器の上位の出來る前の狀態とある點類似した一つの姿が現はれてくる。併し類似してゐるといふものの、實際は全然違つてゐるものだ。――二つのリビド退行のうちで、性組織の初期の段階への退行の方が數倍も著明である。このやうな退行はヒステリイには缺けてゐる。神經症に對する精神分析の全見解は、時間的に進步してゐるヒステリイの研究の影響を非常に蒙つてゐるのだから、リビド退行の意義は抑壓の意義に比してはずつとあとに私達に明瞭になつたのである。若し私達がヒステリイ及び强迫神經症の外になほ別種のナルチス型神經症を考察出來るなら、私達の見地はもつと廣く擴張され改革されることを信じてゐる。

これに反して强迫神經症では、サド風肛門的組織の前段階へのリビドの退行が最も顯著であつて、

この退行は實に症候への表現を決定する因子である。この時は戀愛衝動はサド風衝動の假面をかぶらなくてはならぬ。「俺はお前を殺したいのだ。」といふ强迫觀念は若し人がその觀念を過然でない、いや不可缺なある壓力から釋放さしてやつたなら、その根本に於て「俺はおまへに戀愛を享樂したいのだ。」といふ意味に外ならないことになる。これに加へて對象退行が同時に惹起され、その結果この衝動が最も近しい最も愛してゐる人をのみ對象にとつたと假定するなら、これらの强迫觀念が患者に喚起さす驚愕と、同時に、强迫觀念が患者の意識的認識に現はれる際の奇怪な姿に就て諸君はある想像を逞しくすることが出來る。ところがまた抑壓もこの神經症のメカニズムに大いに貢献する。といふもののどういふ貢献をするかなどは、只今のやうな駈足の講演では詳しく說明することがむづかしい。抑壓のないリビドの退行は決して神經症を作らない。いやかへつて倒錯になつてしまふ。この事實から諸君は、抑壓とは神經症を最も早く鑑別さす、神經症を最も立派に特徵づけて呉れる過程であることにお氣が附かれよう。いづれ諸君に倒錯のメカニズムの知識をお話する機會があらうと思つてゐる。そしてその曉諸君は倒錯に於てもまた、私達が構成してみたいと思つてゐるものほど簡單な過程はないことを合點されるに相違ない。

神經症の病原學研究の準備として觀ぜられるなら、諸君はリビドの固著と退行に關する只今の議

論には双手をあげて早速に賛成されることと思ふ。この問題に就て私は初めてたつた一つの報告をしたのである。即ちリビドを滿足する機會が與へられぬ時は人間は神經症に罹る、私の作つた術語に從へば、人間は「拒絕」の結果病氣になること、その神經症の症候は丁度その拒絕された滿足に對する代用物であるといふ報告であつた。勿論リビド滿足の拒絕に會つた人が悉く神經症になるといふのではない。神經症を研究してみると、そのすべての場合に拒絕の因子が發見されるといふ意味に過ぎない。だからこの命題の逆は必らずしも眞ならずである。諸君でもこの命題が神經症病原學の祕密の全部を摘發するものでなくて、僅かにそれの緊要な不可缺なある條件を提唱するにすぎないことをお察しになる筈である。

この命題に立脚して深く論ずるために、拒絕の本性若くは拒絕を蒙つた人の特徴に觸れねばならぬかどうかを只今知つてゐない。拒絕はすべての場合一般に承認された絕對的のものとは申せぬ。病原として作用するためには、その當人がひたすらに渴望してゐる滿足の何等かの形、その當人に僅かに可能な滿足の何等かの形を拒絕せねばならぬ。一般に何等の苦悶なしにリビド滿足の缺乏に堪へ忍ぶ方法が無數に存してゐる。就中かやうな缺乏を一向平氣でじつと我慢出來る人を知つてゐる。勿論その人は幸福でない。その人は憧憬になやんでゐるが、決して病氣の虜にはなつてはゐな

い。だから性衝動の興奮は、私にいふを許して貰ふなら、素晴しく伸縮自在なものだと結論を下さなくてはならぬ。この性衝動のあるものは他の衝動の代用を務めることが出來、他の衝動の强さを引受けることが出來る。若し一つの衝動の滿足が現實に於て拒絶されるなら、他の衝動の滿足によつてその不滿を十分に代償することが出來る。性衝動とは恰も液體で充たされて相互に連結されてゐる水道網のやうなものだが、しかも性衝動はこの狀態で、生殖器上位の支配下に隷屬してゐるのである。この狀態は一寸想像に描くことがむづかしいかも知れぬ。さらに性慾の部分衝動、同樣に部分衝動から合成されてゐる性衝動は、その對象を交換し、それの代りに他のもの、換言すれば、たやすく手に届く他の對象ととりかへる能力を有してゐる。この轉移性と代理者を早速に受け入れる性質は拒絕の病原作用に强力な反對作用を及ぼすに相違ない。缺乏による疾患を防禦するこの過程のあるものは特有な文化的意義を持つてゐる。性衝動が部分快感若くは生殖快感に向けられた目標を拋棄して、發生的にはそれ等の目標と關聯してゐるが、最早それ自體性的でない、いやむしろ社會的と名附けねばならぬ他の目標に流れるといふ過程をいふのである。私達はこの過程を「昇華」(Sublimierung)と呼んでゐる。昇華を認めることによつて、私達は社會的目標がその根柢に於て主我的な性的目標よりずつと高等なものだと觀ずる一般の標準に賛成してゐるのである。なほ昇華は

單に性衝動が他の性的でない衝動に寄生した特別な形と申せる。私は他の機會に昇華に就てもう一度お話しなければならない。

たとへ缺乏があつても、それに堪へ忍ぶ只今のやうないろんな手段があれば、缺乏といふ因子は無意義になつてしまふといふ印象を諸君がお受けになつたことと思ふ。だがさうぢやない。缺乏はそれ特有な病原力を有してゐるのだ。解毒劑などはまるで奏效しない。平均して人間が滿たされないリビドを喰ひしめる程度には限りがある。リビドの伸縮自在若くはリビドの流動性は決して萬人に藏されてない。そして昇華と申しても大概リビドのある一少部分だけがこの作用によつて釋放されるのである。多數の人が有してゐる昇華能力はきはめて僅の程度である。かやうな制限のうちで一番大切なものは明かにリビドの流動性である。この流動性のお蔭で、人は極めて少數の目的と對象によつて、滿足を贏ち得ることが出來るからである。不完全なリビド進化のためにあの組織化と對象發見の初期の段階へ非常に大規模に時には幾層にもリビドが固著されて、その結果現實の滿足が不可能となる場合を諸君が一寸思ひ出して下さるなら、リビド固著といふ中に疾患誘因としての拒絕と合致する第二の强力な因子を承認される筈である。模型的に省言すれば、神經症病原學に於て、リビド固著は素因的內在的因子であり、拒絕は特發的、外來的因子であると申せるのである。

この機會に於て私は諸君が淺薄な論爭に加擔されないやうに警告しておきたい。科學界では眞理の一部を摑み出して、一部の眞理をもつて全體が眞理だとし、眞實でない殘物に都合のよいやうにこの眞理を押し竇りしようとする態度が好んで行はれてゐる。この流儀によつて早くも、精神分析からいろんな方向が分裂したのである。例へばある人は主我的衝動を承認して性的衝動を否定し、他の人は單に現實の人生的の影響だけを尊重して、個體の過去の影響を看過するといふ工合である。さて只今同じやうな對立と論點が起こつてくる。神經症は外因的の疾患か内因的の疾患か、ある體質の必然の結果か若くは人生のある有害(外傷的)な印象の產物であるか、就中神經症はリビド固著(それに加へて他の性的體質)によつてか若くは拒絕の壓迫によつて釀されたものであるか。このヂレンマは私が諸君に指摘出來る他のヂレンマ、卽ち赤ん坊は父親の生殖によつて作られるか、若くは母親の受胎によつて作られるかに比較してあまり逕庭のないものである。二つの條件は双方とも不可缺なものだと諸君も正當に返答して下さるだらう。神經症の原因の條件もこれとは全然同一だとは申せないがまづ大體類似してゐる。神經症の原因をこの見地から眺むれば、神經症といふ疾患の病例は一つの系列となる。この系列中には二つの因子——性的體質と體驗——他の言葉を用ひよと申さるれば、リビド固著と拒絕——が、恰も一方が減少する時は他方が增加する樣に現はれ

てゐるのである。系列の一方の末端に極端な病人が立つてゐる。この病人に就て諸君は「この種の人達は、彼等の異常なリビド進化のために、どれ程人生を注意深く氣を附けて歩いても、彼等はその體驗するどんな出來事にも病氣になる。」とはつきりいふことが出來る。系列の他方の末端に次のやうな病人が立つてゐる。卽ち人生が彼等をこの境遇あの境遇にはこばなくとも、常に疾患に反抗出來ると逆に判決しなければならぬ人達である。この系列の中間にゐる病人では、素因的な性體質の多少が人生の有害な要求の多少に結びついて現はれてゐる。彼等の性體質はかやうな體驗にぶつからなかつたならば、神經症に罹らなかつた人である。そしてにの體驗は若しリビドが他の配分で組み立てられてゐたなら、彼等に外傷的に作用しなかつた人である。私はこの系列に於て、體質的因子の意義の方を幾分偏重することが出來ると思ふが、この偏重は諸君がいかに廣く神經症の領分を限定するかにかかつてゐるのである。

私は諸君に只今のやうな系列を補助系列と名附けるやうに提案する。そして私達がいづれこれに似た他の系列を擧げる機會があると覺悟しておいて欲しい。リビドがある一定の方向と對象にへばりつく粘著性所謂リビドの粘著性（Klebrigkeit der Libido）は私達には個體によつて變異のある一つの獨立した因子であるやうに思はれる。この因子が何に隷屬してゐるかなど私達には全然分から

ぬが、この因子が神經症の病原學に意義あることは最早看過することが出來ない。と申して兩者の密接な關係を過重してはいけない。このやうなリビドの「粘著性」(未知の原因からの)は正常な人に於ても無數の條件の下に現はれて、ある意味に於て神經症の人と正反對の立場にある人達、卽ち倒錯者に決定因子となつてゐる。倒錯者の病歴の中にはしばしば、異常な衝動方向や異常な對象選擇のずつと早期な印象が滿たされてゐて、この人のリビドは全生涯その早期な印象にへばりついてゐる事實は既に精神分析發見前(ビネエ)に知られてゐたのである。世人は大抵どういふ印象がリビドにこんな强烈な魅力を逞しくしたかを知つてゐない。私は諸君に私の觀察したこの種の實例をお話しよう。ある男があつた。この男にとつて現在では異性の生殖器及び異性の他のすべての刺戟は何の意義もなかつたが、僅かに靴を穿つたある形の足のみがこの男に不可抗的に性慾を挑發するのである。男はリビドの固著を決定したと思はれる六歳の時のある體驗を思ひ出すことが出來る。彼は英語のレッスンを敎つてゐた女家庭敎師と並んで腰掛にかけてゐた。女敎師は鶴のやうに痩せた不縹緻な老孃であつた。目は水のやうに碧く澄み、鼻は獅子鼻で、丁度この日は足に怪我をしたために、天鵞絨のスリッパを穿いて蒲團の上になげ出してゐたが、下肢の方は非常にお行儀よく包んでゐた。その時見た女家庭敎師の臑(すね)の目立つたしんなりした足は今や、思春期の正常な性活動の

臆病な試みのあとで、彼の唯一の性對象となつてしまつた。若しこのやうな足に英吉利の女家庭教師の型を思ひ出させるやうな、他の特徴が加はつてゐるなら、この男は不可抗的に興奮してしまふやうになつた。ところがリビドのかやうな固著の結果、男は神經症患者にならずに、倒錯者、私達の術語を用ゐば足の祟物者になつたのである。だからリビドの極端な、それに加へて早熟的な固著は神經症の原因に不可缺であるとはいへ、それの作用圏は神經症の分野をずつと越えてゐることを御覽になるだらう。この條件はそれだけでは、以前にお話した拒絕の條件と御同然に決定力は至つて薄弱であるのである。

從つて神經症の原因の問題はもつともつと複雜になる。事實精神分析の研究は私達に新しい一つの因子を知らして吳れた。この因子はあの病原學の系列の中に考察しなかつたが、現在迄至極壯健であつた人が突然神經症の疾患にかきまはされる病例に於て最も立派に認めることの出來るものである。私達はかやうな人達に極まつたやうに願望衝動の反對の表出、私達の慣用語を用ゐば心的葛藤の表出を發見する。人格の一部がある願望を主張し、人格の他部がその願望に反抗し、その願望に對して防禦する。かやうな葛藤がない時は決して神經症なぞは存しない。こんな事は何もとりたてたものでもない。人間の精神生活は不斷に葛藤によつて動かされ、その葛藤を自ら解決しなけれ

ばならなくなることを諸君は存じていらつしやる。そこでこの條件がどんなものであるか、この病原的葛藤がどういふ精神力の間に演ぜられるか、この葛藤が他の原因的因子とどういふ關係を持してゐるかを尋ねなければならなくなる。

この疑問に對して、尤も圖式的に簡單に失するかも知れぬが、一つ立派な返事をしてみたい。葛藤は拒絕によつて作られる。その時、それの滿足を奪はれたリビドは他の對象と他の道程を追求するやうに驅りたてられる。ところが、他の對象と他の道程は人格の一部から不贊成を喰ひ、その禁止の結果、滿足のこの新しい方法がさしあたつて不可能になることが葛藤への條件となる。これから症候形成の道が開けてくる。この點に關しては次回にお話する積りである。拒否されたリビドの潮流はある迂回を辿つて辛じて捌口を見出す。勿論このときある歪みとある變裝によつて反對に支拂ふことがある。この迂回が症候形成の道である。症候は拒絕といふ事實によつて必然に生じた新しい滿足、換言すれば代用滿足であるのである。

この心的葛藤の意義をまた別の言ひ方によつて正しくすることが出來る。卽ち病原として作用するためには外拒絕になほ內拒絕が附加されねばならぬと申せる。尤も內外の拒絕はこの時のいろいろの道程と對象に關聯してゐる。外拒絕は滿足の一つの可能を取去り、內拒絕は滿足の他の可能を

除去する。その結果葛藤が發生するのだ。このやうな言ひ方の方が都合がよいと私は思つてゐる。と申すのは、この言ひ方はある秘密な內容を有してゐるからである。卽ち內拒絕とは人類の進化史の太古に於て現實の外來妨害から發生したといふ想像を只今の言ひ方が仄してゐるからである。

それではリビドの流に對する反對を作る力は何者であるか。非常に普遍的に申せばその力は性的でない衝動力である。私達はこの力を「自我衝動」(Ichtriebe)といふ名前で總括してゐる。交付神經症の精神分析はこのものの詳しい組成の緒口を惠んで呉れない。私達は辛じて分析に反抗する抵抗からこの自我衝動の姿を學ぶのである。だから病原的葛藤は自我衝動と性衝動との間に惹起された葛藤だと申せる。病例の系列を眺めてみれば、いろんな種類の純然たる性衝動間の葛藤のやうな觀を呈してゐるが、その根柢にあつてはすべては同じである。卽ち葛藤に立つ二種の性衝動のうち、一方は自我と一致したもの所謂 ichgerecht（イッヒゲレヒト）であり、他方は自我の防禦を必要とするものである。これ故に葛藤はやつぱり自我と性慾の葛藤になるのである。

精神分析が心的現象を性衝動の表現と主張した時に、ひつこい程世人はこの主張に抗議を申込んだ。そして人間は性慾だけから構成されてゐない、精神生活にはなほ他の衝動や興味が存してゐる、萬象を性慾から說明しようとするのはけしからぬと立腹されたのである。只今かうい

ふ反對のお方と一度和睦してみるのは大變に愉快なことである。精神分析は性的でない衝動力が存してゐることを決して忘れてはゐない。精神分析は性衝動と自我衝動を劃然と區別してゐる。精神分析は反駁の最中に立つて、神經症は性慾から發するなどとは一度だつて主張した覺えはない。いや神經症は實にその病原を自我と性慾の葛藤に發してゐると主張したのである。精神分析は自我衝動の實在とか意義とかを否定しようとする動機などまるで懷いたことはない。精神分析は性衝動の疾患及び性衝動の人生に於て演ずる役目を研究したのである。先づ第一番に一つ性衝動を研究しようとすることが精神分析の宿命になつたまでである。その譯は、交付神經症から最も手取早く性慾研究の緒口が開けたためと、他人が等閑に附してゐる事象を研究することが精神分析の使命であつたからである。

精神分析は人格の性的でない部分をちつとも研究しないといふのは非常に正鵠を失してゐる。自我と性慾を區別することによつて、私達は自我衝動もまた重大な進化を歩いたこと、この進化はリビド進化と密接し、リビド進化に反響してゐることを特別明瞭に知つたのである。勿論私達はリビドの進化に比較しては自我の進化に就て大した知識を有してゐるとはいへない。と申すのはナルチス型神經症を研究した時に初めて自我の構造にある見解の手蔓を發見したからである。併し早くか

ら自我の進化段階を理論的に構成しようとするフエレンチの注目すべき研究が存してゐる。そして私達は自我の進化を檢討するために、少くとも二箇所にしつかりした立脚點を有したのである。人間のリビド興味は自己保存の興味と最初から對立してゐるとは考へられない。むしろ自我はいかなる段階に於てもその時その時の性組織と協調を保ち自ら性組織に適應して行かうと努めてゐる。リビド進化の各段階の順序は以前に述べたプログラム通りであるが、この進行が自我の方面から影響を蒙るといふことは否定出來ない。自我とリビドの進化段階にある並行、ある對應を想定してもよいのである。さらにこの對應の妨害は病原因子となり得る。リビドがその進化のある箇所で強い固著を殘した時に一體自我はどういふ態度をとるだらうといふ疑問は私達にとつてははるかに重大な見地となる。自我はこの固著を認容し、それに準じて倒錯となるか、若くは、結局は同じだが、小兒性となるかも知れぬ。ところが自我はこのリビドの固著に對して不贊成の態度をとるかも知れぬ。その結果リビドが固著を蒙つた箇所に於て自我は抑壓を下すのである。

この道を通つて私達は、神經症病原學の第三因子たる葛藤傾向は、リビドの進化と同じ程度に、自我の進化に結びついてゐるといふ知識に達した。かくて神經症の原因に對する私達の見解は完結したのである。第一に最も一般的な條件としての拒絕がある。第二に一定方向におしやられようと

するリビドの固著がある。第三にかやうなリビド退行を否定しようとする自我進化から生じた葛藤傾向がある。この三つの因子に立脚すれば、私の講演中に御覽になつたやうには決して渾沌たるものでないし朦朧たるものでもない。だが正直に申せば私達の知識は未成品である。私達はさらに新事實を附加し、既知の事實をもつと解剖しなくてはならない。

自我進化が葛藤形成、從つて神經症の原因に及ぼす影響を諸君に論證するために、私は一つの譬をお目にかけたい。この譬は作話ではあるが、いろんな點に眞實味が籠つてゐる。私はこの例にネストロイの道化芝居「地下室と二階」といふ藝題を與へたい。地下室には小使が住み二階には主人が住んでゐた。主人はブルヂョアで貴族であつた。二人とも子供があつた。主人は自分の娘をこのプロレタリアの娘と勝手に遊ばすことを許してゐたと想定してもよい。子供達の遊戲は巫山戯たもの換言すれば性的特徴を帶びてくるのは理の當然である。その結果子供達は「お父さんお母さんごつこ」をやり、お互に祕密な行ひを窺つて生殖器を刺戟するのである。小使の子供は未だ五歳か六歳の年配であつたが大人の性生活を澤山觀察してゐたので、當然この遊戲に於ても誘惑者の役目をとつたのである。この遊戲は、勿論長い期間持續しなかつたが、二人の子供に性興奮のあるものをめざめさすに十分であつた。この遊戲をやめた後二、三年間ずつと、性興奮は手淫の形で表出さ

れてゐた。双方に共通點はあるが、最後の結末は二人の子供で非常に相違して來る。小使の娘は大體月經の初潮頃迄手淫の習慣を續けてゐたが、それから一向苦心もなしにこの習慣をぷつつりやめてしまつた。それから數年たつて戀人をこしらへて、子供まで生んだかも知れない。あるひは人生の阪路を渡り歩いて、その曉に有名な閨秀作家に出世して、おしまひには目出度く貴族の夫人に納まつたかも知れない。彼女の運命は大して華かなものでなかつたかも知れぬが、いつどこを通つても、性慾のあの初期の活動に煩はされず、神經症に罹らず、彼女の生存を充實したであらう。お話かはつて主人の娘はこれとは全く違つてゐる。娘は未だ子供だのに早くも惡いことをしたといふ氣持に包まれた。それから間もなく、いや多分うんと煩悶したあげく、やつと手淫の滿足を斷念した。斷念したにもかかはらず、娘は心の奥深くあるおしつけられたものを持つたのである。娘が年頃になつて人間の性交に就てある知識を耳にした時に、娘は不可思議な恐しさに包まれてこの話に耳を掩ひ、いつまでも無邪氣でありたいと希つた。娘はこの頃再び發した手淫への不可抗的な衝動に屈服してしまつた。娘にはこの苦悶を告白する勇氣もない。やがて一人前の女として夫を持たねばならぬ年配に達する時に突然神經症が爆發する。そのために娘は結婚も人生の幸福もふいにしてしまはねばならぬのである。分析によつて私達がこの神經症を透察することに成功すれば、この教

養ある、利發な、氣位の高い娘はその性衝動を完全に抑壓してしまつてゐること、然もその性衝動は彼女の無意識界であの昔の幼友達とやつたとるにも足らぬ遊戯に結びついてゐることを發見するのである。

同一の體驗を持つたくせに二人の運命がこのやうに違つて來たのは、一方の娘にあつては自我は他方の娘に現はれなかつた進化を通つたところに基因してゐる。小使の娘にとつては、性活動は後年になつてもあの小兒時代と同樣に自然なもの、罪のないものに見えたのである。ところが主人の娘は教育の感化を受け、その教育の理想を採用したのである。彼女の自我は、教育によつて鼓吹された要求から、女らしい清淨無垢と性慾の一點のしみもない無慾の理想を形成した。彼女の教養は自分に定められた女としての役目への好奇心を卑しいものとさした。彼女の自我が道德的にも智的にも高く進化してゐるために、彼女は自分の性慾の要求と衝突するに到つたのである。

今日自我の進化に就てもう一つの點を考察したい。といふのは、第一にはこれによつて廣い世界が開けるためと、第二には丁度その結果が、自我衝動と性衝動の間に私達が劃してみたいと思つてゐる、勿論早速には目につかぬ、明白な境界線を裏書するに適してゐるためにある。自我とリビドの二つの進化を評價するために、私達は今日迄のところ未だ一向考察されてゐない一つの見地を想

定しなくてはならぬ。二つの進化ともその根本に於て、全人類がその原始時代から非常に長い年代を通して歩いた進化の繼承であり、進化の收縮した再演である。リビド進化の中に只今の種族發生的の起原が目に立つ。ある動物では生殖器は口腔と密接な關係を持つてゐるし、他の動物では生殖器と排泄器官がはつきり分離してゐぬし、またある動物では生殖器と運動器官が關聯してゐることを考へて欲しい。かういふ事柄はあのベルシエの書いた有名な書物の中に美しい筆致で記載されてゐる。諸君はいろんな動物に就てその性組織に準じた觀のある各種の倒錯を御覽になるであらう。ただ人類にあつては、根本に於ては遺傳したものでも個體の進化に於ては新しく獲得したものとなる事情によつて、この種族發生の見地は一部ははつきりしなくなる。この理由は恐らく、その當時獲得を强制した同一の狀況が、今日なほ永續して各個體に作用してゐるからである。彼等はその當時には創造的に作用し、今日では刺戟的に作用してゐると私は申したい。これ以外に、個體に於ける敍上の進化の航路は、外來の最近の影響によつて、攪亂され變形され得ることは明らかである。併し私達は人間にかやうな進化を强い、今日でもなほ同一方向にその壓迫を緩めない力を知つてゐる。この力はここでもまた現實の拒絕、私達が正當な堂堂たる名前を與へるなら生存の窮迫卽ちアナンケである。實に窮迫は嚴格な女教師であつた。この女教師はわれわれに敎ふるところ莫大で

あつた。神經症患者は丁度この敎育があまり嚴格すぎて惡い結果を持つた子供に屬してゐる。だがこれはどんな敎育でも避け難いものである。——序でに同じやうに生存の窮迫を進化の動力と評價したところで、私達は何も「內部進化傾向」(假りにこんなものが存在するなら)の意義を滅却する必要はない。

ところで性衝動と自己保存の衝動は現實的窮迫に遭遇する場合同じに振舞ふものでない。自己保存の衝動並びにその衝動に結びつく一切のものにははるかに容易に敎育が施せる。自己保存の衝動は早期に遭遇した窮迫に服從することを學び、現實の指針に適應するやうにその進化を調節する。こんな事は至極分かりやすいことだ。と申すのは、この衝動はその要求する對象を違つたもので代用することが出來ない。この對象なしには個體は死滅しなければならぬ。ところが性衝動といふ奴は敎育の施し難いものである。性衝動はその端緒から對象の窮迫を知つてゐないからである。性衝動は恰も寄生蟲のやうに他の肉體機能に寄生して、自らの肉體で自己春情的に滿足を贏ち得るものだ。だから現實の窮迫といふ敎育的感化とは初めつから緣がない。この性衝動は大抵の人間に於て、ある見地から見れば、全生涯を貫いて我意、無感化といふ性格、卽ち私達が「不條理」と呼んでゐるものを主張してゐる。性要求がそれの最後の强さに發達した時も御同然、靑年に對する指導性は

いふことを利かなくなるのがお極まりである。教育家はこの事をよく知り拔いてゐて、それに對して手心を加へてゐる。併し教育家は今後精神分析の成績に動かされて、教育の主力を乳兒期から小兒時代の初期にまで注ぐに至るであらう。しばしば四歲乃至五歲をもつて早くも小さい人間が完成される。そしてそれから以後は、彼にちやんと埋もれてゐるものが漸次に現れてくるだけである。

二つの衝動群の間に存する敍上の相違がどういふ意義を持つてゐるかを十分に評價するために、私達は本題からずつと離れて、經濟的と稱へてもよい考察の一つを紹介しなければならなくなる。この考察によつて私達は精神分析の最も緊要な、しかも不幸にして最も暗黑と申せる領域に踏みいることになる。私達は精神機關の働きに主目的が識別出來るかどうかの疑問を提出してみる。そしてこの疑問に對する手近な返答として、この目的は快感獲得に向けられてゐると申したい。私達の全精神活動は快感を求め不快を避けようとする方向に向けられ、その活動は自動的に快感原理によつて調整されてゐるやうである。只今一つこの世界の萬象に就て、一體快感と不快の發生の條件が何であるかを知りたいものであるが、これは大變な難題である。私達は僅かに快感はある點精神機關に現存する刺戟量の減少、低下、消失に關聯し、一方不快は刺戟量の增加に關聯してゐると主張する以上を出られない。人間が經驗出來る最も强力な快感、卽ち性交の頂上に於ける快感の硏究は

この一點に對して僅かなる疑問を殘す。かやうな快感過程は心的興奮、若くは心的エネルギイの分量の運命を中心としてゐるために、この種の考察を經濟的と名附けてゐる。私達は精神機關の任務と働きを快感獲得の主張によつてとは別種、それよりもつと一般的に記述出來ることに氣が附く。精神機關は內外からやつてくる刺戟量、興奮度を抑制し釋放する目的に使はれてゐると言ふことが出來る。性慾に關してもその進化の始まりからおしまひ迄快感獲得を追求してゐることは明瞭である。性慾はこの起原的な機能を終始一貫して維持してゐるのである。自我衝動もまたその起原に於てはこれと同一のものを追求するが、女教師であるあの窮迫の影響の下に間もなく快感原理を一つの變形物で置換することを習つてくる。不快を防ぐ任務は自我衝動にとつては快感獲得の任務と殆ど同價値のものである。自我は自ら直接に滿足を得ることを斷念し、快感獲得を猶豫し、不快の一部に忍從し、ある快感源泉をすつくり拋棄することがやむを得ないものであることを知つてくる。かやうに教育された自我は「理性的」になつてしまふ。最早快感原理の支配を受けずに現實原理に服從するやうになる。この現實原理はその根柢に於てはやつぱり快感を追求する。だがその快感といつても勿論猶豫された、減少された、現實の顧慮の下に確保された快感である。

快感原理が現實原理に移行することは自我の進化に於ける最も重要な進步の一つである。私達は

性慾が遲ればせにいやいや自我進化のこの部分に駈けのぼつて來ることを旣に知つてゐる。そして性慾が外界の現實に對してこんな粗雜な關係でもつて滿足してゐることが、人類にどういふ結果を招來するものかを諸君も今後耳にされる筈である。只今結論として、この點に關してゐる考察にもう一つ觸れておかう。人類の自我がリビドと同じくそれの進化史を經るならば、當然「自我退行」も存すべきだと聞いたとて諸君は一向驚かれない筈だ。そして諸君は自我がこのやうに初期の進化段階に退化することが、神經症の疾患にどういふ役割を持つてゐるかを定めし知りたいと望まれるに相違ない。

第二十三章　症候形成の道

疾患の本質を作つてゐるものが症候で、症候をとりのぞけば疾患が直るものだと素人は考へていらつしやる。醫者は疾患の症候を鑑別することに力瘤を入れ、症候をとりのぞいても、疾患は未だ直らないと申してゐる。併し症候を除去したあとに殘されたところの疾患の觸知出來るものは、新しい症候を作る能力だけである。この理由から私達は當分この素人の見解に贊成して、症候を探究することと疾患を理解することとは同じ意味だと考へることにする。

症候――勿論心的（若くは心的原因の）症候と心的疾患を指してゐる――は全生活にとつて有害な少くとも無益な作用であつて、しばしば患者から嫌なものだと訴へられるものである。症候には不快若くは苦悶の感情が結びついてゐる。症候の含む重要な損害は症候自らが支拂ふ精神的費用、さらにこれ以外に、症候との鬪爭に供せられる精神的費用に存してゐる。症候が強く形成される時は、この二つの費用のために、精神的エネルギイが收斂されて、患者は非常な貧困に陷り、その結果人生の重大な任務の一切に對して不能力になつてしまふ。その結果は專らかやうに收斂されたエ

ネルギィの分量にかかつてゐるのだから、諸君は「病氣」はその本質に於ては實用的概念であることを容易に認められるであらう。併し諸君が理論の見地に立つて、このエネルギィ量を不問に附すことにすれば、症候形成の條件が正常な人に於ても證明される以上、われわれは悉く病氣である、」卽ち神經症に罹つてゐると卽座にいふことが出來るのである。

神經症の症候に就て、私達は既に、症候とはリビド滿足の新種の探究から生じた葛藤の成果であることを存じてゐる。あひ格闘した二つの力は症候の中に再び出會つて、恰も症候形成といふ妥協によつて和睦されたやうな觀を呈してゐる。この故にまた症候は非常に抵抗力が強い。と申すのは、症候は二方面から尻押しされてゐるからである。私達はまた葛藤に與かつた二つの力の一方は、現實から拒絕された所謂滿たされないリビドであつて、このリビドは今や滿足への別の捌口を探さねばならぬことを知つてゐる。たとへリビドがその否定された對象の代用として他の對象を何時でも手に出來ても、現實が頑固である以上は、リビドは結局は退行の道を辿り、昔に踏んだ組織、ある時は昔に棄てた對象の一つによつて滿足を追求するやうに强制される。リビドはそれの進化のこの場所に殘した固著によつて退行の道へひつこまれてしまふのである。

さて倒錯への道と神經症への道は劃然と區別されてゐる。これ等の退行が自我の反對を喚起しな

ければ、神經症と申すものは發しない。そしてリビドは當然常態でない何等かの現實的滿足に到達するのである。併し意識のみならず、運動神經力從つて心的潮流の實現への進路を支配する自我が、これ等の退行と妥協しないなら、ここに葛藤が生ずる。リビドは恰も堰き止められたやうになり、どこかに拔路を見附けなければならぬ立場にくる。かくてこの拔路に於てリビドは快感原理の請求に服して、それのエネルギイ裝塡の捌口を發見するのである。リビドは自我から逃れなくてはならぬ。併しかやうな拔路は現在退行の道を歩いてゐる進化の軌道への固著をリビドに許す。ところがこの固著に對しては自我はその當時抑壓をもつて防禦したものである。リビドは逆流しながらこの抑壓された場所へ裝塡して、自我及び自我の法則から退却し、同時に自我の感化の下に受けた一切の教育をも返却する。リビドはそれの滿足が目睫にある限りは從順であつた。だが内外の拒絕といふ二重の壓迫を受けて、リビドは剛情になり、過ぎし昔の幸福な時代を追憶し出す。以上がリビドに不變な根本特徵である。リビドが只今裝塡として彼のエネルギイを交付した空想は無意識體系に屬してゐて、その空想はその領域だけで許されてゐる過程、特に壓縮と轉移の支配を受ける。ここに到つて夢形成と完全に合致した狀態が作られる。無意識的願望空想の實現といへる、無意識裡に形成された潛在夢に、(前)意識的活動の一部が出會つて、その結果檢閱官の發動を促し、この檢閱

官の協調の下に妥協としての顯在夢の形成が許可されるやうに、無意識にあるリビド代表もまた前意識的自我の權力を考慮せねばならぬのである。自我に於てリビドに對して放たれた反對は「反對裝塡」(Gegenbesetzung)としてリビドを追求し、同時に自らの表現となり得る何等かの表現をリビドに選擇するやうに强いる。その結果症候は無意識的リビド願望實現の幾重にも歪められた誘導體となり、相互に矛盾した二つの意味を巧みに選擇した曖昧といふ姿をとる。夢形成と症候形成はこの後者の點に於てのみ區別が立てられる。といふのは、夢形成に於ける前意識的目的は單に睡眠を維持し、睡眠をかきみだすものはどんなものでも意識によせつけないところに存してゐる。ところが前意識的目的は無意識的願望興奮に鋭く「いや。反對に。」と呼びかける力を有してゐない。前意識的目的がかやうに寛大なのは、寢てゐる人の狀態が大して危險なものでないからである。現實への捌口は單に睡眠狀態によつて閉されてゐるからである。

葛藤の條件下のリビドの拔路は固著の存在によつて達せられると諸君は御覽にならう。この固著の退行的裝塡は抑壓の迂回とリビドの捌口——若くはリビドの滿足——に到達する。この時妥協の條件が保たれねばならぬ。無意識と古い固著への迂回を通つて、リビドは最後に現實的滿足へ突破することに成功する。といふものの、この場合の現實的滿足は、法外に制限された、殆ど認知する

ことがむづかしい程度のものである。この最後の捌口に關して、二つの論評を私に許して欲しい。まづ第一に諸君はリビドと無意識が一方に、自我と意識と現實が他方にあつて、兩者がいかに密接してゐるかをお氣附きにならう。勿論兩者はその起原から決して關聯してゐるものでない。第二に只今申し上げた事柄及びこれから述べる事柄は總て、ヒステリイといふ神經症の症候形成にのみ關係してゐることを諸君は耳にされるであらう。

それぢやリビドは抑壓の決潰に必要な固著をどこで發見するか。リビドはその固著を小兒性慾の活動と體驗の中に、小兒時代の遺棄された部分衝動と抛擲された對象の中に求める。卽ちリビドは彼等に再び舞ひ戻るのである。この場合この小兒時代の意義は二重になる。一方にあつては、小兒がその先天的素因と一緒に持つて來た衝動方向がまづこの小兒時代に姿を見せ、他方にあつては、外來の影響、偶發體驗によつて他の衝動が小兒時代にまづめざまされ發動される。このやうな二分釋を提供するのは正當な權利だと私は信じてゐる。先天的素因が外に現はれるといふ事には最早議論の餘地がないだらうが、精神分析上の經驗から、私達は小兒時代の純粹に偶發な體驗はリビドの固著を殘すことが可能だと想定しなければならなくなつたのである。私の主張には一向理論上の困難など存してゐない。體質的素因は確かに太古の祖先の嘗めた體驗の餘韻であり、嘗て一度は獲得

されたものなのだ。かやうな獲得がないなら、遺傳と申すものは存しなかつたであらう。そして遺傳に導くこの種の獲得が、私達が只今考察してゐるこの時代に消失するといふやうなことは至當であらうか。小兒期體驗の意義を祖先の體驗や成年時代の體驗の意義に比較して抹殺してしまつてはいけない。いや反對にこの小兒期體驗の意義こそ特別な態度で評價すべきものなのだ。小兒期體驗は重大な結果を殘すに十分である。なんとなれば、この體驗は未完成な進化期に惹起されるからである。丁度この理由のために、小兒期體驗は外傷的に作用する力を持つてゐる。ルウ及び他の學者の唱へる進化メカニズムの研究によると、細胞分裂を行つてゐる胚胎に針刺を行ふと、その結果大變な進化障礙が起こつてくるが、幼蟲とか成熟した動物に同樣な傷害を加へても何等の障礙も現はれてこない。

かういふ事實から、神經症の病原方程式に於ける體質的因子の代表者として紹介した大人のリビド固著をこれから二つの因子、卽ち遺傳的素因と初期小兒時代に獲得した素因に分解することにする。圖式と申すものは學ぶ人にも早分かりするから、只今の關係を次の圖式に總括してみよう。

神經症の原因＝リビド固著による素因＋偶然(外傷的)體驗

性體質(有史以前の體驗)　　小兒期體驗

甲または乙の部分衝動が單獨に、若くは他の部分衝動と結びついて、特別に強く高められるに從つて、遺傳的性體質は種種雜多な形の素因を作る。性體質は再び小兒期體驗の因子と共に「補充系列」を形成する。これは私達が最初に知つた大人に於ける素因と偶然體驗の間の補充系列と全く類似してゐる。二つの補充系列中に同じやうな極端な病人、因子の同じやうな關係が見ひ出される。リビド退行の最も顯著なもの、卽ち性組織の初期段階へのリビド退行は、專ら遺傳的體質的因子によつて決定されないかどうかの疑問をこの點に關して提出することは時機に適してゐる。だがこの疑問に應ずる返答は、諸君が神經症の疾患形式の大量を考察するやうになる迄一時お預りしておく方が適切だと私は思ふ。

分析研究は神經症患者のリビドがそれの小兒期の性體驗に粘著してゐることを立證する事實に私達は當分踏みとどまることにする。この事實はこれ等の體驗に人生及び人類の疾患に對する莫大な意義を與へる。治療研究を考察する範圍内ではかやうな意義は永久に價値を損じない。併しこの立場から離れて眺める時は、私達が神經症の一角から人生をあまりかたよつて觀察するやうにはまりこんだと誤解される危險が存してゐることに早速に氣が附く。後年の地位から却けられた後、リビドは退行的に小兒期體驗に舞ひ戻ると考へると、小兒期體驗の意義はずつと減じてくるに相違ない。

だがリビド體驗はその小兒期には何等の意義も持たなかつたが、退行的になつて初めて意義を持つたのだといふ逆の結論が存してゐる。諸君は既にエヂプス錯綜を論じた時に、私達が同じやうな立場をとつたことを記憶されるであらう。

この點を決定するのは大してむづかしいことでない。小兒期體驗へのリビド裝塡――即ち病原的意義――はリビド退行によつて强度に高められるといふ考察は飽く迄も正しい。だがこの考察を唯一の基準とする時は誤謬に陷る。これ以外になほ他の事を考慮しなくてはならぬ。觀察は第一に小兒期體驗はそれ固有の意義を持ち、小兒時代に於ても既に證明されるものであることを眞正直に示して與れてゐる。實際小兒神經症といふのがある。勿論小兒神經症には時間的の退行といふ因子は非常に薄弱になつてゐるか若くは缺損してゐる。疾患は外傷的體驗の直接の結果として發してゐる。かやうな小兒神經症の研究は、丁度小兒の夢が大人の夢の理解に鍵を惠んだやうに、大人の神經症に對する陷りやすい誤解を防禦して與れる。小兒の神經症は非常に多い。世人が考へる以上に多いものである。小兒神經症は大抵不行儀とかいたづらの表示ぐらゐに考へて看過されてゐるし、小兒科の大家でさへ問題にもしてゐない。併しこの神經症は既往に溯れば直ぐに認知出來るものである。小兒神經症は大概恐怖ヒステリイの形で現はれる。この恐怖ヒステリイに就ては他日の機會にお話

することにする。後年神經症が發した時に、分析をやると大抵の場合、その神經症は單に潜行的に單に暗示的に形成されてゐた小兒神經症の直接の連續であることが分明する。併し前述のやうにこの小兒神經症が斷絶されずに痼疾の中に續いてゐるといふ例が存してゐる。極めて少數の例であるが、私達は子供自らに就て――現實狀態で――小兒神經症を分析することが出來た。そして大人になつてから罹つた神經症患者に就て得た小兒神經症の退行的見解に私達は幾度も滿足しなければならなかつた。この場合私達はある訂正とある警戒を輕んずることが出來なかつた。

第二に小兒時代へ牽引を逞しくするやうなものが何もないのに、リビドがお極まりのやうに小兒時代へ退行するのは可笑しなことだといふ抗議が當然發せられる。私達が假定する進化軌道のある箇所への固著は私達が固著をリビドエネルギイのある一定量の固定と觀ずる時にのみ意義を持つてくる。最後に小兒期の體驗及び後年の體驗の强さと病原的意義の間には、丁度私達が以前に研究した系列に於けると類似の補充關係が存してゐることをお知らせしておきたい。病原の全重心が丁度小兒時代の性體驗におちてゐる患者が存してゐる。この場合性體驗の印象は確かに外傷的に作用して、平均の性組織及びそれの未成品を提供出來る以外何の支持も要求しないのである。なほこれに加へて、すべてのアクセントが後年の葛藤に存してゐて、小兒期印象といふ分析

的主張はどこ迄も退行の仕事のやうに見える。從つて「進化抑制」と「退行」の兩端があつて、この兩端の間にこの二つの因子がさまざまな程度で協力し作用してゐる譯になる。

小兒の性進化に早期から干渉して神經症を豫防しようと目論んでゐる教育學にとつてはこの關係はある點興味深いものである。人が小兒期性體驗に專ら著眼する限りでは、この進化を阻止して、小兒にかやうな體驗を避けてやるやうに注意する時に、神經症の豫防に萬全の策を講じた譯になると思はなくてはならぬ。私達はとつくに神經症の病原の條件は非常に複雜で、唯一の因子を顧慮するだけで、一般を律することが出來ないことを知つてゐる。小兒時代に於ける嚴格に失した豫防は却つて豫防の價値を損する。なんとなれば、かやうな豫防は體質的因子に對してはまるで役に立たないからである。なほ教育家が考へる程この種の豫防はたやすく實行出來るものでない。さらにかやうな豫防は二つの新しい危險を伴つてくる。この危險はさう輕く見積ることが出來ない。第一の危險はあまり功を急がうとする。いひかへれば性的抑壓を大量に與へて有害な成果が生じて來る。第二の危險は思春期に當然やつてくる性欲求の勃發に對して抵抗を失つたまま子供は人生に送られることになる。だから小兒期の豫防がどの範圍迄有效なものであるものか、さらに現實に對する變化した心的態度が果して神經症の豫防への最良の要擊點となり得るものかは俄かに斷定出來ない。

いよいよ症候に後戻りをしよう。症候はリビドの進化の初期段階への退行によつて、拒絶された滿足の代用を創るものである。對象選擇若くは組織の初期段階への退行はそれとぴつたり結びついてゐる。私達はずつと前に神經症患者は彼の過去のどこかに、こびりついてゐると申したことがあつた。只今その過去のある時期といふのが、リビドが氣儘に滿足を手にした時代、卽ちリビドが幸福であつた時代を指してゐることを知る。患者はかやうな時期を探し求めながら彼の既往史をずつと溯る。そしてある場合彼が囘想するやうに、或ひは後年の興奮の下に空想するやうに、彼の乳兒時代にさへ舞ひ戻らねばならぬのである。症候は何等かの方法をもつて滿足の早期小兒性の一種を反復する。その滿足は葛藤から生じた檢閱官によつて歪められ、大抵苦悶の感覺に轉化され、滿足は疾患の誘因から來た要素といりまじつてゐる。症候の齎す滿足の種類はそれ自體非常に風變りである。いふ迄もなく、この滿足はその當人が氣附かないものである。むしろ當人はそんな滿足を苦痛として感じ苦痛として訴へる。滿足の苦悶への轉化は心的葛藤に屬してゐる。この葛藤の壓迫の下に必然症候が形成されたのである。往時個體にとつて滿足であつたものは現在の彼に抵抗若くは嫌惡をよびさまさなければならぬ。このやうな感覺變化に就て、私達は極く平凡なしかも非常に面白い實例を知つてゐる。たとへば母の乳房からむさぼるやうに乳を呑んだ子供が、二、三年たつと

乳汁の流に激しい反感を示すのを常とする。この反感は教育によつては容易に征服され難いものだ。」若し乳とか乳のはひつてゐる飲料に皮がはつてゐる時は、この反感は戰慄に迄亢進する。このやうな皮は子供に以前にむさぼり吸つた母の乳房への囘想をよびさますのは必然である。勿論その中には離乳といふ外傷的に作用した體驗もまじつてゐる。

さらになほ別のものがある。このもののために、症候は注目すべきものとなり、リビド滿足の手段としては症候は不可解な姿をとつてくる。症候は普通に滿足と呼びならはしてゐるものを私達に一つも思ひ起こささない。症候は大概對象から全く獨立して、同時に外界の現實との關係を拋棄してゐる。私達はこれを現實原理を排斥して快感原理に復歸した結果だと解してゐるが、考へやうによつてはまた廣義の意味でいふ一種の自己春情への復歸であると申せる。自己春情は實に性慾に最初の滿足を惠んだものなのだ。自己春情は外界變化を作る代りに肉體變化を作つたのである。卽ち外界的活動の代りに內在的活動、行動の代りに適應を作つたのである。これはまた種族發生の見地から最も意義深い退行にも合致してゐる。私達がなほ症候形成に對する分析的研究からさらに知らうとしてゐる新事實と結びつける時は、この事柄は初めてはつきりしてくる。この上に私達は症候形成にあつては夢形成に於けると同一な無意識過程、卽ち壓縮と轉移が共同して作用してゐること

を思ひ出してくる。症候は夢と同じに實現されたあるもの、ある種の小兒性の滿足を描寫するが、極端な壓縮作用によつて、この滿足はたつた一つの感覺若くは興奮におしつめられ、極端な轉移作用によつて、この滿足は全リビド錯綜の小さい單位に限定されてしまふ。だからいつでも極まつて立證されるといふ推定したリビド滿足を症候に於て認めることがむづかしかつても何もびつくりする必要はない。

私達はなほある新事實を學ばねばならぬと諸君にさつきお話した。この新事實といふのは確かに驚くべきものであり混亂を招來するものである。諸君も御承知のやうに、症候の分析から私達はリビドの固著を決定した、症候の起原となつた小兒期體驗の知識に達する。さて驚くべきといふのは、――小兒期のこの場面が必ずしも現實のものでないといふことである。確かに大多數の實例では現實のものでない。そして少數の實例では歴史的眞實と正反對のものである。諸君はかやうな結果に導いた分析、或ひは分析及び神經症の一般知識の立脚點を作つて吳れた患者にこの發見は疑惑をなげるものだとお察しになるだらう。併しなほこの外に非常な混亂におとしいれるあるものがある。若し分析によつて明みに出された小兒期體驗が、いつも極まつて現實のものであつたなら、私達は確乎たる地盤の上を歩いて來たといふ感じを持つたに相違ない。ところが小兒期體驗が常に極まつて作

り事であり、患者の作り話や空想といふことが分かつたなら、私達はこの不安な地盤を捨てて、もつとしつかりした場所に赴かねばならなかつたに相違ない。だがこんな事はまあどうでもよい。兎に角分析で構成された若くは分析で回想された小兒期體驗はある時は徹頭徹尾作り事であり、ある時は確かに本當のものであり、大概の場合は眞實と嘘をつきまぜたものであることが證明される。だから症候はある時は實際に經驗した體驗の描寫であつて、その體驗がリビド固著に影響を與へたものといへる。またある時は患者の空想の描寫であるといへる。勿論この空想に何等かの病原的意義を與へることは許されない。そんな空想の中に足場を作ることもむづかしい。だが私達は同じやうな發見の中に最初の足場を見附ける。同じやうな發見といふのは、即ち人間が分析のずつと前に意識的に有してゐた小兒期記憶が同樣に作り事であることもあり、少くとも澤山の眞實に嘘がいりまじつてゐると申せる。さういふ記憶の中に嘘のものを證明することは大してむづかしくない。だから私達は只今の思ひ設けない失望は分析の精ではなくて、ある點患者の精であると考へて、少しは氣を安んずることが出來るのである。

一寸考へてみただけでも私達は、何がこの事態をこんなに混亂せしめたかに氣が附く。現實を輕視して、現實と空想との區別を等閑にしたためによる。こんな患者の作り語を一所懸命に研究する

のは實もつて馬鹿馬鹿しいといふ氣持がしてくる。私達にとつては現實と作り話とは天と地ほど違つてゐるやうに思はれる。そして私達は現實と作り話は全く別のものだと考へてゐる。患者でも彼の正常な考へ方に於ては同一の見地をとつてゐる。若し患者が症候の背面に小兒期體驗を作つた願望情況に導く材料を提供した時は、私達でも最初はこの材料が果して現實のものであるか、果して空想のものであるかを疑ふ。あとになつて、ある特徴によつて、二つの區別を立てることが出來る。そして私達は患者にもこの區別を領かしてやらうとする責任を感じてくる。だがどの患者にもやすやすと出來るものでない。若し私達が丁度民族が傳說によつて忘却裡の太古を包んでゐると同じに、小兒時代の歷史を包んでゐると申せる空想を君は將に外に出さうとしてゐるのだと患者に申してやるなら、この題目をさらに深く追求しようとしてゐる彼の興味が突然に薄らぐことに私達は氣がついて失望する。患者は現實なるものを欲して、すべての空想なるものを輕蔑したがる。ところが私達が小兒時代の現實的事件を硏究してゐるのだと信ぜしめて、患者に硏究のこの部分を解決さすやうにしてやるなら、患者はあとで私達の誤謬を非難し、私達の淺薄な妄信を嘲笑するといふ危險が生じてくる。空想と現實を同一に取扱ひ闡明さるべき小兒期體驗が空想か現實かなどは最初に念頭に置くなといふ提案に患者が馴れる迄には長い時日がかかる。だがこの提案こそ明かに空想といふ

心的產物に對する唯一の正しい態度である。空想もまた一種の現實を有してゐる。患者がかやうな空想を創造したといふことは一つの事實である。そして、この一つの事實は、彼の神經症に對して、患者がこの空想の內容を現實で體驗した場合と決して比肩せぬ意義を有してゐるのである。かやうな空想は唯物的現實に對立して心的現實を有してゐる。かくて私達は神經症の世界では心的現實が決定的因子であることをだんだん解するやうに習つてくる。

神經症患者の小兒時代の歷史に常に囘想され、殆ど例外なく見られる事件の中である二、三のものは特別に大切である。この故に私は他の事件以上にこれ等の事件に注目してゐる。私は諸君にこの種の事件のモデルとして、兩親の性交を目擊すること、大人から誘惑されること、去勢威嚇の三つを擧げる。かやうな事件は決して唯物的現實に現はれるものでないと假定するのは大いなる間違ひである。全く反對に、この種の事件は年とつた親戚の人達の打あけ話からみなそれぞれ現實に經驗してゐたことが證明されてくる。例へば小さい子供が不行儀にも自分の陰莖をいぢくり始め、さういふ不行儀は人前でやつてはいけないことを未だ知らない時に、兩親とか保姆がそんな事をするとちんちんをとつてやるぞとか、そんな事をした汚い手は切つてしまふぞと威嚇することはこの世のありふれた事柄である。兩親が何故そんな事を子供にいふのだとあとで質問さるれば、かういふ

のは親として當然だといふだらう。自分達はかやうな威嚇によつてある合目的性なことをしたと信じてゐるのである。多くの人はこの威嚇を正確に意識的に記憶してゐる。少し年が行つてからこの威嚇が下されたのだつたら、その威嚇は特にはつきり頭の中にはひつてゐる。若し母親とか他の女の人がこの威嚇を下す時は、大抵お父さんがいけないといつたとかお醫者さんの命令だとか逃げを張る。フランクフルトの小兒科醫のホフマン——この人は小兒時代の性的錯綜及び他の錯綜に關して造詣が深いために世間の評判になつたのであるが——の書いた有名な「ストルヱルペルテル」といふ本の中に、諸君はひつつこいルッチエンに對する刑罰として、去勢を和げて拇指の切斷で代用してゐるのを讀まれたであらう。兎に角神經症の分析から引き出される程頻繁に去勢威嚇が子供に下されたとは一寸信ぜられない。私達は子供が自己春情は禁止されてゐるといふ知識をかりて諷示の下に、そして子供が女子の生殖器を發見した時に受けた印象の下に、この種の威嚇を空想裡に合成したものだと考へて滿足してゐる。これと同様に、勿論子供の理解や記憶は信用がおけないとしても、小さい子供はプロレタリヤでない家庭でも兩親や大人の性交を目撃してゐるだらうと考へるのは決して不當でない。そして子供は後年この印象の意味をさとつて、それに反應することが出來ることは否定出來ない。だが萬一子供がこの性交を觀察も許さない程ことこまかしく記述するなら、

若くは子供がうしろからの more ferarum の性交であつたといふなら、――子供が見たといふのは大抵この型であるが――この空想は動物(犬)の交尾の觀察に基づいて發展したこと、その空想の原動力は思春期の子供に於ける滿たされない見たいといふ欲望から發してゐることは最早疑ふ餘地がない。この種の空想のうちで最も極端なものは、自分が未だ生れずに母の胎内にゐた時に、兩親の性交を觀察したといふ空想である。特に興深いのは誘惑の空想である。と申すのは、この空想は空想であることは少數で、大抵現實的記憶であるからである。分析の成績を一寸見れば現實のやうであるが、幸福にもそんなにしばしば現實ではない。年上の子供とか同年輩の子供から誘惑されたといふ方が、大人から誘惑されたといふものより多數である。娘がかういふ事件を子供時代の經歴から引き出して來て、父が極まつて自分の誘惑者となつて現はれる時は、この誘惑の空想的本質もこの誘惑に驅りやる原動力も疑問でなくなつてくる。現實で誘惑など起こらなくても、子供は誘惑空想でもつて彼の性活動の自己春情期を隱すのがお定まりである。子供は自分の渇望してゐる對象を空想でもつて最も早期な時代に退行せしめて、手淫に對する羞恥感を誤魔化してゐるのである。なほ子供が親類の男子から性的に濫用されたといふのはどこ迄も空想の國に屬してゐると信じないか。大抵の分析家は、かやうな關係が現實事件であつて、一點の疑惑も殘さずに確證出來た實例を治療

したと思つていらつしやる。だがかういふ關係は後期の小兒時代に屬してゐて、單に前期の小兒時代に移行されたものなのである。

このやうな小兒期の出來事はどこかで必然に要求されたもので、神經症の鐵骨に屬してゐるものだといふ印象を諸君は受けよう。この種の事件が現實に含まれてゐるなら文句はないが、現實がこんな事件を藏してゐないなら、この事件は諷示から構成されて空想によつて補筆されたものといへる。結果はどちらでも同じである。今日迄のところ私達は空想若くは現實がこの種の小兒時代の出來事の大部を占めてゐる時は、兩者の結果に區別をつけることに成功してゐない。ここにもまた幾度もお話したあの補充關係の一つが存してゐる。勿論この補充關係は私達が學んだ知識のうちでも最も奇怪なものである。それではこんな空想への欲求とその空想を作る材料はどこからやつて來たのであるか。これ等が本能の泉に發してゐることには疑ひはないが、同一空想はいつでも同一內容から構成されてゐることは一體どう說明したならよいか。私はこれに對して一つの返答をちやんと所持してゐる。私の返答をお聞きになれば諸君はその無謀さに恐れ入られることを知つてゐる。私はこれを原始空想(Urphantasien)とよびたい。勿論別の名前があるかも知れない。この原始空想は種族發生的所產であると私は考へてゐる。個體は自分自らの體驗が不足してくれば、いつ何時でも

この原始空想を借りて、自らの體驗を飛び越えて太古の體驗にはひりこむのである。今日分析に際して私達に空想として語られるものはすべて、例へば小兒誘惑、兩親の性交目擊に際する性興奮の挑發、去勢威嚇——若くはむしろ去勢——は人類の家族の原始時代に於て一度は現實のものであつたこと、空想を肆にする子供は單に個體的眞實の空隙を有史前的眞實で埋めてゐることは私にとつてはどこ迄も本當のやうな氣がする。私達は分析每に神經症心理學は他のすべての源泉に比してうんと澤山人類進化の古代的なるものを藏してゐると疑ひ出して來たのである。

以上の事柄は「空想」と名づけられる精神活動の起原と意義をさらに深く究めるやうに私達を鞭韃して與れる。諸君も御存じのやうに、精神生活に於ける空想の地位は未だ明瞭にされてはゐないが、兎に角空想と申すものは一般に高い尊敬を受けてゐる。私は諸君にこれに關して次の事をお話することが出來る。諸君も御承知のやうに、人類の自我は外來の窮迫の働きによつて、漸次に現實を尊重すべきこと現實原理を遵守すべきことを習得して、自我の快感追求——ただに性的に限らぬ——の種種なる對象と目的を一時的若くは永久に抛棄しなければならなかつた。ところが快感拋棄は人類にとつてはいつでもむづかしいものである。拋棄すると同時に人類はある種の代償を求めずにはおかない。從つて人類はその代償として一つの心的活動を保留したのである。その心的活動の

中にこの抛棄した快感の泉、快感獲得への抛棄した道の一切が、丁度實在の形で、いひかへれば現實要求と私達が名づけてゐる現實試練から何の拘束も受けずに、その存在をずつと許されてゐるのである。どんな望でも早速に空想の形で實現される。空想によつて願望實現を肆にすることは、空想は現實ぢやないといふ知識がたとへ曇らされてゐなくても、一つの滿足を與へることは疑ひないことである。だから人類は空想の活動を借りて外界の壓迫から脫れ、現實が長い間禁止してゐる自由を享樂する。人類は交互に、ある時は快感を追求する野獸ともなり、ある時は理性ある人間ともなれるやうに仕組まれてゐる。人類は現實から盜んで來たほんちよつぴりの滿足だけでは命がつなげないのである。「人の世は娛樂機關がなければうまく行かないものぢや。」とフオンタネが昔申した。空想といふ精神國の創造物は「禁獵區」とか「天然保護公園」の施設の中にその生寫が見られる。農業、交通機關、工業の要求によつて地球の原始的な面影は見る見るうちにあとかたもなく破壞されつつある。ところが天然保護公園はこの舊い狀態を保存してゐる。それ以外の土地は悲しいことにすつくり必要の血祭にあげられてしまつた。天然保護公園ではすべてのものが思ひの儘のびのびと生成し繁茂してゐる。益なきもの、害あるものまでに生存が許されてゐる。現實原理の拘束からはなたれたかやうな禁獵區はまた空想といふ精神國の姿である。

最も人のよく知つてゐる空想の所産は以前にお話したことのある所謂「晝の夢」である。功名心、誇大心、エロチツクな願望が空想によつて滿たされてゐる。現實が屈伏と忍從を强いれば强いるほど、かやうな願望はますます熾烈に繁茂する。空想幸福の本態、現實の拘束から離れた快感獲得の再生はこの晝の夢の中に如實に示されてゐる。さやうな晝の夢こそ夜の夢の中核でありモデルである。夜の夢とはその根柢に於ては衝動の夜の自由によつて活動し出した、精神活動の夜の形によつて歪められた晝の夢に外ならない。私達は既に晝の夢もまた必ずしも意識的でなくてもよい、無意識的の晝の夢も存在してゐるといふ思想に親しんだのであつた。卽ちかやうな無意識的な晝の夢は、夜の夢の根源であり、同時にまた神經症の症候の根源であるのである。

空想が症候の形成にどういふ意義を有してゐるかは次の報告によつてお分かりのことと思ふ。次の報告はかうである。拒絕が起こつた時はリビドは昔に捨てた場所へ退行的にエネルギイを裝塡する。ところがこの昔に捨てた場所にはリビドエネルギイが未だ小量はくつついて殘つてゐる。私達はこの報告を撤回したり訂正したりしない積りだが、この報告にある連絡線を挿入しなければならない。卽ちリビドはどうしてこの固著の場所に舞ひ戻る道を發見するのか。ところが拋棄されたといふリビドの對象や方向はいろんな意味に於て未だ拋棄されてはゐない。その對象や方向或ひはそ

れ等の誘導體はある强さでもつて未だ空想觀念の中に生きてゐる。だから空想から抑壓されたすべての固著への道を打開くためには、リビドは空想へ復歸するだけで事が足りる。かやうな空想はある種の忍從を樂しんでゐたのだ。空想と自我の間にたとへ嚴然たる對立が存してゐても、ある一定の條件、リビドの空想への逆流によつてこの對立がみだされないといふ量的性質の條件が保たれる限り、二つの間に葛藤は發しないのである。この添加によつて空想のエネルギィ裝塡は高められ、その結果空想はいきりたつて實現の方向へ押し寄せるのである。といふものの、この場合空想と自我の葛藤は避け得られない。空想が以前に前意識的であつても意識的であつても、空想は今や自我の方面からの抑壓に降服し、無意識の方面からの引力にすひつけられる。かくてリビドは現在無意識である空想から移轉して無意識に於ける空想の淵源、卽ちそれ自らの固著の場所に舞ひ戻るのである。

リビドの空想への逆行は症候形成への道の中間段階である。この段階は特筆すべき價値がある。ユングがこれに對して內翻（Introversion）といふ非常に立派な名前を創案して吳れた。だがユングはこの名前を不適切にも他の意味にも用ゐたのである。私達は內翻を現實的滿足の可能からのリビドの離反及びこれ迄に無害とした空想へのリビドの過裝塡に名附ける範圍にとどめておきたい。內

翻された人は未だ神經症患者でないが、さういふ人は不安定な地位に來たことになる。萬一彼が鬱結したリビドに對して他の捌口を發見しない時は、重心が一寸反れた拍子に症候が發展するに相違ない。これに反して神經症滿足の非現實的性質並びに空想と現實に横たはる差別の無視は既に内翻といふ段階の停止によつて決定されてゐる。

この最後の議論に於て、私は病原學的連鎖の構造の內へ一つの新しい因子、卽ちこれから考察しようとするエネルギイの量、エネルギイの大きさを挿入したことに諸君はお氣附きになつたことと思ふ。この因子は今後どこでも考へなくてはならぬものである。病原學的條件の純定性分析だけでは十分でない。別の言ひ方をすれば、これ等精神過程を單に力學的見解に立つて眺めるだけでは物足りない。なほこの上に經濟的見地を必要とする。二つの衝動間の葛藤は、たとへ內容的關係がずつと前から存してゐても、エネルギイ裝塡がある强さ迄に達しなければ爆發するものでないといはなくてはならぬ。同樣にして、體質的因子の病原學的意義は、素質の中にある部分衝動が他の部分衝動よりずつと過量になることによつて決定されてゐる。すべての人間の素質は定性的には同一であつても、この定量關係に於てのみ違つてゐると想像出來る。神經症の疾患に對する抵抗力のこの定量的因子は可なり大切なものである。人間が自由に浮揚出來るのは發散しないリビドの總量に關

してゐ、人間が昇華作用によつて性的なるものを非性的なるものにそらすのは、そのリビドの分數がどれ程大きいかに關してゐる。定性的には快感獲得及び不快逃避への努力として記載されてゐる精神活動の最終目的も、經濟的見地から眺むれば、精神機關に活動する興奮量(刺戟量)を鎭撫し、不快を作るそれの欝結を豫防する使命を奉じてゐるのだ。

私は諸君に神經症に於ける症候形成をうんと澤山お話したかつた。ところが只今お話申上げたことはみんな、ヒステリイの症候形成のみに關聯してゐると、もう一度力說せざるを得ないのである。强迫神經症の場合でも根本原則は同じであるが、いろんな點でヒステリイとは相違してゐる。私達がヒステリイの場合に於てお話したことのある衝動要求に對する反對裝塡は、强迫神經症ではもつと强く現はれて、所謂「反射形成」をもつて臨床的症狀を支配してゐる。私達はこれと同樣なさらにもつと廣い變異を他の神經症に於て發見してゐる。かういふ神經症に就ては、症候形成のメカニズムの研究はいろんな點で未だ完結されてゐない。

今日お話を終るにあたつて、私は空想生活の一般人に興味深い方面にもうしばらくの間諸君の注意を引きたいと思つてゐる。と申すのは空想が現實に逆行する場合がある。この逆行こそ實に藝術である。この點に於て藝術家はまた內翻者であり、もう一步で神經症患者となることが出來る。藝

術家は熾烈な衝動欲求に驅られて、名譽、權力、富、盛名、女の愛を贏ち得ようとする。だが彼の手許にはかやうなものを滿たす手段が缺けてゐる。この故に藝術家は他の不平家と同じに現實から背いて、彼のすべての興味、彼のリビドをさへ、神經症への入口ともいへる空想生活の願望形成に交付する。併し神經症が彼の進化の全捌口とならないやうに、いろんなものを結び合さなくてはならない。特に大抵の藝術家が神經症に陷つて彼の能力の部分制止にいかに煩悶するかは人のよく知るところである。藝術家の體質は昇華への強い能力並びに葛藤を決定する抑壓のある程度の弛緩を藏してゐるのかも知れぬ。兎に角藝術家は現實への逆行の道を次のやうにして發見する。藝術家だけが空想生活を送つてゐる人種でない。空想の中間世界は全人類の協贊によつて承認されてゐる。そしてあらゆる飢ゑたる靈はこの空想から慰安と慰籍を求めるのである。併し藝術家ならざる一般人にとつては、空想の泉から快感を獲得することは非常に制限せられてゐる。峻嚴な一歩も假借しまいとする抑壓の手によつて、彼等は辛じて意識に許される、僅かばかりの晝の夢によつて滿足するやうに強いられてゐる。ところが眞正な藝術家である場合はこれ以上の事が出來る。藝術家はまづ第一に自分の晝の夢を粉飾することを心得てゐる。その結果、晝の夢は他人に抵觸するあまりに個人的なるものをふるひ落として、他人の目と共に享樂すべき姿にかはる。藝術家はまた晝の夢が

禁忌の泉からやつて來たことを容易に曉れないやうに、晝の夢を和げる術を知つてゐる。さらにまたある一定の素材を彼の空想觀念の生寫になる迄こね上げる不思議な能力をも具へてゐる。同時に彼は無意識的空想のこの描寫に多量の快感獲得を結びつけることを知つてゐる。その結果抑壓が少くとも暫時の間動搖して追ひ散らされるのである。若しかやうな術に實事に成就するなら、藝術家は無意識裡の彼自らの遠い快感の泉から再び慰安と慰籍を世人のために創つてやることが出來、世人の感謝と賞讃を拍し、彼が昔空想裡で僅かに描いた名譽、權力、女の愛を彼の空想を介して今や一身におさめることが出來るのである。

第二十四章　尋常神經質

前回の講演に於て私達は精神分析の非常に難解な一章を突破した。そこで今度はこの題目をしばらく棄てて諸君の言分を承ることにしたい。

諸君が內心不滿であることを私はよく承知してゐる。「精神分析入門」といふ表看板から見ると話の中實が違つてゐると諸君は考へていらつしやる。學說でなしになまなましい實例を聞きたいと諸君は期待していらつしやる。あの「地下室と二階」の比喩が本當の觀察で、作り話でないなら、あの話から神經症の原因についてあるものが學べた筈だと私に仰しやる。あるひは、私が今年の講演の冒頭に二つの症候——あれを作り話だと思はれては困る——を諸君に紹介して、その症候をどう解釋すべきか、その症候が患者の實生活とどのやうに關聯してゐるかを說明した時に、症候の「意味」なるものの曙光が諸君に輝き始めたと思はれた。諸君はこのやうに話を進めて吳れるやうに私に希望されてゐるのだ。それだのに、私は諸君に長たらしいひちむづかしい學說をお話したのである。おまけに次から次へと新事實を附加し、恐らく諸君には初耳と思はれる概念を論じ、記述的描

寫に次いで、力學的見解に觸れ、さらに力學的見解をすてて、經濟的見解に鋒先を向けた。この際使つた術語が同一のことを意味するものか、單に語呂がよいために同じ意味のことをいろいろ違つた術語で述べたててゐるものか、諸君は解するに苦しまれたことと想像する。この上に快感原理とか現實原理とかいふだだ廣い見解や、種族發生的に獲得したといふ所有物まで諸君にお目にかけて、諸君に何物かを紹介する代りに、諸君の思惑と非常にかけ離れたものを陳列したのであつた。

何故に私は神經症學の入門に於て諸君でさへ神經質として知つていらつしやるもの、諸君の興味を昔からひいてゐるものでもつて始めなかつたのであるか。神經質者の獨特な本質、人事關係及び外來影響に對する神經質者の不可解な反應、神經質者の興奮性、逡巡性、不適應性でもつて始めなかつたのか。何故に神經質の單純な家常茶飯な形に最初に觸れて、一歩一歩神經質の謎のやうな極端な現象の問題にまではひらなかつたのであるか。

仰せの通りである。私は諸君の言分が間違つてゐるなぞとは申さない。私が自分の描寫法にすつかり自惚れて、その中の缺點はみんな特殊な魅力を持つてゐるなどと吹聽する程有頂天になつてゐるのでない。私でさへもつと違つたやうにお話する方が、諸君にずつと便宜だと十分信じてゐるし、私の意向も諸君と同じであつたのである。ところが、人間と申すものは豫定した意向を思ひどほり

しなければならぬはめに陷ることがたびたびある。人のよく知つてゐる陳腐な材料を配列するといふやうな一寸見れば何でもないやうな仕事でも、やつて見れば著者の思ひ通りになかなかなるものでない。成程ぐんぐんと勝手に出來上つて行く。そしてあとになつて、何故かう書いてああ書けなかつたのかと我ながら訝る次第である。

「精神分析入門」といふ題目は神經症を論じようとするこの章には最早適當でないといふのが、恐らくこの理由の一つになつてゐるだらう。精神分析入門の本領は間違ひとか夢の研究に存してゐる。そして神經症の學說は實に精神分析學それ自體であるのだ。私はこんな限られた時間の間に、神經症の學說の內容に就て、只今のやうな壓縮した形によらずに、全く別の形で諸君に何等かの知識を與へることが出來るとは信じてゐない。實は諸君に症候の意味と意義、症候形成の內外條件及びそのメカニズムを結び合はせて講義するのが眼目であつた。私はさうしようと試みた。それは精神分析が今日敎へようとしてゐるものの中核に可なり近いものであるからである。それと結びつけて、リビド及びその進化に數言を費し、自我の進化に就てもまた少し觸れておいた。諸君は既に精神分析への入門によつて、われわれの術式の臆說、卽ち無意識と抑壓（抵抗）といふ大見地に準備がと

となつてゐたのである。諸君は次の講演の一つに於て精神分析の研究がいかなる地位にそれの有機的連鎖をとるべきかを學ばれる筈だ。私達の報告のすべては神經症疾患のある一つの部類、即ち所謂交付神經症の研究から來てゐることを私は諸君に隱さなかつた。ところが、私は症候形成のメカニズムを單にヒステリィ神經症に都合のよいやうに追求して來た。諸君がたとへ確乎たる知識を贏ち得られなくとも、諸君が何等詳しい事柄を耳にされなくても、精神分析がどういふ方法を活用し、精神分析がどういふ問題を取扱ひ、精神分析がどういふ業蹟を發表したかに就て、諸君が概念だけでも得られたことと想像しておく。

私は神經症を描寫するに當つて、まづ神經症患者の動作をきつかけに、患者がいかに自分の神經症になやみ、それに對していかに防禦し、神經症にいかに適應しようとするかを描寫したいと希望してゐた。それは確かに興味深深たる、研究のやり甲斐のある材料であり、取扱ふに際しても大してむづかしくない材料であるが、さてそれで火蓋を切らうとする段になると一寸考へ物だと思はれてくる。無意識が發見出來ず、ひいてリビドの重大な意義を看過し、すべての情況を患者自らの自我に現はれたやうに判定する危險が存するからである。患者の自我が信用のおける公平な證人でないことは火を瞭るより明らかである。この自我は無意識を否定し無意識を抑壓に屈伏さしてしまつ

た權力である。無意識を樹立するために、どうしてこの自我に信頼することが出來ようぞ。この抑壓の下に第一に性慾の拒否された要求が立つてゐる。自我の見解から無意識の廣さと無意識の意義を到底引き出し得ないことは分かり切つてゐる。抑壓の見地がしらみかけた瞬間から、私達は相反目し合つてゐる二つの階級の一方、卽ち優勝階級をこの鬪爭の審判官にたてないやうに警告しておいた。私達には自我の公言に迷はされないだけの準備がちやんと出來てゐる。若し人が自我の言分を信ずるなら、自我はいかなるところでも能動的であつた。從つて症候は自我自らの欲求と斡旋によつて作られたことになつてゐる。ところが私達は自我がその大部分に於て自ら受動性の役割を演じてゐたことを知つてゐる。自我はその時その受動性を陰蔽し粉飾しようときばつてゐるのである。勿論自我はこの試みをいつでも敢行するとはきまつてゐない。强迫神經症の症候に於ては自我は、ある異物が自分に敵對し、自分は辛じてその異物の壓迫を防いでゐると告白しなければならぬのである。

自我の欺瞞を掛値のままで買はうとすることを、私の只今の警告でひつこめない人は明らかにお人よしである。さういふお方は、精神分析が無意識、性慾及び自我の受動性を强調する際に出くはさなくてはならぬ一切の反對から逃走する仁である。アルフレット・アドレルと御同然に、さうい

ふお方は「神經質性格」は神經症の結果でなくて神經症の原因であると主張したいのである。だがそんなお方は症候形成の單一なデテエル若くは單獨な夢を說明する資格がない。

諸君はかう質問されるだらう。精神分析が發見した要素を頭ごなしにやつつけずに、自我が神經質と症候形成に干與してゐることを承認することは出來ないものでせうか。私はかう返答する。確かに出來なくてはならぬ。いつかどこかで出來上るだらう。併しこれで始めるのは精神分析の研究方針ではない。勿論この任務が精神分析にいつ近接してくるかは前以て申し上げることは出來る。私達が今日迄硏究した神經症に於て見たより、もつとはげしく自我が干與してゐる神經症が存してゐる。この種の疾患を分析的に研究してみれば、神經症といふ疾患に自我が干與してゐる事實を公平に正當に評價することが出來る筈である。

然しながら、自我がそれの神經症に對する關係の一つは非常に顯著であつて、最初から考慮に入れることが出來るぐらゐである。その關係は一見どんな場合でも目に附くものだ。就中今日の精神分析の知識では一寸近寄り難い疾患である外傷性神經症に於ては、この關係は最も鮮かに看取出來る。諸君は種種雜多な形式のすべての神經症の原因とメカニズムに於て、いつも同一の要素が活動してゐること、ある形の神經症ではそのうちの甲なる要素、他の形の神經症では乙なる要素が、症

候形成に對して主役を演じてゐることを知らなくてはならぬ。これは芝居の登場人物のやうなものである。役者めいめいにはお得意のはまり役がある。勇士とか男伊達とか惡者とかのはまり役がある。めいめいの役者がその十八番(おはこ)に應じてそれぞれ違つた役割を選ぶことが出來るだらう。空想もこれと同じである。空想はヒステリィの場合ほどあざやかに症候に轉化するものはない。自我の反對裝塡若くは自我の反射形成は强迫神經症の症狀を支配してゐる。私達が夢に就て第二次推敲と名附けたものは、パラノイア等の場合に妄想として現はれてくる。

外傷性神經症、就中戰爭の驚愕から發生した外傷性神經症に於て、保護と利益を追求しようとする我儘な自我動機の姿がはつきりわれわれに迫つてくる。尤も自我動機だけでは疾患を創造することは出來ないが、自我動機は疾患にそれの支持を與へ、一度疾患が形成された曉はそれを維持するものである。この動機は自我を疾患の誘因に導かうとする焦眉の危險から守らうとする。そしてこの危險が最早すつかり反復されないと見込がついた時、あるひは受けた危險の賠償が手にはひつた時に初めてこの疾患は囘復するのである。

併し自我は他のすべての實例で神經症の發生と神經症の維持に同じやうな興味を示してゐる。症候が自我から支持されてゐるのは、自我の一側面は抑壓されてゐる自我傾向に滿足を支給してゐる

からであると既に申しておいた。なほこの上に、症候の形成をもつて葛藤を解決さすことは、最も便利な、快感原理に一番かなふ解決法である。實に症候形成は自我に苦痛な強い内部勞働を免除してやるのである。醫者でさへ、葛藤が神經症となつて捌口を作るのは最も無害な、社會的に最も安全な解決法であると自白しなくてはならぬ實例を知つてゐる。定めし諸君は醫者でさへ時折は自分が撲滅しようと志してゐる疾患の味方をすることがあると聞いてびつくりされるだらう。保健狂の喇叭吹きとなつて、人生の境涯を自ら狹うするのは、醫者にとつても窮屈至極でござらう。醫者はこの浮世では神經症のみがたつた一つの悲慘事でないこと、もつと現實的な避け難いなやみが存してゐること、必要と申すものは、健康を犧牲に供するやう人間に誅求することさへ出來ることを知つてゐる。醫者は個人のかやうな犧牲によつて多數の人間に迫らうとする不測の不幸が防がれることを承知してゐる。だから、神經症患者は葛藤に直面すればいつ何時でも疾患への逃避をやるものだと言ふことが出來るならば、當然多數の實例に於てかやうな逃避は正當なものであると承認しなくてはならぬ。かやうな事情を承認してゐる醫者は、沈默を守つて患者に衷心の同情を表して自ら退却するのである。

併し私達はこれ等の例外を棄ててもつともつと議論を進めてみたい。大體のところ私達は神經症

へ逃込むことによつて、ある內部的疾患利益が自我に惠まれることを認めてゐる。ある事情に於ては、この內部的疾患利益に多少現實的に尊重されてゐる、明確に外的といへる利益が集められる。この種の最もありふれた實例を觀察して欲しい。自分の夫から虐待され、冷酷にこきまはされる妻は、若し彼女の素質が可能であるなら、若し彼女があまり內氣すぎるとかあまり眞面目すぎて祕かによその男で慰藉を求めることが出來ないなら、若し彼女が夫とのすべての外面的羈絆を打ち破るだけの度胸がないなら、若し彼女に自活が出來る見込や現在の夫以上の立派な男を手に入れる見込がないなら、最後に彼女がどこ迄もこの無慈悲な男に性慾によつて結びつけられてゐるなら、この妻はおきまりのやうに神經症に捌口を見ひ出すのである。彼女の疾患は今や强力な夫に挑む武器となる。彼女はこの武器を彼女の防禦にふりまはし、自分の復讐の上に濫用することが出來る。この際彼女は自分の疾患を訴へることはあつても、決して自分の結婚の不幸を訴へないであらう。彼女は醫者と聯盟する。いつもならおもひやりのない夫でも、已むなしに彼女に寛大な態度をとり、彼女のためにお金を出し、彼女の外出を許し、かくて彼女は同棲生活の壓迫からはなたれる自由を持つやうになる。このやうな外面的な若くは偶然的な疾患利益が眞實莫大で、それ以外の代償物が現實で見つからぬ場合は、治療力によつて諸君が神經症に何等かの影響を與へることは殆ど絕望とい

つてもよいだらう。

私が只今疾患利益に就て諸君にお話したものは、私が否定した見解、卽ち自我それ自體は神經症を希望し神經症を作るものだといふ見解を却つて擁護するものだと諸君は私に苦情を申込まれよう。だが暫く待つて欲しい。諸君の言分は恐らく、自我がこのやむにやまれぬ神經症を歡迎してゐること、若しあるものが神經症から作らるべきであるなら、自我はそのあるものを利用するものだといふことを意味してゐるに外ならない。諸君の考へ方は楯の半面である。勿論お目出度い半面である。神經症が利益を有してゐる以上は、自我は神經症と仲よく暮らす筈である。ところが神經症は利益ばかしを持つてゐるのでない。神經症を購買したことによつて自我は途方もない買物をしたといふことが大抵早速に分かつてくる。自我は葛藤の解決をあまりの高値で買つたのである。症候にくついてゐる苦惱の感覺は恐らく葛藤の煩悶と等價値の代用物であり、おまけに不快といふ釣錢まで貰つてゐることになる。自我は症候のこの不快を追拂はうときばつても、疾患利益を拋棄しようとは欲しない。そんな蟲のよいことは出來るものでない。だから自我は從前考へてゐたほど自分が絕對に能動的でなかつたことを暴露する。この事實は十分頭に置いておきたいものである。

諸君が醫者として神經症患者と交涉を持つなら、諸君は早速に、自分の疾患を最も强く訴へる患

者は、醫者の救助を進んで求めてゐる人であり、醫者の救治に對して殆ど抵抗を見せない人であると豫想されるであらう。ところが事實は正反對である。いや諸君は疾患利益を助成するすべてのものは、抑壓抵抗を强大にし治療上の困難を增大するものであることを曉るに相違ない。私達は所謂症候と一緒に生れる症候利益の一部に後日現はれる他種の利益を附加しておかねばならぬ。疾患と申すやうな精神組織が長年月永存するなら、その組織は最後に獨立體の特徴を具へてくる。この組織は自己保存本能のやうなものを發揮する。かくてこの組織と精神生活の他の部分の間、その根本に於てこの組織に敵對してゐる他の部分の間にさへ、ある種の Modus vivendi ある種の和睦が形成される。そして機會ある每にこの組織は再び有益な有價値な姿をとる。恰も新しく自分の地位を鞏固にする第二次機能のやうなものを贏ち得るのである。病理學から實例を求める代りに、日常生活から一つすばらしい說明を拾つてこようぢやないか。熟練職工があつた。職工は自分の腕で生活費を稼いでゐた。ところが作業中に怪我をして跛になつてしまつた。男は勞働が出來なくなつた。だがその賠償として月月ちよつぴりの手當を貰ふことになつた。そして今度は自分の跛が乞食の道具に利用出來ることを知つた。不憫な話ではあるが、今や男の新生涯は彼の舊生涯を破壞したものによつて支持されるやうになつたのである。若し諸君がこの男の跛を元のとほりに直してやるなら、

諸君はさしづめこの男から生活費をもぎとつたことになるのだ。といふのは、果してこの男は昔の職を再び元のやうにやれるかどうかが疑問となつてくる。神經症に於て疾患のこのやうな第二次利益に一致するものを、私達は第一次疾患利益に對して第二次疾患利益と呼ぶことが出來る。

併し大局から見て諸君が疾患利益の實際的意義をみくびらないやう、理論的見地に於て疾患利益をあまり買冠らないやうに申し上げておきたい。以前に承認した例外を問題外として、疾患利益と申すものはいつもオオベルレンデルがあの「フリイゲンデ・ブレツテル」に描いた「動物の智慧に就て」の例を思ひ出させる。一人のアラビヤ人が駱駝に乘つて狹い一本道をやつて來た。道の片方には嶮しい山が切りたつてゐた。丁度道の曲り角で男は突然ライオンに出會つた。ライオンは今にも男にとびかからうと身構へてゐる。男は逃道のないのを知つた。一方は屛風のやうな山であり一方は千仭の谷である。引返すことも逃げることも出來ない。進退これ谷まつたのである。ところが駱駝はさうでなかつた。駱駝は男を乘せたまま谿谷めがけて一とびにとびこんでしまつた。——そしてライオンは茫然とそのあとを見守つてゐるだけであつた。神經症の救助でもいつも患者によい效果を齎すとはきまつてゐない。その理由は恐らく症候形成をもつて葛藤を解決することは自動的過程であつて、この過程は人生の要求に反抗する姿をとり、人間をして彼の最も優れた最も高い力の

利用を抛棄さしてしまふからである。若し取捨選擇が存してゐるなら、人間は屑く運命との光榮ある戰ひに身を投ずる方を選ぶに相違ない。

何故に私が神經症學の描寫の發端に尋常神經症を語らなかつたには、なほこれ以上の理由が存してゐる。諸君は多分その理由として、かういふ行き方をすれば神經症の性的原因を證據立てる場合に私が非常に苦境に陷るのを見越して、わざと最初に尋常神經症を避けたのであると假定されるであらう。だが諸君の方が間違つてゐる。交付神經症に於てはこの見解に達するために、まづ第一に症候解釋を斷行しなくてはならぬ。所謂眞正神經症（Aktualneurosen）の尋常の形では、性生活の病原的意義は、觀察にも一致する一つの大事實である。私は殆ど二十年前にこの事實にぶつつかつたのである。ある日のこと私は神經症患者を檢べる時に、何故に規則のやうに性慾方面のことに觸れるのを避けるのかといふ質問を提出した。その當時私はさやうな方面を患者に就て調査することは、私に對する患者の信用に泥をぬるものだと考へてゐた。ところが間もなく私は性生活が常態である時は神經症——私は眞正神經症を意味してゐた——は存し得るものでないといふ定義を發表することが出來た。確かにこの定義は人間の個體的差異をあまりにも輕輕しく無視したものである。この定義にはまたどこ迄が常態だといふ判斷に伴ふ不確實性が拔け切らない。だが兎に角この定義

は大體の指南として今日でもその價値を失つてはゐない。當時私はさらに前進して神經質のある形と特別な性障害との間に特異な關係を樹立しようとしたのである。そして若し私が患者達から同種の材料をうんと提供して貰つてをれば、私は今日でも同じやうな觀察を繰返すことが出來てゐるだらうと信じてゐる。私は不完全な性的滿足のある種類例へば手淫で甘んじてゐた人は眞正神經症のある病型に罹つてゐたこと、若しこの男が例へば手淫をやめてそれに代つてまた別の、前のとは大同小異な滿たされない性的習癖を行ふならば、忽ちにこの神經症は消えて、他種の神經症が姿を見せてくるといふことを何度も知つた。それから私は患者の症狀の變化から患者の性生活樣式の變遷を摘發することが出來た。その時私は自分の臆說を頑固におしとほせる確信がついて、とうとう私は自分の患者達の誤魔化しを征服し、私に告白を與へるやうに強いたのであつた。その結果患者達は私の許を去つて、患者の性生活を私のやうに熱心に穿鑿しない醫者のところへ鞍替してしまつたのであつた。

勿論私とてその當時疾患の原因が可ならずしも性生活の中に探せるものでないことぐらゐは承知してゐた。甲の患者は直接性障害のために神經症に罹つてゐたが、乙の患者は自分の財産を失つたため、若くは重篤な器質的疾患を經驗したために神經症に罹つてゐたのである。かやうな千差萬別

な姿の說明は、あとで自我とリビドの間の假想的な交互關係にある見識を有した時に自然に下せた。そしてこの見識が深くなるにつれますます實事な說明が下せるやうになつたのである。ある人は自我が何等かの手段でリビドを處分する能力を失つた時にのみ神經症におちいる。自我が强ければそれだけこの任務を果たすのは容易であるが、何等かの原因のために自我が虛弱になれば必然、リビド要求の過大な亢進と同じ作用を與へる。いひかへれば神經症を可能ならしめるのである。さらに自我とリビドの間にはなほ別種のもつと密接な關係が存してゐるが、この關係は未だ私達の眼界にはひつてゐないものである。そのため私は只今その說明を避けることにする。どういふ場合でも、その發病の道筋がどういふものであつても、神經症の症候のエネルギイは常にリビドから惠まれ、從つてリビドエネルギイが變態な方面に利用されてゐるといふ考へ方は私達にとつて最も根本的な最も役に立つ點である。

さて諸君に一つ眞正神經症の症候と精神神經症の症候の確然たる相違點に留意して貰はなくてはならぬ。精神神經症のうちの第一部類、卽ち交付神經症の部類は私達がこれ迄に非常に詳しく硏究したものである。二つの場合とも症候はリビドから發してゐる。換言すれば、その症候はリビドの變態的な利用、卽ち滿足代用であるのである。併し眞正神經症の症候である頭痛、疼痛感、ある器

官の刺戟狀態、ある機能の衰弱または抑制は何等の「意味」何等の心的意義を藏してゐない。その症候は例へばヒステリィ症候のやうに專ら肉體に現はれたばかりでなく、それ自體徹頭徹尾肉體過程であつて、私達が學んだ輻輳した精神メカニズムのすべてを通らずに發生してくる。卽ち精神神經症の症候が長い間閑却されたのはこのためであつた。ところで精神內で作用してゐる力として學んだところのリビドの利用を私達は症候にどういふ工合に一致さすことが出來るか。これは至つて簡單である。私をして精神分析に放たれた最初の抗議を想起せしめよ。當時世人は精神分析は神經症現象の純粹な心理學の理論に精進してゐる、心理學の理論は決して疾患を說明し得ないから、精神分析の前途は絕望であると申してゐた。性的機能は純然たる精神的のものでないこと、況や單なる肉體的のものでもないことを世人はすつくり忘れてゐた。性的機能は肉體生活にも精神生活にも影響を與へる。若し精神神經症の症候の中にそれの精神作用力の障害の表出を學んだならば、眞正神經症が性的障害の直接の肉體結果であることを發見したとて私達は決して驚くに足りないのである。

臨床醫學は後者の見解に對して各方面の學者からも注目された貴重な指針を私達に惠んで吳れた。眞正神經症はそれの症候學の細目の中に、換言すれば、すべての器官系統、すべての機能に影響を

與へる特性の中に、外來の毒物の慢性影響及び外來の毒物の急性剝奪によつて發生する疾患狀態、卽ち中毒と禁慾狀態との明白な類似點を指示して吳れた。疾患のこの二つの部類はバセドウ氏病のやうな症狀によつてもつと密接してくるだらう。卽ちバセドウ氏病は、毒物作用に因してゐるが、異物として體內にはひつた毒物でなく、自らの身體の新陳代謝に於て發生した毒物に因してゐることを私達は承知してゐる。この類似にならつて、神經症とは性新陳代謝に於ける障害の結果と見做すやうになつてくると私は考へる。ある時は當人が處置出來る以上の多量の性的毒物が產出されるために起こり、ある時は內的境遇及び心的境遇によつてこの毒物の正しい利用が侵害されるために起るのである。性慾の本質に關してこれと似よつた假定を民間の人が太古から奉じてゐる。世人は戀を陶醉と名附け、媚藥によつて戀心が發するとし、この考へ方によつて世人は、作用する動因をある點迄外界の方に置いたのである。この點に關して私達は只今性興奮が諸種の器官に於て發生出來るといふ主張と發情帶といふものを思ひ出す機會を持つた。だが「性新陳代謝」とか「性の化學」とかいふ言葉は內容のない一章だと思つてゐる。私達はこんな事に就ては一向知るところがない。果して「男性」と「女性」と命名の出來る二つの性物質が假定出來るものか、果してリビドのすべての刺戟作用の運搬者としてたつた一つの性毒物で十分であるか、こんな事を私達は一度も決定す

ることが出來ない。私達が建設した精神分析の殿堂は現實にあつては一つの蜃氣樓である。この蜃氣樓はいつか一度はそれの有機的土臺にまで分解されなくてはならぬものであるが、今日のところわれわれは未だその土臺を知つてゐないのである。

科學としての精神分析學の本領はそれの取扱ふ材料によつてでなしに、それが活用する術式によつて獨自の光輝を放つてゐるのであらう。世人は精神分析學を、それの本質を變更することなしに、そのまま文化史、宗教科學、神話學及び神經症學にまで活用することが出來る。精神分析はひたすらに精神生活に於ける無意識の發見を主眼とし、それの發見に精進してゐるのである。直接の毒物障害によつて症候が發生したと見做されてゐる眞正神經症の問題は精神分析に何等の攻擊點を提供しない。この問題は精神分析の說明にちよつぴり役立つたばかりである。この問題の解決はむしろ生物學的醫學研究に讓らなくてはならぬものである。諸君は今となつて初めて、私が何が故に私の材料をこれ迄のやうに配置しなければならなかつたかの理由を十分に理解されたことであらう。私が諸君に「神經症學入門」に就てお話してゐたのなら、當然眞正神經症の簡單な症型を出發點として、リビド障害に因する複雜な精神疾患に迄說き及ぼすといふ手順を踏むことは飽く迄も正しい道であつたのである。私は前者の眞正神經症に就ては、私達が多方面から學んだもの、あるひは多方

面から知らうと信じたものを總括しなければならなかつたであらう。それから後者の精神神經症に就ては精神分析こそこの狀態を闡明する最も重大な術式的方法であると發言しなければならなかつたであらう。ところが私は「精神分析入門」を標榜してお話したのである。諸君が神經症に就てある知識を有されるよりは、精神分析に就て一つの概念を持たれる方が私にとつては數等大切である。そのために私は精神分析に大して役立たない眞正神經症を最早擔ぎ出す必要がなかつたのである。私は諸君に話の材料を最も巧みに選擇してあげたものだとも信じ切つてゐる。なんとならば、精神分析はそれの深奥な前提と廣汎な關聯によつて、あらゆる教養ある人士の興味を領する價値のあるものであるからである。飜つて神經症學は單に醫學の一章に過ぎないのである。

だが私達もまた眞正神經症に對して少なからざる興味を持たなてくはならぬと諸君が期待されるのは間違つてゐない。眞正神經症が精神神經症と臨床的に密接してゐるといふことからだけでも、私達は厭でも眞正神經症に興味を持たなくてはならないのだ。この故に私は諸君に精神分析學は眞正神經症を三つの純粹な症型、神經衰弱症、恐怖神經症、及びヒポコンドリイに區別してゐると報告することにしよう。この分類は今日でも大した反對がないものである。三つの名前は一般に用ゐられてゐるが、かういふ名前の含む內容の方は不確實で未だ定說となつてゐない。神經症といふ混

亂した現象界に於て何等かの分類をたて、臨床的單位換言すれば疾患個體をひき出すことに反對し、眞正神經症と精神神經症の區別すら認めようとしない醫者が存してゐるぐらゐである。さういふお醫者はあまり極端に走りすぎてゐると私は考へてゐる。さういふお醫者のとつた方向は決して學問の發達を進めるものでないと私は信じてゐる。只今擧げた神經症の症型は時時純粹な姿であらはれるものだ。勿論症型はお互に混同し、時にはよく精神神經症的疾患とこんがらかることもある。かやうな姿があらはれたところで、何も只今の分類を拋棄する遠慮などはいらぬのである。諸君は一つ金石學といふ學問に於ける鑛物學と岩石學の區別を考へて欲しい。鑛物は個體として分類されてゐる。疑もなくある鑛物はしばしば結晶形を作つて、それの周圍から劃然と鑑別される場合が存してゐる。岩石は鑛物から合成されたもので、その成分たる鑛物は確かに偶然に結びつけられたものでなく、それ等の發生條件に準じて結びつけられるものである。私達は神經症に就て、岩石學とやや似た學說を作り上げる上には、未だそれの進化の由來をあまり知るところ迄になつてゐない。だが若し私達が丁度鑛物にも比すべき既知の臨床的個體をまづ岩石から分離する時には、私達は確かに正しい方向に足を向けてゐると申せるのである。

眞正神經症と精神神經症の症候間に介在するある特筆すべき關係は、さらに精神神經症に於ける

症候形成に關する私達の知識に大切な貢獻を惠むものである。卽ち眞正神經症の症候はしばしば、精神神經症の症候の中核であり先驅であるからである。神經衰弱症及び私達が轉化ヒステリイと呼んでゐる交付神經症の間、恐怖神經症及び恐怖ヒステリイの間、さらになほ、ヒポコンドリイ及びいづれパラフレニィ（早發性癡呆とパラノイア）としてお話しようとする病型の間にかやうな關係は最も明瞭に觀察出來る。例へばヒステリイ性頭痛またはヒステリイ性腰痛を借りてこよう。分析の結果この種の疼痛は壓縮及び轉移によつてリビド空想若くはリビド囘想の全系列に對する滿足代用になつてゐることが分かる。ところがこの疼痛は嘗て一度は現實に存してゐたのである。この疼痛はその當時、直接の性中毒症候であり、リビド興奮の肉體的表現であつたのである。私達は何もすべてのヒステリイ症候がかやうな中核を有してゐるなどとは主張しないが、眞實これはよく起こるものであつて、肉體からのすべての——正常若くは病的——影響はリビド興奮によつて、ヒステリイの症候形成に好んで使用されると申せるのである。このやうな肉體からの影響は、恰も眞珠貝が眞珠母物質の一枚一枚で包んで行くあの砂のかたまりのやうな役目をしてゐる。同樣に性交に伴ふ性興奮の一時的表示は、症候形成に役立つ最も得やすい最も適當した材料として精神神經症に利用されるのである。

同種の過程は診斷上さらにまた治療上に特別な興味を與へる。未だ大規模の神經症に發展せずに、僅かに神經症に傾きかかつてゐる人に於ては、肉體の病的變化——例へば、炎症とか傷害によつて——は症候形成の仕事を喚起せしめる。その結果、この症候形成の仕事は現實から提供された症候をすばしこくとつつかまへて、一つの表現法を手に入れようと構へてゐる無意識的空想の總代者にそれを奉り込まうとすることは決して稀有なことでない。醫者はこのやうな場合に、ある時は治療の甲の方法、ある時は治療の乙の方法を試みて、囂囂たるそれの神經症的推敲にまるで無頓著に有機的基礎を除去しようとしたり、あるひは機會に應じて現はれてくる神經症を驅除して、それの有機的誘因に極めて無關心であらうとする。その奏效は治療の甲若くは乙の方法によつてある場合は成功しある場合は失敗するものだから、この種の混合症狀に對して一般規則などは殆ど處方出來るものでない。

第二十五章　恐　怖

私が前回尋常神經質に就てお話したものは、私の講演のうちで最も不適當なものだと諸君は斷定されるだらう。私もその通りだと思つてゐる。そしてその時大概の神經質者が訴へる、彼等さへ最も恐ろしい苦痛だと名づけてゐる、そして實際神經質者に於て最も巨大な强さに達し、その結果最も氣違ひじみた用心の原因となる恐怖なるものに就て一言も觸れなかつたことを、諸君がどれ程いぶかられたかを私は十分に察してゐる。併し少くとも私は恐怖の問題を割愛しようとは欲してゐなかつた。割愛するどころか、私は諸君に恐怖の問題と神經質の問題を特に別別に取扱つて、恐怖に就て詳細に述べてみたいと思つてゐたのであつた。

恐怖(アングスト)(Angst)をわざわざ敍述する必要はない。諸君はみんなこの感覺、正しく申せば、この情緒狀態をいつかどつかで自ら體驗された筈だ。だが世人は何故に丁度神經質な人のみが普通のお方より多數の、普通のお方より强烈な恐怖を味ふものかを一度だつて眞面目に質問されたことはなからうと私は思つてゐる。多分世人はこれを尤なことだと考へてゐる。世人は一般に「神經質」といふ

言葉と「こはがり」といふ言葉をごつちやに使つて、恰も二つが同一の意味であるかのやうに見做してゐるのである。併しこれは正しくない。どの點から見ても神經質でない癖にいやにこはがる人がゐるし、いろんな症候に患んでゐる正眞正銘な神經質者で、どこをどう探しても恐怖への傾向が發見出來ない人もある。

それはそれとして、恐怖の問題は確かに一つの結節點である。その結節點に於てあらゆる種類の最も樞要な疑問が集合してゐる。恐怖の問題は確かに一つの謎である。この謎を解けば私達の全精神生活に立所に太陽の光が差込むに相違ない。この謎は物の實事に氷解出來るもんだと私は諸君に斷言しないが、精神分析はこの恐怖といふ題目までも學校の醫學とは全く違つた戰術で突撃しようとしてゐると諸君は期待されてもよいのである。學校の醫學にとつてはまづ第一に、どういふ解剖學的經路を通つて恐怖狀態が惹起されるかが全興味の焦點となつてゐるやうに思はれる。換言すれば延髓が刺戟されるといふ。そして患者は醫者から君は迷走神經の神經症に罹つてゐるのだぜと話される。迷走神經は非常に嚴肅な非常にすばらしい對象である。青年時代に私はこの延髓の研究にいかに多大の時間と多大の努力を捧げたものかを只今はつきり回顧出來る。だが今日恐怖を心理學的に理解する上に、私は恐怖といふ興奮が走る神經經路の知識ほど無益なものはないと申さなくて

はならぬのである。

神經質の全般を考へずに、まづ暫時の間恐怖の方を考察することにしよう。若し私がこの型の恐怖を神經症恐怖と對立さして現實恐怖（Reelangst）と名附けるならば、諸君は直ちに私の申すところを理解して下さることと思ふ。さて現實恐怖はわれわれには非常に合理的な非常に自然なもののやうに思へる。現實恐怖とは外界の危險、いひかへれば、豫期してゐる、豫知してゐる障害の認識への反應である。卽ち恐怖は逃避反射と結びついてゐると公言出來る。そして人は恐怖を自己保存本能の表現と觀じても差支へないのである。いかなる機會に、換言すれば、いかなる對象に對し、またいかなる情況に處して、恐怖が發生するか、これは勿論大部分迄私達の知識の狀態と外界に對する私達の權力感情にかかつてゐる。野蕃人は大砲に戰き日蝕に怯えるが、機械が操從出來、日蝕といふ自然現象が豫言出來る白人にとつては、かういふ條件は決して恐怖を惹起さすものでないことは理の當然である。ある場合は知識がよけいにあるために、却つて恐怖が促される。と申すのは早く危險を認めるからである。例へば野蕃人は森林中に印された足跡を見ただけで戰慄するが、理由を知らない白人にとつては足跡などは何の意味もなさない。野蕃人にとつては足跡は猛獸が眞近にゐることを告げるからである。老練な水夫は地平線の一角に一片の雲を見ひ出して恐ろしがるが、

船客には雲などは一向無意義である。水夫にとつては雲は颶風の襲來を告げてゐるからである。

深く熟考をめぐらしてみれば、現實恐怖は合理的、合目的性であるといふ批判に對して、根本的な修正を必要とすると申さねばならぬ。卽ち危險が迫る際にとるべき合目的性な唯一の態度は、冷靜に自己の力と切迫する危險の大さを比較して、逃るべきか、防ぐべきか、出來得べくんば進んで突撃すべきか、どの道をとる方が一番よい結末を得る望みがあるかを決定するにしくはない。ところが一般に恐怖はこの綱目の中にはひつてゐない。恐怖といふものが發生しない方がうんと立派に今のやうなことが冷靜に遂行出來るものだ。諸君も御承知のやうに、恐怖が過度に强烈になる時は、恐怖は極端に非合目的性になり、すべての行動が痲痺されてしまふのである。危險への反應は、通常恐怖情緖と防禦反應の混合から成立してゐる。動物が嚇かされる時は、この動物はこはがつて逃走してしまふが、この際にとるべき合目的性な態度は「こはがる」といふことでなくて逃げるといふことである。

この理由から恐怖の發生は決して合目的性でないと主張したくなる。恐怖情況を綿密に分解してみれば、恐怖に關して、立派な見解が湧いてくるだらう。恐怖に於ける第一のものは危險に對する準備であつて、この準備は知覺的注意力の亢進と運動緊張の亢進の姿となつて現はれる。かやうな

期待準備は明かに有益なものと認めなくてはならぬ。そのやうな準備が缺けてをれば、當然大變な結果がふりかかつてくる。さてこの準備から、一方に於ては、運動といふ行動、まづ第一に逃走、さらに高い階段では活潑な防禦が現はれ、他方に於ては、私達が恐怖狀態として感ずるものが現はれる。恐怖の發生が一つの閃光、一つのシグナルであれば、恐怖準備はそれだけ滑らかに行動に轉化され、全經過はそれだけ合目的性に形成されるのである。だから私をしていはしむれば、恐怖準備は合目的性であり、一方恐怖發生は私達が恐怖と名附ける形にあつては非合目的性であるやうである。

恐怖、恐れ、驚愕といふ言葉が同一の意味に使はれてゐるが、そのおのおのには嚴然たる區別が存してゐるかといふ問題を詳論することを避けることにしよう。單に私の考へではあるが、恐怖は狀態に關聯してゐて對象を見ない時に用ゐ、恐れは對象に注意が向けられる時に用ゐる。これに反して、驚愕は明かに特別な意味を持つてゐるやうである。卽ち驚愕は前以て恐怖準備が作られないうちに突然に危險にぶつつかつた時の狀態に用ゐる。從つて人間は恐怖によつて驚愕を防禦するといひ得るのである。

恐怖といふ言葉の使用にはある曖昧とある不確實が拔け切らないことを諸君も　氣　きになつて

をられよう。世人は大概恐怖を「恐怖發生」の認識によつて生じた自覺狀態に解して、この狀態に情緒といふ名を附してゐる。それぢや情緒は力學的にどういふ意味を有してゐるか。情緒はいつでもいろいろの要素から合成されてゐる。情緒は第一にある運動性神經力若くは運動性發射を含み、第二に二種のある感覺、即ち惹起された運動行動の認識と情緒に基調を與へるといはれてゐる快不快の直接の感覺を含んでゐる。併し私はこの記述が情緒の本質を射留めてゐるとは信じない。ある二、三の情緒に於て人はもつともつと深く觀察して、所謂集合を作つてゐる核はある意義深い體驗の反復であることを認めることが出來るやうに思はれる。この體驗は非常に普遍的な性質の、種族の太古でなしに、個體の太古に遭遇した非常に早期の印象に過ぎないと申せるだらう。私のいふところをもつとしつかり理解して貰ふために、恐怖狀態は丁度ヒステリイ發作のやうな構造を持つ、換言すれば囘想の沈澱物であると申しておきたい。だからヒステリイ發作は新しく構成された個體的情緒に比較出來る。そして正常な情緒は遺傳物となつた普遍ヒステリイの表現に比較出來る。私が只今諸君に情緒に就て申し上げた事柄はすべて、常態心理學が承認してゐる學說だと考へて貰つては大變である。いや只今の見解は精神分析の土壤で成長し、精神分析の土壤に於てのみ繁茂する特產物であつたのである。諸君が心理學から情緒に就て敎授される事柄例へばジェイムズ・ランゲ

說はわれわれ精神分析家にとつては全くわけの分からぬもの、まるで問題とするに足りないものなのである。といふものの、情緒に對する精神分析學の知識とて勿論何も確定されたものではない。この暗黑な領域へ私達がまづ第一歩を踏み入れたのである。さて話を續けよう。恐怖情緒に於て反復として再生された早期の印象とは一體何物であるかを私達は知つてゐると信じてゐる。それは分娩行爲であると申せる。分娩に於ては不快の感覺、興奮の發射、肉體感覺が連續して現はれてくる。これは實に生命が危難に瀕するあらゆる場合の原型となり、それ以來恐怖狀態として私達に反復されるものなのである。血液新生（內呼吸）の斷切による極度の刺戟亢進は出生時恐怖體驗の原因であつた。換言すれば最初の恐怖は中毒的である。恐怖卽ち獨逸語の Angst（アングスト）——angustiae 狹隘——といふ言葉は呼吸の狹くなるといふ特徵を特に强めてゐる。この特徵は實際誕生當時現實狀態の結果として實在してゐたもので、今日情緒の中におきまりのやうに反復されるものである。この最初の恐怖は母から離れるために惹起されたのだといふのはまた非常に關係深いことである。最初の恐怖狀態の反復への素因は無數の年代を通して有機體に根深く塗りこまれ、その結果個體はすべて、たとへ傳說のマクヅッフが「母のお腹から切り出された」やうに、分娩行爲を自ら體驗しなくても、恐怖情緒は逃れることの出來ないものだと私達が考へるのは當然である。哺乳動物以外の動物にも

恐怖狀態の原型があるかどうか私達は明言出來ない。これ等の動物に於ける感覺復合が果してわれわれの恐怖と等價値であるかも私達は知つてゐない。

私達がどうしてこのやうな、即ち分娩行爲がどうして恐怖情緒の源泉であり原型であるかといふ思想に達したかを、諸君は定めし聞きたいと思つていらつしやることであらう。思索したところでこんな思想が浮ぶ筈がない。私はむしろ民族の無邪氣な思惟から拜借して來たのである。ずつと昔のこと病院勤務の私達若い醫者が晝飯に食堂の卓子に集まつた時に、産科の助手が最近の産婆試驗の珍談を話して吳れた。一人の產婆生が分娩の時胎糞が羊水の中に現はれたのは何の意味かと先生から質問された。この產婆生は早速に「赤ん坊がこはがつた證據であります。」と返答した。彼女は野次りとばされて見事に落第點を頂戴した。だが私は心の中でひそかに彼女に味方をした。そしてこの可哀相な田舍出の女が口に出した、浮世の塵によごれてゐないこの意見こそある重要な關聯を暴露してゐるものだと私は考へ始めたのであつた。

これから一つ神經症恐怖に話を轉ずることにする。神經症患者に現はれる恐怖は私達にどんな新現象と新關係を示して吳れるであらうか。それに就てここでお話したいことが山程ある。第一に一般的不安所謂浮動してゐる恐怖といふのがある。この種の恐怖は適當なものであればどんな觀念内

容にも早速に附著し、批判力に影響を與へ、期待を選擇し、自らを正しと主張するためにいろんな機會を狙つてゐる。私達はこの狀態を「期待恐怖」若くは「不安な期待」と名附けてゐる。この種の恐怖になやんでゐる人間は、いろんな可能性のうちから、最も恐ろしいものを豫想し、偶然事をすべて不幸の前兆と解釋し、あらゆる不確實を悉く不吉な意味に考へるのである。このやうな不吉豫想への傾向は病人だと名附けることの出來ない人にも澤山發見出來る性格であつて、かういふ氣質のお方を世人はこはがり屋さんとか悲觀屋さんとか呼んでゐる。併し程度を越えた期待恐怖は大抵神經症疾患についてゐる。この神經症を私は「恐怖神經症」と命名し、眞正神經症の中にいれることにしてゐる。

恐怖の第二の形は只今述べた恐怖と正反對にむしろ心的に縛られ、ある一定の對象若くはある一定の情況に結びついてゐる。この種の恐怖はさまざまな姿を有し、しばしば奇怪な「恐怖症(ホビイ)」(Phobie)となるものである。亞米利加の有名な心理學者スタンレイ・ホオルは最近初めてこの第二の恐怖にホビイといふ堂堂たる希臘語の名前を與へて、これを數種に分類することに大いに盡力して吳れた。この分類は恰も埃及の十種の惡疫の數へ方に似てゐるが、ホビイの方は十以上にも及んでゐる。ホビイの對象若くは内容となるものをみんな數へ上げると、暗闇、野外、廣場、猫、蜘蛛、

蛾、蛇、鼠、雷、尖つた先端、血、かこまれた場所、人込、淋しさ、橋を渡ること、航海、汽車旅行等である。このやうな混沌たるものの中にまづ方角をつけるために、これ等を三つに分類する方が手取早い。第一に恐れられる對象とか恐れられる情況の多くは私達正常な人間にとつても不氣味なものであり、危險と關聯してゐるものである。だからこのやうなホビイは、たとへその强度が非常に强くなくても、私達には十分に理解出來るものである。蛇に出くはした時には、誰でも厭な感じがするものだ。蛇ホビイと名附けるものは人類一般に普遍なもので、ダアギンもこのホビイを極めて如實に記述してゐる。厚い硝子板でしつかり仕切がしてあると知りつつも、蛇が自分の方に向つて鎌首をふりあげる時は、やつぱり心の底に恐怖の念を禁じ得ないと書いてゐる。第二の部類には依然危險との關係は存してゐるが、私達はこの危險を輕視しこの危險を豫想しない習慣になつてゐる情況がはひる。大抵の情況ホビイはこれに屬してゐる。私達は汽車旅行中には家にゐる時よりもつと澤山不幸の機會、卽ち列車衝突の災難があることを知つてゐる。また航海では船が沈沒することがあることも知つてゐる。沈沒すれば船客の大半は溺死しなくてはならぬことを百も承知してゐる。然るに私達はこの危險を念頭に浮べずに、平氣で汽車に乘つたり汽船に乘込んだりしてゐる。橋を渡る時に萬一橋がこはるれば河中に墜落してしまふこともあり得ることだが、こんなことはご

くごく稀有な珍事で、危險だとは考へないぐらゐである。淋しさもやつぱり危險性を有してゐる。そして私達はある條件の下に淋しさを避ける。とはいふものの、どんな條件の下でも、淋しさにこはくて、一瞬間も我慢が出來ないといふやうなことはあり得ない。同じやうなことが人込、かこまれた場所、雷にもあてはまる。神經症患者の懷くこの種のホビイに就て私達が知らないものは、そのホビイの內容でなくて、一般にそのホビイの强さである。ホビイの恐怖は敍述がむづかしい。そしてある條件の下に、私達にも恐怖を喚起さす同一の對象とか情況に對して、神經症患者の方が却つて一向こはがらないやうな印象を私達はたびたび受けるものである。

ホビイの第三の部類が殘されてゐる。この部類には私達の理解力も最早手が屆かない。ある頑强な男がある街路とか案內知つてゐる故鄕の町のある場所を恐怖のために步くことが出來ないなら、またある壯健な立派な體格の女が、猫が着物の裾に戲れつくとか、鼠が部屋の中を駈まはるとかい ふところにも足らぬ恐怖に怯えるなら、私達はこの場合これ等の恐怖症の人に明白に存してゐる危險にどう連絡をつけてよいだらうか。この動物ホビイといふ種類では、その中心は一般人類的な嫌惡の亢進だとは速斷出來ない。なんとなれば、猫を見ればそのまま素通りが出來ずに、それを手馴けたり愛撫せずにをられぬ人が澤山ゐるといふ立派な反證があるからである。女達がこはがつてゐる

る鼠は同時に、寵愛を示す第一流の名前となつてゐる。自分の戀人から鼠さんと呼ばれて得意がつてゐる娘が、自分と同じ名前を持つてゐる小さい動物がちよろちよろと顔を出す時には、恐ろしさのあまり金切聲を立てる。街路とか廣場に對して恐怖を持つてゐる男に對して、この男は小さい子供のやうな動作をするといふたつた一つの説明しか湧いてこない。子供の方は教育によつて直接に、このやうな場所は危險だから避けなくてはならぬと敎へられてゐる。そしてこの臨場苦悶（アゴラホビイ）を有する男の恐怖は誰かと一緒にその場所を通る時は本當に現はれてこないのである。

ここに述べた二つの恐怖の形、卽ち浮動する期待恐怖とホビイに結びつく恐怖は別箇のものである。甲の形は乙の形の高級なものだともいへぬ。兩者は極く稀に偶然に結びつく。最も度の強い一般的不安はホビイの形で現はれる必要がない。全生活が臨場苦悶の束縛を受けてゐる人には悲觀的な期待恐怖の姿はまるで現はれることが出來ない。例へば臨場苦悶とか汽車恐怖とかいふホビイの多くは大人になつて初めて現はれるし、暗闇、雷、動物に對する恐怖の方は生れ落ちるなり存在してゐるやうである。前者のホビイは重症の意義を有し、後者のホビイはむしろ性分とか素因といふやうな姿を持つてゐる。後者のこの種のホビイを示す人に對しては私達は普通なほこれと類似した他のホビイを推測しても差支へない。精神分析學はこのやうなホビイをひつくるめて恐怖ヒステリ

ィの中に入れてゐると私は附言しなければならぬ。換言すれば、精神分析學はかやうなホビイを御承知の轉化ヒステリィに非常に密接してゐる疾患と觀じなくてはならぬのである。

神經症恐怖が示す第三の形はわれわれに一つの謎を提供する。第三の形では恐怖と切迫する危險の二つの間にはつきりした連絡が見ひ出せない。この恐怖は例へばヒステリィの場合ではヒステリィ發作に隨伴して現はれる。あるひは興奮といふいろいろの條件の下にも現はれる。後者の場合では情緒表現、少くとも恐怖情緒を豫想してもよい。あるひはすべての條件の拘束から脫して、私達にも患者にも不理解な自由な恐怖發作として現はれることもある。發作が現はれたために誇大になつたといへる危險とか原因を見ひ出し得ずとも、私達は廣く深く進入することが出來る。かやうな偶發な發作に於て私達が恐怖狀態と名附けてゐる錯綜を個個の成分に分解出來ることを經驗してゐる。發作の合體は强度に發達した個個の症候、卽ち震顫、眩暈、心悸亢進、呼吸逼迫によつて代表され得る。そして私達が恐怖と申してゐる全感情はこの場合全然缺けてゐるか、現はれてゐても不鮮明な姿をとつてゐる。さらに私達が「恐怖等價値」として記述してゐるこの狀態は、すべての臨床的及び病原的關係に於て恐怖と對等の地位を占めてゐるのである。

今や二つの疑問が現はれてくる。第一に危險が全くないか、あるひは危險が微微たる役割しか演

じてゐない神經症恐怖が果して、飽く迄も危險への反應であると申せる現實恐怖に關聯してゐるといへるだらうか。第二に神經症恐怖はどのやうに解したらよいのか。私達は何はともあれ恐怖あるところには必ず、人がこはがるべきあるものが實在してゐなくてはならぬといふ前提を掲げてみたい。

神經症恐怖の理解に對して只今臨床的觀察から數多の緖口が現はれてくる。私達は諸君にそれの有する意義を次に述べてみることにする。

(a) 期待恐怖若くは一般的不安は性生活のある過程、私達の言葉で申せばリビドのある利用と密接な關係を有してゐる。この種の實例で最も簡單な最も敎材的なものをお話してみる。例へば所謂不全な興奮に置かれた人、換言すれば烈しい性興奮に於て十分な捌口が發見出來ず、滿足な結末に達し得ない人にこの種の恐怖が現はれてくる。だから婚約期にある男とか、ポオテンツが弱い男若くは受胎を用心して性交を早く不完全に行ふ男を夫に持つた妻がこの種の實例になる。この條件の下ではリビド興奮は消失してそれの代りに恐怖が發生する。勿論恐怖は期待恐怖の形とか發作及び恐怖等價値の形で現はれる。常習的に中絕性交を用心深く行ふ時は、この習慣は男、男以上に特に女にあつては常に恐怖神經症への原因となる。だからかやうな病例に接すれば、第一にこの方面の

病原を檢索しなければならぬと臨床家に忠告しておかねばならぬ程である。人は性的の惡習慣を抛棄する時には、恐怖神經症が消失することを無數の經驗から確信することが出來るものである。

性的禁慾と恐怖狀態が關係してゐることは、私が知つてゐる限り、精神分析に緣遠い醫者からでも承認されてゐる事實である。ところがお醫者は二つの關係を逆に考へて、このやうな患者は最初から恐怖症への傾向を有してゐて、この結果性的事物にも遠慮するやうになつてゐるといふ意見を持してゐるのだと私は自分だけで考へてゐる。併しこれと正反對な事實を女の態度が敎へて吳れる。女の示す性的活動はその根本に於て受動的性質である。換言すれば男の方からの取扱によつて決定されるものである。妻の方が感受性が强ければ、卽ち妻の方が性交により傾向を有し、妻の方が快感の絕頂により容易に達するものであれば、夫の陰萎若くは中絕性交に對して、妻は恐怖現象でもつて、より確實に反應するのである。だから不感症の妻若くはリビドの少い妻はさやうな虐待に平然としてゐる。現代に於て醫者が常に推奬を惜まない禁慾と申すものは、滿足といふ捌口を拒絕されたリビドがそれに準じて强烈になり、同時にその大部が昇華作用によつて鎭定されぬ時は當然、恐怖狀態の發生に同一意義を持つものである。病氣が現はれるか現はれないかの決定は常にリビドの量的因子に存してゐる。病氣でなしに性格形成を考察してみても、私達は容易に、性的制限はあ

る不安と躊躇と平行すること、一方無恐怖狀態と大膽な冒險心は性的欲求の自由な活躍を伴つてくることを知るのである。この相互關係は文化の種種さまざまな影響によつて變化して、昔より複雜になつたといふものの、恐怖は性的制限に密接してゐる事實は人類の水平線に對して今日でもやつぱり眞實であると申せる。

リビドと恐怖が發生的に因果關係を持つてゐるといふ只今の事實を語るすべての觀察を私は諸君に今迄に報告してゐなかつた。次のやうな觀察はこれを證明する。例へばある年齡は恐怖症の發生に影響する。卽ち思春期とか更年期にあつてはリビド產物が非常に豐饒になるために恐怖狀態が喚起される。多くの興奮狀態を觀察してみれば、リビドと恐怖の混合及び最後にリビドが恐怖によつて全部置換されることを直接に知ることが出來る。私達がこれ等すべての事實から受ける印象は二重になる。第一に正當な利用を禁ぜられたリビドの堆積を中心とする場合と、第二に徹頭徹尾肉體的過程の領域に存してゐる場合である。どうしてリビドから恐怖が發生するかの疑問は今日でも解決出來るものでない。私達は單にリビドが消失してその代用に恐怖が現はれることを確定するだけである。

(b) 第二の指針を精神神經症の分析、特にヒステリイの分析から借りてくることにしよう。この

種の疾患に於ては、恐怖がしばしば症候に伴つて現はれることを聞いてゐたが、症候と結びつかずに單獨に恐怖が發作となりあるひは持續狀態となつて現はれる。患者は自分が何に恐れてゐるかを知つてゐない。患者は明らかに第二次推敲の作用によつて恐怖を極く卑近なホビイ、例へば死ぬとか狂ふとか、雷にうたれるとかいふものに結びつけてゐる。若し私達が恐怖、若くは恐怖を伴つてゐる症候が發生した情況を分析にかけてみると、正常な心的潮流のあるものが堰き止められて、それが恐怖現象によつて置換されたことを常に摘發することが出來る。言葉をかへて申せば、私達は無意識過程を恰も何等抑壓を受けない、意識への進行を何等妨害されないもののやうに構成することが出來る。この過程はある一定した情緒を伴つてゐたのであらう。そして今や意識への正常な潮流を伴つてゐるこの情緒が抑壓される時は、情緒は、その固有の性質がどんなものであつても、いかなる場合でも、恐怖でもつて置換されるのである。從つて私達がヒステリイ性恐怖狀態を見る時に、それの無意識的相關はそれと類似した性質、例へば恐怖、羞恥、當惑のやうな興奮であるか、若くは積極的なリビド興奮か、あるひは激忿とか怒りとかいふ敵對的、攻擊的な興奮であり得るのである。若しそれに屬する觀念内容が抑壓を蒙むるなら、あらゆる情緒興奮は恐怖によつて兩替されるのである。だから恐怖はどこへでも流通する兩替錢と申せるのである。

(c) 第三の觀察は一見著しく恐怖が免除されたやうに見える强迫動作を示す患者に見られる。若し私達がさういふ患者が行ふ强迫動作、例へば淸めとか儀禮等に妨害を加へてみるか、若くは患者自らがその强迫動作の試みを進んで中止するならば、患者の心の中に狂ほしい恐怖が首を擡げて、いやでも應でもその强迫動作をやらずにはをられなくなる。かくて私達は恐怖は强迫動作の裏に隱されてゐたこと、恐怖を逃れんがためにのみこの强迫動作を行つてゐることを知る。だから强迫神經症に於ては普通ならば現はれなくてはならぬ恐怖が症候形成によつて置換されてゐる。そして私達がヒステリイを觀察して見れば、この神經症に於て同一な關係が存してゐること、卽ち抑壓過程の結果として、ある時は純然たる恐怖發生、ある時は症候形成を伴つた恐怖、ある時は恐怖のない完全な症候形成を發見するのである。從つて一般に症候は普通の狀態なら避け得られない恐怖發生を避けるためにのみ形成されるといつたとて、それは抽象的意味に於ては決して不當でないやうである。この見解を通して恐怖は恰も神經症問題に對するわれわれの興味の焦點に位するやうになつてくる。

恐怖神經症の觀察から私達は、リビドがその正常な利用から轉向し、その結果恐怖が發生することは肉體的過程といふ土臺に於て行はれると結論した。ヒステリイ及び强迫神經症を分析してみれ

ば、同一な結果を伴ふ同一な轉向はまた心的動因からの否定作用であり得るといふ結論が生じてくる。だから私達は神經症恐怖の發生に就てはいろんな知識を持つてゐる譯になる。いや無限の知識を有してゐるやうである。併し私は只今のところこれ以上に前進する道を見ひ出してゐない。私達が提出する第二の任務、卽ち變態的に利用されたリビドである神經症恐怖と、危險への反應に相當してゐる現實恐怖の間に、連絡をつけることが大變むづかしいもののやうに思はれてくる。この場合二つは全く遠隔した事物であると考へてもよからう。そして私達は現實恐怖と神經症恐怖を感覺に於て相互に區別する手段を有してゐないのである。

若し私達がこれ迄幾度も主張したやうな自我とリビドの對立を前提とするなら、結局只今求めてゐる二つの連絡が成立することになる。恐怖發生は危險に對する自我の反應であり、逃走の準備を告ぐるシグナルであることを知つてゐる。だから神經症恐怖に於ては自我はリビドの欲求に對して同樣な逃走を試み、この內在的危險を恰も外來的危險であるやうに取扱ふといふ見解が當然生じてくる。だから恐怖が生ずるところには人がこはがるべきあるものが存してゐるといふ豫想はこの見解によつて實現されたことになる。併しこれと同じ考へ方はうんと進めることが出來る。外來的危險からの遁走は一轉して固守と合目的性手段でもつて防禦に變ずるやうに、神經症恐怖の發生もま

た容易に恐怖をしばりつけようとする症候形成に變化するのである。

今や他の箇所に理解の困難が現はれて來た。自我がそのリビドから逃避することを意味する恐怖は、このリビド自體から喚起されたものでなくてはならなくなる。これは不鮮明な意見でない。そしてこの意見はある人のリビドはその根本に於てはその人に屬し、リビドが何か外界のあるもののやうにその人に對立して現はれ得ないことを忘れないやうに警告して吳れてゐる。これは恐怖發生の局所的力學である。どういふ種類の心的エネルギィが消費され、どういふ精神體系に由來してゐるかは私達にも今日不明なところである。私は諸君にこの疑問の解答を與へることが出來るとお約束は出來ないが、私達は他の二つの緒口を探り、われわれの思索を援助するために、直接の觀察と分析的硏究をもう一度活用することに努めようと欲してゐる。これから一つ小兒に於ける恐怖の起原とホビイに結びついてゐる神經症恐怖の由來を探ることにしよう。

子供の懷くこはさといふものは非常に普通のもので、そのこはさが神經症恐怖であるか、若くは現實恐怖であるか區別することは極めて困難である。この區別の價値は小兒の態度に從つて問題となる。何となれば、一方に於て、子供は珍らしい人、新しい場所、新しい物品を悉くこはがるのになんの不思議もない。そして私達はこの反應を子供の臆病と無知から容易に說明することが出來る。

だから、小兒は現實恐怖に對して强い傾向を有してゐること、若し小兒がこの恐怖を遺傳として生れながらにして所持して來たのなら、この種の現實恐怖は誠に合目的性のものであると思はれる。小兒はこの時單に原始人及び現今の野蕃人の動作を反復してゐるのであらう。原始人とか野蕃人は自分の無知と孤獨のために、あらゆる新奇なもの、今日われわれに最早何等の恐怖も與へないやうないろいろの日用品に對しても恐怖を懷くのである。小兒のホビィの一部が少くとも私達が人類進化のこの太古期に立證するものと同一であつたなら、私達の豫想は見事に命中したことになる。

他方すべての小兒が悉く同一程度に於てこはがらないこと、すべての物象や情況に對して一般の子供以上に特別な臆病を示す子供は後年神經症者になることを私達は看過することが出來ない。だから神經症への素因は既に現實恐怖への著明な傾向の中に姿を見せてゐるといへる。卽ちこはさが初徵として現はれてくる。そしてその子供が後年大人になつた時に、私達は彼が萬象に對してこはがつたために、彼のリビドの高さに對してこはがるのだと結論することが出來る。この結論をもてすれば、リビドから恐怖が發生することは考へられなくなる。そして私達が現實恐怖の條件を探究する時に必然自らの臆病と孤獨の意識――アドレルの術語を借れば低格感（Minderwertigkeit）――が、若し小兒時代からずつと成熟期迄持續出來るものであるなら、神經症の最後の土臺となる

といふ見解に到達することになる。

この事實は非常に簡單であり非常に分かりよいもので、當然私達の注目をひきつける權利を有してゐる。勿論この事實によつて神經質に對する私達の立場が變化し出す。低格感の持續――從つて恐怖形成と症候形成の持續――は立派に立證出來るやうである。若し私達が健康として知つてゐるものが現はれてくるのが例外であるなら、その健康といふ例外にむしろ説明を與へなければならなくなる。併し小兒の懐くこはさを綿密に觀察すれば一體何を知るであらう。小さい子供はまづ第一に他人をこはがる。情況の方は、それが人間を含んでゐる時に初めて有意義になつてくる。だから一般に情況はずつとあとで恐怖の對象となるのである。併し子供といふものは他人を、その人が自分に惡意を持つてゐるため、あるひは自分の弱さと他人の强さを比較するために、換言すれば他人を自分の生存、自分の安全、自分の自由への侵害者と認めるためにこはがるのでない。世界を支配する攻擊本能を恐れる、かやうな猜疑の深い子供は理論的に考へれば實に不幸な畸形兒である。子供が他人の姿に恐れるのは、他人の姿が信頼し熱愛し切つてゐる人、第一に母の姿に取つて變るがためである。これは子供の絕望であり子供の憧憬である。この絕望、この憧憬が恐怖に轉化するのである。言葉をかへば、その時に浮揚狀態に保つことの出來ない利用されないリビドが恐怖として

發射されるのである。小兒性恐怖のモデルであるこの情況の中に、分娩行爲中の最初の恐怖狀態の條件、卽ち母からの分離が反復されてゐることは殆ど偶然とは申されない。

小兒の最初の情況ホビイは暗黒と淋しさに對する恐怖である。暗黒に對する恐怖はしばしば全生涯殘る。二つに共通なことは愛する乳母、卽ち母を見失ふところにある。暗さをこはがつてゐる子供が隣室のものに「ばあや。お話してよ。あたいはこはいんだもの。」と叫ぶ。「でも何がそんなにこはいの。坊は私の顏が見えないぢやないの。」子供はそれに對して「誰かがお話をすれば、ここが明るくなるのよ。」といふ。暗黒への憧憬はかくて暗黒への恐怖に轉化される。神經症恐怖は單に第二次的であり、現實恐怖の特殊のものであるといふことを知るどころか、私達は却つて小さい子供に於て、利用されないリビドから發生したといふ本質的特徴に關しては神經症恐怖と共通したあるものが現實恐怖として活動してゐることを知るのである。小兒は正當な現實恐怖のうちごくちよびりのものだけをこの世に持參して來たやうである。後年ホビイの條件となり得るすべての情況、例へば高所とか川に架つた狹い橋とか、汽車旅行、船といふものに子供は何の恐怖も示さない。子供が無知であればある程、それ等に恐怖を示すことは少い。生命を保護しようとするこの種の本能が出來るだけ澤山遺傳されることは非常に望ましいことである。もしさうであるなら、次から次へと

遭遇する危険に陷ることを豫防しなければならぬ警戒の使命はこの遺傳によつて大變容易になつたであらうに。だが實際のところ子供は初めは自分の力を恃んで、危險を知らないがために大膽不敵に振舞ふ。子供は川岸を走り、窓ぎはに攀上り、尖つた物品や火を弄ぶ。略言すれば、子供といふものは自らに危險を與へ、保護者をはらはらさすことを悉く實行するのである。大人は子供がこのいたましい體驗を自ら甞めるのを許さないから、最後に子供の心に現實恐怖がめざめてくる。これは明らかに教育の力であるといへる。

ここに子供がゐるとする。この子供が恐怖へのこの教育を非常に素直に受け、次いで大人が未だ知らして吳れなかつた危險を自分の力で發見するなら、子供は生れつきその體質に於て大量のリビド要求を持つてゐ、若くはリビド滿足に早くから惡づれしてゐるといふ說明は只今の子供に立派にあてはまる。かやうな子供のうちから後年神經症者が輩出したとて何の不思議もない。神經症の發生を非常に促進するものは、莫大なリビド鬱積を長い時間我慢出來ないところに存してゐることを知つてゐる。この點に於ても私達がつひぞ否定しなかつた體質的因子はそれの當然の權利を持つてゐることを御覽になるだらう。だが何人かが體質的因子だけを力說して他のすべての因子を等閑にし、觀察と分析兩方からの一致した成績によつて、體質的因子などまるで存してゐない、存してゐ

ても極めて微微たる役割しか演じてゐないといふやうな場合にも、この體質的因子を高唱する時は、私達は飽く迄もこれに反對するものである。

諸君は子供のこはさに對する觀察から次の總括を作られよう。小兒性恐怖はそれ程まで現實恐怖と密接してゐない。むしろ大人の神經症恐怖の方に關聯してゐるのである。小兒性恐怖は神經症恐怖と同じく利用されないリビドから發生し、失つた愛の對象を他の物象若くは情況によつて置換するのである。

今や諸君はホビイの分析は一向私達に多くの新事實を惠まなかつたことを聞いて喜ばれよう。即ちホビイに於ても小兒性恐怖に於けると同一のものが起るのである。即ち發射されない、利用されないこのリビドは見掛けだけ現實恐怖に轉化して、その結果とるにも足らぬ外來危險がリビド要求の代表に立つのである。この一致は決して不合理でない。何となれば、小兒性ホビイは私達が「恐怖ヒステリイ」の中に數へてゐる後年のホビイの原型であるばかりでなく、それの直接の前提であり、それの前奏曲であるからである。すべてのヒステリイ性ホビイを溯れば小兒性恐怖に達する。そしてたとへ內容が違つてゐても、むしろ違つた名前を與へなくてはならなくても、ヒステリイ性ホビイは小兒性恐怖の連續である。二つの情緒の相違はそれのメカニズムに存してゐる。大人にあ

つて、リビドが恐怖に轉化するためには、憧憬としてのリビドが一瞬間利用されないだけでは十二分でない。大人は早くからかやうなリビドを浮揚狀態に保つこと、あるひは他のものに利用することを知つてゐる。併し若しリビドが抑壓を受けた心的衝動に屬してゐるなら、意識と無意識の區別が未だ存してゐない小兒に於けると同一の關係が再成され、小兒性ホビィへ退行することによつて、譬へてみれば掛橋が作られて、この掛橋によつて、リビドはやすやすと恐怖に轉化することが出來るのである。

諸君の記憶にもあるやうに、私達は抑壓に就て既に澤山お話したが、その時は大抵抑壓さるべき觀念の運命ばかりを研究してゐた。と申すのは、この方が分かりよかつたし、お話しやすかつたからである。抑壓された觀念にひつついてゐる情緒の方は一體どうなるかといふ問題は毎度觸れずにお預けにしてゐた。只今初めて私達は、正常な進路を流れる情緒がどんな性質のものであつても、恐怖に轉化することがこの情緒の次に來るべき運命であることを知る。この情緒轉化は抑壓作用の最も重要な部分である。無意識的情緒の實在を無意識的觀念と同一意味に主張出來ないから、この點を詳しくお話するのは容易な業でない。觀念はそれが意識的か無意識的かの區別をとりのぞけば常に同一である。私達は何が無意識的觀念に相當するものかを知らすことが出來る。ところが、情

緒と申すものは觀念とは全く違つたやうに判斷しなければならぬ一つの發射作用である。無意識に於て情緒に相當するものが何であるかを話さうと思へば、心的過程に關するわれわれの前提を十分深く考察し十分はつきり呑み込まねばならぬ。只今のところそんな事は到底出來ない相談である。兎に角恐怖發生は無意識體系に密接してゐるといふ丁度只今受けた印象を尊重しておきたい。

恐怖への轉化、もつと旨く申せば、恐怖の形で發射することは、抑壓を受けたリビドのすぐ次の運命であると申した。これは唯一無二の運命若くは終結の運命でないと私は附加しなければならぬ。神經症に於ては、この恐怖發生を防遏しようと努力する過程が行はれる。そしてこの過程はいろいろの方法で恐怖發生をしばりつけることに成功してゐる。例へばホビイに於て私達は神經症的過程の二つの段階を明瞭に區別することが出來る。第一の段階は抑壓を果たしてリビドを恐怖に移行せしめ、その結果恐怖は外來危險に結合する。第二の段階はあらゆる用心と安全を作るところにある。それによつてこの外界に投射された危險との接觸が避けられるのである。抑壓は危險視されたリビドに直面した自我の逃避への試みに一致してゐる。ホビイは外的危險に對する要塞に譬へられる。この場合この外的危險は恐れられたリビドが代表してゐる。ホビイに於けるこの防禦組織の弱點は勿論、外界に向つて非常に強くなつた要塞が却つて內部から崩壞するところに存してゐる。外界へ

のリビド危險の投射は決して見事に成就するものでない。この故に他の神經症に於ては、恐怖發生の可能性に對する防禦の他の組織が用ゐられてゐる。これは誠に神經症心理學の最も興深い一章であるが、殘念にも私達は深く進むことが出來ない。このためには前以て基礎となるべき專門智識が必要である。私はこれになほ二、三の事實を附加するに留めておかう。私は諸君に「反對裝塡」に就て既に述べたことがある。卽ち、自我は反對裝塡を抑壓の上に消費し、抑壓を永續せしむるために、自我は飽く迄も反對裝塡を維持しなければならない。抑壓後恐怖發生に對していろんな形の妨禦を遂行することは實にこの反對裝塡の使命となる。

話をホビイに戻さう。ホビイの內容だけを說明し、ホビイの由來、卽ち甲なる物象、乙なる物象若くはある情況がホビイの對象になることのみに興味を集中するのはいかに淺薄であるかに諸君がお氣附きになるやうに希望したい。ホビイの內容は夢に於ける顯在夢の正面と殆ど同一の意義しか有してゐない。ホビイのかやうな內容の中にはスタンレイ・ホオルが指摘したやうに種族發生的の遺傳によつて恐怖對象となつた多くのものが存在してゐることを認めてもよい。勿論そこにはある範圍の制限が必要である。かやうな多くの恐怖事物は危險と僅かに象徵關係によつて結合することは只今の事實と一致してゐる。

かくて私達は恐怖の問題が神經症心理學の疑問に於て殆ど中樞ともいへる地位を占めたことを確信した。私達は恐怖發生がリビドの運命と無意識の體系に密接してゐる事實から深甚な印象を受けた。私達はただ一點だけを結びつけることが出來なかつた。私達の見解の中に一つの間隙がある。卽ち現實恐怖とは自己保存を求める自我衝動の表現と見做さなくてはならぬといふ要するに殆ど異論もない事實が殘されてゐる。」

第二十六章　リビド說とナルチス型

私達は再三再四、そしてつひこの間も自我衝動と性慾の區別を論じた。とりわけ抑壓といふ作用から私達は、二つの衝動が對立してゐること、性慾は形式上は自我衝動に從屬して退行的迂回を迹つて滿足を求めるやうに强いられ、せめてその頑强といふ性質をもつて自我衝動に對する敗北の代價を見附けてゐることを知つた。次に二つの衝動はその起原からあの必要といふ女敎師にめいめい違つた關係を持してゐて、その結果二つの衝動は同じ進化を通らずに、現實原理に對しても同一の態度を示さなかつたことを學んだ。最後に私達は性慾が自我衝動より何倍かしつかり恐怖情緒に結びつけられてゐることを知つた。だがそのうちこの第三の結論はある重大な一點に於て未だ完全のやうに思はれない。この故に私達はこの結論をもつと鞏固にするためになほ次の顯著な事實、卽ち最も根本的な自己保存の本能である飢と渴の不滿が、たとへ姿を變じても決して恐怖にならないが、滿たされないリビドは、それが姿を變ずる時は、先刻お話したやうに、恐怖になるといふ事實は、何時でも觀察出來る誰でも知り拔いてゐる現象であることを問題としたいのである。

自我衝動と性慾を區別しようとする私達の主張はぴりつともしないものである。性追求の存在は個體のある特別な活動と考へられる。この區別にどういふ意義が附帶してゐるか、私達がこの區別をどの點迄深くどれ程突きこんで考へようとしてゐるかを僅かに自問することが出來る。だがこの自問に對しては、性慾がそれの肉體的及び精神的表現に於て、私達が性慾と對立せしめてゐる他の衝動に比してどの範圍迄違つた行動をとるものであるか、またこの分化から生じた結果がどれ程意義深いものであるかを確定した後に返答が下せるのである。私達は勿論二つの衝動に存する本質の差違を主張する動因を有してゐない。さらに二つの本質の差違はさうたやすく確定出來るものでない。二つの衝動は單に個體のエネルギィ源泉への名前として私達の面前に立つてゐる。そして二つの衝動がその根本に於ては一つのものか、あるひは本質的に異なつたものか、若し一つのものであるなら、いつ二つに分岐したものかといふ議論はこれ等の概念の土臺とすることは出來ないが、この議論はこれ等の概念の背面に存してゐる生物學的事實に立脚しなければならない。この事柄に就て私達は只今のところ大して知つてゐない。よし多くを知つてゐても、そんな事は精神分析研究の問題として考察する必要もないものであらう。

ユング流にすべての衝動の始原的統一を高唱して、すべてに漲つてゐるエネルギイを「リビド」

と呼んだところで、私達は大して得るところのないのは受合である。どんな小細工を施しても性機能を精神生活から消去さすことは出來ないのだから、私達は性リビドと無性リビドを別けて考へるやうに強いられる。併しリビドといふ名稱は、私達がこれ迄用ゐたやうに、どこ迄も性生活の衝動力といふ特權を有してゐるのだ。

だから性衝動と自己保存の衝動をどの範圍迄はつきり正當に區別出來るものかといふ疑問を解決したところで、こんな事は精神分析には大して役立つものでないと私は考へてゐる。さういふ問題は精神分析の畑のものでない。勿論生物學の方から考へれば、この區別がある重要なものを意味することを裏書きするやうないろんな見地が湧いてくる。何となれば、性慾は個體を延長せしめて種に連鎖をつけようとする生體の有する唯一の機能であるからである。この機能の演習は他の機能の演習のやうに個體にいつも利益をもち來たすものでない。いや、この機能の有する譬へようもない熾烈な快感のために、個體はその生命を脅し時には生命を奪はうとする危險に瀕するのである。個體の生命の一部を來るべき子孫への素質として保持するために、個體はまた他のすべてのものと範疇を異にした全く特殊な新陳代謝の過程を必要とする。そして最後に、自己自らを第一とし、性慾を自己の滿足の一手段とする個體は、生物學の立場から見れば、世代の一挿話、恰も死後に殘る世

襲財産の一時的保管人と同じやうに、虚しい不滅を授けられた生殖細胞へのはかない附屬物と申せるのである。

ところが神經症を精神分析的に說明する上にはこんな大袈裟な見地など不必要である。私達は性衝動と自我衝動を別箇に硏究することによつて交付神經症といふ部類を理解する鍵を持つた。その鍵によつて性衝動が自己保存衝動と衝突する本當の場所、生物學的にいへば――勿論言葉は不正確であるが――獨立した個體としての自我の一部位と世代の成員としての他の部位が相反目する場所をつきとめることが出來た。このやうな分離は恐らく人類にのみ存してゐるものである。この故に、大局から眺めてみても、神經症は實に動物に優る人類の特權とも申せよう。人類のリビドがあまり强く發達し過ぎたこと、多分リビドのこの發達のために人類の精神生活の構成が複雜になつたことが、かやうな葛藤の發生に對する條件となつたやうに考へられる。これはまた明らかに人類が動物といふ集團から一步飛躍した大進化の條件とも考へられるのである。だから人類が神經症になり得る能力は、人類の有する他の天禀の半面に過ぎなかつたのであらう。だがこんなことも要するに單なる思辨に過ぎない。こんな思辨のために當面の問題から脫線するやうだから私達は別の話に轉ずることにしよう。

自我衝動と性衝動はそれの表現によつて區別が出來るといふ臆說の下に私達の硏究は今迄ずつと進められたのであつた。交付神經症ではこの臆說は容易に立證出來た。私達は自我がそれの性追求の對象にふりむけるエネルギイ裝塡を「リビド」と名附け、自我衝動から發した他のすべてのエネルギイ裝塡を「興味」と名附けた。そしてリビド裝塡、リビドの轉化、リビドの最後の運命を硏究することによつて、精神力の曠野に初めてある見解を持つことが出來たのである。交付神經症はこの方面の硏究に最も適切な材料を提供して吳れた。併し自我、種種な組織よりの自我の構成、その組織の構造及び機能は私達に隱されてゐた。そして他の神經症障害を分析にかけて初めて私達はこの見解に達することが出來るだらうと想像しなければならなかつたのであつた。

ずつと昔に私達はこのやうな他種の疾患に精神分析の見解を應用し始めたのである。早くも一千九百八年にアブラハムと私が意見を交換した時に、對象へのリビド裝塡が缺けてゐることが早發性癡呆（精神病の一つに考へられてゐる）の主要な特徵であるといふ定義を發表した。（「ヒステリイと早發性癡呆の性心理的差違」）。それから、ぢや、早發性癡呆の患者にあつて、對象からそれたリビドは一體どうなるのだらうといふ疑問が湧いて來た。アブラハムは何の躊躇もせずにかう返答した。このリビドは自我にまひもどる、そしてこの反射的復歸が早發性癡呆の誇大妄想の源であると。

戀愛生活に見られるやうな對象を性的に誇大に評價することはすべての點でこの誇大妄想とよく似てゐる。かくて私達は常態な戀愛生活の知識でもつて、精神病といふ疾患の一特徴を學べることを初めて知つたのである。

アブラハムが提唱したこの最初の意見が精神分析學に採用されて、精神病に對する精神分析派の態度の土臺となつたことを諸君に早速に申し上げておきたい。かくて分析派は、私達が對象に粘著してゐる姿で發見する、對象に於て滿足を獲得しようとする努力の表現であるリビドはまた對象を捨てて、その對象の代りに自我を置くことが出來るといふ說を漸次に懷くやうになつて來た。そしてこの說はしだいしだいに鞏固になつて來た。リビドのかやうな使命に私達はナルチス型（Narzissmus）といふ名前を與へた。この名前はネッケの記載したある性慾倒錯から借用したもので、この例では成人した個體が普通異性の性對象に對してのみ浪費するすべての愛撫を自らの肉體にふりまくといふのである。

自らの肉體にリビドがこのやうに固著し、ある對象の代りに自らの肉體が對象となるなら、こんな現象は何も稀有な、とるにも足らぬものでないことに氣が附く。むしろこのナルチス型は普遍的な始原的な狀態であると申せる。この狀態から初めて後年の對象愛が發生する。この故にナルチス

型は消滅してしまふ必要はないのである。對象リビドの進化史からもまた、多くの性衝動は、私達が自己春情的にといふやうに、最初は自己の肉體で遂情すること、自己春情へのこの能力は現實原理への教育に於ける性慾の停止の根柢をなすものであることを思ひ出すべきである。だから自己春情はリビド利用のナルチス段階の性活動であつたのである。

簡略にするために、私達は自我リビドと對象リビドの關係から一つの觀念を作つてみた。私はこの觀念を動物學から拜借した比較によつて諸君に示すことが出來る。ここに一つ極めて分化の少い原形質の小塊から出來てゐる最も簡單な生物を考へて欲しい。この生物は擬足と名附ける突起を出す。この突起の中へ生物は自分のからだの原形質を流す。ところが生物はこの擬足を再びひつこめて元の小塊に歸ることが出來る。只今擬足を出すことをリビドを對象に送ることに譬へてみる。この場合リビドの大部分は自我の中に殘つてゐることになる。そして私達は常態にあつては自我リビドは自由に對象リビドに轉化され、對象リビドは再び自我へもどされることが出來ると假定出來る。

この觀念を利用して今や精神狀態の全局を說明することが出來る。いや、もつと穩當に申せば、私達が常態生活のうちに數へ上げねばならぬ狀態、例へば戀愛、器質的疾患、睡眠といふやうな心的態度をリビド說の術語で記述することが出來る。睡眠狀態に就て申してみれば、この狀態は外界

るものは、睡眠願望に行使され、なほこの上に飽く迄も利己的な動機によつて支配されてゐる。只今リビド説で申せば、睡眠とはすべての對象裝塡、卽ちリビド的な對象裝塡、主我的な對象裝塡がすべて抛棄されて、自我の中にひつこめられた狀態である。かう申せば睡眠による休養及び一般疲勞の本質に新しい光が差し込んだことにならないものだらうか。この考へ方によつて、每夜每夜寢てゐる人に訪れる胎內生活への安らかな隔離の姿は心理方面から見ても完全になる。寢てゐる人に於てはリビド分布の原始狀態、卽ち自己滿足を營んでゐる自我の中にリビドと自我興味が未だ分離せずに、ひつついたまま同棲してゐる原始狀態が再び形成されるのである。

只今二つの考察が殘つてゐる。第一に、ナルチス型とエゴイズムは概念上どう區別すればよいのか。ナルチス型はエゴイズムのリビド的補體だと私は考へてゐる。個體の利益だけを念頭においてゐる場合にはエゴイズムと申す。ナルチス型と申す時には、個體のリビド滿足をも考へに入れてゐる。實地上の動因から兩者をずつと引離して追求することが出來る。人は絕對に利己的でありうるが、然も對象によつてのリビド滿足が自我の要求に屬してゐる限り、强度のリビド的對象裝塡を保つことが出來る。從つてエゴイズムと申すものは自我に何の侵害も與へずに對象を追求しようと氣

を附けるものである。人は利己的でありうるが、同時に過大なナルチス型、換言すれば、極く少量の對象欲求を持つことが出來る。そしてこのナルチス型は再び直接の性滿足、ある時は性欲求からそれをさらに高尙な追求、私達が時時「肉慾」に對照して「戀愛」と呼びならはしてゐる追求の中に姿を見せる。エゴイズムはこれ等すべての關係に於て自明な一定不變な要素であるが、一方ナルチス型は極めて變異しやすい要素である。エゴイズムと正反對にあるアルトルイズムは概念上リビド的對象裝塡と同一のものでない。アルトルイズムは性滿足なぞ追求しないところが後者と相違してゐる點である。併し全身全靈をうちこんだ戀愛狀態に於てはアルトルイズムとリビド的對象裝塡は合致するのである。大抵性對象は自我のナルチス型の一部、所謂對象の「性的過重」として現はれるところのものをひきつける。若しこの上にエゴイズムから性對象への利他的轉換が附加されるなら、性對象は過大になり、恰も自我を併呑したやうな觀を呈する。

諸君は定めし疲勞を感ぜられたであらう。そこで私は科學の無味乾燥な空想のあとへ、淸涼劑として一つ、ナルチス狀態と戀愛狀態を經濟的に對照した詩を誦することにしたい。私はゲエテの「西東詩篇」から借りてくることにする。

ズライカ。　國民も奴隷も征服者も

つねにみなかく告白す、
「地上の子の至上の幸は
人格にのみこそあれ」と。
「自我をだに失はずんば、
いかなる生も堪ゆるにやすし。
自我の本性を失はずんば、
すべてを失ふも悔なし。」と。

ハアテム。

いかにもと思はるれども、
しかもわれ異なる道にある。
なべての地上の幸は一つとなりて
ズライカにのみわれは見る。
君われに惜みなく與ふる時は、
われは尊き自我となるべし。
君その身を背くる時は、

忽ちわれは自我を失ふ。
かくてハアテムこそは破滅に瀕す。
しかもわれ他なる運命を開けり。
われは直ちにわが身を變じ、
君が撫しますいなせ男とならまし。

第二の考察は夢學への補充である。抑壓された無意識がある點自我から獨立して、その結果、たとへ自我に隷屬するすべての對象裝塡が、睡眠に都合のよいやうに撤退しようとも、抑壓された無意識は睡眠願望に降伏せずに彼の裝塡を支持してゐるといふ假設を附加しなければ、私達は夢の發生を說明することが不可能である。かくてこの無意識は検閲力の夜分の廢棄若くは低下に乘ずること、無意識はその原料から禁壓されてゐる夢の願望を作るために、晝の殘物を驅使することを知つてゐることを初めて解することが出來るのである。また他方にあつては、睡眠願望から命ぜられたリビド撤退に反對する抵抗のある一部は、この晝の殘物とこの抑壓された無意識の間に既に存在してゐる連絡に發してゐると申してもよい。だから私達は今後この重大な力學的特徵を夢形成の精神分析の見解に入れたいと思つてゐる。

器質的疾患、疼痛刺戟、器官の炎症は、明らかにリビドがそれの對象から剝離するはめに陷る狀態を作る。撤退したリビドは身體の疾患部位のより强い裝塡として再び自我にまひもどつてくる。これ等の條件下に、リビドが對象から撤退することは、利己的興味が外界から撤退することよりはるかに著しいと敢て主張することが出來る。この事實からヒポコンドリイを理解する一路が開けてくる。ヒポコンドリイでは器官は同じやうに自我からの心配の種となるが、それはわれわれの認識には疾患とならない。併し私はヒポコンドリイをさらに追求する試みに反對する。あるひは對象リビドが自我に復歸するといふ假定の下に理解しまたは描寫しようとする他の立場を議論する試みに反對する。何となれば、只今諸君の耳にはひらうとする二つの抗議が私に及向つてくるからである。第一に諸君は私が睡眠狀態、疾患狀態、さらに類似の狀態に於て、自由に浮動して、ある時は對象に、ある時は自我に、さらに甲の衝動、乙の衝動に行使されて充塡出來る單一なエネルギイの假設は觀察からでも十分に說明出來るのに、何故にリビドと興味、性衝動と自我衝動を飽く迄も分離して考へようとしてゐるかを知りたいと思つてをられる。そして第二に、若し對象リビドから自我リビド——あるひは一般に自我エネルギイ——へのかやうな轉換が、精神力學に於ける每日每夜反復される常態な過程に屬してゐるなら、どうして私がリビドの對象からの剝離を病理狀態の源である

と論斷しようとしたかを知りたいと思つてをられる。

諸君の二つの質問に返答しよう。諸君の第一の抗議は尤も至極のやうに思はれる。睡眠、疾患、戀愛といふ狀態を論議する上に私達は何もわざわざ自我リビドと對象リビド、リビドと興味を區別しなくてもよかつたのである。ところが諸君はこの抗議をつき出す時に、私達が出發點にとつた研究、目下の問題たる精神狀態を私達が今考察する上の手蔓としようとしてゐる研究を等閑にしていらつしやる。實は交付神經症が發する葛藤を考察することによつて、リビドと興味の區別、卽ち性衝動と自己保存衝動の區別がひとりでに必要となつて來たのである。それ以來私達はこの區別を棄てることが出來なくなつて來たのである。對象リビドが自我リビドに轉化出來るといふ假設、換言すれば、自我リビドを考察に入れなくてはならぬといふ假設は所謂ナルチス型神經症、例へば早發性癡呆の謎を解いて吳れる唯一無二の鍵のやうに思はれる。さらにこの假設はナルチス型神經症がヒステリイと强迫神經症に類似してゐる點、相違してゐる點を十二分に說明して吳れるものである。さらに私達がこのやうな病症で事實と認め得たものをそのまま疾患、睡眠、戀愛狀態に應用することが出來る。どんな方向にも自在に應用が出來、どれ程廣い範圍まで役立つかを知るのである。直接私達の分析的經驗に基づいてゐない唯一の主張は、たとへリビドが對象で消費されようとも自我

で消費されようとも、リビドはリビドであり、リビドは決して利己的興味に轉化されないし、また反對に利己的興味はリビドに轉化されないといふところにある。併しこの主張は既に批判的に評價したあの性衝動と自我衝動の區別を言葉を變へていつただけで、私達は發見的（ホイリスチッチェ）動機からこの區別を無效といはれる時代まで維持してゐたいと思つてゐる。

諸君の第二の抗議も一應御尤のやうだが、惜しいことに的がはづれてゐる。對象リビドが自我に退却するのは直接に病原となるものでない。こんな退却は每晩每晩寢る前に起こつて、起きる時は丁度退却とは反對の過程が行はれることを承知してゐる。原形質の微生物は擬足をひつこめるが、次の瞬間に再び擬足を出す。だがある一定の非常に力强い過程によつてリビドが對象から無理やりにもぎとられる時には、事態はまるで違つてくる。ナルチス型になつたリビドはこの時對象への逆行の道を發見することが出來ない。そしてリビドの運動性がこのやうに妨げられることは當然病原的に作用する。恰もナルチス型リビドがある限度以上に堆積して最早持堪へられぬやうになるのだ。丁度このために對象裝塡に到つたこと、自我はリビドの鬱積によつて病氣に陷らないためにはそのリビドを派出しなければならぬことを私達はまた想像出來るのである。早發性癡呆を深く研究することが私達のプランの中にはひつてゐたなら、對象からリビドを剝離し、對象への逆行の道をリビ

ドに向つて遮斷する過程は抑壓の過程に近接し、抑壓の過程の半面であると見做すべきだと諸君に教示することが出來たに相違ない。だが諸君がこの過程の條件が抑壓の條件と――私達が今日迄知る範圍で――同一であると知ることによつて、何はともあれ諸君が足下にふみしめる地盤は既にお馴染のものであることを感ぜられるであらう。葛藤は同一のもので、同一の力の間に演ぜられるやうに見える。若し捌口が例へばヒステリイに於ける捌口と違つたものであるなら、二つの相違點は單に素因の相違に存してゐるぐらゐである。かういふ患者に於けるリビド進化の弱い箇所は他の階段に存してゐる。諸君も御存じのやうに、症候形成を突發せしめる決定的固著は他の箇所、恐らく早發性癡呆がそれの最後の捌口として復歸する原始ナルチス型の段階に存してゐる。私達がすべてのナルチス型神經症に對してリビドの固著の箇所を想定しなければならぬのは特に注目に價する。この固著の箇所はヒステリイや强迫神經症より進化のずつと早期の段階に溯つてゐるのである。併し私達が交付神經症の研究で發見した概念はまた實地上非常に重いナルチス型神經症の指南にも役立つことを諸君は既に知つていらつしやる。共通點はもつともつと廣汎である。根本に於ては同一の現象界である。だがまづ第一に交付神經症の分析的知識でしつかり武裝しなければ、本來精神病學に屬してゐるこの種の疾患を闡明しようとする使命がいかに見込のつかないものかを諸君はまた

想像することが出來るであらう。

早發性癡呆の症狀――これは大變千差萬別であるが――はリビドを無理やりに對象から剝離して、ナルチス型リビドとして自我の中に堆積さすために生じた症候によつて專ら決定されてゐない。むしろ他の現象が廣い場所をとつてゐる。かういふ現象を溯つて行けばリビドが再び對象に達しようと努力するところに舞ひ戾る。これは丁度復舊法と治療法に一致してゐる。これ等の症候はけばけばしい騷騷しいもので、ヒステリイの症候、極く稀には强迫神經症の症候と明白に類似してゐるが、いろんな點でまた異つてゐる。早發性癡呆では再び對象に、換言すれば、その對象の觀念に達しようと努力するリビドは眞實對象からあるものを掴まへてゐるが、恰も對象の陰影、私から申せば對象に附屬してゐる言語觀念だけを掴まへてゐるのである。この點に就ていろいろお話は出來ないが、逆行しようとするリビドのとるこの種の行動は私達に、意識觀念と無意識觀念の眞の區別を構成してゐるものにある見解を下さすやうにして吳れると私は考へてゐる。

只今の事柄は當然分析研究の次の進步が豫想出來る領域に諸君を導いたのである。私達が自我リビドの概念を研究しようと決心した以來、ナルチス型神經症は精神分析學の畑のものになつてしまつた。この種の疾患に力學的見解を下し同時に精神生活に對するわれわれの知識を自我の理解によ

つて完全にすることが私達の責任となつたのである。私達が求めてゐる自我心理學は私達の自己認識の資料を土臺としてゐるのでなくて、リビドに於けると同じやうに、自我の攪亂と破壞に對する分析の上に立脚してゐなくてはならぬ。交付神經症から得たリビドの運命に關する私達の現在の知識も、萬一これよりもさらに偉大な研究が完成された曉には、極めて淺薄なものになつてしまふだらう。併し現在のところ私達はまだまだ前進してはゐない。私達が交付神經症で利用した術式でもつてしてもナルチス型神經症の陷落は覺束ない。諸君はその理由を早速に耳にされよう。かういふ患者では一寸ばかり侵入すると前に墻壁が聳えてゐて私達の突貫をせきとめてしまふのがおきまりである。交付神經症に對しても私達はかやうな墻壁につきあたることを諸君は御存じだが、私達はこの墻壁を一枚一枚ひきむいて行くことが出來たのである。ナルチス型神經症では抵抗は難攻不落である。たかだか物欲しさうに墻壁の方にのび上つて、はるかなる城の中に何が行はれてゐるかを偵察するぐらゐが落である。だから私達の術式は他の方法で置換しなくてはならない。だがそんな置換が成功するかどうかも覺束ない。といふもののこれ等の患者に對する材料が私達の手許にないのではない。患者達は勿論私達の質問に對する返答としてではないがいろんな表現を示して吳れる。そして私達は交付神經症の症候で贏ち得た知識を利用してかういふ表現を解釋出來ることに思ひあ

たる。兩者の疾患の型の一致は最初に得た收穫を確實とさすに足る程立派である。この術式がどの範圍まで有效であるかは今後の研究に俟つべきである。

なほ別の困難が現はれて私達の行手を阻む。交付神經症の分析的研究に訓練された觀察家のみが、ナルチス型疾患とそれと關聯した精神病の謎を解くことが出來るのである、ところが現代の精神病學者は一向精神分析學を研究しないし、私達精神分析家はごくちよつぴりしか精神病學の實例に接してゐない。準備科學として精神分析の訓練を通過した精神病學者の一つの品種が將來に繁茂しなくてはならない。この魁は現在阿米利加に現はれた。阿米利加では多數の偉い精神病學者が學生に精神分析學の講義をし、研究所長や瘋癲病院の院長は患者を精神分析的に觀察しようと努力してゐる。だがかういふ人達と同じやうに私達もまたナルチス型を包む石垣のかなたへも偵察することに二、三度は成功した。そして私は諸君に私達がこの方法で發見したと確信してゐるものを二、三次に報告したいと思つてゐる。

パラノイアとか慢性の組織的狂氣の症狀は現代の精神病學の分類法にあつてはしつかりした地步を占めてゐない。早發性癡呆もまたこれ等と疑ひもなく五十步百步と申せる。私は嘗てパラノイアと早發性癡呆をパラフレニイといふ共通の名前で總括するやうに提案したことがあつた。パラノイ

アの病型はその内容によつて分類すると誇大妄想、追跡妄想、色情狂（エロトマニィ）、嫉妬狂等となる。こんなものを精神病學から説明しようときばつても一向ものにならない。一つ實例をあげてみることにする。勿論この實例は極めて陳腐なものであるひはぴつたりこないものかも知れぬが、私はこの實例をもつて諸君に原發的傾向から追跡されてゐると信じてゐる患者は、この追跡から、俺は確かに特別重要な人間に相違ないといふ結論を作り、この結論から誇大妄想が發展してくるのであるといふ知的合理化の手段によつて、いかに精神病學の症候から、精神分析學の症候をひき出すことが出來るものかといふ試みを諸君にお話したい。私達の分析的見解によると、誇大妄想はリビド的對象裝塡の撤退による自我擴大の直接結果であり、始原の早期小兒型への復歸としての第二次的ナルチス型であるのである。併し追跡妄想の病歷から私達はある緒口を許して呉れる二、三の例を觀察した。まづ第一に氣が附くのは、病例の大多數に於て追跡する人物は追跡される人物と同性であるといふことである。成程これは立流な説明を許して呉れた。ところが精細に研究した二、三の病例では、健康な時代に自分が最も愛してゐた同性の人物が、病氣になつて以來追跡者に轉化してしまつたことが明瞭になつた。さらに一歩發展すれば、愛してゐた人物が聯想の有名な過程によつて他の人物に置換される病例も可能である。例へば父親は先生とか上官によつて置換される。

私達は日一日と數をまして行くこの方面の經驗から、追跡性パラノイア (Paranoia persecutoria) は過大になつた同性愛的衝動に對して個體が防禦を試みた形であると結論を下したのである。愛情の憎しみへの轉化、この轉化は御存じのやうに愛し憎しむ對象の生命を眞劍に脅かすことが出來るが、これはリビド衝動の恐怖への轉化と一致してゐる。この方の轉化は抑壓過程のおきまりの結果である。これに關して私が觀察した最近の實例をお話することにしよう。一人の若い醫者が彼の町から護送されなければならなかつた。と申すのは、この醫者はその當時迄無二の親友であつたこの地の大學教授の息子を殺さうとしたからである。彼はこの親友が確かに惡魔的計畫と超人的な力を自分に對して奮つてゐるとした。近年自分の家庭にふりかかつたすべての不幸、公私兩事の失策はすべてこの親友の所爲であると考へた。だがこれだけではない。その憎むべき親友とその父親たる大學教授が戰爭さへ巻き起こしてはるか國境を越えて露西亞に出征した。男は親友の生命をさまざまな方法で失はうとした。男はこの惡魔が死にさへすれば、すべての不吉は消滅すると信じ切つてゐた。それでも彼に對する舊い友情がなほ强かつたので、彼の敵を眞近で射擊出來る機會が與へられた時でも、自分の手は痺れていふことがきかない程であつた。私がこの患者ととりかはした短い談話に於て、二人の間の友情關係が中學校時代に迄遡つてゐることが分かつて來た。少くとも一度はこの

關係は友情の境を越えた。ある夜一緒にゐた時に、完全な性交への機會が二人に生じたのであつた。この患者は彼の年配、彼の魅力ある人格に相當するやうな女に未だ嘗て愛情關係を傾けたことがなかつた。彼は一度美しい上流の娘と婚約したが、男が冷淡だといふ理由で娘はこれを破棄してしまつた。それから數年たつて、男が一日ある女に生れて始めて完全な滿足を與へることに成功した丁度その瞬間に只今の疾患が爆發したのである。この女が男に感謝に一杯になつて全身全靈を捧げて抱擁した時、突然男は不可思議な疼痛を感じた。この疼痛は恰も頭蓋の天頂のまはりを鋭利なメスできりまくるやうな感覺であつた。男はこの感覺をあとで恰も人が剖檢の時に腦髓を出すために行ふ切開が自分の頭になされたやうに解釋した。そして自分の親友が病理學者であつたところから、この友達が自分を誘惑さすためにこの女を送つたのだと悟り始めて來た。この時以來彼の眼は昔の親友のたくらみのために自分が犧牲になつた他の追跡に開かれて來たのである。

それでは追跡者は追跡される者と同性でない、換言すれば、同性愛的リビドの防禦としてのわれわれの說明に矛盾するやうな疾患は一體どうすればよいか。この間私はこの種の病例を研究する機會を持つた。そして外觀上の矛盾から一つの確信を有することが出來た。ある若い娘があつた。この娘は男から追跡されると信じてゐた。娘はこの男と二度だけ關係したと告白したが、事實をいふ

と娘ははじめ一人の女に妄想を傾けてゐたのである。この女は母の代用物と考へることが出來た。男との第二回のあひびきの直後娘は同一の妄想をこの女から離して、男に交付さすといふ進歩をとつた。卽ち追跡者が同性であるといふ條件は、この例にあつても、根本に於ては維持されてゐるのである。この女患者は自分の妄想のこの前階段を辯護士及び醫者に打あけた訴への中に述べなかつた。だからこの病例は一見するところパラノイアの精神分析派の見解に矛盾してゐるやうな姿を呈してゐたのであつた。

同性愛的對象選擇はその起原に於て異性愛よりも一歩ナルチス型に近接してゐる。若しこの時異常に强い同性愛的衝動を拒否することに成功すれば、ナルチス型への退行は特別容易に行はれる。私はこれ迄に諸君に戀愛生活の根本を、私が知つてゐる範圍でお話する上に好機會を持ち合はさなかつたし、只今とてもこれを追加することも出來ない。ただ私は對象選擇、ナルチス段階のあとで現はれてくるリビド進化の發展は二つの相異つた定型に從ふことが出來ると申す以上を出ない。二つの定型とは、一つは自らの自我の代りに、自我に出來る限り酷似した者を對象として選擇するナルチス型、他は依賴型(Anlehnugstypus)である。依賴型にあつては別な人生要求の滿足によつて貴重になつた人物がまたリビドによつて對象として選擇される。私達はまた對象選擇のナルチス型へ

の强いリビド固著を顯在的同性愛への素質の中にも數へてゐる。

私がこの學期の始めにある夫人の嫉妬狂の病例に就てお話したことを諸君は思ひ出される。さて私の講演も終りに近づいたから、われわれが精神分析的にどのやうに妄想を説明するかを諸君が聞きたいと心から希望されるだらう。併し私は諸君が豫期されたよりずつと僅かのものしか語ることが出來ない。論理的論證と現實的經驗をもつてして妄想に近づき難いことは、丁度强迫觀念と同じに、妄想若くは强迫觀念によつて表現され同時にこれ等によつて拘束されてゐる無意識との關係でもつて説明が下せる。妄想と强迫觀念の間の差違は、二つの疾患のいろいろの部位と力學に立脚してゐるのである。

パラノイアに於けると同じやうに、私達はいろいろ違つた臨床的病症に分類されてゐるメランコリイに於てもまた、疾患の內部構造への洞察を許して吳れるある部位を發見した。これ等メランコリイ患者が目もあてられない程に悶える自責は本來は他人、彼等が失つた若くは彼等の罪科のために價値を損じた性對象に關してゐる。この事實から、メランコリイ患者は自分のリビドを對象からひつこめたのであるが、所謂「ナルチス性同視作用」と稱すべき過程によつて、恰も自我に投射されたやうに、對象を自我自體の中に設けたのであると結論出來るのである。私は諸君にこの過程を

只今局所的力學的に配列した記述で申せないが、繪畫的に描寫だけは出來る。自我自體は恰も捨てられた對象のやうに取扱はれて、自我は對象にさしむけられてゐた一切の非難と復讐の表現に煩悶する。メランコリィ患者に見らるる自殺傾向、患者の苦悶は、愛し憎しむ對象を鞭うつ同一鞭韃でもつて自らの自我を苛むのであるといふ假設によつて一そう分かりやすくなる。他のナルチス型疾患と同樣、メランコリィに於ても、非常に著明に、ブロイレル以來私達がアンビワレンツとよび習はしてゐる感情生活の一特徴が現はれてくる。アンビワレンツとは同一人物に對して正反對の、卽ち愛と憎しみの感情を懷くことをいふ。私は只今の講義で諸君に感情のアンビワレンツに就て詳しく述べる立場にゐないことを遺憾だと思つてゐる。

ナルチス性同視作用の外にずつと前から私達に知られてゐるヒステリィ性同視作用が存してゐる。私は二つの同視作用の相違點を二、三の明瞭な事實でもつて旣に說明が出來たことだと思つてゐる。諸君の興味を確かにひきつけるメランコリィの周期的な循環的な病型に就て私はある事實をお話することが出來る。卽ち好都合な條件下に——私は二度だけ經驗したのであるが——發作の休歇期に分析療法をやつたのに、前と同一な若くは前と正反對な氣分狀態への復歸が豫防出來たのである。

このことからメランコリィと躁狂（マニイ）に於ても治療の中心は葛藤鎭定のある特別な種類であること、同

じ前提はどこ迄も他の神經症の葛藤とも一致してゐることを學ぶのである。諸君はこの分野に關してどれ程多くの研究が精神分析に殘されてゐるかを想像することが出來よう。

私達がナルチス型疾患の分析によつて人間の自我の組成とそれの諸種の能力からの構造に關する知識を得たいと望んでゐたと諸君に申上げた。ある箇所でこれに着手したことがあつた。觀察妄想の分析から私達は眞實自我の中に一つの能力(インスタンツ)が存してゐること、この能力は不斷に觀察し、批判し、比較し、かやうにして、自我の他の部分に拮抗してゐるといふ結論が作れたのである。卽ち患者が萬一自分のすることなすことはみんな密偵され監視されてゐる、自分の思考のどれもこれも密告され、批評されてゐると私達に訴へる時は、患者は未だ十分に評價出來ない眞實を私達に洩したと考へるのである。患者はこの不快な力を、外からはひつて來た、自分には緣も因りもないあるものと考へるところにのみ彼は誤まりをしてゐる。患者は自分の自我の中に、彼の眞正な自我及びその進化の道程のうちに創造した理想自我へのあらゆる活動を失つた一つの能力の獨裁を感ずる。患者はこの創造物たる理想を始原的な小兒性ナルチス型に結合してゐた自己滿足、然もそれ以來幾多の障害と煩悶とを味つた自己滿足を復舊する目的に作つたのである。私達はこの自己觀察力を自我檢閱官、卽ち良心として知つてゐる。この良心は夜分に夢の檢閱を行ひ、不穩當な願望衝動に對して抑

能力の由來を、兩親、教師及び社會環境の影響の中に、これ等模範とすべき人物のある者との同視作用によつてつきとめることが出來る。

これこそ精神分析をナルチス型疾患に應用することによつて私達が贏ち得た業蹟の二、三であつた。あまり數が少いのは確かだ。しばしば鋭さが未だ缺けてゐる。だが畢竟この鋭さも新天地に確實に信頼することによつて達せられ得るものである。私達は自我リビド若くはナルチス性リビドの概念を利用することによつてこの收穫の一切を手にしたのだ。これ等の助けを借りて私達は交付神經症に際して樹立した見解をナルチス型神經症に普遍することが出來たのである。ところが諸君は、ナルチス型疾患と精神病のすべての障害をリビド説の配下に征服することが私達に可能であるか、私達がいたるところで精神生活のリビド因子が疾患に責任ある因子と認め、未だ嘗て一度も自己保存本能の機能の變革を原因と觀じなかつたことが可能であるかと質問されるであらう。諸君に對する答辯は急を要さない。答辯するのはとりわけ時期尙早の概がある。私達は靜かにこの答辯を科學研究の進歩に委ねることが出來るのだ。若し實際に病原的作用の力がリビド衝動の全權であつて、その結果リビド説が最も簡單な眞正神經症から個體の錯亂中の最も重い精神病に至る迄の全線に凱

歌を奏することが出來たとて、私達は一向驚かない積りである。私達はリビドがこの世の現實、卽ち必要への隷屬に反抗することがリビドの特徴であることを知つてゐるからだ。併し私は自我衝動がリビドの病原的刺戟のために二次的にまきこまれて、自我衝動が無理やりに機能障害に陷るといふのはどうもあやしいことだと考へてゐる。そして若し私達が重い精神病に於て自我衝動自體が一次的に錯亂することを認めたなら、私達の硏究方針は決して誤まつてゐないと私は信じてゐる。この方面は少くとも將來に俟たねばならぬ。併し私としては暫時の間われわれがそこに殘しておいた暗黑な點をはつきりさすために恐怖の問題に戻つてみたい。恐怖とリビドの間に存してゐる他の點で非常によく知られてゐる關係は、危險に直面した現實恐怖は自己保存衝動の表現であらねばならぬといふ、最早議論の餘地のない假設と全然一致してゐないと私達は申した。ぢや若し恐怖情緒が利己的な自我衝動からでなしに、自我リビドから發するならば、事態はどうだつたか。恐怖狀態はあらゆる場合に於て非合目的性である。若し恐怖狀態が最高の程度に達すれば、それの非合目的性が露骨になる。その場合恐怖狀態はある時は逃避によつてある時は防禦によつて自己保存に役立つて、飽く迄も合目的性な行動を攪亂する。だから若し現實恐怖の情緒成分を自我リビドに、その場合に現はれる行動を自己保存本能に歸せしめるなら、理論上のすべての困難が消滅することになる。

諸君はこの上になほ、恐怖を感ずるが故に人間は逃げると眞劍に信じてゐないだらうか。さうではない。人間は恐怖を感ずる。そして人間は危險の認識の下に喚起された共通動機から逃避をとるのである。大きな生命の危險に直面したことのある人間は俺はちつともこはくなかつた、ひたすら行動した——例へば猛獸に鐵砲をさしむけた——と語る。これこそ確實に最も合目的なことであつたのである。

第二十七章　交付

私の講演もいよいよ結末に近づいて來た只今、諸君の胸中に諸君を決して迷はさないある期待が擡頭してくる。一般精神分析を實行する可能性の根柢をなす治療に就て一言も觸れずに諸君とお別れするためにのみ、私が精神分析の種種雜多な材料を紹介しなかつたのだと諸君は多分お考へになることだらう。私は治療といふ題目は諸君には不可能なものだとして保留することが出來る。と申すのは、治療の話をすれば當然諸君は觀察を通して新事實を學ばなくてはならない。この新事實に對する知識がなければ、私達が研究するやうな疾患を理解することは木によつて魚を求むるたぐひである。

どのやうに分析を治療の目的に活用すべきかの術式を手ほどきして欲しいと諸君が決して期待してをられないことを私はよく承知してゐる。ただ諸君はどういふ道筋によつて精神分析療法が働くか、また精神分析療法がいかなることを行ふかの全般を知りたいと思つてをられるのである。そしてこれを知ることは諸君の當然な權利であるのだ。併し私は諸君にそれをお話したくない。單に諸

君自らがその療法を會得するやうに私は話を進めたいのである。

一寸考へて欲しい。諸君は疾患の條件のすべての本質及び病氣に罹つてゐる人に活動してゐるすべての因子を學ばれたのである。一體治療の效力が許される餘地はどこに存してゐるのか。第一に遺傳的素質がある。——私達はそれをあまり口にしない。その理由は、遺傳的素質は他の方面から力說されてゐ、事新しく私共が口にする必要がないからである。だが私達が遺傳的素質をみくびつてゐるのだと信じて吳れては閉口だ。醫者として私達はその力を十二分に承知してゐる。どんなに踏張つてもその遺傳的素質を變化さすことは不可能である。遺傳的素質は永遠に私達の努力を堰止める旣知數である。次に私達が分析中に第一に着目するやうにしてゐる早期の小兒期體驗の影響がある。この體驗の影響は過去に屬してゐる。私達はその影響に干涉することは出來ない。その次に私達が「現實的剝奪」として總括してゐる人生に於ける一切の不幸がある。そのものからすべての愛の缺如、卽ち貧困、家庭悲劇、配偶者選擇の蹉跌、社會環境の不幸、秋霜烈日の如き道德律の峻嚴が現れてくる。ある奏效確實といはれる療法に對しては當然大きな期待が持てやうが、こんな期待は維納の口碑のヨセフ王のやつたやうな療法に俟つべきである。君主の慈悲深い斷行の意志の前には人民は屈伏し一切の困難は消失してしまふものである。かやうな慈善事業を私共の治療の手段

として用ゐることが出來るとは夢にだに思つてゐない。そんな事は私達の柄ではない。私達自らも貧乏である。社會的にも無力である。私達はお醫者といふ商賣で自分達の生活費をやつとこさで得てゐるのである。こんな身分の精神分析家は丁度他のお醫者がいろいろの治療法でやるやうに、貧しいものに對して私達の努力をふり注ぐやうな地位に一度だつてありあはしたことはない。精神分析の治療法は他の治療法に比較すれば、あまり時間がかかりあまり面倒臭いものである。ところが諸君はやつぱり既に申し上げた因子の一つにこびりついて、そこに精神分析の作用力に對する攻撃點が發見出來たと信じていらつしやる。社會が要求する道德的制馭こそ患者が蒙むる剝奪の一部を構成してゐるならば、治療でもつて患者に勇氣を與へ、ある時は直接この制馭から解放してやり、社會によつて高く標榜されてゐる、實のところは大して履行されてゐない理想の實現を拒否して滿足と恢復を贏ち得るやうに忠告出來るのである。この故に人間は性的に享樂することによつて壯健になれるのである。併し性的に享樂することが社會一般の道德に反してゐることは分析療法の行手に暗雲を投げかける。個人といふものに許すべきものは社會一般から剝奪すべきものなのである。

併し一體こんな馬鹿なことを諸君に誰が報告したのか。性的に享樂して見たまへと忠告することが分析療法の骨(こつ)であるといふのはもつての外のことである。私達自ら患者に於てリビド衝動と性的

抑壓、色慾方向と禁慾方向の間に頑固な葛藤があると申しただけでさう評判されるのでない。この葛藤は人間が二つの方向の一つに勝利を與へてやつたことだけで消失するものでない。私達は神經症患者に於ては禁慾が勝を制してゐたことを見てゐる。その結果禁壓された性慾は症候の中に逃道を作つたのである。若し私達が只今正反對に肉慾の方を勝たしてやつたとすると、片方におしやられた性的抑壓の方が今度は症候に變らなくてはならないことになる。二つの決定のどちらも内部葛藤を鎭定することが出來ない。いつでも滿たされない一部が存してゐるのである。葛藤が非常に不安定で、その結果醫者の忠言といふ一寸した因子が決定を與へるやうな場合があるが、そんなうまいことは至つて稀である。そしてこんな場合は何も分析療法などを要しない。醫者によつて容易に動かされる人は、醫者の力を借らなくても同じ道を發見する筈だ。ある禁慾的な青年が不法な性交をしようと決心した時、若くは滿たされない妻がよその男に代償を求めようとする時、わざわざ醫者の許可とか分析家の許可を求めるものがあらうか。

この立場に於て神經症患者の病原的葛藤は同一な心理學的土臺に立つてゐる精神衝動の普通の葛藤と混同されないといふ大切な一點を人は見逃してゐる。二つの力の間に鬪爭が存してゐる。その二つの力の一つは前意識と意識の階段に現れてゐ、他の力は無意識裡にとどめられてゐる。この故

に葛藤は決して圓滿な解決に至らないのである。あの有名なお話にある鯨と北極熊のやうに、爭つてゐる二つのものは未來永刧めぐりあふことは出來ない。二つのものが同じ地盤に會ふ時に初めて立派な仲直りが達せられるのだ。同一の地盤にくるやうに計つてやることが治療の唯一の任務だと私は考へてゐる。

この上になほ諸君が處世術の忠言と指導は分析療法の不可缺な部分であると假定するなら、諸君は大間違ひをしてゐると私は斷言することが出來る。いや、私達はさやうな指導者面をすることを極力戒めてゐる。むしろ患者が自らの獨斷でその決定を下すやうに私達は努力したいのである。この點に於て職業の選擇、企業、結婚、離婚に就ての人生の重大な決心のすべては治療期間中は患者に差控へしめて、治療が完結してから履行すべきだと要求してゐる。自分達が想像してゐたのとはまるで趣が違つてゐると諸君は白狀されるだらう。勿論非常に年若い人、若くは身寄とか相談相手のない人にだけは私達もこの制限を守ることが出來ない。さういふ人達に對しては私達は醫者の仕事以外に教師の任務をも兼用しなければならない。この點に於て私達は私達の責任を立派に意識して必要な注意をもつて治療にあたつてゐると申せる。

神經症患者は分析療法中に享樂するやうに吹き込まれるといふ世間の非難に對して、極力辯護し

てゐる私の熱心振を捉まへてきて、私達は社會道德の許される範圍內では患者達に享樂を吹き込んでゐるだらうと諸君が早合點されては困る。そんなことは精神分析の領分ではない。私達は決して社會改良家を標榜して立つてゐない。いや一介の觀察者である。だが私達とて批評眼をもつて觀察せずにをられない。そして因襲的な性道德に賛成出來ぬ場合を知つてゐる。社會が性生活の問題を實地上に處分しようとするあのやりかたを買冠らうとする連中に組してはならない。社會がその道德と稱してゐるものに、却つて相當以上に多大の犧牲が拂はれてゐること、社會のやりかたは決して眞實といふものに立脚してゐないし、聰明といふものによつて確保されてゐないことを私達は平然と指摘することが出來る。かういふ批評を私達の患者が諸君と一緒に聞かれて一向差支へない。私達はほかの事柄と同じやうに性的事物をも公平な態度で考へるやうに患者に習慣づけてゐる。そして治療が完結して患者が獨立出來るやうになり、自らの判斷によつて完全な享樂と無條件な禁慾の中間を渡るやうになつた時は、かやうな結末がどうならうと私達は良心に對して一點疚しいところがないのである。自らに對する眞實への敎育を無難に卒業した人は、よしや彼の道德の標準が社會が標榜してゐるものとある點で外れてゐようとも、不道德の危險から長く身を守るものだと申せるのである。なほ神經症の影響としての禁慾問題の意義を高く見積ることに私達は警戒してゐる。

剝奪の病原狀態及びそれに伴ふリビド鬱積が大して努力のかからぬ性交の種類で消滅するのは極めて少數の人に限られてゐるからである。

この故に患者に性的享樂を許すことによつて精神分析の治療の效果が現れると斷言出來ない。諸君はこれ以外の他のものを探さねばならぬ。私が諸君からの當推量を一蹴した時に、私の申した考へは諸君を正しい軌道に導いたことと思ふ。私達が利用するのは、無意識の意識への置換、無意識の意識への飜譯であらねばならぬと仰しやる筈だ。確かにその通りである。私達が無意識を意識へ擴大さすことによつて私達は抑壓を除去し、症候形成の條件を追つ拂ひ、病原的葛藤を何等かの解決を生ずる普通の葛藤に轉化さすことが出來る。私達はこの心的抑壓以外の何ものも患者に喚起さすことは出來ない。私達が許される範圍に於て私達の助力は有效になる。抑壓若くは抑壓に類する心的過程が溯れぬ場合は、精神分析の治療とてまた施す術がないのである。

私達はこの努力の目的を種種な形で表現することが出來る。無意識を意識化するとか、抑壓を除去するとか、記憶の缺如を塡めるとか、そんなことは要するに同じことである。併し恐らく諸君はこの知識では不滿であらう。諸君は神經症が直ることを別なことに想像していらつしやる。例へば患者が精神分析の手數のかかる療法を受けてしまへば、人間が變つたほどしつかりなると想像して

意識にあるものが少くなつて、意識にあるものが多くなつたことが治療のききめの全部だと考へられよう。諸君は多分只今かやうな內部變化の意義を輕視していらつしやるのである。恢復した神經症患者は仰せの通り人間が變つたのであるが、その根本に於ては彼は勿論同じ人間である。例へば彼は最もよい人間になつたのである。だが最もよい條件の下では前でもさうなれたのである。勿論それだけでも大したものである。若し人間が行はねばならぬ一切のもの、精神生活に於て一見些細な變化を遂げるために人は何をなすべきか、いかなる努力を拂ふべきかを諸君がお聞きになれば、精神の水平線に於けるかやうな相違の含む意義はもつとはつきりしてくることだらう。

諸君が原因療法と稱せられるものが一體何を意味するかを知つてをられるかどうかを質問したいために、一寸わき道にはひることにする。對症療法でなしに疾病の原因を除去するを目的とする方法を原因療法と申してゐる。では精神分析療法は原因療法であるかどうか。その答は簡單に下せぬが、こんなことをわざわざ質問するのが不必要であることが分かる機會が多分やつてくる。分析療法が症候の除去を第一の目的としてゐないなら分析療法は原因療法だと申せる。他の點で諸君には分析療法が原因療法でないといふことが出來る。卽ち私達は抑壓を越えて因果の連鎖を根氣よくず

つと追求して行つて最後に衝動素質、體質に於けるそれの相對的强度、それの進化軌道に於ける迷行を研究した。さう申せば諸君は、ある化學的方法によつて、この精神の機械に突入して、そこにあるリビド量を高めたり低めたり、あるひは甲の衝動を犧牲にして乙の衝動を强めたりすることが可能だと假設されるなら、この方法こそ本當の意味の原因療法だと申せよう。私達の分析は諸君のいはれるこの原因療法に對して缺くべからざる偵察の豫行に役立つたのである。諸君も御存じのやうに、只今リビド過程のさやうな影響を問題としてゐない。私達は精神分析をもつて連鎖の別の箇所をつついてゐるのである。別の箇所といふのは私達の面前にある現象の根元でなしに、症候からずつと飛び離れた、途方もない關係によつて私達が近接出來るある一箇所をつついてゐるのである。

それでは、患者に就て無意識を意識に置き換へるためには、私達はどうしなければならぬか。昔私達は至極簡單に出來ると考へてゐた。この無意識を推量して、患者にこれが無意識だと話してやるだけで十分だと考へてゐた。ところがこの考へはあまり近眼的な誤謬であることに早くも氣が附いた。無意識に對する私達の知識と患者の知識は同價値のものでない。患者に私達の知識を報告してやつたなら、患者は彼の無意識の場所にその知識をこなさずに、彼の無意識の傍でこなす。そして大局は大した變化を蒙らない。この無意識を局所的に想像しなければならぬ。患者の記憶に於て

丁度抑壓によつてひきおこされたその場所に無意識を探さねばならぬ。その場所にこの抑壓を除去しなければならぬ。その曉こそ無意識の意識への置換が圓滑に行はれるのである。それではこのやうな抑壓をとりのぞくにはどうすればよいか。私達の使命はここで第二段にはひる。第一の使命は抑壓を發見すること、第二の使命はこの抑壓を維持してゐる抵抗を除去することになる。

どうしてこの抵抗をとりのぞくか。同じ方法によつてである。即ちその抵抗なるものを發見して患者にそれを話してやるのである。抵抗は抑壓からもやつてくる。私達が解かうときばつてゐるその同一の抑壓からも、また昔に起こつた抑壓からもやつてくる。抵抗は反對裝塡によつて作られる。」この反對裝塡は不穩當な衝動を抑壓するために現れたのである。だから私達は既に初めにしようと思つた同じことを只今すればよいのだ。即ち解釋し、摘發し、それを患者に報告すればよいのであるが、私達は只今それを正しい場所で行はなければならぬのである。反對裝塡若くは抵抗は無意識に屬してゐない。いや私達の共力者である自我に屬してゐる。そしてそれが意識的でなくても、自我はどこ迄も自我である。この際「無意識的」といふ言葉の二重の意味、即ち一つは現象としての無意識、他は體系としての無意識が問題になることを知つてゐる。この問題は非常にむづかしい。眞暗である。だが要するに以前に申したことの反復に過ぎない。私達はずつと長い間それの準備を

してゐた。――私達が解釋を通して自我にそれを認識さしてやることが成就すれば、必然この抵抗は棄てられ、反對裝塡はへつこんでしまふことを豫期してゐる。ではかやうな場合にどういふ衝動力を用ゐて研究すればよいか。第一に患者が自發的に直りたいときばる努力によつて。この努力は私達と一致共同して仕事に熱中するやうに驅りたたすのである。第二に私達の解釋によつて支持される患者の智性の助を借りて。私達が患者にそれに適當な豫想觀念を與へる時は、明かに患者の智性は抵抗を承認せしめ、抑壓に合致する飜譯を發見しやすからしめるのである。若し私が諸君に空を仰いでごらんなさい、それあすこに輕氣球が見えませうと申すなら、君は空に何か變つたものが見附かりますかと私が訊ねる場合より、ずつと樂に輕氣球を見附けることが出來る。生れて初めて顯微鏡をのぞいた學生でも、彼が見なくてならぬものを先生から敎示されるものだ。敎示されなければ、たとへ顯微鏡下に實在して見えてゐるものでも發見することは覺束ない。

事實はいくらでもある。ヒステリイとか恐怖症とか强迫神經症といふ神經疾患のいろいろの形にも私達の前提はあてはまる。抑壓をこのやうに探究し、抵抗を發見し、抑壓されたものを解釋することによつて、抑壓を征服し、抑壓を除去し、無意識を意識に轉化さす使命は見事に成就する。この際にあたつてこの抵抗を克服するために患者の心中でいかに激しい闘爭、即ち反對裝塡を支持し

ようとする動機と反對裝塡を拋棄しようと身設へてゐる動機の間に同一の心理學的地盤の上で普通の精神鬪爭が演ぜられるかを明瞭に看取出來る。前者のものはその起原に於て抑壓を作つた舊い動機である。後者のものの中には新しく附加された、私達のいふ意味に於て葛藤を解決しようと希つてゐる動機が存在してゐる。私達は舊い抑壓葛藤を再びなまなましく甦らし、その當時鎭壓された過程を復活さすことに成功する。新しい材料として私達は第一に昔の解決は疾患に導いたといふ報告を與へ、只今の解決は恢復の道を開くものだらうとの約束を與へ、第二にあの昔の最初の拒否を剴して、あらゆる關係に大變化が生じたのだと指摘してやる。拒否したその時代では君の自我は虛弱であり小兒性であり、多分リビド欲求を危險視して恐れる理由を有してゐたが、今日の君の自我は鞏固になり、體驗を積み、この上に醫者の救助を信賴するやうになつてゐると申してやる。この故に私達は抑壓よりもずつと優れた捌口にまで只今再生された葛藤を導いてゐると想像してもよいのである。そして旣にお話したやうに、ヒステリイ、恐怖症、强迫神經症に於ても私達の主張する效果は原理上正しいことを知る。

だがこれ等と趣を異にした病型が存してゐる。この種の疾患では相互關係は同一であるが、私達の治療の操作は全く無效である。かやうな疾患に於ても抑壓に導いた——勿論この抑壓は、局所的

にも違つた性質のものであるが――自我とリビド間の起原的な葛藤が存してゐたのである。この場合でも患者の生涯のどの場所に抑壓が起こつたかを探究することはむづかしくない。私達は同じ方法を用ゐ、同じ期待を懷き、期待觀念の報告によつて同じやうに應援する。そして抑壓の起こつた時代から現今迄に横たはる歳月の差は葛藤の他の捌口を都合よくする。だがこの場合私達は抵抗を征服するとか、抑壓を除去するとかには成功しない。パラノイアとか、メランコリイ、さては早發性癡呆に懸れてゐる患者達は一般に治療に感應せずに、精神分析療法に頑としてゐる。これはどこからやつてくるのか。智能の不足からでない。ある程度の智的能力はこの種の患者にあつても勿論必要である。頭が非常に鋭く働く結合的偏執狂のやうな患者ではこの點には不足がない。私達は他の衝動も見逃すことは出來ない。例へばメランコリイ患者は自分は病氣である、この故に自分は悶悶としてゐるといふ意識を高度に有してゐるが、こんな意識はパラノイアの患者には缺けてゐる。併しメランコリイ患者はこのために治療の力が屆き易いとは申されない。ここに至つて私達はある事實に直面する。といふものの私達はこの事實を理解してゐない。そして理解してゐないがために、他種の神經症で可能な効果をそれのあらゆる條件下で私達が果して本當に理解してゐるかどうかといふ疑問さへ湧いてくるのである。

ヒステリイ患者とか强迫神經症の患者の研究にふみとどまるなら早速に未だ一向に準備してゐなかつた第二の事實に遭遇する。卽ち少し時間がたつてくると患者達が私達醫者に對して全く特殊な態度をとることに氣が附く。私達は治療に考察すべきすべての衝動力を考慮に入れ、私達醫者と患者の間に存する狀況を十分合理化し、その結果算盤の寄算のやうに狀況といふ數を落としてしまつたと信じてゐる。そして結局この寄算中に讀みあげなかつたあるものが紛れ込んでゐるやうに見える。この思ひ設けない新しいものは、それ自體いろいろの姿を呈してゐる。私は何はともあれこの現象の一番現れやすい、一番解釋しやすい形を記述したいのである。

自分のなやましい葛藤を解決したいと始終熱望してゐる患者は醫者の人格に對して特別な興味を起こしてくることに氣が附く。醫者といふ人間に關聯する一切のものは患者には自分自らの事柄以上に意味深いものに見えて、自分の病氣の氣晴しをして吳れるやうに思はれる。患者との交渉は暫時の間は非常に愉快に搬ばれる。患者は特に從順である。出來る限り感謝の念を示さうとさばる。私達が一寸では探せなかつたやうな本質の長所や微細な點を示して吳れる。かくて醫者は患者に對して非常に立派な意見も作れ、特に患者の尊い人格に一臂の勞をとることに成功する。若し醫者が患者の親戚のものと語る機會があるなら、醫者は患者もまた自分を尊敬してゐることを聞いてうれ

しくなる。患者は家にゐても醫者をほめちぎり次から次へと發見した醫者の長所を吹聽する。「あいつは先生に夢中になつてゐます。まるで盲目のやうに先生を信賴し切つてゐます。先生の仰しやつたことはどんなことでも神樣の啓示のやうに響くのです。」と親戚のものは語るのである。あちらこちらでこのコオラスからもつと鋭い聲が現れてかういふ。「もう先生の噂で持ち切りです。あいつは四六時中先生のことばかり口にしますので私共がすつかりへこたれます。」

私達は醫者の人格が患者によつてこのやうに尊重されることは、醫者が患者に與へ得る囘復への希望と、治療が齎らした驚くべき啓示と、それの解放力による患者の智的水平線の擴大に因してゐると醫者がきめてかかると希望したいのであつた。この條件の下に分析はすばらしい進歩を見せる。患者は醫者が一體自分に何を仄すかを解し、治療によつて指定された任務に熱中する。記憶と聯想の材料は患者に溢れるほど流れ出す。患者は自分の解釋の正確さと鮮さでもつて醫者を驚歎さし、醫者もまたこの部屋の外の世界にゐる健康人によつて痛烈に排擊されるを例とする心理學上の新事實を患者がみんな進んで承認するかを知つて喜びに溢れる。疾患狀態がどこから見ても他覺的に囘復して來たことはまた、分析中患者と醫者がこのやうにうまく調和するところに存してゐる。

だがこんな素晴しいお天氣がいつ迄も續くものでない。曇つた日がやがてやつてくる。治療に困

分析の仕事に集中しない。自分に浮んだ聯想を包まず口に出して、決してその聯想に刄向ふ批判的躊躇に負けてはならぬといふ前以て與へた規則を患者が忘れ勝ちになることを私達は極めて明瞭に看破する。患者は治療を受けてゐない時のやうな態度を見せる。恰も醫者と何等交渉もなかつたやうな顏附をしてゐる。患者の頭は明かに自分自らに祕藏しておかうと思つてゐるあるもので一杯になつてゐる。これこそ治療にとつては危險極まる狀態である。私達は明白に力强い抵抗に直面してゐる。だが一體全體何事が起こつたしるしであらうか。

この狀況を再び明瞭にすることが出來るなら、この攪亂の原因は、患者が醫者に熾烈な愛情を交付したところにある。だが醫者の擧止が患者にこの愛情を湧かしたのでもなければ、治療中に起こつた相互關係がこの愛情を作つたのでもない。この愛情がどういふ形で現れ、この愛情がどういふ目的を追求してゐるかは勿論患者と醫者の對人關係にかかつてゐる。若し患者が若い娘で、醫者が靑年であるなら、私達は正常な戀愛關係といふ印象を受ける。娘といふものは、大抵二人ぎりになつて祕密を打あけ得る男、一段上に立つてゐる救助者といふ有利な地位で彼女と對立してゐる男に惚れ込むのは至極自然なことである。いや神經症の娘にはむしろ戀愛力の障害を豫期すべきだとい

ふ事實を私達が見逃してゐるのかも知れぬ。醫者と患者の人事關係が只今假定した場合とまるで遠去かつてゐるのに、やつぱり同一の感情關係がおきまりのやうに作られることを發見すれば、なほさら譯が分らなくなつてくる。結婚生活で不幸な若い女が未だ獨身の醫者に對して眞劍な情熱をうちこむ時、患者がいつ何時でも離婚を斷行して、醫者に走るか、あるひは患者が社會的障壁を乘り越えてその醫者と祕密な戀愛關係を結ぶ度胸を有してゐる時は、こんなことは問題とするに足りない。かやうな事件は精神分析以外の世界にもしばしば現れるものである。ところがこの狀況に於て婦人や娘が驚くべき告白を吐き出す。この告白は治療といふ問題に全く特殊な地步を示すものである。女患者達は自分は戀愛によつてのみ健康になり得ることを常に知つてゐた。そして治療の發端から彼女達は人生から今日迄自分等に保留されてゐたものは醫者との交際によつてつひに惠まれると期待してゐたのである。この希望によつてのみ、彼女達は治療中のいろいろの苦勞を甘受し、報告のすべての困難を征服して來たのである。私達は自ら「そして彼女達は普通なら信ずることもむづかしい事を全部たやすく理解する。」と附加しておかう。併しかやうな告白は私達を驚かす。私達の見込はすつくり當がはづれる。では私達が全問題の核心を落としたためにかうなつたのか。

實際さうである。私達が經驗を積めば積むほど、私達の科學的特質を辱しめるこの訂正に對して

反抗する元氣がなくなつてくる。ここに到つて初めて、分析療法は偶然な、言葉を換へば、治療の本道に横つてゐない、治療それ自身に因してゐない一つの事件のために頓挫すると信ずるやうになる。だが若し患者が醫者にかやうな愛情を結ぶことが、どんな新しい例にでもおきまりのやうに反復されるなら、若し最も不都合な條件の下に、譬へばグロテスクな不調和に於て、例へば年とつた女に於てさへ、剩へ胡麻鹽頭の醫者に對して、何等の誘惑も存在しなかつたと私達が評せる場合に於てさへ、そんな愛情がいつでも湧いてくるものなら、當然この事件を厄介な偶然だと考へるのをやめて、この事件こそ疾患の本質そのものと最も密に結びついてゐるある現象を中心としてゐると認容しなくてはならなくなる。

私達がいやいやながら承認しようとするこの新事實を交付（Übertragung）と呼んでゐる。私達は醫者の人格への感情の交付を意味する。と申すのは、治療といふ狀況からかやうな感情が發生するのは正當だと私達が信ずることが出來ぬからである。むしろ別の場所でちやんとそんな感情の下拵が作られてゐる、卽ち患者にちやんと準備されてゐて、分析療法といふ機會に醫者の人格に交付されるのだと想像したくなつてくる。交付はある時は狂はしい戀愛要求の姿で現れ、ある時は穩和な姿で現れる。若い娘と年とつた男の間には、戀人になりたいといふ願望の代りに、あの人の娘にな

つて寵愛されたいといふ願望が發現してくる。この場合リビド欲求は永久に變りのない、プラトニックな理想的な愛情の形にやはらげられる。大抵の女はこの交付を昇華して、それがある種の存在權を持つところまで捏上げることを知つてゐる。また他の女はこの交付を粗な、始原的な、大概架空な姿でもつて表現しなければならない。併し私達は兩者がその根柢に於て同一であり、同一の源泉に發してゐることを決して見はづさない。

私達はこの交付といふ新事實をどこに置かうとしてゐるのかと自問するにあたつて、何はさておきこの交付を完全に記載しておきたいものである。それでは男の患者ではどうなるか。男の患者では性の區別と性の引力といふ面倒臭い混亂をとつてしまひたいものだ。さうすれば、男の患者に就ても女の患者と大體同じやうな返答が出來る。女患者と同じやうに、醫者に對する同一の執著、醫者の性格に對する同一の尊敬、醫者の興味への同一の適應、醫者の生活の近邊にあるすべてのものに懷く同一の嫉妬が男の患者にも現れてくる。交付の昇華された形は男と男の間に大變よく現れるが、直接の性欲求の方は非常に稀有である。顯在的な同性愛などはこの衝動組成の別な消費に壓せられてしまふ。醫者でさへ男の患者に就て女患者よりずつとしばしば交付の現象を觀察する。その交付は一寸見ただけでは今迄のすべての記載と矛盾してゐるやうである。卽ち男患者に現れるのは

敵對または陰性交付と名附けてよいものである。

私達は第一に交付が治療の冒頭から患者に存してゐて、暫時の間は分析といふ仕事の最强の原動力として現れることを知る。最初は交付の痕跡すら現れない。交付が醫者と患者が共同して行ふ分析に都合よく作用する限りは、交付などを氣にかける必要はない。萬一交付が抵抗に轉化するなら、この時こそ交付に注目しなければならぬ。そして二つの異つた正反對に立つてゐる條件の下では交付は治療に對する關係を變じてしまつたことを知る。第一は交付が愛情となつて非常に强力になり、交付が性慾から發したといふ表示を露骨に現し、その結果交付は自らに對して內的反抗をよびさまさなければならなくなる。第二は交付が愛情でなしに敵意から發してゐる時である。敵對感情は大抵愛情より遲く現れ、愛情の裏に隱れて發現する。敵意と愛情が同時に存する時は、兩者は他の人間に對する私達の親密な大抵の關係を支配してゐる感情のアンビワレンツの立派な姿を描いて吳れる。敵對感情は愛情と同じに一つの感情の結合を意味してゐる。これは丁度反抗がまるで正反對の前示を持つてゐる服從と同一の隸屬を意味してゐるのと同じである。醫者に對する敵意にも「交付」といふ名前を與へる値打があることは疑ふことが出來ない。なんとなれば、治療といふ狀況は交付發生の原因に大して與かつてゐないからである。かういふ見方で陰性交付をぐんぐん考へて行けば

必然、陽性若くは愛情の交付に對する私達の斷定が決して間違つてゐないことが立證されてくる。どこから交付が湧いて來たのか、交付が醫者にいかなる困難を與へるものか、どうして醫者は交付を征服すべきものか、そして最後に醫者は交付からどういふ利益を引出すかは、分析の術式をお話する時に十分詳しく論ずることにして、只今のところは一寸それ等に觸れてみるだけにしておかう。そんな交付から發した患者からの要求に醫者は從はねばならぬといふのは途方もないことである。そんな要求を醫者がある時は眞面目臭つて、ある時はぶつつけに、ある時は憤慨して拒絶するのは大人げないことである。私達は患者にさやうな感情は現在の狀況から發したものでもない、醫者といふ人間に關聯してゐるものでもない、自分の心中で既に昔に一度は現れた感情をあなたが再生してゐるのだと患者にいひ聞かせて、その交付を征服することにしてゐる。かやうな方法によつて私達は患者にその再生を記憶の中へ轉化さしてやるやうに强制する。その結果、愛情であらうが、敵意であらうが、常に治療の最も强い脅威を意味してゐたこの交付が、治療の最良の道具となつて、私達はその道具を利用して精神生活の閉された扉を開くことが出來るのである。併し諸君がこんな思ひ設けない現象に出會つて面喰はないやうにしてあげたいために、諸君に一言申し上げておきたいことがある。精神分析にかけた患者の疾患は決して完成したもの、凝結したものでない、恰も生物のや

うに一歩一歩成長し、その進化を續けてゐるものであるといふ事實をいつも念頭に置いておきたい。治療を始めたところでこの疾患の進化を喰ひとめることは出來ないが、治療が患者を壓迫し始めるや、疾患の全新産物は一つの方向に寄せ集められる。換言すれば、醫者との關係に集められるのである。だから交付は木の髓質と皮質の間にある形成層に譬へてもよい。形成層から組織新生と樹幹の直徑の成長が作られる。交付がこの意味にぴつたり融合すれば、ここに初めて患者の記憶への分析はずつと後退するのである。この曉私達の取扱つてゐるものは最早患者の昔の疾患でなくて、昔の疾患といれかはつた、新しく作られた、形を變へた神經症であると申しても決して不當でなくなつてくる。醫者は舊い疾患のこの再版を第一頁から讀んだことになる。かくて醫者はその疾患が發生し成長して行く姿を眺めたことになり、醫者自らがその疾患の中心人物として立つてゐるために、その疾患に特別ぴつたり親しんだことになる。患者の現すすべての症候はそれの起原的な意味をすてて、交付と關係を持つてゐる新しい意味に適應するやうになつてゐる。あるひはかやうな改訂に成功した症候のみが存續してゐることになる。ところがこの新しく加工的に作られた神經症を征服することは、治療前に存してゐた疾患の征服、われわれの治療的使命の遂行と合致するのである。醫者との關係にあたつて正常である、抑壓された衝動傾向の作用に動じない人間は、醫者が再びな

くなつた時でも、彼自らの生活に於て前のままの姿を持つてゐる。

ヒステリイ、恐怖ヒステリイ、强迫神經症に於ける交付は異常な實に治療の中心をなす意義を有してゐる。この故にさやうな疾患を總括して「交付神經症」と名附けるのは宜なる哉である。分析研究から交付の事實をしつかり摑んだ人は、これ等の神經症の症候の中に表現されてゐる、抑壓された衝動が、どういふ種類のものかを最早疑ふことが出來ない。そしてかかる人はこの衝動のリビド本質に對してこれ以上の確乎たる證據を探さうとしない筈だ。リビド的代用滿足としての症候の意義に對する私達の確信は交付といふものを挿入することによつて、初めて確乎たるものとなつたと敢て斷言してもよいのである。

然しながら、治療過程に對する私達の以前の力學的見解を改良し、この新しい見地に以前の見解を一致さす上に、私達はいろんな理由を有してゐる。若し患者が精神分析によつて私達が發見したあの抵抗でもつて正常な葛藤を征服したなら、患者は私達が目指してゐる意味、卽ち恢復に導く意味に於て決定に影響を與へる巨大な衝動を要求することになる。さうでなければ、患者はやつぱり以前の捌口の再生に決定を與へて、折角意識に浮び上つたものを再び抑壓してしまふやうになつてしまふ。この鬪爭の勝負は患者の智的見解が決するのでなくて——智的見解といふものはさやうな

働きを遂行する程强力でないし我儘でもない――むしろ唯一患者と醫者との關係が決すると申せる。患者の交付が陽性の表示である範圍では、交付は權威を持つて醫者を包み、交付は醫者の發見と意見への信仰に變形する。さやうな交付がなければ、かやうな交付が陰性であるなら、患者は決して醫者及び醫者の言葉に耳を傾けるものではない。實に信仰はこの時患者自らの發生史を反復する。信仰は愛の誘導體である。信仰は議論を絕したものである。やつとしてから患者は初めて議論を鬪はすやうになり、その結果、患者はその議論が自分の愛してゐる人から提出されたものなら、その議論を批判的に檢討するやうになる。さういふ支持を持つてゐない議論なら、患者には一向興味のないもので、大抵の人間に於ては人生上何の興味をも與へないものである。だから一般にリビド的對象裝塡が可能な場合だけ人間に智的方面からも感化出來るのである。そして私達はそのナルチス型の尺度に於て、最も立派な分析的術式によつてさへ、どの範圍まで感化力が及ぼせるものかを認め得る立派な理由を有してゐる。

他人へリビド的對象裝塡を向ける能力は、すべての正常な人間に存してゐるといはなくてはならぬ。所謂神經症患者の有する交付傾向はこの普遍特徵の異常に亢進したものに過ぎない。かやうに普遍してゐる、かやうに意義深い人間の特徵が、今日迄一度も氣附かれず一度も評價されなかつた

なら非常にをかしなことであらう。かやうなものは實際に昔に氣が附いてゐたのである。ベルンハイムは直感的な烔眼で催眠現象の學說を、あらゆる人間は幾分の程度で暗示に罹り易い、卽ち「被暗示性」だといふ定義にくくつてしまつた。ベルンハイムのいふ被暗示性はある點狹義の意味の交付傾向に外ならない。だから被暗示性の中には陰性交付がはひつてゐない。ところがベルンハイムは暗示の本態と由來を語ることが出來なかつた。彼にとつては暗示は一つの公理であつた。公理の由來に彼は一つの證明も與へることが出來なかつた。彼は被暗示性が性慾に隷屬してゐること、リビドの活動に隷屬してゐることを知らなかつた。そして私達は暗示を交付の姿で再發見するためにのみ、精神分析の術式上に催眠術を棄却したのだといはねばならぬのである。

併しここで一休みをして諸君の言分を聞くことにする。諸君の心中に抗議の聲が一杯になつて、諸君に發言を許さなければ、私の話などに身がいらないことに氣が附いてゐる。「結局先生はあの催眠術使ひと御同樣に、暗示の力をかりて分析をするのだとうとう白狀されたわけですね。そんなことならとつくの昔に知つてゐます。それはさうとして、過去への回想、無意識の發見、歪みの解釋と飜譯といふ迂回に消費した努力、時間、お金といふ莫大なつひえも結局は、唯一の有效な因子は暗示だけであるといふ結論に到達するためであつたのですね。先生はどういふ譯であの眞正直な

催眠術使ひのやうに直接に症候に暗示をかけないのですか。さらに若し先生が迂回された道筋で、直接の暗示では發見出來なかつたやうな無數の意義深い心理學上の事實を發見したと辯解したいと望まれるなら、かういふ事實が本當だと證明するのは誰ですか。これ等の事實はまた暗示の產物、卽ち先生が目指してゐるなかつた暗示の產物ではないのですか。先生が希望されるもの、先生の目に正しと見ゆるものをこの分野に於ても先生は患者におしつけることが出來ないのですか。」

諸君が私をこのやうにやりこめようとされるのは大變面白い。當然諸君の抗議にお答へしなくてはならぬ。併し今日は時間がないからお答へ出來ないが、是非次回にお話することにしよう。今日は私が手につけた事をすつくり片附けねばならぬ。私は交付といふ事實を借りて、何故に精神分析の治療の努力が、ナルチス型神經症に對して無效であるかをはつきりしたいとお約束しておいた。

これは極く簡單に說明出來る。そして諸君はこの謎がどれだけ簡單に解けるものか、萬事がどれだけ好都合に一致するものかを御覽になる筈である。觀察によつて、ナルチス型神經症に罹つてゐる人は、交付能力をまるで有してゐないか、あるひは交付能力をごくちよつぴりしか有してゐないことを敎へられる。さういふ患者は敵意のためでなくむしろ無關心のために醫者から退却するのである。この故に患者は醫者からも影響を受けない。醫者のいふことに對して患者は冷然としてゐる。

醫者のいふことなどは患者に何の印象も與へない。從つて私達が他種の神經症で成功した治療のメカニズム、病原的葛藤の再生、抑壓抵抗の征服を患者に作ることが出來ない。患者は木偶のやうである。患者はしばしば病理的結果に導いた自らの握拳でもつて恢復への企を試みたのである。私達にはどうする術もない。

この種の患者から得た臨床的印象に立脚して、私達は彼等には對象裝塡がないこと、對象リビドは自我リビドに轉化されてゐると主張したのである。この特徴によつて私達はこの種の神經症を神經症の第一部類（ヒステリイ、恐怖神經症、强迫神經症）から區別した。今や治療に對する彼等の態度はこの假定を立證してあまりあるのである。彼等はまるで交付を示さない。この故に精神分析の努力によつて彼等に接近出來ない。精神分析は彼等を直すことが出來ないのである。

第二十八章　分析療法

今日私が何をお話しようと企ててゐるかは諸君には御承知の筈である。精神分析療法は結局交付即ち暗示に立脚してゐると私が認めた時に、諸君は私達が何故に直接暗示を利用しないのかと質問された。そして諸君は暗示がかほどまで大きな役割を演じてゐるといふ事實に面して、私達は飽く迄も自分の心理學上の發見の客觀性を自惚ることが出來るかといふ疑問をその質問に結びつけてゐた。私は諸君に十分詳しく返答しようとお約束しておいた。

直接暗示は症候の外觀に對しての暗示である。諸君の權威と疾患の動機の間に存する鬪爭に對しての暗示である。この鬪爭に於て諸君は動機の方をまるで氣にせずに、患者に對してひたすらに、症候といふ形で現れてゐる動機の表現をおさへつけるやうに要求してゐる。そんなことでは要するに、諸君が患者に催眠術をかけやうがかけまいがさしたる區別がないのである。ベルンハイムはその獨特な烱眼でもつて、暗示は催眠術現象の本質であるが、催眠狀態そのものは暗示の結果、即ち暗示された狀態であると繰返し述べてゐた。そしてベルンハイムは好んで暗示を覺醒狀態に於てか

けた。その結果は催眠狀態に於てかけた暗示と同じものであつた。

さてこの質問に就て諸君はまづ第一に何を聞きたいと望まれるか。經驗の結果か理論的考察の結果か、どちらを諸君は希望されるのか。

私達は經驗から始めることにする。私は一千八百八十九年にナンシイのベルンハイムを訪れてその門弟になつた。そしてベルンハイムの暗示の書物を獨逸語に飜譯した。數年間私は催眠療法を使用してゐた。最初私はそれを禁止暗示に結びつけ、それから暫くして、患者を訊問するあのブロイエルの方法に結びつけた。だから私は催眠療法若くは暗示療法の效果を自らの廣い經驗からお話することが出來るのである。昔のお醫者の諺によると、理想的な療法と申すものは、手間のかからない、信用の出來る、患者に不愉快を與へないものでなくてはならぬさうである。さうだとすると、ベルンハイムの方法はこのうちの二つの條件を滿たしてゐることになる。ベルンハイムの方法は非常に早く搬ばれる。言ひかへれば、分析療法に比較しては譬へやうもない程迅速に萬事が搬ばれる。おまけに患者に苦勞や不愉快を與へない。醫者にとつてはこの方法は常に單調である。どんな患者に對しても千篇一律に、同一の型によつて、いろんな姿の症候の存在を、その意味とかその意義などを摑まへずに、禁止すればよいのである。この療法はまるで機械的仕事であつた。決して科學的

仕事ではなかつたのである。そして魔術、まじなひ、手品に類似してゐた。だがこの療法は患者の御機嫌を損じないものであつた。ところがベルンハイムの方法には第三の條件の方が缺けてゐた。この方法はどの方面に於ても信用のおけるものでなかつた。甲の患者には應用してもよいが、乙の患者には應用出來なかつた。甲の患者には多大の成功を博したが、乙の患者には殆ど成功しなかつた。その理由は皆目分からなかつた。この暗示療法の效果が持久しなかつたことはこの療法の氣紛れ以上に不都合なものであつた。暗示をかけておいて數日後に患者にあつてみると、前の症候が再び現れてゐたり、前の症候はうまく消えてゐたが、その代り新しい症候が現れてゐたりした。そこで醫者はまたぞろ催眠術をかけなければならなかつた。經驗をつんだ醫者は何度も催眠術をかけて患者の獨立性を奪つてはならない、痲醉藥のやうにこの療法に習慣さしてはならないと忠告してゐる。成程思ひどほりにたびたび成功することがあつた。一寸やつただけで持久した完全な效果を收めることがあつた。併しかやうなうまい結末がどういふ條件で起こつたかは永久に分からなかつた。一度私はかういふ經驗を持つたことがある。私は簡單な催眠療法である女患者の病氣をすつくり除去してやつた。ところがこの女患者がこれといふ理由もないのに私に反感を懷いた時に、前の病氣が元のまゝ再發した。私がその患者と仲直りをした時に病氣はすつきり消失してしまつたが、患者

が私にまた反感を持つた時に、折角消失してゐた病氣がまたぞろ姿を見せた。ある時はこんな經驗を持つたことがある。私がたびたび催眠狀態によつて神經症の狀態を救つてやつてゐたある患者が、ある特別頑固な發作を治療してゐる最中に、突然私の首玉にしがみついた。以上の事實は、人が欲しようが欲しまいが、必然暗示的權威の本質と由來の疑問を穿鑿するやうに强いるものである。

經驗はこれで十分である。私達がたとへ直接暗示を拋棄したところで、一向掛替のないものを棄てたことにならなかつたことを經驗が私達に示して與れる。さてこれに關して二、三の註釋を許して欲しい。催眠療法を練習する事は醫者にとつても大して勞力を要しない。この療法は多數の醫家が一般に承認してゐる神經症の見解と大變ぴつたり一致してゐる。醫者は神經症の患者に「病氣などありませんよ。單に神經なんですよ。あなたの心配されてゐるやうなことは二言三言いや五六分でとり去ることが出來ますよ。」と申す。然しながらかういふ言葉は、若し直接にそして適當な裝置の助を俟たずに干渉すれば、最小の力によつて重い荷物を動かすことが出來るといふエネルギイに關して私達が懷く考へに反する。事情が同じである限り、經驗からも私達はこの詭計は神經症に成功しないことを知る。併し私はこの議論が堅固でないことを知つてゐる。こんな議論はまた爆發の種となるのである。

精神分析から得た知識の光の下に、私達は催眠的暗示と精神分析的暗示を次のやうに區別することが出來る。催眠療法は精神生活に藏されたあるものを蔽つてそれに膏藥を張りつけようとしてゐるが、分析療法はそのあるものを暴露して取り除かうとしてゐる。前者は美顏術のやうな仕事をやり、後者は外科のやうな仕事をしてゐる。催眠療法は症候を禁ずるために暗示を用ゐる。この療法は抑壓をさらに強くするが、一方症候形成に導いたすべての過程は原型のまま持續してゐる。ところが分析療法の方はさらに深く根元の方に向ひ、症候が發した葛藤に突撃しようとする。そしてこの葛藤の捌口を變へるために暗示を利用する。催眠療法は患者を無活動、無變化に留めるのである。この故に患者はまた、疾患へのすべての新しい機緣に對して無抵抗となるのである。分析療法は患者にも醫者にも多大の勞力を必要とする。この勞力は內部抵抗の揚止に消費される。內部抵抗を克服することによつて、患者の精神生活は永久に變化され、進化のさらに一步高い段階にあげられ、新しい疾患の可能性に對して免疫を有するやうになる。この克服といふ仕事こそ分析療法の根本を成すものである。從つて患者はこの仕事を遂行しなければならぬし、醫者もまた教育の意味で働きかける暗示の助によつて患者にこの仕事をやりおほせるやうにしてやらねばならぬ。この故に精神分析療法を一種の再教育（Nacherziehung）と申しても決して不當ではない。

私は只今諸君に暗示を治療上に應用する精神分析の方法と、催眠療法に於てのみ可能な方法との區別がどこにあるかを明瞭にしてあげた筈だ。暗示を交付にまで溯らすことによつて諸君は、催眠療法に現れる氣紛さと同時に何故に分析療法はそれの限界内に屬してゐるかを理解されたのである。催眠狀態など利用すれば、私達は患者の交付能力の狀態に縛られて、この交付能力の狀態それ自體に、何の影響も與へることが出來なかつたのである。催眠術にかかつた患者の交付は陰性のものであるかも知れぬ。ある時は一般にアンビワレントであるかも知れぬ。ある場合患者は特別な心理狀態によつて彼の交付に對して警戒を下すことが出來るものだ。だが私達はまるでそんなことを經驗してゐない。精神分析に於て私達は交付自體によつて仕事をやり、交付を妨害するものを退散さし、私達が活用しようと欲してゐる道具を自由に驅使する。かやうにして暗示といふ力をまるで別なところに利用することが出來る。私達は暗示といふ武器を手に入れることが出來る。患者は最早彼自らの御意のままに暗示されることが出來ない。いや、患者が一般に暗示の影響に從順である限り、私達は患者の暗示を誘導するのである。

さて私達が精神分析の原動力を交付と名附けようが暗示と名附けようが諸君にはどうでもよいことだが、患者の影響が私達の發見の客觀的確實を疑はしくさすといふ危險がそこに存してゐる。治

療に役立つものは研究に有害であると仰しやるであらう。これは精神分析に最もよく下される抗議である。そしてよしこの抗議が的からはづれてゐても私達はこの抗議を不合理だと拒否することが出來ぬと白狀しなくてはならぬ。だが若しこの抗議が正當であつたなら、精神分析は結局特別巧妙に假裝した、特別の作用力を持つてゐる暗示療法の一種に外ならなかつたのであらう。そして私達は生活影響、心的力學、無意識に關する精神分析のすべての主張をたやすく仕入れる事が出來たかも知れぬ。精神分析の反對者もまたさう考へてゐる。特に性體驗の意識に關するすべてのもの――たとへ性體驗それ自體でなくとも――を、私達自らの腐敗した空想の中で、かやうに組合せたあとで、患者の心に押しつけたのだと想像する。こんな非難は理論の助けよりも經驗の助けによつてずつとたやすくへこますことが出來る。自ら精神分析をおやりになつた人は患者にかやうな風に暗示することが不可能であることを何度も自らに納得されるに相違ない。患者をある學說のお弟子にして、醫者の誤つた考へに贊成させることはさしてむづかしいことでない。こんな時に患者は患者でなくて例へば學生のやうな態度をとる。だが醫者はそれによつて患者の智性にだけ影響を與へることは出來ても、決して、患者の疾患に影響を與へることは出來ない。彼の葛藤を解決し、彼の抵抗を征服することは、患者に於ける現實と一致するさやうな豫想觀念が與へられた時にのみ成就する

のである。醫者の推測に合致しなかつたものは、分析の進行中に再び消失してしまふ。それは撤回されてもつと正しいもので置き換へられなくてはならぬ。注意深い術式によつて人は暗示による一過性の效果の發現を豫防しようと努める。だがそんな一過性の效果が現れても大した心配はいらぬ。と申すのは、私達は第一番の效果だけで足れりとしないからである。病例に存する疑點に說明がつかず、記憶の間隙が塡められず、抑壓の機緣が發見出來ないやうな場合は、分析が完成したと考へてはいけない。あまり早くからよい結果が現れさうになつても、これだけで分析の仕事が進捗したしるしとせずに、むしろ分析の仕事が妨害されてゐるしるしと觀ずる方がよい。そして人はそれの原因をなしてゐる交付が再び破れる時に只今の良結果が再び消滅することを知る。分析療法が純然たる暗示療法と斷然と區別すべき點は根本にあつてはこのあとの特徵によつてゐる。そしてまた分析的成績が暗示的結果であるといふ疑惑はこの特徵によつて一掃出來るのである。すべての暗示療法では交付を注意深く節してやり、交付に觸れずにおいてやる。ところが分析療法の方では交付そのものが治療の主題となり、交付をそれのいろんな現象型に解體することにしてゐる。分析が完了する時は交付そのものは消滅しなければならぬ。そして良結果が現れてそれが持久的であるのは、暗示に因してゐるのでなくて、暗示の助けによつて到し得た內抵抗の征服、患者の心中で成就され

た內部變化に基づいてゐるのである。

陰性（敵對）交付に轉化する道を知つてゐる抵抗に對して私達が治療中に絕え間なく喧嘩をしたといふ事實は暗示の發生と矛盾する。普通なら暗示の產物だと疑惑の目を向けてもよい分析中のいろんな結果の大量は、何人も否認しない他の方面から立證出來ると指摘するのを怠つてはならぬ。これ等の點を保證して吳れるのは癡呆とパラノイアの患者である。かういふ患者は暗示の影響を受けるといふ疑惑から超越してゐる。かういふ患者が意識におし出てくる象徵飜譯とか空想を借りて語るところのものは、交付神經症の無意識に關する私達の研究結果とぴつたり合致するものであり、しばしば猜疑の眼で見られてゐる私達の解釋の客觀的正當を强めるものである。

ここに到つて私達は疾患囘復のメカニズムに就ての精神分析の描寫をリビド說の術語で完成したくなつてくる。神經症の患者は享樂に對しても仕事に對しても等しく不能である。享樂に對して不能なのは、彼のリビドが現實對象に向けられてゐないためである。仕事に對して不能なのは、リビドを抑壓の下に保ち、リビドの湧出を防禦するために、餘分のエネルギイを大量に消費しなければならぬためである。若し彼の自我と彼のリビド間の葛藤が終焉して、彼の自我が再び彼のリビドを左右するに到れば患者は壯健に復したのである。卽ち治療の使命はリビドを自我と[illegible]

にある昔の固著から剝離せしめ、リビドを再び自我に隷屬せしめるところにある。それでは神經症患者のリビドはどこにあるか。探し出すのはたやすい。そのリビドは過去に於てリビドに唯一可能な代用滿足を許して呉れた症候と結合してゐるのである。だから譬へば患者の方から進んで私達に催促するやうに、私達は症候に君臨し、症候を消滅しなければならぬ。症候を消滅するためには、症候の起原にまで溯り、症候を作つてゐる葛藤を再生さし、當時無力であつたかやうな衝動力の助けを借りて、葛藤を別の出口に導いてやることが必要である。抑壓過程に行ふこの校訂の一部は抑壓に導いた過程の記憶痕跡によつて行ふことが出來る。醫者との關係、卽ち交付によつて昔の葛藤の改訂版を作る時は分析といふ仕事の決定的部分が成就する。この葛藤に於て患者は昔ふるまつたと同じやうにふるまはうとする。同時に醫者は患者の心中に有効な精神力のすべてを召集することによつて他の決定を強制するのである。この故に交付は相角逐するあらゆる力のいりみだれる拳鬪場と申してもよからう。

あらゆるリビド、リビドに對するあらゆる反抗は醫者への一つの關係に集中される。その結果當然症候からリビドが剝離される。患者の自らの疾患の代りに、人工的に形成された交付、卽ち交付疾患が現れる。諸種の非現實的なリビド對象の代りに、一つの對象、卽ち醫者といふ人格の空想的

對象が現れる。併しこの對象に向つて起る新しい鬪爭は、醫者の暗示の助けによつて、最高の心的階段に高められ、正常な精神葛藤として進行する。かくて再び現れようとする抑壓を避ける時は、自我とリビドの不和は落著し、人格の精神統一が再び作られるのである。リビドが醫者の人格といふ一時的の對象から剝離するなら、リビドはそれの昔の對象に退行することが出來ずに、自我の命令に服するやうになる。この治療といふ仕事の最中に私達が格鬪した力は、一方に於ては、リビドのある方面に對する抑壓傾向の姿で現れた自我の嫌惡であり、他方に於ては、嘗てリビドに裝塡された對象から、心よく分離しようとしないリビドの粘稠性若くは粘著性である。

從つて治療の仕事は二段に別けられる。第一段ではすべてのリビドは症候から交付におしやられて、交付に集中する。第二段ではこの新しい對象をとりまいて戰鬪の火蓋が切られて、リビドはこの對象から釋放される。よい出口を決定する變化は、この新しく起つた葛藤に於て抑壓を排擊するところにある。この結果昔のやうにリビドは無意識內への逃避でもつて自我から退却することが出來ない。かやうな成功は醫者の暗示の影響の下に行はれる自我變化によつて達せられるのである。無意識を意識に轉化しようとする解釋の仕事を通して、自我はこの無意識の犧牲の下に大きくなる。自我は教育によつてリビドと和睦して、リビドにある程度の滿足を讓歩するやうな傾向を示してく

る。そして新しくリビドのある量を昇華によつて消費する能力を贏ち得て、自我はリビドの要求にだんだん恐れなくなつてくる。治療に於ける過程がこの理想的な記述のやうにぴつたりうまく行けばそれだけ、精神分析療法の效果はますます大きくなるのである。どの範圍まで成功するかは、對象から分離するのに抵抗するリビドの運動性と、對象交付をある一定の限界以上に成長さすを許さないナルチス型の强情に存してゐる。私達が交付によつてリビドの一部を私達にひきつけることによつて自我の獨裁から逃れた全リビドがつかまへられるのだといふ陳述の下に、囘復過程の力學をさらに明瞭にすることが出來るであらう。

治療中そして治療によつて現れるリビドの分布は、從來の疾患中のリビドの配置に直接干渉出來ないといふ警告も當然現れてくる。ある患者が醫者に對して强烈な父交付を作り、次いで幸運にもこの父交付を溶解することによつて見事に囘復に赴いたと假定する場合、患者は從來無意識的に父に對してリビドをかやうに結合するところに病んでゐたのだとは結論出來ない。この場合父交付は私達がリビドを捕獲しようとする戰場に過ぎないのだ。患者のリビドは他の位置からここへ輸送されたのである。この戰場はからずしも、敵軍の肝腎な砦を構成してゐない。敵が首府を防禦するためには何も全軍を首府の門のところへ集中する必要はない。交付を再び溶解して初めて、人は疾患

中に存在してゐたリビド分布を思考の中へ再び組立てることが出來るのである。

リビド說の見地に立つて、私達はもう一度夢に關して最後の言葉を述べてみたい。神經症患者の夢は、それ等の人の間違ひ行爲とか自由聯想と同樣に、症候の意味を摘發しリビドの配置を發見する上に役立つ。夢なるものはいかなる願望衝動に抑壓が加へられたか、自我から撤退したリビドがいかなる對象にぶらさがつてゐたかを願望實現の姿で私達に敎へて吳れる。この故に精神分析療法に於ては夢判斷は緊要なものであつて、多數の患者に就て長期にわたり分析といふ仕事の最も大切な武器となる。睡眠狀態はそれ自體抑壓のある程度の弛緩を齎すことを知つてゐる。抑壓にかかつてゐる重さが幾分か輕くなるために、抑壓された衝動は覺醒時に症候中に許されるよりずつと鮮明にいろんな表現を夢の中に作ることが出來る。從つて夢の研究は自我から撤退したリビドが屬してゐる抑壓された無意識を知る上の最も手取早い道になる。

　ところが神經症患者の夢はその根本に於ては健康人の夢と大した徑庭がない。兩者の夢を區別することなどは出來ない相談だ。神經症患者の夢を土臺として、健康人の夢に通用しないやうな說明をたてるのは不合理であるかも知れない。そこで私達は神經症と健康との區別は覺醒時にだけ存してゐて、夢の生活に迄滲透してゐないと申しておかねばならない。私達は神經症患者に於てその夢

とその症候を結びつけて生じた數多の假設を、健康な人達にも敷衍せずにをられなくなつて來たのである。健康な人でも精神生活中には症候形成と同じに夢形成を可能とさすものを所有してゐると斷言することが出來、當然健康な人もまた抑壓を設け、その抑壓を支持する上にエネルギイのある量を消費しなければならなかつたこと、健康人に存する無意識體系は抑壓された、加ふるにエネルギイを裝塡された衝動を藏してゐること、彼のリビドの一部は彼の自我の支配から退いてゐることを結論としなくてはならない。だから健康人も事實上一つの神經症患者と申せる。併し夢は外觀的には健康人が形成することの出來る唯一無二の症候であるやうである。若し諸君が彼の覺醒生活に銳い觀察を斷行するなら、この外觀と矛盾するあるものを實際に發見する筈だ。卽ちこの外觀的に健康と申せる生活に些細な、實地上意義あるといへない無數の症候形成が織り込まれてゐることを知るのである。

從つて神經症的健康と神經症の區別は實地の上に限定されて人が享樂能力と勞働能力の十分な範圍內に存してゐるかどうかといふ結果に準じて決定されてくる。この區別は拘束を受けないエネルギイ量と抑壓によつて結合されてゐるエネルギイ量の比例にまで溯れるやうである。そしてこの區別は質的でなくてむしろ量的である。この見解は神經症なるものがたとへ體質的素因に基づいてゐる

ても根治出來るものであるといふ私達の確信に、理論的根據を與へたものだと蛇足を加へる必要はない。

健康人の夢と神經症患者の夢が同じであるといふ事實から、健康と申すものの特性に關してうんと知識を持つことが出來るに相違ない。併し夢そのものに對しては、私達は神經症の症候に對する夢の關係から夢を引き離すことが出來ない、思考を太古的表現樣式に飜譯するといふ公式に夢の本質が盡されてゐると私達が信じてならない、夢は實際われわれに現存してゐるリビド配置と對象裝塡を示して吳れると私達が假定しなくてはならぬといふ一歩進んだ歸著が現れてくる。

いよいよお話はおしまひになつて來た。私が精神分析療法の一章で理論的方面だけを論述して、治療を行ふべき條件、治療が收める效果にまるで論及しなかつたのに諸君はがつかりされたことと思ふ。併しそんなことは省略しておく。前者を省略する理由は、私は何も諸君に精神分析習得の實地上の手引を與へるお約束でなかつたからである。後者を省略する理由は、幾重もの動機が私にそれをひきとめるからである。この講演の冒頭に於て、都合のよい條件下に私達は治療に成功する、この成功は內科的治療の領域に於ける最も立派な治療に比しても遜色がないと力說した。なほこの

成功は他種の方法をもつてしては決して收めることが出來なかつたらうと追加することが出來る。もつと大きなことを申し上げれば、私はあの反對派の逆宣傳のわめき聲の中に消されるを希望してゐるといふ嫌疑を蒙ることにならう。醫學者といはれるお方までが、公開の席で分析の失敗とか分析の害毒とかを發表して、分析療法の無價値な點を精神分析にかぶれてゐる民衆に示してやれと、たびたび精神分析家を脅迫するのである。だがさやうなものを報告することは、分析法の惡意ある密告的な性質を離れても、精神分析の治療的效果に正しい判斷を下す上に一向適當なものとは思はれない。諸君も御存じのやうに、分析療法は未だ年が若い。私達一派がその術式を樹立する迄に實に長い歲月を要した。そしてこの術式は分析といふ仕事の間にのみ、熟練した經驗の影響の下にのみ行ふことが出來たのである。術式を敎示することがむづかしいために、新前の醫者は精神分析に於ては他の部門の專門家よりもうんとしつかり自らの能力によつて技倆を磨かなくてはならない。だから彼が最初の年に收めた結果は決して一般分析療法の效果の判斷とはなり得ないのである。

精神分析の初期にあつては分析療法は可なり澤山失敗に終つた。分析にかけた病例は一般にこの操作に不適當な、私達が今日適應症といふ立場からとりのぞいてゐるものであつたからである。併しある病例が果して適應症であるかどうかは分析を行つてみて初めて分かつたのだ。その當時は著

明な形にあるパラノイアとか早發性癡呆に分析療法を施しても無效であることなどは初めつから分からなかつた。そして當然いろんな疾患にこの方法を驗してみなくてはならなかつたのである。だが第一年の大抵の失敗は醫者の手落のためとか不適當な材料を選擇したために生じるのでなくて、むしろ外的條件の不便利なために生じるのである。私達は單に內抵抗に就てお話した。卽ち必然に現れてくる、征服出來る患者の內抵抗に就てお話したのである。患者の境遇とか患者の環境から分析に刄向うとする外抵抗は理論的には大した興味を與へぬが、實地上では最も重大なものとなる。精神分析療法は外科手術に比敵する。外科手術のやうに、成功に最も都合のよい條件で分析を行はねばならぬといふ權利を主張することが出來る。手術を行ふに際して外科醫がまづどういふ設備を注文するかを諸君は御承知の筈だ。適當な手術室、よい光線、助手、それから親戚のものを遠去けることだ。外科醫が親戚全部の立會の下に手術を行はねばならぬとすると、そして親戚の者どもが手術臺をかこんで鼻をつつき合はして、メスを入れる每に大きな聲を立てたとすると、こんな手術がどれほど成功するものかは諸君もわざわざ尋ねるに及ばない。精神分析療法に於ては親戚の立會は危險である。途方もない危險が出來するものだ。私達は患者の內抵抗を覺悟してゐる。內抵抗は當然のものだと考へてゐる。ところが外抵抗に對して私達はどう防禦してよいだらうか。私達がい

ろんに說明しても、患者の親戚の人達に成程と納得さすことは出來ない。私達は親戚の人達に分析に對して馬耳東風の態度をとらさすことも出來ない。私達は親戚の人達と共同して分析を斷行することも出來ない。若しそんなことをすれば、私達は患者の信用を失ふ羽目になると申すのは、患者は當然自分が信頼してゐる人に立會つて吳れるやうに申出るに違ひないからである。家庭といふものがしばしばどういふ軋轢を齎すものかを承知してゐる人が、また分析家として、患者の身内の者共は患者が健康に復するといふことに大した興味を示さずに、患者を病人にしておく方にずつと興味を示すものだと知つたところで、こんな事は大して驚くに足りないことである。よく世間にあるやうに、神經症が家庭の成員との間の葛藤に關聯してゐる時には、健康な方の人は自分の利益と患者の回復のどちらかを選ぶかの場合は、誰だつて自分に利益な方を卽座に選ぶものである。夫と申すものは自分の非德が暴露されるやうな――この想像は當然適中するが――分析療法には顏を出さないものだと申しても別に驚く必要はない。私達でもこんな事には一向驚き入らないが、若し夫の抵抗が病人の妻の抵抗に加へられたとの理由で、私達の努力が水泡に歸し、治療を始めるか始めぬうちに私達の努力を放棄してしまふ時に、この場合私達は何等非難を蒙むる必要はないのである。私達は現存してゐる條件の下では實行不能なあるものを實行したに過ぎなかつたのである。

いろいろの病例を述べる代りに、私が醫者としての良心のために困り拔いたある一例をお話するに留めておかう。私は——數年前に——ある若い娘に分析療法を施してゐた。この娘はずつと以前から恐怖のために街路が步けずまた家の中に自分一人で留守番をしてゐることが出來なかつた。患者は次第次第に次のやうな告白を洩して來た。若し自分の家庭と昵懇な間柄にあるお友達と自分の母が關係してゐるところを自分が偶然に見附けたならといふ空想が頭の中に一杯になつてゐると語つた。ところが娘は輕卒にも——いや實に婉曲に——自分が分析の時間に話してゐた事を母に仄したのである。卽ち娘は母に對する態度をがらりと變へた。自分のお母さん以外どんな人が一緒にゐて呉れてもあたしが留守番をしてゐる時の恐さを鎭めることが出來ないと主張した。そして母親が外出しようとした時に、娘は恐怖に一杯になつて戸口に立ち塞がつた。この母は以前は非常に神經質であつたが、數年前に水療法をやるある病院に通つてからすつくりよくなつたのである。この病院に通つてゐる間にある紳士と懇意になつて、この男に對して母はいろん方面に於て自分を滿たして呉れる關係を結ぶことが出來たと私達は言ひ變へてもよい。娘の突然の要求に仰天して母は立所に自分の娘の恐怖が何を意味するかを悟つた。實は母親に四六時中家にゐて貰ふために、母が愛人と交際するための外出の自由を剝奪せんがために娘は病氣になつたのである。ところが母は早速に

自分に不利な治療に行かせまいと決心した。そこで娘はさる病院の神經科にほりこまれた。この病院で長い年月娘は「精神分析の哀れな犧牲者」として講義の材料となつてゐた。私の分析療法が飛でもない結果を招いたといふ惡い評判が長い間私の耳まで響いてゐたのである。私は沈默を守つてゐた。私は醫者として職業上の祕密を口外すべきでないといふ規則に縛られてゐると信じてゐた。ところがその後その病院を訪問してこの臨場苦悶の娘に會つた醫者が私に、娘の母とそのお金持の紳士との關係は町内の大評判となつて、二人はすつくり夫婦きどりで既に子までなしたとの噂だと話して吳れた。だからこの「祕密」のために娘の療法が犧牲となつたのである。

歐洲戰爭前數年間外國から澤山の患者が私の許に流れ込んで來た。私はそのお蔭で私の住んでゐる維納の町の評判に超然とすることが出來た。その時私は Sui juris でない、卽ち根本的な生活關係に於て他人から獨立してゐないやうな患者は決して治療にかけない規則を設けた。だが精神分析家がこぞつてこの規定を嚴守することは出來ない。多分諸君は親戚に關する私の警告から、精神分析に都合のよいといふ口實で患者をその家庭から獨りで分析家の家によび寄せてはならない、この故に分析療法は病院の神經科にゐる醫者のみに限るべきであると結論されるかも知れぬ。私だけは諸君の言分に贊成いたし兼ねたのである。患者が――重い衰弱の階段にない限りは――治療中彼等

に提出される要求と鬪はねばならぬやうな境遇にゐる方がずつと利益が多いと申したい。併し家庭のものは患者の振舞によつてこの利益に逆つてはならぬ。家庭のものは醫者の努力に對して決して敵意をもつて反抗してはならぬ。だが諸君は私達の手に屆かないこの因子をどういふ風にしてこの方向へ動かさうと思つてゐるか。諸君は當然治療の見込と申すものがどれ程社會的環境とその家庭の文化狀態に基づいてゐるものかを指摘することが出來るだらう。

たとへこの邪魔な外來要素の算入によつて私達の失敗の多數のものが說明出來ても、この事實は治療法としての精神分析の效力に暗澹たる將來をトするものだとは申せない。精神分析の友人達は私達の分析の成功率と失敗率の統計を作るやうに忠告して吳れてゐる。私はこの忠告に從はなかつた。統計といつても、比較對照した單位が同種のものでない時は、また治療を施した神經症疾患の病例がいろんな點に於て等價値でない時は、そんな統計などは一文の値打もないものだと私は確信してゐる。さらにまた、私達が眺めることの出來た時日はあまり短くて、これだけでもつてして治療の效果がいつ迄續くものかなど判斷出來なかつたし、澤山の病例に就て私達は一つ一つ報告することも出來なかつた。彼等は自分の病氣、自分が治療を受けたことさへ祕密にしてゐる人達であつた。そして當然自分が直つたことをも同じに祕密にしなくてはならぬ人達であつた。併し統計を退

けようとする最も強い理由は、人間は治療と申す事物に對して極度に理性を失つた態度をとり、その結果、理性ある手段によつて彼等に存するあるものを指示する見込がなかつたといふ意見に存してゐる。新しい治療法は、丁度コッホが結核に對してツベルクリンがきくと發表した時のやうに、瞬く間に大流行を來たすものであるが、本當に福音的といへるゼンナアの種痘のやうに、今日でこそ誰一人反對するものはないが、その當時はてんで相手にされないやうなものもある。精神分析に對して明かに偏見が流布されてゐる。私達がむづかしい病例を直したなら、他人は「そんなことは丸で證明にならない。患者は療法を受けた頃から自然に健康に復して來たのだ。」と言ふに相違ない。そして若し既に抑鬱狀態と躁狂狀態の四つの循環を經過した患者が、メランコリイのあとの一時期に私の治療を受けに來て、三週間の後に再び躁狂狀態にはひり始めたとすれば、家庭のものはこぞつて、いや立會に招かれた、醫者としておしもおされぬ大家でさへ、今度の新しい發作は患者に施された精神分析の結果より外に考へるものはないと信ずるのである。こんな偏見に對しては施す術がない。諸君は現在目の前に再び、戰爭に參加した民族の甲群は乙群に對立して發展したといふ偏見を御覽になつていらつしやる。最も理性的なことは、その偏見が時の經過と共に自然に磨滅するのを待つことである。いつかは同じ人類が同じ事柄を今迄とはまるで違つた見方で考へるやう

にならう。人類が何故にとうの昔にさういふ見方で考へなかつたかは今日では暗い神祕に屬してゐる。

精神分析に對する偏見は今日では漸次打破されて來た。多くの國國に於て精神分析の知識が普及されたこと、精神分析で治療する醫者の數が多くなつたことがこれを物語つてゐる。私の青年時代には、醫者は催眠術の暗示に對して、丁度今日所謂「眞面目な人」が精神分析に反對すると同じやうに、鳴物入で非難したものだ。併し催眠術は最初に標榜したやうな治療的效果を發揮しなかつた。」私達精神分析家はこの催眠術派の正統な繼承者と名乘つてもよい。そして私達がこの催眠術にいかに多くの刺戟と理論的啓蒙を負つてゐるかを決して忘れてはならぬ。精神分析に就て噂される惡結果といふものは專ら、分析を下手に行つた時あるひは分析を途中で中止した時に現れる、葛藤亢進の一過性現象に限られてゐる。諸君は私達が患者と交換した取引を承知していらつしやる。そして私達の努力が果して永久の障害に導くべき可能性を有してゐるかは諸君自らの判斷に俟つべきだと思ふ。勿論精神分析の濫用はいろいろの方面に起り得る。交付は良心のない醫者の手で行はれる時は危險きはまりなき武器となる。だが醫者の藥でも醫者の療法でも濫用すればどれも危險なものとなるものだ。」メスが切れないものなら、そんなものは初めつから治療に役立つことが出來ない。

講演はこれで切上げることにする。終りにのぞんで、私がお話した講演のいろんな缺點をふりかへつて慙愧の到りであると白狀しても、これは決して紋切形の口上でない。一寸觸れてみた題目を別の箇所で詳しくお話すると何度もお約束しておきながら、約束を果たすことの出來る箇所に來ても、私はその題目に言及することが出來なかつたことはとりわけ申譯がない次第である。私は諸君に進化の途上にある未完成な事物を報告しようと企てたのであつたから、私の短い綜說は當然不完全を免れない。ただ私はいろんな箇所で結論が引出せるやうな材料を示しておいた。だから私自らが何も結論を下さなくてもよかつたのである。だが私は諸君を專門家に仕立てようと目論むことが出來なかつた。私はひたすらに諸君に精神分析の理解を與へて、精神分析に興味を喚起されんことを希望してゐたのである。

索引

索引

A

B

Ch

D

E

F

G

H

I

J

N

O

P

R

S

Sh

U

W

Y

Z

精神分析入門（下巻）

定價　壹圓五拾錢

昭和四年十二月廿日印刷
昭和四年十二月廿五日發行

譯著者　安田徳太郎

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下桃太郎
東京府戸塚町下戸塚一〇九

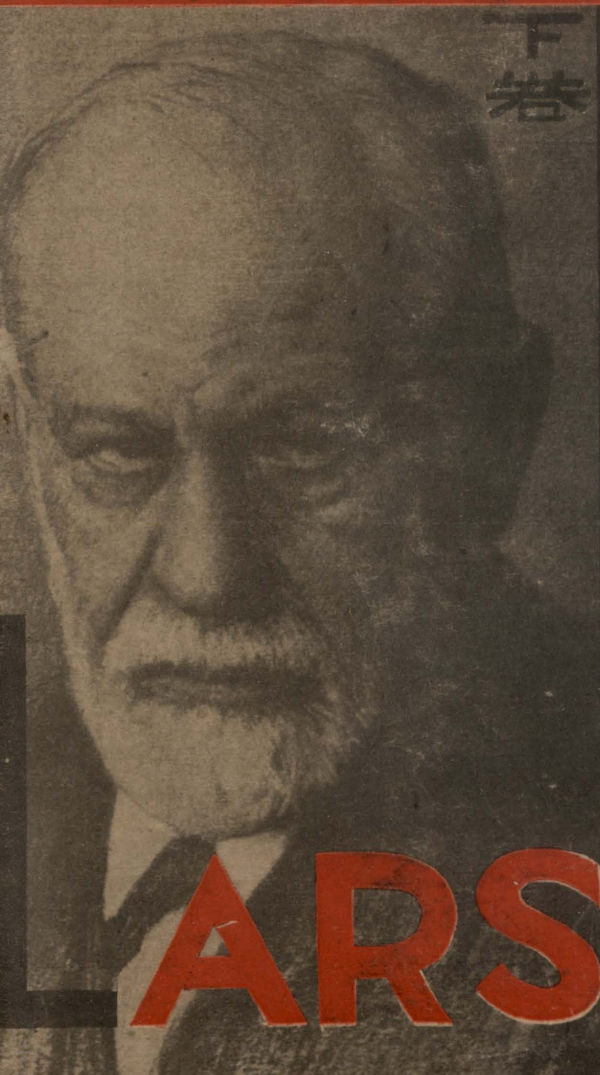
發行所　東京市神田區今川小路二ノ一　アルス
電話九段（二一七五番
二一七六番）
振替東京二四八八八番

Freud

Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse

FREUD

フロイド
精神分析大系
VOL.VIII

精神分析入門
フロイド
精神分析大系
下巻
フロイド
精神分析大系
2
精神分析入門
下巻
ARS

フロイド精神分析大系

最近の學界を悪魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇抜の新學說『精神分析』とは何ぞや

これ……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

これ……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

これ……神と悪魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奧の眞を示す新しき哲學である。

これ……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

これ……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪悪意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

これ……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

譯者は悉く學界の最高權威！現代に於て求め得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意